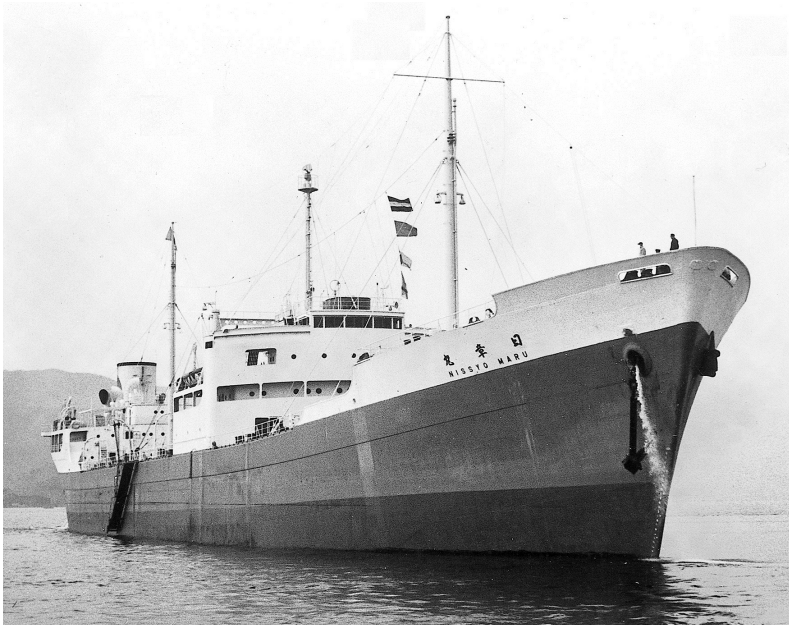
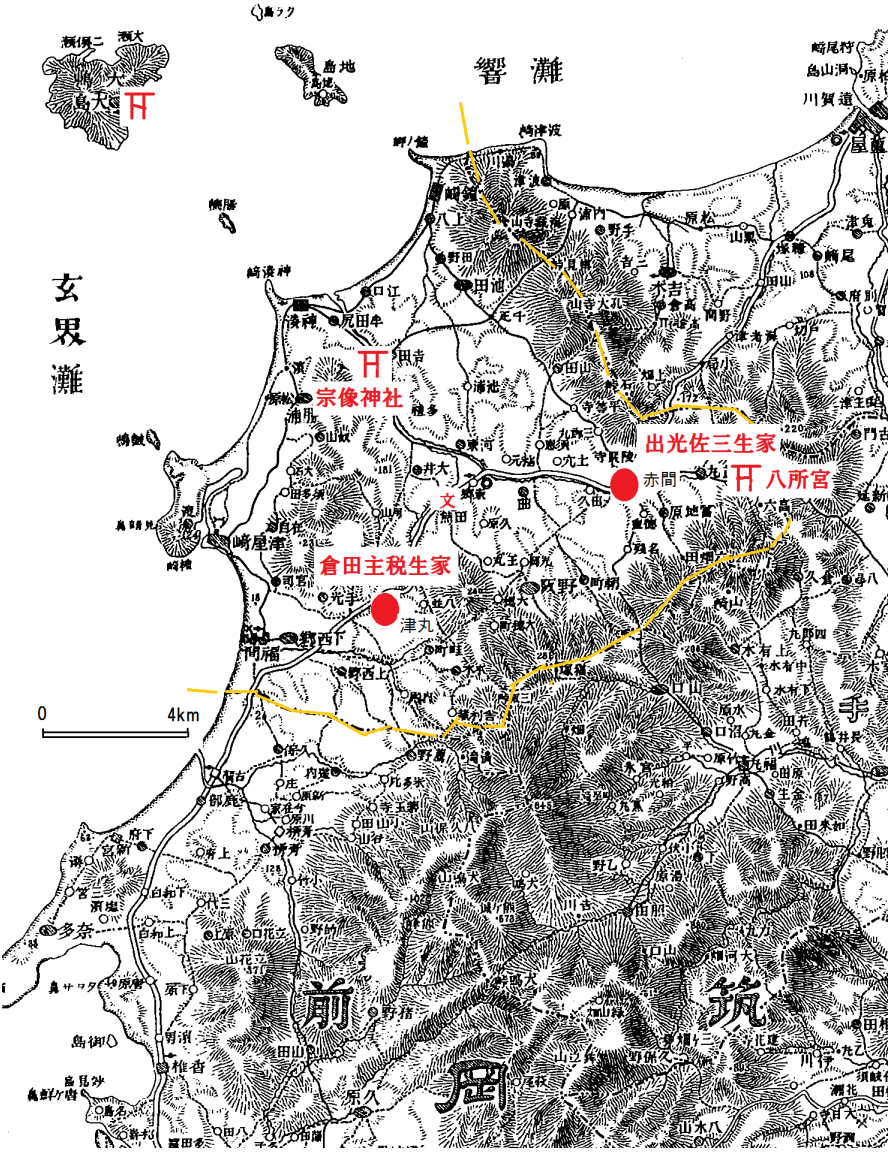
出光佐三と宗像

温故知新と回想 －宗像二題－



花田　勝広著



福岡県宗像郡の地図　（明治 22 年地図）

出光佐三翁

（出光興産株式会社　提供）

彼は、宗像大社を復興し、福岡教育大学の誘致、郷里の教育、人材育成に尽力され、今の宗像の根幹を造った。宗像をこれほど愛し、宗像人に影響を与えた人物は、歴史上に存在しない。（筆者）

はじめに

過去の事象は、世代の消滅と共に記憶から薄れ、記録として書いておかなければ、歴史から削除され、次世代に残らないものである。私たちは、生きている世代しか知る事ができない。こうなると、記録したものしか歴史にならない。他は露と消えるのだろう。人は、過去を忘れるものである。

筆者は、宗像市図書館深田分館の郷土資料室に提供するために、宗像関連論文等 500 本を集め、戦前の雑誌を集成・デジタル化しているなかで、かつて研究内容や先学の書いた成果が次ぎの世代に伝わっていないものが多くあり、なぜ知識が蓄積される事なく、繰り返されるのか疑問を持つようになった。そこで本稿では、そのなかの気になる二題について検討する。

第 1 題、宗像郷友会 (宗像会) と出光佐三翁

明治 24 年に結成された宗像郷友会 (宗像会) は、会誌『宗像』を通じて、宗像出身者の集まる東京宗像塾を拠点に、全国の出身者の親睦・交友を図る会員数が千人の団体であった。

出光佐三も会員の一人であった。戦後に宗像大社復興を本格的に進める原動力は、この会が母体となり、出光兄弟や出光興産幹部も会員であった。佐三の活躍を通じて、宗像の基層意識の本質と宗像会と佐三の行動と影響を検討する。

そして、佐三翁がなぜ宗像に情熱をかけたのかを明らかにする。

第 2 題、宗像における遺跡発掘調査の黎明期

宗像に大規模団地の開始されたのは、昭和 40 年前半の日の里団地で、開発に伴い文化財の発掘調査が開始された。この頃に調査を実施された波多野晥三先生と福岡教育大学歴史研究部考古班の活躍や文化財啓発を紹介する。

併せて宗像高校歴史研究部、東海大学付属第五高校歴史クラブの活動を関係者の一人として記録として纏め、その後の宗像会の影響を考えた。

歴史は世代を通じて、後世に継承され連続する。そこで、根本となる宗像地域の基層意識を検討する。基層意識とは、生活の中で、無意識に蓄積されるものである。

目　次

第１題、宗像郷友会（宗像会）と出光佐三翁

1、宗像の基層意識の形成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
（1）、早川勇とは
（2）、宗像会の概観
2、出光佐三翁と宗像・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
（1）、佐三の事業と宗像
（2）、佐三と宗像郷土館・郷土会館建設への支援
（3）、宗像神社復興期成会会長就任と復興
（4）、佐三を支えた出光兄弟と久保宮司
（5）、佐三と先人の顕彰
（6）、鎮国寺の復興、東郷公園の再建
（7）、佐三と戦後の宗像会
（8）、勤評闘争と教育の荒廃
（9）、出光佐三の宗像での講演会
（10）、福岡教育大学の移転統合
（11）、出光丸の竣工見学
3、著作・評論・出版と顕彰事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
（1）、著作・評論・出版
（2）、宗像での佐三翁顕彰事業
4、まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
（1）、佐三翁はどんな人
（2）、今日、出光佐三翁の痕跡を探す。
（3）、同郷の倉田主税

第 2 題、宗像における遺跡発掘調査の黎明期

1、波多野先生と福岡教育大学歴史研究部考古班・・・・・・・・・・・・・100
(1)、波多野晥三先生
(2)、福岡教育大学歴史研究部考古学班の活動
(3)、調査活動と成果
2、文化財保護と啓発活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
(1)、城ヶ谷古墳群発掘を通しての文化財保護運動の展開
(2)、城ヶ谷古墳群調査の取り組みと評価
(3)、城ヶ谷古墳群のその後
3、宗像郡内遺跡の分布調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
(1)、調査とその内容
(2)、宗像町遺跡分布調査のまとめ
4、野坂の土器と中松元古墳群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
5、考古班活動がその後に及ぼした影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
6、高校クラブの活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
(1)、宗像高校郷土研究部の活動
(2)、東海大学付属第五高校歴史クラブの活動
7、まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・137
(1)、40 年後の宗像の古墳
(2)、40 年後の後悔

総　括

1、宗像の特性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・146
2、文化財の調査・啓発の歴史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・147
3、結語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
資料　講演録　「日本人の世界的使命」・・・・・・・・・・・・・・・・・・161
福岡県立宗像高校同窓会 - 東京支部略史 -
出典・参考文献
出光美術館（門司）「出光創業史料室」

※ 表紙、中表紙は日章丸、※は出光興産株式会社の提供写真である。P89 の写真は宗像市教育委員会の提供を受けた。

第１題、宗像郷友会（宗像会）と出光佐三翁

1、宗像の基層意識の形成

宗像の基層意識は、古代・中世の宗像大宮司が地域領主として、自主性を持ち独立していたものが、宗像氏貞の死去により統治権が崩壊、豊臣秀吉の九州征服により、後に黒田藩領地となることで変容する。江戸時代の黒田藩の時代は、農耕基盤の水田と玄界灘の領地・領民支配が行なわれる。唐津街道の宿である赤間と畦町に通るのみの静かな農村と漁村であった。大きく変わるのは､明治時代で、人々が自由に土地を離れ移動し、明治 20 年以後の鉄道開通によって大きく広がる。この流れの中で、郡民が土地を離れることにより、同胞意識の形成で宗像会が発生する。「宗像は一つ」という考えは、ここから始まる。その基層・同胞意識形成のきっかけは、幕末の勤皇志士である早川　勇が関係する。

(1)、早川　勇とは

天保３（1832）年７月 23 日、遠賀郡 (遠賀町) 虫生津村に生まれ、宗像郡吉留村の医師早川元瑞の養子となる。嘉永２（1850）年、藩医の板垣養永に従って江戸におもむき、儒学を学ぶ。嘉永６年 (1854) 年のペリー来航で世の中が騒然とする中、福岡に帰った勇は勤王討幕の志士として活躍した。西郷隆盛、中岡慎太郎、高杉晋作らと接触し、三条実美はじめ五卿の西遷を実現させ、薩長同盟の基礎づくりに奔走した。五卿落ちの一行は､赤間宿の御茶屋に慶応元年（1865）１月 18 日～２月 11 日に一ヶ月ほど滞在する。

ところが福岡藩の佐幕派は、勤王党の全滅を計画し、勇も幽閉される。その間、討幕の世論はいよいよ高まってゆき、慶応３（1867）年 10 月、薩長に対して討幕の命が下り、12 月にはついに王政復古の大号令が発せられる。

この政変で勇も解放されて吉留の自宅に帰り、これを聞いた赤間、吉武方面の村民は、郷土の栄えある偉勲者を迎えるために沿道を埋めたそうである。時に明治元年（1868）１月１日、勇は 38 歳であった。

その後、奈良府判事や元老院大書記官を勤め、晩年は郷土の育英事業に専念し、明治 32 年２月、68 歳で亡くなる。ここまでが一般的な彼の業績で評価される。ところが、彼が宗像郷友会（宗像会）の結成に関わり、もう一つの役割が明らか

となる。早川は、黒田藩勤王党のただ一人の生き残りである。

早川翁は、何にも心に留めることもなく活淡たる心情は、晩年を子弟教育に捧げた。東京在住の時は、「その邸に出入りする書生（学生）は幾百人、その邸に寄食し補助を受ける者、幾十人、当時三十間掘の孟嘗君と都下に宣伝する所」となったという。早川邸は、現在の東京都中央区銀座 8 丁目にあたる。しかも、「翁は極めて質素倹約にして駄奢の風ない人」また、「その晩年は、藩の後進子弟の教育に捧げ、報酬の大部分を学徒の教育費に投じて、苦学生の訃報を聞き、その葬儀を行ったこともある」という。彼が、東京に上京した宗像出身者・旧黒田藩関係者を可愛がった。ここに連帯意識から宗像郷友会が生まれる。幕末の志士であるが、宗像会の精神的主柱として、戦後まで尊敬された。ただし、孟嘗君と呼ばれたころは良かったが、この後これが原因で御苦労される。

(2)、宗像会の概観

①宗像郷友会 (宗像会) の概観 (明治～昭和前期)

明治 24 年 11 月、早川邸宅に集まり東京に在住する宗像郡出身者の間で、「郷友雑誌」の第 1 号が発行されたが、宗像郷友会はこのとき、まず東京で自然発生的に結成されたものといえるが、中心人物は吉田良春 (陵厳寺出身) で、伊東尾四郎（東郷出身）・中村哲二郎（原町出身）・伊豆直吉（武丸出身）が発起人となる。その後「宗像」を媒介として大阪・福岡・北九州・飯塚等の各市をはじめ、海外でも結成されるようになり、会員数は 1,200 人を越えた。宗像会は雑誌から機関紙へ変貌した「宗像」を通じ、会員及び宗像神社との連絡をはかるとともに、神徳を宣揚することを目的としている。ここで機関紙「宗像」の歴史をたどり、宗像郷友会の変遷を概観すると、まず東京宗像会で発刊した会誌「宗像」は、在京の学生が輪番幹事になって編集にあたり、毎年 4 回発行して昭和 10 年に至る 46 年間に既に 144 号まで発行している。その後の経過は次のとおりである。郷友雑誌の題字は、幕末志士、早川　勇による。昭和 11 年 8 月 3 日、宗像神社発行の「神光」と宗像会発行の「宗像」との合同を協議する関係者の会合が、宗像神社で開催され、その結果、両者を合同して年 4 回会員制によって会誌を発行することとなる。しかし、戦争により、会誌はつい漸次遅延し、昭和 18 年に、遂に第 163 号で自然休刊の止むなきに至った。宗像会全盛期の頃の大正 4 年に、石田和吉の記事があるので紹介する。

宗像会と機関誌　「郷友宗像・宗像」について　『宗像』100 号　大正 4 年より引用する。読みにくいが、原文とした。

早川　勇 (1832 ～ 1899)

「 明治 24 年、11 月 9 日に、郷友雑誌として、第 1 号が発刊されてからは、号を重ねること 145 号となり、同 46 年、現在会友数千人に達している。この偉大な雑誌は、日本一で、他に類例ではないのである。名称は、初め郷友雑誌であったが、途中宗像と改称された。年 4 回の発行で、学生が余暇を利用して、編輯献身的な努力を以て今日に至らしめたのであるが、維持のための空前の灯というべき、状況に陥ったこともあった。責任者と云うべきものもなく、順廻りに学生が、世話人となって、斯くも長く保っているのは、全く宗像人の着実にして、持久性に富み粘り強い気質が、この雑誌において発現したものと言わねばならぬ。また、大正 4 年 1 月号は 25 年目で第百号記念号であった。実に堂々たる物で菊版三百余頁、宗像の誇りの偉大なるものと思われるのである。

本誌発行の所以については、郷友雑誌第 1 号（ 明治 24 年 11 月 1 号発行）の巻頭の主旨を記述して宗像人の意気を示すことにする。発行の主旨たる会員諸氏の熟知するところと雖も、或は未だ其の旨を解せざる人なきを保せず、故に今其の大略を述べて広く本郡有志の士に告げ、その賛成を仰ぎ併せて会員と為せるを諾せらんことを希望するものなり。

近代世相一変し所雲四塞の小天地間に躊躇し、我が国民も我が晴朗広潤なる蒼穹を仰ぎ万里の青涯を望んで東航西馭し、是において我郡の如き西陲陬邑の子弟も鍬を投じ超ちて中原遊ぶものあり、祖先以来十世未だ会いて四塚の麓を離れ釣川の岸を去らざるもの、今富士岳を仰ぎ太平洋を眺め利根隅田の河畔に吟じ、或は賀茂の清泉を掬し東山三十六峯の景を眺め、或は朝瞰金鯱に輝く奇景を賞し、或は更に進んで落機山に登り蜜櫛此河に浮かぶものあり。斯の如く一郷の士にして四方に離散し復した昔日の感にあらず、この本誌発行の止む能はざる所以なり。乞う詳に之を云わん、物相離れて情潮々疎なるは常なり、然れども離れて情喩々切なるものは故郷なるべし。故郷の光栄なる所は父母兄弟の住む所なり、疎ならんと欲すと雖も得ん、況んや少時遊嬉眺望せし、所の山川草木の美景は決して眼底を去らざるを、是を以て郷を離れるもの未だ会で故山を望

みて其の他の災なからんことを希に父兄諸友の恙なからんを、祈らずんばあらず、郷にいる父兄諸友もまた懐慕して、故に各自の消息を報じ各地の状況を告げ兼ねて本郡の幸福増進の道を論じて本誌に掲載し以て親愛の情を表す交誼を全うせんと欲す、これ本誌発行の理由の其の一なり。

郷を同じくする人々は父子兄弟の情あり、老いては教え少なくは問い長き率い幼は従う、之自然の勢なるのみららず実に年少、徳乏しき者は長老の戒飾を仰ぎ幼学者は先進者の鞭撻を受ける必要あり、然れども山海阻絶ん相見ることを得ずんば何を以て其の胸憶を陳べ其の志念を談ることを得ん、今本郡子弟の他郡に遊ぶもの常に 30 ～ 40 人、長老の人豈憂慮する点なしとせんや、又本郡高等小学校を卒するもの 50 ～ 60 人、豈先進の士一言の其の志気を躊躇することなくして袖手傍観するに忍びんや、故に此雑誌において老幼少長各其の胸を披き、情を蓋し戒飾し鞭撻し以て老は安んじ少は楽しむ境域に進まんと欲す、是れ本誌発行理由の第二なり。

我郡は、古来、宗像神社の鎮座ましますを以て、中古親王公卿が下りて、祭祀を司り賜う例ありし故に、民俗徳化に風靡し古より孝子節婦の後世に伝うべきもの少しとせず。且つ宗像氏数十世の居城なるを以て一個独立の歴史を有す、此等の遺事古聞を蒐集せば、故事の煙没を担ぎ風化の万一に補うなしとはせず、是本誌発行理由の第三なり。

且つ近世学術の探究日に切に、之に従事する者山河を跋渉し湖海を横航し物事を見風俗を察し兼ねて名山に攀じ、大川を浄うじて活気を養うの徒、会員中数頗る多きを知る、故に此等の人々の記事必ず見るべきものあらん、且つ才能富みその文章詩歌を投稿せられ又文学上の好雑誌たるを疑わず、これ本誌発行理由の第四なり。

其の他本誌の直接または間接の目的は多かるべしと雖も要するに郷友の考誼を厚くし知識を交換し徳行を奨励し老幼少長其の責任を書し以て本郡の福利を増進するにあたり、会員諸氏幸に善く此の意を諒し投稿の労を敢えてくつす僻することなかれ。

②宗像会と宗像塾の実態

宗像会は、昭和の高度成長期までは、有名な団体であったが、この団体を纏めたものがなく、昭和 61 年の占部玄海『郷土歴史資料叢書　人物往来』第 3 輯が最初で唯一のものである。東京の宗像塾で生活していた学生の柴田節郎の回想録「宗像塾の思い出」の収録があり、詳しく当時を知ることができる。以下、引用する。

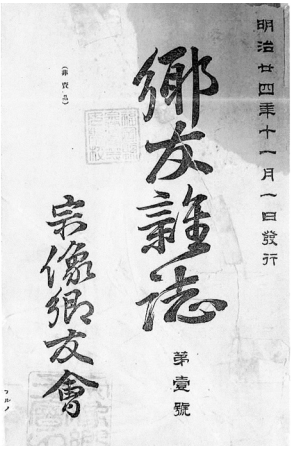
雑誌「宗像」の発行　宗像会は、宗像会の機関紙「 宗像」の編集発行をしていた。宗像会は本部を東京宗像塾におく旨の会則にある。しかし、宗像会の歴史は塾よりももっと長い。明治 24 年に第 1 号が発行されている。宗像出身の東大生が中心であった。誌名も当初は「 宗像郷友会雑誌」といったが、31 年、35 号から「 宗像」となった。はじめの頃の幹事をあげると、吉田良春（ 法学部、住友重役）、中村啓二郎（ 工学部、住友重役）、安部正也（ 工学郡、国際汽船重役）、深田千太郎（ 法学部　朝鮮総督府、実業にて活躍）、伊東尾四郎（ 文学部、福岡県立図書館長）、八波則吉（ 文学部　五高教授）、平田知夫（ 法学部　駐ロシヤ大使館一等書記官）、入江海平（ 法学部　拓務次官）氏等、そうそうたる顔触れで、後年実業界、官界、学界、教育界等で活躍された宗像の

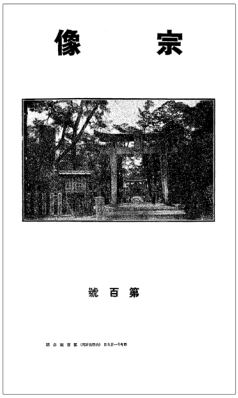
代表的な人々である。宗像塾が「宗像」を編集するようになって、ここに宗像会本部が定着したのである。「宗像」は郷里を出て、愛郷の念やみがたい人たちと、郷土宗像との連絡の欄であった。会見消息と郡地のたよりが主要な記事であった。その他、論説、文苑等の欄があって会員の投稿による充実した内容の高級な記事がのった。本誌によって、宗像を離れた人は望郷の念をいやすことかでき、郡地の人は各地で活躍している人の動静を知ることかできた。在米会員の多かったこともうなずける。会員数は最盛時には 1,200 人に達したという。関東大震災で休刊するまで 120 号を出している。随分発行されたもので、今でも旧家にはこの雑誌が何号か残っている筈である。表紙の「宗像」という風格のある字は、教育家、書家として有名であった、田島の興聖寺の住職手嶋宥峰氏の揮毫であるという。この人の記念碑は興聖寺の前に今もある。この由緒ある雑誌も、あらゆる会員雑誌同様、会費の未納による財政難に悩まされたうえ、郡制廃止後は郡よりの補助金も打ち切られ、大震災後、塾の解散と共に自然休刊となった。

宗像塾のはじめ　宗像塾は「浩々居」の弟分ということになっている。では「浩々居」とは何か、福岡の生んだ宰相広田弘毅の伝記には必ず出てくる名前である。広田が一高時代、耕友の平田知夫とはかり、同郷の学友 5 人で、明治 33 年小石川に小さな家を借りて、自炊をはじめたのが「浩々居」のはじまりと言う。この平田知夫は私の伯父で修猷館、一高、東大、外交官と、広田と行動はしたか、モスコー駐在中病を得て 40 歳にして世を去った。だんだん入居者もふえていったか、その中には宗像出身の人たちもいた。主な人をあげると、入江海平（上八出身、拓務次官）、林繁蔵（徳重出身、朝鮮殖産銀行頭取）、高武公美（在自出身、福岡市助役）、釜瀬富太（野坂出身、九州学園理事長）がある。そのうち、「浩々居」にはいれなくなった宗像人たちが、当時、東京外語の学生であった滝口亮造を中心として、平田と相談し、「浩々居」の近所に家を借りて作ったのが宗像塾である。その後、塾生もふえ、住所は小石川白山御殿町、原町、本郷千駄木町と変わったが、「清々居」との友好関係は続き、中には両方に籍をおいた人もいたくらいである。

宗像塾の発展　もともと宗像は教育熱心な郡、上級学校に志すものは多かったが、現在とちがって殆どの学校は東京だったので、上京者は年と共に増えた。さて子弟を上京させるとなると、父兄の関心は子弟が病気にならず、悪の道に迷わず、学に励んで無事学業を終えてくれるということに尽き、一方学生の方も、田舎から出てきて大都会の一隅で、一人で暮らすことは心細いことかぎりない。同郷の者が生活を共にし、共に戒めあい、共に学び、共に楽しんでいる宗像塾は、父兄、学生双方にとって頼もしい所であった。その存在価値を貴われて、郡からも補助金が出ていた。宗像塾が在京宗像学生の中心となったのも無理はない。創立後十年たった大正 4 年までに、塾に席をおいた人は 70 名を超えたというから、その盛況のほどか偲ばれる。

前期の終わり　全盛をほこった宗像塾も、本郷千駄木町時代、大正 12 年の関東大震災のため、家が大破し、塾生もちりぢりとなって解散のやむなきにいたった。しかし、この間数多くの人材を送りだした。今、千駄木町時代の在塾生中より全国的に活躍された人をあげると次の人々がある。倉田主税（東京高工、日立製作所社長）、安永渡平（東大、八幡製鉄所副社長）、古野清人（東大、学士院会員）、出光計助（出光、出光興産会長）、安部隆任（一橋、三井物産重役）など。古野氏は九大教授を経て、独協大、駒沢大、都立大教授をされているが、52 年学界最高名誉である学士院会員に列せられ、更にフランス政府からパルム・アカデミック勲章を受けられた。安部隆任





郷友雑誌・宗像・再興　宗像

は現在福岡市在住、会社顧問の傍ら、福岡宗像会の会長をしておられる。

『宗像』の復刊　「宗像」が大震災を機として宗像塾の手をはなれたことは前に述べたが、宗像会本部は宗像中学におかれ、中学で何回か発行されたまま中断状態となっていた。しかし、この由緒ある雑誌を何とかして復刊させたいという意見や希望か会員間に多く、昭和5年の宗像全夏期総会は、暑い最中すきやき鍋というのか総会の慣例であった。出席した塾の阿部正彦を通じて、塾にたいして「宗像」引受の交渉があった。当時塾は阿部正彦、寺野泰雄（3回、東大）、安川太朗、永野高雄、越智汎愛と柴田兄弟の7人であったが、協議のうえ、できるかぎりやってみようということで引き受けることにした。「宗像」復刊がきまると旧会員の反響は強かった。各地からの消息は集まるし、投稿も多かった。伊豆先生はじめ伊東尾四郎、深田千太郎、服部音太郎、石田和吉氏等、昔の幹事の方々より喜びのことばをいただいて一同大いに気をよくした。石田氏は「宗像」最盛時の幹事で、文名は関係者間に鳴り響いていた。原稿の割り振り、印、校正等、型通りの苦労を経て、昭和6年5月1日に復刊第143号を出すことができた。会員は当時450人位だったと思うが、帯封を書いて発送し、帰ってきて一同で打上げのスキ焼鍋をつついたときの楽しみは忘れられない。このように、苦しみと喜びを交えながら何号か出したが、先輩と同じように原稿難と会費未納には手を焼いた。この苦労は勉学中の学生の手にあまるものであった。何号か出したまま、また「宗像」は郷里へ戻った。今度は宗像大社で戦争まで発行された。昭和16年12月26日発行第162号が私の手許にあるさいごである。私も東京の委員として、集会の記事や会員消息を送った記憶はあるか、戦後はどうなったであろうか。塾での発行は長つづきしなかったが、尊い経験だった。

塾の終焉　天神の塾は十年以上もつづいたが、借家の悲しさ又家主の都合で立退かされ、昭和15年中野上高田に移った。塾ははじめから終わりまで借家住まいであった。兄貴分の「浩々居」が早くから自前の家を持ち、財団法人となっているのと対照的であった。何とか自分の家を持ち落ち着いた気分で暮らしたいというのが、歴代の塾生の願いであった。これは先輩から引き継が

れた悲願ともいうべきものであった。しかし寄付金を募り、土地を買い、塾にふさわしい家を建てるということは、年々に交代していく学生にとっては無理な仕事であった。先輩の中服部吉太郎、出光万兵衛は熱心に協力して下さったが、いろいろのいきさつもあり実らなかった。その間、時局は急進し、上京学生は少なくなり、塾生も 5 人となった。上高田にいること一年、とうとう塾も解散のやむなきに至った。かくして宗像塾は、明治 37 年創立以来昭和 16 年まで、一時の中断はあったが、約 40 年つづいた輝かしい歴史の幕を閉じたのである。しかしその間に送り出した人材は 200 人に近かろうと思われ、その人々がそれぞれの分野で活躍していることを思えば、宗像人発展の礎石としての任務は充分に果たしたわけである。塾時代の思い出は各人の胸の中にいつまでも続いている。

この雑誌は、明治 25 年の 3 号に河邊稔が「教育家諸君の左右に致す」と教員の推進が書かれ、安部正也によって家庭教育の必要が説かれている。明治 33 年には、宗像教育会があり、女子教育の問題が議論されるなど、教育関係記事から始まる。明治の気風を強く持つ雑誌で、郷友の交友と新知識の取得や切磋研磨を目的としている団体であった。

注目されるのは、吉田良春（法学部、住友重役）が提唱者で、中村啓二郎（工学部、住友重役）、安部正也 (工学郡、国際汽船重役)、深田千太郎（法学部、朝鮮総督府、実業にて活躍）、伊東尾四郎（文学部、福岡県立図書初代館長）、八波則吉（文学部、五高教授）、平田知夫（法学部、駐ロシヤ大使館一等書記官）、入江海平 (法学部、拓務次官）等、そうそうたる顔触れで、後年実業界、官界、学界、教育界等で活躍された宗像の代表的な人々である。

「郷友雑誌」第 1 号には、早川勇が 60 歳で元気であり、投稿されている。もちろん内容は、幕末の勤皇志士のことである。伊東尾四郎は後に、『福岡県史』・『宗像郡誌』等を編集・発刊するが、大学生の頃に貝原益軒の「続筑前国風土記」、青柳種信の「続筑前国風土記拾遺」の史料の重要性を指摘し、自らまとめることを宣言している。4 代目の編集長である。年四回の編集は、彼の能力を鍛えることになる。大正 12 年 (1923)9 月 1 日にマグネチュード 7.9 の関東大震災が起こる。関東大震災前の編集長は、古野清人（東大、のち学士院会員）で、災害で印刷所がつぶれる中、ガリ刷りにより同年 13 年 1 月に 134 号を発刊した。何があろうと郷友の為、停められなかったのだろう。しかし、印刷所の復興が遅れ 2 年間ほど中断し、大正 14 年 8 月に 135 号が発刊される。この時に多くの仲間が被災する。後に、古野は昭和 12 年に宗像で宮座の民俗調査を実施している。この時は、古野の名が通り調査が容易に出来たようだ。古野は宗像への想いが強

く、戦後に『農耕儀礼の研究 - 筑前宗像における調査 -』1970 年が、東京大学出版会から刊行される。この発刊は、宗像会への回想に近いものだったのだろう。

関東大震災後、一時は再興したが、東京から宗像会本部が宗像神社に置かれ、宗像辰美（宮司）・石田和吉が昭和 10 年～終刊の編集長であった。会員数は、名簿で拾うと明治 31 年に 262 名、明治 37 年に 423 名、大正 4 年に 1,005 名、最高で 1,200 名、昭和 14 年で 920 名となる。当時の有力者や知識層の殆どが入会している。

このように、当時、宗像名物は「教員・鶏卵」と云われるほど、福岡県下で有名であった。鶏卵は、江戸時代後期には黒田藩の検地や奉行なとの役人視察の際は、常に卵がお土産であり、明治時代になると大阪に輸出する櫨実 (はぜのみ) と共に一大産物になり問屋もあった。宗像の「すき焼」は肉が鶏肉なのは、鶏卵の産地と深い関係がある。地元の宗像会の多くのメンバーは教員が多く、今日までこの伝統は続く。

戦前の地方雑誌としては、第 1 巻～第 163 号まで、51 年間も続いた同人雑誌は殆どなく、当時より全国一と評価されている。宗像は一つと意識される基層意識は、この会の影響に神郡宗像の歴史性が後に付加したものである。『宗像』には、興味深く検討すべき内容があるが、ここで留める。

2、出光佐三翁と宗像

(1)、佐三の事業と宗像

宗像会入会　佐三は、明治 37 年 (1904)4 月、中野吉三郎の紹介により 19 歳で宗像会に入会する。記事によると、「赤間の人、目下福岡商業学校に在学中」とある。中野吉三郎は、「朝町の人、目下上京、下谷区車坂町 88 番地に御寄留の由、法律学校入学の準備中」とある。福岡商業学校 4 年の時であり、進路を考えていた頃である。会員であった兄の雄平が脱会し、佐三が入会する。明治 42 年 (1909) までの 5 年間会員となり、神戸高商 (神戸大学) に在学中までである。したがって、商業学校卒業後も宗像の情勢は、『宗像』の会員通信を通じ知っていたと思われるが、酒井商会の丁稚となり脱会している。卒業証書を捨てた頃である。

明治 44 年 6 月、出光商会門司店は、目抜き通りの東本町、鏡西橋近くに構えた。ただし、木造二階建てである。ここを住宅にもした。近くの材木置き場を倉庫として借りる。取引銀行は住友銀行の門司支店となる。同じ宗像出身で佐三の

卒業論文「筑豊炭及び若松港」を助けてくれた住友若松炭業所長の吉田良春の勧めである。吉田は宗像会の結成発起人の一人である。

大正 6 年 (1917) に門司で出光商会が軌道に乗った頃に、石田和吉の紹介で佐三 (31 歳) が、再び宗像会に入会する。当時、明治 44 年に日田重太郎から資金を渡され、6 月に門司市に出光商会を創業し、7 年後である。数年前に南満州鉄道に車軸油の納入に成功し、事業が軌道に乗り出した頃である。石田は、雑誌『宗像』100 号の特集号を発刊した編集長であり、同郷の出光に入会を持ちかけたものである。関門海峡で「海賊」と呼ばれた頃である。昭和 7 年 3 月、門司警察署長として岬村上八出身の山路虎夫が赴任する。門司在住の宗像郡出身者が集まり歓迎会を行ったが、出席者が多いために門司宗像会の結成となった。会長を佐三、常任幹事に花田要一、書記に出光興産社員の上野亀太郎 (後の上野商会社長) となった。会長は昭和 19 年迄であった。

以後、時系列で宗像の活動と彼の石油事業の要点をまとめる。なお、宗像の視点で彼の足跡を追う。

貴族院議員　昭和 12 年 (1937) 貴族院多額納税者議員に出光佐三が選ばれ、2 月に宗像神社に参拝する。52 歳のころで以後、貴族院議員（多額納税）として登院し、貴族院が廃止されるまで議席を持っていた。次の昭和 13 年の記事には、出光の 53 歳で「貴族院議員、門司商工会議所会頭、満州国名誉理事として公務多忙の模様であるが、又一面、出光商会の家業も繁盛し、去る 6 月 10 日には、新鋭油槽船『日章丸』を進水させた。この船は三菱造船所の製造で一万一千トン、400 万円を投じたと云う巨船ですから、益々出光商会は発展するであろう。本会としても郡としても喜びに堪えない」とする。入会から事業に多忙であり、ほとんどこの間の記事は見られない。昭和 14 年に再選される。高橋昇委員の出光評に「氏は、明治 18 年出生と云いますから 55 歳。福岡商業高校を卒業後、神戸高等商業高校に学び明治 42 年に卒業された。在学時は外交官志望であったが、父上より・・・諭され独立自営の意を固めたと云う。」と紹介があり、先鋭の事業家として、認識されている。

宗像郷土館寄附　昭和 13 年 (1938)4 月に出光に郷土館関係者が、郷土館の増資の懇願、郷土館建築状況の報告に行き、最終的に建設費用の 32,000 円のうち 2,500 円を賛助している。最も多い寄附である。開館は、12 月に宗像郷土会館と共にオープンする。宗像会会員をはじめ 3,000 名が見学する。

昭和 14 年 (1939) に貴族院議員に出光佐三が再選され、『宗像』158 号に報告

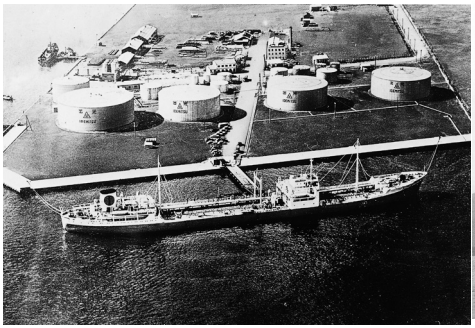
される。翌年に宗像会の終身会員となり、3 月には出光興産株式会社を設立、8 月には、『宗像』に出光の躍進記事があり、宗像出身者の事業家として、郡民にも広く知られる。昭和 16 年 (1941) の宗像会創立 50 周年、弟の出光弘が終身会員となる (160 号)。12 月には、太平洋戦争が始まる。昭和 17 年 (1942)11 月に宗像神社復興期成会会長に出光佐三を選任される。昭和 18 年 11 月、出光興産本社を東京の東銀座に移転する。

昭和 20 年 (1945) の 8 月に敗戦となる。宗像郡の当時人口は 54,321 人である。

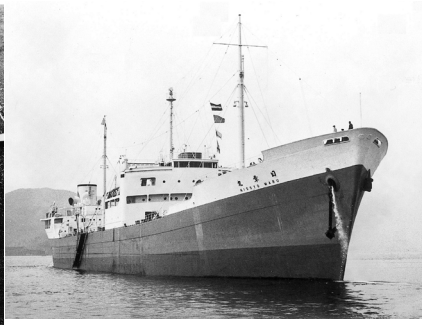
敗戦　8 月 出光佐三は、終戦の 2 日後、従業員に対し「愚痴をやめよ。世界無比の三千年の歴史を見直せ。そして今から建設にかかれ」と訓示した。60 歳の還暦でも、我意思を通す人である。当時、多くの企業が人員を整理する中、出光佐三は約 1 千名の従業員の首を切らないことを宣言した。そして、タンク底油集積を経て、昭和 22 年 10 月、石油配給公団の販売店指定を受ける。11 月に出光商会と出光興産が合併し、出光興産として再出発する。昭和 25 年 (1950)6 月には、朝鮮戦争が起こり福岡県板付飛行場は最前基地となり、Ｆ 86 戦闘機など一日約 300 機が発着する。また、朝鮮戦争で北九州に警戒警報が発令される。出光の石油輸入基地の室蘭・川崎・神戸油槽所竣工がなされる中の 7 月に「宗像神社」を書かれている。さらに、法事で宗像郡赤間町にもどり、町長や有志と会い懇親を広め「夢」を書く。これらは、『四十年間を顧る』に纏められる。

昭和 27 年 (1952)4 月には、平和条約締結 (サンフランシスコ平和条約) により、占領軍から日本が正式に独立する。

日章丸事件　昭和 28 年 (1953)5 月に、日章丸事件となる。石油事業を国有化し大国イギリスと係争中のイランに、日章丸二世（1 万 9 千トン）をイラン石油輸入のため、イランのアバダン港から、ガソリンと軽油を満載し川崎へ入港する。英国アングロイラニアン社は、積荷の所有権を主張し、東京地方裁判所に提訴した。出光の奇策により出光の勝訴が決定し、日本国民を勇気付けるとともに、イランと日本との信頼関係を構築する。この時に出光佐三は、東京地方裁判所の北村良一裁判長に「この問題は国際紛争を起こしておりますが、私としては日本国民の一人として俯仰天地に愧じない行動をもって終始することを、裁判長にお誓いいたします」と答えた。歴史に残る有名な話である。宗像ではこの年、6 月に台風により北九州豪雨、釣川が氾濫し宗像大洪水害が起こる。宗像低地の海抜 4.5 mライン以下は水没し、田畑に水害を与えた。記録に残る最大のものである。8 月に宗像神社の拝殿修理などに国庫補助 53 万円と文化財愛護委員会が発表し



川崎油槽所　※



日章丸二世　※

た。昭和 29 年 (1954)5 月、沖ノ島 1 次調査が実施される。12 月に沖ノ島を国営漁港として 4 億 5,000 万円で修築することが決まる。昭和 30 年 1 月に復興事業で田島・高宮の土地が買い上げられる。9 月には、孝子、武丸正助翁の遺徳しのび福岡松源寺で、200 回忌讃仰法会が行なわれ、翌日父の松寿の 13 回忌を赤間法然寺で行なわれ、9 日に武丸正助廟での 200 回忌に遺徳をしのび、正助伝記 3,000 部を寄附される。ここに序文を書かれる。12 月の復刊宗像に「宗像族の雄心」を書く。この年に沖ノ島 2 次調査が実施される。昭和 31 年 (1956)7 月の復興宗像 2 号に「アメリカを視察して」が掲載される。昭和 33 年 (1959)3 月、念願の出光興産の徳山製油所が竣工する。昭和 35 年 (1960) に宗像高校にて記念講演 (創立 40 周年) で講演する。4 月には､出光興産がソ連石油を輸入し、マスコミに赤い石油と呼ばれる。

教育大学の統合移転　昭和 35 年 (1960)12 月、高山勉町長が福岡刑務所の吉武地区への移転を断り、学芸大学の統合移転が検討される。昭和 36 年 (1961) に「こころの世界」を書く。昭和 37 年 (1962)3 月、沖ノ島出土の銅鏡などが国宝に指定される。鎮国寺の護摩堂が完成する。9 月には、宗像神社の長久手神事と呼ばれた「みあれ祭」が約 400 年ぶりに復活し、漁船 180 隻が参加する。この年に『人間尊重五十年』が出版される。復興期成会会長代理に出光泰亮（佐三の弟）が就任し、宗像神社の復興業務を取り仕切る。

一匹狼　昭和 38 年 (1963) に出光興産の千葉製油所竣工（1 月)、出光興産が石油化学工業へ進出（4 月）する。出光興産は 11 月には、生産調整に反対し、石油連盟脱退を決める。マスコミに出光脱退が「業界の一匹狼」が檻を出たと呼ばれたころである。『「人の世界」と「物の世界」-40 の質問に答える -』が、出光興産社長室より出版される。復興された宗像会の会誌に再興宗像 1 号に「宗

像会に寄す」書き、名誉会員となる。10 月 22 日、学芸大統合起工式に出光佐三社長が出席、城山中学校講堂で講演する。昭和 39 年 (1964)、「年頭所管」で教育大学の設置の抱負を再興宗像 2 号に書く。4 月、宗像神社宝物館の本館が完成し引き渡しが行なわれる。5 月に東京で福岡県人会総会、会長に出光佐三に就任する。5 月 21 日に墓参り帰福し、八所宮・緑風園・武丸正助廟に参る。8 月に武丸正助翁の伝記 3,000 部を配布する。この年に『題名のない音楽会』が放映開始される。11 月に宗像神社宝物館が竣工する。

昭和 40 年 (1965)1 月に宗像神社宝物館の開館、矢次ざまに宗像大社が宗像大社由緒記を作成、4 月に配布する。5 月にＮＨＫ「自然のアルバム」で沖ノ島を放映、『宗像神社史』上巻・下巻、『続沖ノ島』が完成し、全国の図書館・大学の研究施設に配布される。9 月 26 日、宗像高校で「宗像人の使命」再興 8 号を書き、宗像郡町村会館で宗像青年会議所の臨席講演が行なわれる。

出光丸の建造　昭和 41 年 (1966)4 月、福岡教育大学が赤間に統合移転した。出光佐三が、出光興産の社長を退き、会長に就任する。出光丸は、石川島播磨重工横浜工場で建造され、同年 12 月 7 日に竣工した。当時、このタンカーは世界最大であり、かつ史上初めての 20 万重量トンを超えたタンカーである。ペルシャ湾と出光興産徳山製油所を年間平均 9.5 往復して日本への原油輸送に大いに貢献した。10 月、本社に出光美術館が開館する。12 月の出光丸竣工には、全国の中学生 15,000 人を招待する。昭和 42 年 (1967)4 月、再興 14 号、石田正美が「出光丸」を書く、8 月に沖ノ島 3 次調査が開始される。昭和 43 年 (1968)7 月、早川勇翁像の除幕式を吉武村役場跡に建設され、会長代理として出光弘が出席、併せて、早川勇の伝記を桧垣元吉教授が出版 (6 月) される。10 月、宗像会機関誌「宗像」廃刊、神社広報誌「宗像」へ吸収する。

昭和 44 年 (1969)4 月 20 日、宗像高校体育館で 3 度目の出光佐三の記念講演会が行なわれる。宗像の教育をよくする会の事業である。その後に宗像高校創立 50 年に、千万単位の多額寄附が行なわれる。9 月、宗像神社神官の太田可愛らが『宗像史話伝説』を出版する。12 月、宗像神社本殿の解体が始まる。昭和 45 年 (1970)1 月、宗像神社国宝展が小倉井筒屋で開かれ、九州初公開される。8 月、沖ノ島丸（25 万 4 千トン）が完成する。12 月、宗像神社祈願殿が完成し、新殿祭が執り行われる。

昭和 46 年 (1971)4 月、宗像神社史の付巻が刊行される。27 年かけて 3 巻が完成する。4 月、宗像神社境内が国指定史跡指定となる。6 月、東郷橋にあった

出光佐三と宗像会、宗像地域の主な歴史の概観

元号	西暦	宗像神社と出光佐三	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
明治44	1911	門司市に出光商会を創業。	25	津屋崎の塩田が廃止される。	日田重太郎（資産家。日田の息子の家庭教師を佐三がしていた）から別荘を売却して得た資金8,000円を渡され、満25歳で独立。その条件が一風変わっていて、「ただやるのだから返さなくていい。利子もいらない。また、事業の報告もしなくてよい。君が好きに使え。ただ、独立を貫徹すること。そうして兄弟仲よくやってくれ。」というものであった。福岡県門司市に出光商会を設立。	出光佐三
大正元	1913		26	明治天皇の崩御。	下関で漁業燃料の販売に着手する。	
大正2	1912		27	4月、東郷駅が開業		
大正3	1914		28		南満州鉄道に車軸油の納入成功する。	
大正4	1915		29		漁業燃料油の販売拡大、下関支店を開設。	
大正5	1916	雑誌『宗像』100号を発刊する。	30		事業拡大で、資金繰りの悪化する。	
大正6	1917	宗像会に石田和吉氏が紹介し、再入会。(138号)	31			
大正7	1918		32	米騒動が全国に広がる。	満州鉄道、車軸焼損事故の続発。	
大正8	1919		33	4月、宗像中学校が開校する。	酷寒の地・満州で車軸油が凍結し、貨車のトラブルが続出していた南満州鉄道に「2号冬候車軸油」を無償で提供。当初は使われてすらなかったが、単身満州にわたり満鉄本社に直談判し、現地で試験を行い、事故を一掃した。1927年（昭和2年）満鉄創立20周年のときに、感謝状と銀杯が贈られた。	
大正9	1920		34		佐三、チフスで死線を彷徨う。	
大正10	1921		35		創業10周年。博多支店の開設する。	
大正11	1922		36	大峰山頂に東郷公園が作られる。	台湾に進出する。	
大正12	1923		37		9月、関東大震災に際し、全店員に禁煙を呼びかける（2ヶ月間）。	
大正13	1924		38		第一銀行（現・みずほ銀行）からの25万円の借入金引き揚げ要請があったが、二十三銀行（現：大分銀行）の林清治支店長が肩代わり融資を決め、窮地を脱する。この頃、自殺説までささやかれる。	
大正14	1925		39	沖ノ島艦が津屋崎町に払い下げられる。		
大正15	1926		40	7月、宗像郡役所を廃止する。		
昭和2	1927		41	7月、豪雨で東郷ー福間間、赤間ー海老津間のトンネルが不通。		
昭和3	1928		42	『沖津宮』を幡掛正木を発刊する。		
昭和4	1929		43	博多湾鉄道の宮地岳線が電化される。	朝鮮における石油関税改正のために奔走。	
昭和5	1930		44	7月、暴風雨で宗像郡で47戸全壊。		
昭和6	1931		45		創業20周年。満州事変が起こる。	
昭和7	1932	**門司宗像会が結成される。**	46	田中幸夫による宗像での発掘調査が始まる。	門司商工会議所会頭に就任。	
昭和8	1933		47	『宗像郷土読本』を田中幸夫が刊行する	満州奥地に進出する。	
昭和9	1934		48			
昭和10	1935		49	『宗像の旅』を田中幸夫が刊行する	「満州国」の石油専売制に反対。	
昭和11	1936		50			
昭和12	1937	1月、貴族院多額納税者議員に出光佐三が選ばれる。	51	沖ノ島砲台施設の地鎮祭		
		このころ宗像神社に参拝する。沖ノ島に砲台が建設が開始される。		7月、盧溝橋事件。	2月 貴族院議員（多額納税）として登院。以後、貴族院が廃止されるまで議席を持つ。	

元号	西暦	宗像神社と出光佐三	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
昭和13	1938		52	4月、出光に増資の懇願、郷土館建築状況の報告する。		出光佐三
		7月、田中幸夫が門司出光商会に再び1,500円で懇願。宗像の歴史を説明する。			日章丸（一世）就航する。	
				8月、宗像に出光佐三の記載あり。	国策会社大華石油設立に反対。	
		12月、宗像郷土館・宗像会館の開館、出光は参加せず。		12月、宗像郷土館・宗像会館が落成する。3,000人が見学。		
昭和14	1939	9月、佐三、樣本憲三宮司と復興計画を協議する。	53			
		12月、貴族院議員に出光佐三が再選		4月、田中幸夫による宗像での発掘調査が終わる。	中華出光興産株式会社・満州出光興産株式会社設立。	
昭和15	1940	3月、宗像会終身会員（158号）となる。	54	大政翼賛会が発足する。	3月 出光興産を設立。上海油漕所竣功。	
		8月、宗像に出光の躍進記事		11月、皇紀2600年式典		
昭和16	1941	4月28日、佐三、樣本憲三宮司と復興計画を協議する。宗像会創立50周年、出光弘、終身会員となる(160号)	55	6月、川端橋が流失、吉田の交通がマヒする。12月、太平洋戦争が始まる	北支石油協会の設立に反対。創業30周年。12月、太平洋戦争が始まる	
昭和17	1942		56	2月、味噌、醤油も配給、衣料は点数制		
		8月、佐三、竹間保史宮司と復興計画を協議する。		5月、金属回収令による強制譲渡命令発動により町村内の寺社の鐘や仏具はじめ一般家庭金属類を回収する。	8月、南方に石油配給員を派遣する。	
		11月、神社復興期成会　会長に出光佐三を選任。				
昭和18	1943	4月、佐三が復興期成会で上・下高宮の復興保存を決議する。	57		出光興産本社を東銀座に移転する。	
		8月、雑誌『宗像』が発刊停止する。		上西郷の大阪陸軍航空補給廠福間出張所が建設着手される。	石油専売法に反対。	
昭和19	1944	宗像神社史の編纂が始まる。	58	6月、米軍爆撃機B29が北九州を初空襲。	11月、仙崖図を全支店に配布する。	
				8月、宗像郡誌が完成、12月、津屋崎国防訓練場が開場する。		
昭和20	1945	8月、沖ノ島の下関重砲兵7中隊が沖ノ島から撤去。敗戦	59	5月、本土決戦で歩兵第145師団が配備される。7月、第歩兵351師団が配備される。敗戦。	8月 出光佐三は、終戦の2日後、従業員に対し、「愚痴をやめよ。世界無比の三千年の歴史を見直せ。そして今から建設にかかれ」と訓示した。当時、多くの企業が人員を整理する中、出光佐三は約1千名の従業員の首を切らないことを宣言した。	
		11月、佐三会長、①復興問題は時機を待つこと、②調査資料は本印刷を延期することの今後の方針が示される。		10月、福岡市に占領軍の軍政部が設置される。11月、宗像郡人口54,321人	10月、石油配給会社から業界復帰を断られる。	
昭和21	1946	1月、昭和天皇の人間宣言が行われる。2月、GHQにより、官幣大社の廃止する。	60	2月、公職追放令の発布。	4月、旧海軍タンク油の集積作業を行う。	
昭和22	1947	10月、第2次の農地改革による農地買収、売り渡しが行われる。	61	11月、池野村の池田炭鉱が操業開始	出光、石油配給公団の販売店指定を受ける（10月）。出光商会と出光興産が合併し、出光興産として再出発（11月）。	
昭和23	1948	4月、立部瑞祐により、荒廃していた宗像神社の記事が書かれる。	62	鎮国寺住職の立部瑞祐が復興住職となる。		
昭和24	1949	8月、宗像郷土館が廃館となる。	63	鎮国寺の晋山式が行なわれる。	3月、石油元売り会社に指定される。	
昭和25	1950	4月、公職選挙法を公布する。	64	6月、朝鮮戦争が起こり板付飛行場は最前基地となり、F86戦闘機など一日約300機発着する。	出光興産、石油製品の輸入を主張。	
		7月、宗像神社を書く。		朝鮮戦争で北九州に警戒警報が発令される	石油輸入基地の室蘭・川崎・神戸油槽所竣工	
		法事で赤間町にもどり、町長や有志と会う。「夢」を書く。			11月、川崎・神戸に輸入基地を設置する	

元号	西暦	宗像神社と出光佐三	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
昭和26	1951		65	9月、池野村池田炭鉱に埋蔵量300万トンの新炭層が見つかる	・『四十年間を顧る』	出光佐三
昭和27	1952	4月、平和条約を締結、アメリカ軍の占領が終わる	66	4月、平和条約締結、日本が正式に独立する	米国から高オクタン価ガソリンを輸入する。	
昭和28	1953	5月、日章丸事件が起こる。	67	6月、北九州豪雨、宗像大洪水、釣川が氾濫する	5月9日く日章丸事件、石油を国有化し英国と係争中のイランから石油輸入、アバダン港から、ガソリンと軽油を満載し、川崎へ入港する。	
		8月、拝殿修理などに国庫補助53万円と文化財愛護委が発表する。				
		１２月9日、佐三、復興した下高宮祭場に参拝。				
昭和29	1954	5月、沖ノ島１次調査が始まる。沖ノ島を国営漁港として4億5000万円(6年計画)で修築することが決まる。	68			
		１２月、「水を呑み冷暖自ら知る」を『知性』12号に書く				
昭和30	1955	4月、田島・高宮の土地買い上げ、祭場整備が竣功する。佐三ら多数が参列する。	69	4月、沖ノ島で密航朝鮮人39人が逮捕される。		
		8月、沖ノ島漁港の修築に国庫補助3500万円が決まる			8月、徳山旧海軍燃料廠跡地を払い下げが決まる。	
		9月、孝子、武丸正助翁の遺徳しのび福岡松源寺で200回忌賛仰法会を実施する。		6月、水産高校校舎が完成する。		
		１０月、武丸正助廟、松寿の13回忌を法然寺、正助伝記3000部を寄附。序文を書く。			10月、佐三、初めて渡米する。	
		12月、佐三が復刊宗像1号に「宗像族の雄心」書く。		12月、復刊「宗像」が発刊される。		
昭和31	1956	7月、復刊宗像2号に「アメリカを視察して」を書く。沖ノ島2次。	70	6月、玄海国定公園の指定を受ける。		
昭和32	1957		71		3月、徳山製油所の起工式。	
昭和33	1958	2月、『沖ノ島』の刊行。	72	2月、河東鉱山で落盤、生き埋め3人となる。		
		9月、沖ノ島出土品が重要文化財になる。			3月、出光興産の徳山製油所が10ヶ月で竣工する。	
昭和34	1959	4月、久保宮司の就任。	73	5月、「青年よ、明治精神に帰れ」	4月、出光興産、ソ連の石油を輸入する。	
		6月、文化財収蔵庫が竣工する。		7月、東郷に濁流、釣川の堤防が決壊、氾濫する。	5月、徳山製油所の第2期増設工事完成。	
昭和35	1960	2月、宝物館の計画を協議する。	74			
		5月20日、佐三が宗像沖ノ島へ参拝する。				
		１２月、高山勉が福岡刑務所の移転を断る		10月、宗像高校にて記念講演(創立40周年)		
昭和36	1961	１月、佐三が「心の世界」を書く	75		創業50周年。	
		１月、宗像大社が機関誌「宗像」を復刊。『続沖ノ島』の刊行。		7月、赤間城山中学校で講演する。		
		2月、『宗像神社史』上巻の刊行。				
昭和37	1962	3月、沖ノ島出土の銅鏡が国宝に指定される。	76		2月、創業の恩人、日田重太郎が死去。	
		5月、佐三、東京で田島小学校の跡地利用を協議する。		4月鎮国寺に護摩堂が完成する。		
		7月、宗像神社復興期成会会長に出光泰亮が就任、宝物館建設設置委員会の発会式。			7月 生産調整に反対し、出光興産、石油業法に反対。石油連盟脱退を決める（1966年（昭和41年）、生産調整が廃止されたことを受けて復帰）。	

元号	西暦	宗像神社と出光佐三	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
昭和37	1962	9月、みあれ祭が約400年ぶりに復活し漁船180隻が参加	76		9月、『人間尊重五十年』	出光佐三
		11月、宝物館建設の募金集め開始。				
昭和38	1963		77	3月、再興宗像会の創設総会、鐘崎海岸で戦争中のピストル弾丸1400発が見つかる	出光興産の千葉製油所、竣工（1月）。出光興産、石油化学工業へ進出（4月）『「人の世界」と「物の世界」-40の質問に答える-』 出光興産社長室	
		8月、再興宗像1号に「宗像会に寄す」書く、名誉会員となる。		5月、青年会議所九州地区大会で講演する。	本社を丸の内一丁目（パレスビル）に移転	
		10月22日、学芸大統合起工式、出光佐三社長が出席、城山中学校体育館で講演する。			11月、出光興産、石油連盟から一時脱退。	
昭和39	1964	1月、再興宗像に「年頭所感」書く	78	1月、山田・畑から経筒、町教委が現地調査する。	1月、石油生産調整問題で、福田と会談。	
		4月、宝物館の本館が完成する。		1月再興「宗像」が復刊		
		5月、東京で福岡県人会総会、会長に出光佐三を選ぶ、芦屋航空自衛隊の訪問する。『宗像神社史』下巻の刊行。		5月、高山勉が落選		
		5月21日、墓参り、八所宮・緑風園・武丸正助廟に行く。				
		8月、武丸正助翁の伝記3,000部を配布する。			『題名のない音楽会』の放映開始	
		11月、宝物館の開館披露式			9月、 出光石油化学会社の設立。	
昭和40	1965	1月、宝物館の開館、2月神社で講演会をする。	79	2月、宮地嶽神社の宝蔵庫が破られ日本刀が盗まれる。		
		4月、宗像大社が宗像大社由緒記を作成、配布する。				
		5月、NHK「自然のアルバム」で沖ノ島を放映する。		宗像郷土館から宗像高校に資料を移動する。	5月、徳山市に出光会館建設。	
		6月、宗像神社史上巻、続沖ノ島を配布		5月、上妻国雄が民話「福間の又べい」出版する。		
				8月、上野古墳調査で横穴式石室を発掘する。		
		9月26日、宗像高校「宗像人の使命」再興3号、宗像郡町村会館で宗像青年会議所臨席講演、教育大学統合する。		9月、宗像高校・宗像青年クラブ講演、福岡教育大学の統合。	9月、千葉製油所に世界最大のＬＰＧタンクを完成。	
		11月30日、宝満会が行われる。		12月、東郷団地で弥生中・後期の竪穴住居を発掘する。		
				12月、上妻国雄が「宗像伝説風土記」出版		
昭和41	1966	4月も福岡教育大学の統合、赤間に移転する。	80	宮地嶽古墳遺物の保存修理か3ヵ年で開始される。	『マルクスが日本に生れていたら』春秋社	
		10月、出光美術館の開館(東京)			10月、 出光興産の社長を退き、会長に就	出光計助
		12月、出光丸竣工、宗像の中学生をを招待		12月、釣川県道拡張計画で大鳥居の移転する。	出光丸、25万5千トンタンカー竣工、全国の中学生15,000人を招待する。	
昭和42	1968	4月、再興14号、石田正美「出光丸」を書く、大造営計画の協議	81			
		7月大造営計画の打ち合わせ、沖ノ島3次調査。		8月、宮地嶽・国宝の蔵骨器の補修がおわる		
昭和43	1968	3月、沖津宮・中津宮・辺津宮の境内を国史跡に指定答申。	82	4月～7月、校長着任拒否闘争が行われる。高校現場が混乱する。		
		7月、早川勇翁像の除幕式を吉武村役場跡。出光弘が出席、宗像神社大造営計画のため募金の開始。		早川勇の伝記を桧垣元吉教授が出版する。	5月、出光石油化学徳山第2期工事完成。	
		8月、神社、白アリ被害で本殿と拝殿の改築申請する。		9月、東郷公園の大峰山頂から古代の斧が発掘される	8月、出光美術館で、「宗像大社国宝展」を実施。	

元号	西暦	宗像神社と出光佐三	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
昭和43	1968	10月、宗像会機関誌「宗像」廃刊、神社広報誌「宗像」へ吸収する。	82		11月、大阪市立博物館で、「宗像大社国宝展」を実施。	出光計助
昭和44	1969	4月17日に宝満会で倉田主税と佐三が参拝する。20日、宗像高校体育館で記念講演会「日本人の世界的使命」を行う。	83	4月、東京の宝満会が宗像神社に参拝する。宗像の教育を良くする会が結成される。	1月、松寿丸竣工。	
		5月、沖ノ島3次予備調査。		6月、津屋崎郷土史会の結成。5月、宗像高校創立50周年。	5月、計助社長が石油連盟会長に就任する。	
		7月、宗像神社本殿解体修理に着手。		7月、上妻国雄が「宗像伝説風土記」出版する。	・『働く人の資本主義』 春秋社	
		9月、神官、太田可愛らが「宗像史話伝説」を出版、沖ノ島3次		7月、早川勇の歌碑が吉武村役場跡に建立される		
		10月、沖ノ島調査団が神湊～宮地嶽の古墳の調査				
		１０月、三笠宮が宗像神社を参拝、11日に沖ノ島を視察		11月、倉田主税が逝去する。		
		１２月、神社の本殿の解体が始まる。				
昭和45	1970	１月、大和勝理事、大造営事業の視察。	84	１月、宗像神社国宝展が小倉井筒屋で開かれる。九州初公開。		
		２月、復興期成会事務局を福岡支店より、宝物館内に移す。				
		３月、宗像神社復興地鎮祭・起工式。		5月、鎮国寺住職、立部瑞祐が真言宗御室派大僧正となる。		
		5月、宗像高校創立50周年で岡崎敬の沖ノ島の講演。沖ノ島3次。		5月、宗像高校創立50周年、宗像高校創立50年に多額寄付。		
		8月、沖ノ島丸25万4千トンが完成		7月、天保年間の沖ノ島御番所なとを大宰府で発見する。	8月、沖ノ島丸の竣工。	
		１２月、祈願殿が完成、新殿祭。			10月、第6回在東京宗像郡人会を開催 11月、出光、三島由紀夫の葬式で弔辞	
昭和46	1971	4月、宗像神社史の付巻が刊行。27年かけて3巻が完成	85	1月、宗像神社宝物館で沖ノ島神宝展を開く。		
		4月、宗像神社境内の史跡指定告示		3月、三郎丸古墳群の調査。	創業60周年。	
		6月、九州一の大鳥居が正面に引っ越し。				
		10月、佐三が大造営の進捗を視察。		11月、桜京古墳を発見する。		
		１１月12日、総工費10億円をかけて神社復興事業が終わり、遷宮大祭、佐三ほか出光関係者など、1,000人が参列。			11月、宗像神社遷宮大祭。	
昭和47	1972	１月、佐三は店主となる。	86	1月、久保宮司退任、新宮司は葦津となる。		
		3～4月、佐三、宗像大社に参拝する。大造営史の大綱・編集会議。		5月、玄海町桜京古墳の発見を新聞が伝える。	1月、出光興産の会長を退き、店主に就任。	石田正實
		7月、出光佐三の生き方を描く映画「日本人」を福岡で上映。		牟田尻古墳群の分布調査を行う。		
		8月、復興期成会を縮小、収支決算する。		9月、津丸古墳群横で住居を発見	8月、佐三、米寿。	
昭和48	1973	2月、瀧口凡夫『創造と可能性の挑戦　出光佐三の事業理念』の発刊する。	87	宗像郡4町が遺跡の分布調査	2月、佐三、白内障手術。4月、出光興産、ソ連石油輸出公団と契約。	
				9月、大石岡ノ谷古墳で、装飾古墳が見つかる。	9月、北海道精油所の完成。	
				10月、桜京古墳を県指定に答申	12月、第1次石油危機	

元号	西暦	宗像神社と出光佐三	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
昭和49	1974	5月、総額1億1千万円で、第二宮・三宮の復興を決定する。6月、責任役員の出光弘が逝去する。	88	赤間・御茶屋が消滅する。		石田正實
		9月、第二宮・第三宮の造営工事始まる。		5月・9月、三郎丸・城ヶ谷古墳群で、現地説明会が開催される		
昭和50	1975	5月、宗像神社第二宮・第三宮遷宮の挨拶「御神徳の尊さ」を行い、復興期成会ほか300人が参集する。	89	7月、津屋崎祇園山笠保存会	・『永遠の日本―二千六百年と三百年 出光佐三対談集』	
昭和51	1976	1月、出光佐三らが古文書を神社に寄贈する。『宗像大社昭和造営誌』が刊行される。	90	2月、津屋崎町勝浦峯ノ畑古墳、石柱構造が見つかる		
		10月、宝物館長の出光泰が逝去する。、11月、出光佐三が期成会長を退任する。				
昭和52	1977	１０月、宗像神社から宗像大社に名称の変更が認められる奉告祭。	91	11月、宗像の古代文化を考えるシンポジウム	7月、フランス共和国文化勲章コマンドール受章。	
				津屋崎町奴山正園古墳から剣・鏡・勾玉が出土		
昭和53	1978	１０月、神宝館の起工式	92	4月、上妻国雄が「宗像伝説風土記」上・下を出版		
		１１月、宗像町民名誉町民１号				
		12月、「宗像」宗像神社一同で名誉町民の祝辞が書かれる。				
昭和54	1979		93	1月、宗像町久戸遺跡の調査が終わる。彩色古墳が見つかる。		大和勝
		4月、沖ノ島の香炉・高機が重文指定答申		2月、鎮国寺本堂を茅葺きから銅版葺きにする。	2月、イランで革命が起こる。第2次石油	
		6月、宗像高校創立60年誌に石田正實が佐三の言葉を紹介。		3月、福間町大門古墳の須恵器が盗まれる		
		9月、沖ノ島の国宝・重文の修復するための修理委が発足する。		5月、宗像高校創立60周年、記念誌が発刊される。		
		１１月、沖ノ島出土品147点を内田義真が大社に返還。		9月、宗像郡で歴史資料館建設準備委員会発足		
		『宗像沖ノ島』の刊行される。		『玄海町誌』が刊行される。		
昭和55	1980	1月、出光興産などが、神宝館建設に1億8千万を寄付する。	94	5月、津屋崎町今川遺跡から鉄鏃・管玉が見つかる。	1月、イラン・イラク戦争が起こる。	
昭和56	1981	2月、社報「宗像」満20年、240号までを縮少版の製本する。	95		2月、日章丸四世の竣工。	
		3月、名誉町民、出光佐三の逝去、赤間に埋葬される。		4月、宗像市市制を施行する。	3月7日 97歳で死去。出光店主室『我が60年間』追補	出光昭介
昭和57	1982			4月、八所宮氏子が厳島神社に返却の申し入れ		
				8月、松崎文書館ができ古文書4万点を公開される。		
昭和58	1983			1月、須恵クヒノ浦古墳の発掘が終わる	・『道徳とモラルは完全に違ふ』出光興産	
				4月、湯川山で大規模な水門・土塁が見つかり、現地見学		
				5、朝町山ノ口遺跡でかなはしが出土		
昭和59	1984			5月、宗像高校「郷土資料図版・目録」を占部玄海が自費出版する。	・『出光の言葉』 出光興産	
				10月、八所宮に厳島神社の鐘が返却される		
昭和60	1985			2月、村山田高江遺跡より遺物が出土する		

元号	西暦	宗像神社と出光佐三	年齢	宗像の文化財等の出来事	出光興産の主な事項	社長
昭和60	1985	8月17日、記念式を中央公民館大ホール、故出光佐三生誕100年祭で映画上演、生家公開。テレビでも放映。		3月、『大島村史』が刊行される	出光店主室『我が60年間』第1～4巻	出光昭介
				9月、宗像市市文化財保護条例		
				11月、久原遺跡から鐙・家形埴輪が出土		
昭和61	1986			1月、教育大学考古班が久原遺跡説明会を開く		
		4月、沖ノ島の神宝3000点が修復が終わる		4月、占部玄海が「宗像の文学遺跡」を出版する。		
				6月、宗像郡誌が復刊される。		
		１１月、出光計助『二つの人生』を出版する。		11月、松崎武俊の著作集の刊行		
				11月、石井忠、漂着物辞典の刊行		
昭和62	1987			9月、孝子武丸正助伝拾遺を遺徳顕彰会が出版する。		
昭和63	1988			4月、「宗像の歴史と文化財」を作る		
平成元年	1989			4月宗像高校四塚会館の竣功、市史編纂室の設置。		
平成4	1992	『宗像大社文書』第1巻の刊行				
平成11	1999	『宗像大社文書』第2巻の刊行				
平成15	2003	出光真子『ホワット・ア・うーまんめいと ある映像作家の自伝』				
平成21	2009	『宗像大社文書』第3巻の刊行		田熊石畑遺跡が国指定史跡となる。		
平成22	2010	3月、「宗像高校同窓会会報」				
平成23	2011				出光創業100周年記念日には「日本人にかえれ」の名言が新聞広告に掲載された。	
平成24	2012	7月、『海賊とよばれた男』　講談社		海の道　むなかた館の開館		
平成25	2013	4月『海賊とよばれた男』本屋大賞				
平成26	2015	3～5月、むなかた館『出光佐三展』27,000人が見学。		田熊石畑遺跡の開園	3月、ＲＫＢ毎日放送で『出光佐三と宗像大社』を放映する。	

九州一の大鳥居が神社正面に引っ越しする。11 月 11 ～ 12 日、総工費 10 億円をかけて神社復興事業が進み、遷宮大祭が行なわれる。また 11 月、出光佐三が三島由紀夫の葬式で弔辞を読む。

店主　昭和 47 年 (1972)5 月、佐三は 86 歳で店主となる。7 月、出光佐三の生き方を描く映画「日本人」を福岡で上映。昭和 48 年 (1973)2 月､瀧口凡夫（後の宗像市長）の『創造と可能の挑戦　出光佐三の事業理念』が生前に出版される。

昭和 49 年 (1974)9 月に伊勢神宮の古材を移した第二宮・第三宮の造営工事が始まる。昭和 50 年 (1975) に『永遠の日本 - 出光佐三対談集 -』が出版される。

昭和 51 年 (1976)1 月に、出光佐三が自ら買い集めた中世の宗像神社文書を宗像神社に奉納 (寄贈) する。昭和 52 年 (1977)10 月、宗像神社から宗像大社に名称の変更が認められる奉告祭が行なわれる。

宗像神社復興の完成　昭和 53 年 (1978)10 月、神社神宝館の起工式が行なわれる。11 月に、宗像町名誉町民 1 号となる。社報「宗像」に宗像神社一同で賛辞が書かれる。昭和 54 年 (1979)6 月、宗像高校創立 60 周年となる。11 月、沖ノ島出土品 147 点を内田義真が大社に返還する。同年、岡崎敬の編集『宗像・沖ノ島』が刊行される。昭和 55 年 1 月に大和社長、出光興産株式会社、出光石油化学、出光タンカー等の関連会社の新年参拝が行われ、本殿で社業繁栄、業務安全を祈念する祝詔が奏上された。続いて、葦津宮司へ神宝館建設資金の寄付目録が贈呈された。出光興産関係の従業員 1,400 名や全国出光会 (出光販売所) の 2,400 店の方々から、1 億 8,900 百万円の浄材が寄付された。同年 11 月 8 日、神宝館が竣工落成式が行われる。

佐三の逝去　昭和 56 年 (1981)3 月 7 日、名誉町民の出光佐三が逝去された。10 日に赤間法然寺で密葬が行われ、赤間に埋葬される。社葬は、4 月 2 日に東京の増上寺で厳粛な中にも盛大に執り行われた。

(2)、佐三と宗像郷土館・郷土会館建設への支援

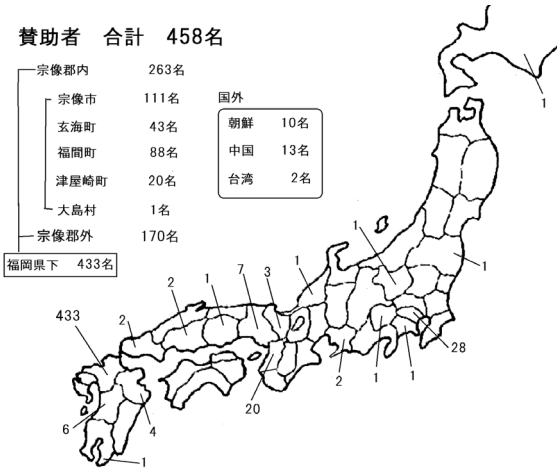
経過　郷土館建設の気運は、宗像高等女学校に昭和 7 年 (1932) 9 月に赴任した田中幸夫教諭が郷土教育資料として授業の合間をみて郡内の各地に現れ、土器・石器・文献史料等を採集されたことに始まる。これらの考古資料は、空室の 2 教室を埋める状況となった。

昭和 11 年 2 月に田中は、『宗像の旅』の刊行による収益金 300 円を郷土館建設とする条件で、許斐仙太郎校長に寄付した。許斐校長が中村堅太郎（宗像町村会代表）を通じ町村会に相談したところ、貴重な品物が集められていることは郡のために非常な喜びであるから、相当の保存方法を講じようとの機運が進んだ。その話を知った、宗像高等女学校後援会や学校から、「教室を使うのは不便で困るだろうから、ぜひ保存の部屋を設けたい」と熱心な希望があり、昭和 11 年 7 月には、発起人会の第 1 回委員会が開催され、教室に似たような建物を設けることで、建設計画と予算 6,000 円で決議を得た。その内訳は、本館 54 坪・戸棚・書籍等の備品・落成記念印刷物・庭園費などである。10 月には、建物を木造から鉄筋へ計画変更となったため総額 1 万 5,000 円として当初予算が決まった。そして、郡内外の有志に向かって建設趣意書が発送された。

佐三への資金依頼　昭和 13 年 (1938)4 月、出光に事務局が、宗像郷土館の増資の懇願、郷土館建築状況の報告に行き、6 月に 1,000 円で郷土館建設の賛助懇

田中幸夫先生と宗像郷土館・郷土会館

宗像の旅



宗像郷土館の資金賛助者

田中幸夫先生

願に行き、再び門司出光商会に 1,000 円の同額で承認、再び 1,500 円で田中幸夫が再度懇願するなど、郷土館建設で最も資金賛助に期待されていた。最終的に建設費用の 32,000 円のうち 2,500 円を賛助している。最も多い寄附である。開館は、12 月 5 日･6 日に宗像郷土会館と共にオープンする。当時のことを出光は、「狭しとも誰しもが神郡宗像人百年の大計を確立すべき瀬戸際と奮闘しこと」に千円の追加賛助を了解した。この時に、田中は宗像出身の財界人を訪ね全国に訪ねたが、昭和 13 年 7 月 11 日に 1 時間近く熱心に聞いたのが出光佐三と回想し

ている。佐三は、昭和 12 年 2 月に貴族院議員当選の御礼詣に行って宗像神社の荒廃を宮司に聞いていたので、熱心に聞いたのではないかと思う。田中は、賛助資金を集めるため「目的の為に我慢強く語った。更に追加一千円を受け、なんたる鉄面ぞ」と記している。そのため、「宗像郷土会館」の額の文字を佐三の父松寿に依頼している。佐三は、「郷土館落成の御盛典を祝し、新日本の重責に任ずべき有為なる後進の輩出を祈る」と祝電を送る。開館には、3,000 人が見学に参加している。

意義　当時の米価を基準に現代価格にすると、1 億 7 千万円に相当する。この時期、九州地方において、歴史資料館建設に寄付されたものとしては破格である。また、寄付金の筆頭 2,500 円は、出光佐三である。中村委員長をはじめとした、各委員の行動力と熱意はすさまじい。寄付金賛助者は、宗像会員で福岡県 433 名、東京 28 名・大阪 20 名など他府県から協力を受けたことが判る。郷土館の開館から閉館まで収蔵資料は、考古・古文書・古写真・図書・参考書、委託品 76 点などの内訳となり、総数 1,493 点となる。落成式の昭和 13 年 12 月 5･6 日には、寄付金賛助者、宗像高等女学校生徒、郡内の小学校生徒などが多数、来館した。また、参観者も九州大学の中山平次郎・竹岡勝也・春日政治・長沼賢海・鈴木清太郎・鏡山猛、東京国立博物館の後藤守一、国学院大学の大場磐雄、考古学者の森本六爾、京都大学の梅原末治・小林行雄、京城大学の藤田亮策、当時の学者たちが来館している。事業期間は、昭和 11 年 2 月～昭和 14 年 5 月までの 3 年 4 ケ月である。田中幸夫は、『むなかた』に、詳細な目録と事業報告が纏められる。しかし、教育改革により、戦後に廃館となる。以後、放置された。

(3)、宗像神社復興期成会会長就任と復興

復興の発端　昭和 12 年 2 月に佐三が貴族院議員の当選のお礼詣りで、「拝殿の屋根の屋根が暴風で破損していて、そこにトタン板がかぶせてあるのを見た。なぜ修繕しないかと聞いたら、この建物は国宝であるから勝手に修繕できないと宮司さんの話であった。宮司さんは神社の縁起から国宝建築物の由来等について次から次と話された。私は愕然と驚いた。国民の祖神であり、神社のはじめであり、伊勢大神宮と表裏一体であらせられるところの宗像大神の御神域、御社殿は荒れるがまま放置してある。私は驚懼した」とある。また、「宗像神社の復興のために神社史の編纂を企画しておりますが、往昔の御神域の広大なるとその祭祀の盛大なるは、今さらながら、驚くほかありませぬ。宗像神社の祭祀を知れば、神社

の祭祀はすべて含まれるということである。全国の神社の数は三万社足らずと思いますが、そのうち九千社は宗像大神が御祭神であることからを見ても、その御神徳の一端を知ることができます」と『人間尊重五十年』「宗像神社」の章に書かれる。神社の縁起と「裏伊勢」と話したのは、櫟本憲昌宮司とされる。

昭和 17 年 (1942)11 月 22 日に、清明殿で出光佐三・出光万兵衞・出光弘・伊東尾四郎・山本忠三郎・竹間保史宮司・小鳥居三思・宗像辰美などの氏子有志が宗像神社復興期成会会則を可決し、会長に出光佐三を選任する。昭和 18 年に①造営整備に関して現在の所を拡張すること、②上・下高宮の聖地として復興保存する事などの方針が決定された。

昭和 18 年 8 月に発刊された『宗像』163 号に高橋昇「宗像神社復興計画の趣旨と経過を延べ神郡郷友一般の噴起協力を望む」に設立趣旨、経過、議事録が掲載される。併せて、宗像志江の「宗像神社復興期成会の設立」に会則が会員に報じられる。この前年には、出光興産本社を東京の東銀座に移転する。

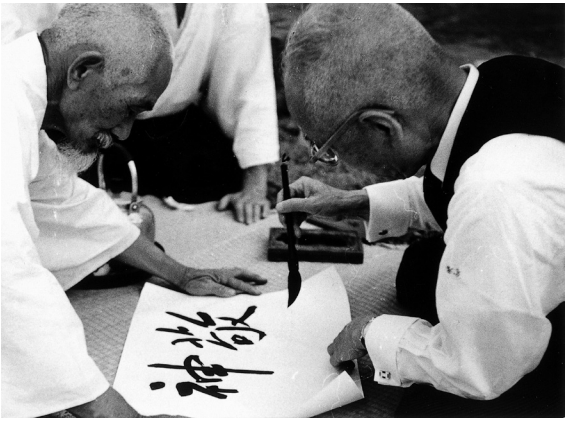
事業は大きく、昭和 17 年～ 43 年までの第 1 次復興と、昭和 44 年～昭和 56 年までの昭和大造営事業の第 2 次復興に区別すると理解しやすい。

第 1 次復興　復興には、神祇院に宗像神社の由緒・学問的調査の報告が必要であり、同 18 年に神社史編纂が開始される。神祇院は、神宮に関する事、官国幣社以下神社に関する事や神官および神職に関する事、敬神思想の普及に関する事項を掌る機関であった。ところが、昭和 20 年 (1945) の 8 月に敗戦になり、中断を余儀なくされる。

昭和 20 年 11 月 23 日に会長により、①復興問題は時機を待つこと、②調査資料は本印刷を延期することの今後の方針が示される。なお、進められていた神社略史の稿本が、昭和 21 年 12 月が完成する。

竹原元凱が「宗像沖ノ島」の中で、「戦後、皇室や海の守り神としての海軍関係者からの庇護を受けていた官幣大社も国家神道の禁止や農地改革などで窮乏していた。神官 3 人も内職でやっと食いつなぐ状況だった」と、当時の状況を記述する。

昭和 23 年 1 月に入山した鎮国寺住職の立部瑞祐は、『心の旅路』の中に「辺津宮は、結構大きいものの、さびさびとした、閑古鳥が鳴いている社でした。当時団体で寺社に参ってはならない、教職にあるものが寺社参拝をしてはならない、寺社が寄附を募ってはならないほど、マッカーサー司令部の施策が浸透して、とくにこういう旧官幣大社からは人心が離反していたように思われます。広い社務



揮毫　　**沖津宮で揮毫（昭和 46 年 5 月 20 日）※**

所に 7 ～ 8 名の神官が手持ち無沙汰に屯している」と、当時のことを記述する。

昭和 22 年 5 月、復興期成会傘下の事業が、弟の出光弘を中心に再開される。

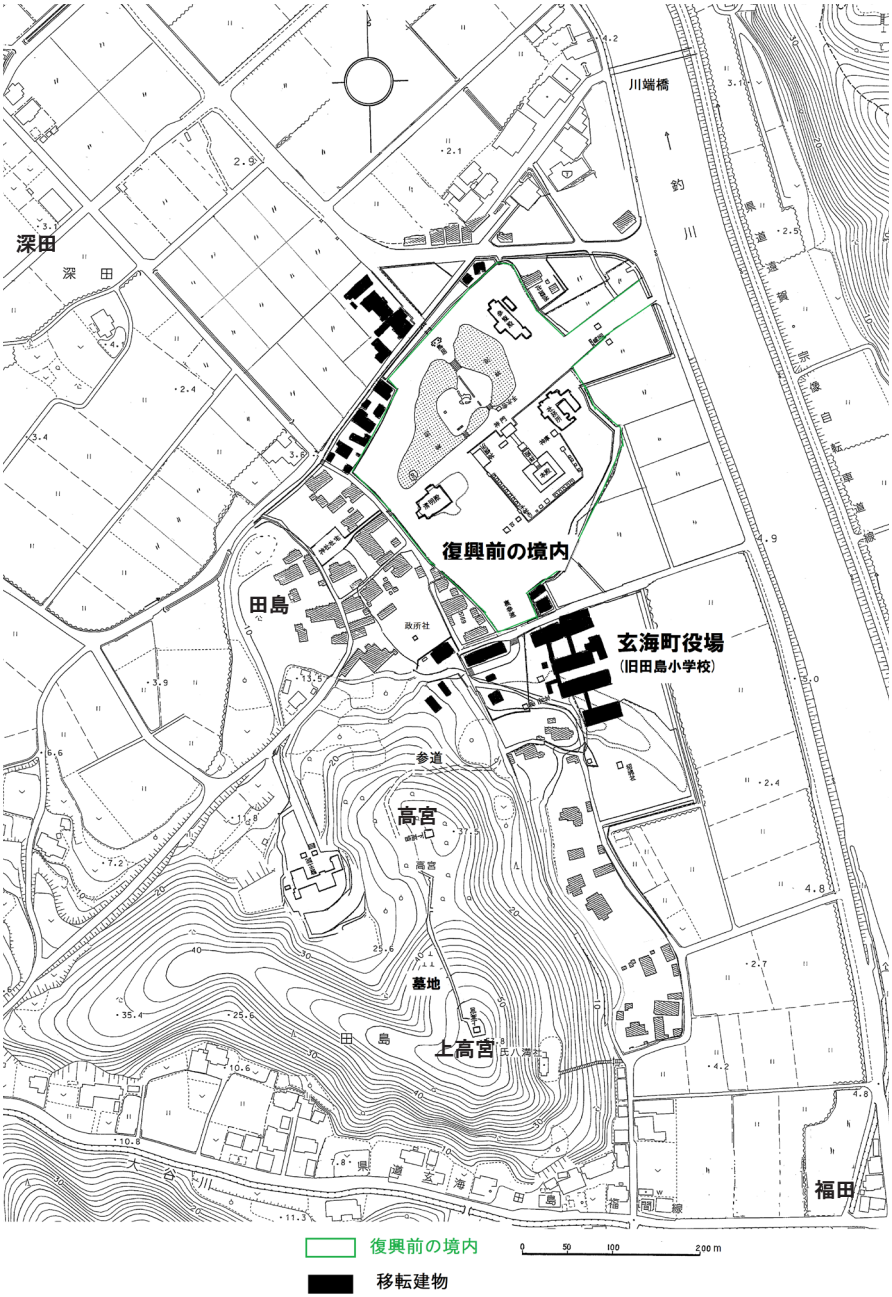
佐三は、「楽しい旅」昭和 26 年 3 月の記事に下記の通り綴る。

「昨年、九州へ旅行しましたが私の一生を通じて快心の旅の一つであった。父の 7 回忌に当るのであつたが、多忙の為法事を延期した。3 月の亡母の命日に両親の法事を営むのが目的で泰亮、計助と兄弟三人の楽しい旅であった。3 月 1 日は父が最も崇敬していた孝子正助翁の廟に参拝し、正助の伝記を積んで孝は百行の本なり、との格言が幼時は単なる記憶に止まっていたが、人生の辛酸を嘗めた老いたる今日では味わいつくせない尊い言葉であることを知った。

翌日は宗像神社に参拝し、荒れ果てる畑の中に、神漏岐、弥栄の昔ながらの御形を拝して恐懼した。畑の中より数千年の首飾りや土器を拾い集めてジット瞑想に耽耽った。又ダンスや俗謡に熱中していた青年の思想が反動的に敬神の方向に戻って来た話を聞いたのは愉快であった。唐から帰られた弘法大師が宗像神社に祈願をこめられ、その近くに建てられた最初の寺、鎮国寺の荒れ果てた跡に昔を偲んだ。」とあり、畑になっていた下高宮と鎮国寺の荒廃を目にしている。

葦津嘉之宮司の「久保宮司の退任に際して」『社報宗像』145 号に当時の記事がある。

葦津は、昭和 34 年に久保輝雄宮司の赴任した頃は、「社内事情は今の宗像大社から想像も出来ぬ程貧弱なもので、まったく手の下しようもない状況でありました。当時の事務引継ぎ書をみますと、年間の弊社入の 6 割以上の負債 (600 万円) を抱え、奉仕する神職は職舎もなく長屋の一室にどうにか雨露をしのいでいる状



宗像神社の復興前（昭和 17 年）

みあれ祭（昭和 46 年 10 月）

況で、参拝者も 1 日 15 ～ 16 名位のものでした。でも心に残っているのは、僅かに 7 ～ 8 名の職員の俸給を一度に渡すことができず、毎月 2 回に分けて支払っていましたが、それでも予定どおり支出が出来ず、経理を担当していた宇都宮禰宜が鎮痛な面持ちで宮司室に参りますと、宮司は何処からともなく都合をつけておられたのを思い出します」とある。

戦後のアメリカ占領軍の GHQ 神道指令の影響は、平和条約締結後の昭和 34 年頃まで宗像神社に大きな打撃を残していた。

昭和 27 年 (1952)4 月には、平和条約が締結され、占領軍から独立、政情が安定してきたので、再び、宗像神社の復興期成会が動き始め、2 月に宗像神社の拝殿などに国庫補助 53 万円と文化財愛護委員会が発表された。3 月には、神社の国有境内地譲渡登記が完了する。5 月からは、神社史の編纂が小嶋鉦作を中心に再開される。これ以降は、上高宮・下高宮の主要部分の用地購入が進められ、以後、継続して用地購入と民家の建物・墓地移転が行われ、昭和 32 年までに大半が境内地に登記される。実施したのは、期成会傘下に「宗像神社文化財復興奉賛会」が昭和 27 年に組織され、会長に貝島太市、理事長に出光弘、顧問が出光佐三となる。会員は、宗像郡下を中心に福岡県下の数千人とされる。事業は、神社の文化財の本殿・拝殿の修復、祭祀の復興、高宮の復元、宝物館等の施設に資金 3,700 万円を募集し、下高宮の整備などを行う。そして、辺津宮拝殿・境内域の整備も国庫補助事業で、昭和 30 年にほぼ竣功を見た。昭和 30 年に活動を終了される。

当時、沖ノ島避難港整備で沖ノ島遺跡の荒廃を心配した福岡県教育委員会の武藤正行は、調査の必要性を説いていた。そこで、復興事業に伴う神島調査の問題が検討され、昭和 28 年 11 月に開催された神社史編纂委員会で、沖ノ島学術調査の発掘が正式に決まる。

昭和 29 年 (1954)5 月、沖ノ島 1 次調査が実施される。12 月に沖ノ島を国営漁港として 4 億 5,000 万円 (6 年計画) で修築することが決まり、港の設置に伴い、遺跡の荒廃の心配が懸念された。この予想は的中、不幸なことに港湾工事関係者の鏡を含む 143 点の盗難と売却があった。発掘調査を実施しなければ、多くの出土品が失われたと思う。昭和 30 年 1 月に田島・高宮の土地買い上げられる。高宮の地は、古代・中世の頃まで神域であったが、整備前は、私有地の畑地や山林となっていた。ここが古代風の祭場として再現された高宮祭場となる。

葦津嘉之宮司は、出光佐三の社殿修繕のみを提案を多く者が支持するのに断った。そして「立派な社殿をつくつても参詣人がいなくては何もなりません。参詣人を呼ぶのはご祭神の神徳です。宗像は千五百年以上、人々の崇拝を集めてきました。その由来と歴史を解けば、神徳を慕って参詣人がつめかけるでしょう。カギは沖ノ島にあると思います。ここをぜひ調査してください。」と話したと竹原元凱が記す。おそらく、久保輝雄宮司の発言と思われる。

沖ノ島出土品は、昭和 33 年 9 月と同 34 年に重要文化財となり、昭和 37 年 (1962)3 月、沖ノ島出土の銅鏡などが国宝に指定される。沖ノ島の報告は、昭和 33 年『沖ノ島』、同 36 年に『続沖ノ島』として刊行される。驚くべき沖ノ島調査の成果は、あまねく寄附頒布されたが、頒布希望が多く、配布は一千冊となる。発掘関連経費は、5,632,765 円とされる。

第 1 次は、沖ノ島調査を含めた神社史の解明と、聖地高宮などの用地購入と拝殿の保存修理と整備がほぼなされる。

昭和 37 年 9 月には、長久手神事と呼ばれた「みあれ祭」が約 400 年ぶりに復活し、漁船 180 隻が参加する。祭の復活は、小野迪夫権宮司の尽力によるものである。この年 9 月に『人間尊重五十年』の普及本（A5 版 466 ページ）が出版される。郡内の広範囲に 280 円の安価で頒布される。

さらに、復興期成会会長代理に佐三の弟の出光泰亮が就任し、宗像神社の宝物館の実務を取り仕切る。泰亮は、沖ノ島調査団の調査員（団長）として、第 1 次～ 3 次調査に参加される。宝物館は、昭和 35 年に「宗像郡文化財共同収蔵庫」として建設計画が協議され、昭和 37 年に建設委員会が結成される。国庫補助事

宝物館（昭和 40 年に開館）

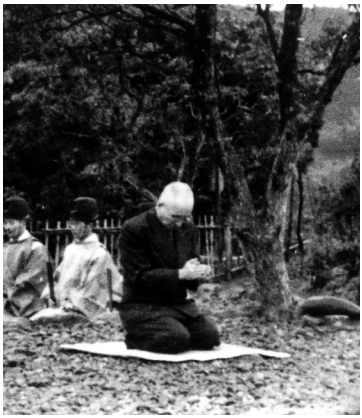
業の決定を受け、資金の募金が始まる。総工費は、3,920 万円で、建物建設工事費が 2,710 万円であった。昭和 40 年 (1965)1 月に宝物館の開館、矢次ざまに宗像大社が『宗像大社由緒記』を作成、配布 (4 月) する。ＮＨＫ「自然のアルバム」で沖ノ島を放映 (5 月)、『宗像神社史』上下巻・『続沖ノ島』が完成し、世界の国々や全国の図書館・大学の研究施設に寄附配布される。『宗像神社史』の完結 3 巻の関連経費は、2,902,947 円で、27 年間かけて刊行された。昭和 43 年 8 月には、東京の出光美術館で、「宗像神社国宝展」が開催され、1 万 5 千人の見学者があった。

上記の『宗像神社史』の調査・編集・刊行費、沖ノ島学術調査費や整理・報告書刊行費は佐三の全面支援によるものである。

宝物館の建設　この企画は、昭和35年3月に久保宮司、出光泰亮、宗像会の元老、深田千太郎宅を訪問し、宝物館の建設計画を談合された事に始まる。その後、同年に興聖寺総代、玄海町長、町村事務局長などで第 1 回建設協議会が行われた。その後に福岡県教育庁と関係者一同が協議をなされ、昭和 37 年 2 月に重要文化財管理団体の指定を受け、建設委員会の発会式が行われた。委員長は、出光泰亮として、神社・行政が一体となり、一般募金が開始される。

浄財は総事業費が 4,020 万円の内、2,890 万円が多くの宗像会関係者をはじめ、出光興産、倉田主税（日立製作所）などの経済人からも支援を受けている。
この当時は、沖ノ島 1 次・2 次調査出土品は 2 万数千点であった。

第 2 次復興（昭和大造営）　昭和 44 年 4 月に起工式が行われ、佐三の「私の最後の仕事」である昭和大造営が開始される。大造営を行うために宗像神社期成会の組織強化・変更を行い、本殿の解体修理、宝物館、神社の祈願殿・齋館・勅使館等の諸施設、第二宮・第三宮、神宝館などの参拝者を呼ぶ為の諸施設を増設することになる。そして、沖ノ島 3 次の学術調査が実施されることになる。出光興産の現地事務所が開設され、幹部社員を置き復興事業が本格化する。



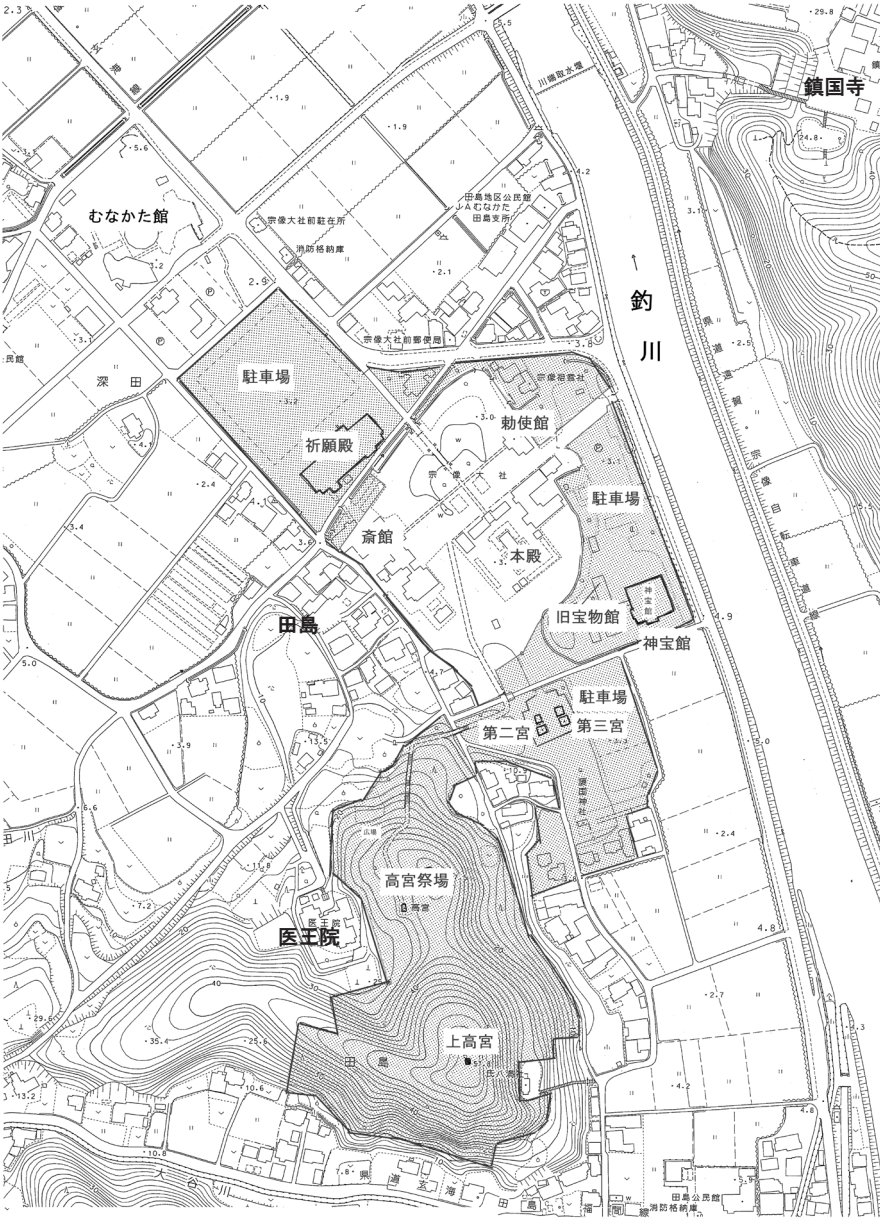
高宮参拝（昭和 28 年 12 月）※　　復興後の宗像神社本殿（昭和 46 年 11 月）

出光佐三は、『社報宗像』112 号に起工式の挨拶が書かれる。

昭和 44 年、国費をもって御神殿の修理をすることになりました機会に御神域を復興したいと考え、諸般の計画を進めましたところ、多年地元の方々、ことに福岡県民の方々に熱誠あふる御支援を賜った結果、今日起工式を行うことになり有り難く重々感謝の意を表したいと存じます。今後とも工事の進行について御尽力をお願いしたいと存じますので、御支援をお願いします。この機会に宗像神社復興期成会発足の発端を簡単に申し述べておきたいと存じます。昭和 12 年頃、私が貴族院議員になり、そのお礼に参拝しました時に拝殿の屋根にトタンがさしこんであり、事情を聞きますと、拝殿は国宝であるから、うつかり手がつけられないので、このようにしているということを聞かされました。

子供の時から郷土史で宗像神社の御神徳は知っていましたが、大人になって聞きまして、又更に意を深くしまして、これを何とか復興をやらなきゃならないというので、宗像神社復興期成会というのを作って時の政府に陳情していました。当時の神祇院総裁、内務次官の飯沼一省さんが、これはあなたがそんなことを言ってあるく神様じゃないですよ。この大神様が如何に貴い方であるかということは、神社史によってわかるから、神社史を作りなさい。日本の神社は神社史によって決まるのだからと言われて、委員を沢山推薦されました。その結果、神社史上下 2 巻ができまして、更に沖ノ島の研究が始まり、出土品が沢山でてきて「沖ノ島」という本ができたことは、皆様ご承知の通りです。

神社史 2 巻と沖ノ島 2 巻を世界各国の美術館、図書館等に贈りました。ところが、これが非常にセンセーションを起こしているわけであります。沖ノ島から色々のものが出土しておりまして如何に宗像神社の御神徳が広大かということがわかるのです。沖ノ島の出土から日本の歴史が考え直されているのではないかと思うほどセンセーションを起こしているわけで御座います。これも全く皆様の御理解と御支援によってここまできたわけで、この神域をもとの通りにはできませんが、中心の大事な処だけでも昔の姿にお戻ししたいということでやっています。どうか今後ともご支援を仰いで、この事業の完成することをお願いしたいと存じます。



復興前の境内

復興後の境内・施設

宗像大社の復興後（昭和 54 年）

昭和 44 年 (1969)、4 月に沖ノ島 3 次予備調査が開始される。また、重要文化財本殿の解体保存修理が実施される。昭和 45 年 (1970)1 月、九州で始めて宗像神社国宝展が小倉井筒屋で開かれる。

昭和 46 年 (1971)4 月、宗像神社史の付巻が刊行される。4 月、宗像神社境内が国指定史跡指定となる。10 月に田島放生会に続いて翌月の 11 月 11・12 日、総工費 10 億円をかけて神社復興事業が進み、遷宮大祭が行なわれる。この時のことを滝口凡夫が書き留めている。「多年の念願を成就され、誠におめでとうございます。」参拝者のひとりがこう挨拶すると、佐三は「ありがとうございます。しかし多年じやありません。一生の念願でした。私にとってこんなうれしい日はありません」とある。佐三翁が復興期成会を組織し、自ら会長として奔走してから、30 年を経過していた。

昭和 49 年 (1974)9 月に、玄海町役場（元田島小学校）の移転で遅れていた第二宮・第三宮の造営工事が始まる。

昭和 50 年 (1975)5 月に、第二宮・第三宮の遷宮の挨拶「御神徳の尊さ」、直会で永遠の日本を話す。

佐三翁の退任　昭和 50 年 11 月に 33 年務めた復興期成会長を退任し、奉告祭が実施された。この日には、三笠宮崇仁夫妻、責任役員列席で実施されている。翁は、89 歳となり、葦津宮司に「これで、私の人生のすべての仕事が終わった。これから先は、私は、宗像の氏子なので毎年お米を一升づつお供えしますから、どうぞ、皆様とご一緒にお仲間入りさせてもらいたい。」と話したという。

昭和 51 年 (1976)1 月に、出光佐三が自ら買い集めた中世の宗像神社文書を宗像神社に寄贈する。奉納の詳細は下記のとおりである。

古文書の寄付奉納　昭和 51 年 1 月 30 日に出光興産株式会社の石田正實社長が、出光佐三の個人所蔵並び同社所蔵、宗像大社社家の宗像辰美所蔵の古文書がそれぞれ、奉納された。今回奉納の橋渡しをされたのは神社史編纂委員長の小島鉦作及び井上団平らの多数の列席で奉納式が行われた。

出光家所蔵は、重要文化財の「宗像神社文書」で元久元年の北条時政の関東御教書など 38 通である。戦争の混乱期に元所蔵者の手を離れた際に、昭和 30 年 3 月に佐三が宗像神社の貴重な史料と賢察され購入された。

又、宗像辰美所蔵文書は、「色定法師一筆一切経奥書」、軸物、「宗像宮神官僧官御燈衆等起請文」、「宗像社事書條々」など、唐筆三合の古文書群で長く保存されてきたものである。

元　号	社殿整備	宗像神社史	沖ノ島調査	宝物館	神宝館	みあれ祭	古文書奉納	鎮国寺
昭和17年	11月宗像神社復興既成会の結成							
昭和18年		計画						
昭和19年								
昭和20年	敗戦、GHQの神道指令発令。							
昭和21年								
昭和22年		中断						
昭和23年		再開						立部瑞祐入山する。
昭和24年								
昭和25年								
昭和26年								
昭和27年	4月平和条約締結で占領政策が終わる。辺津宮本殿修理・高宮起工							
昭和28年	中津宮本殿屋根修理							
昭和29年	高宮祭場の竣工		1次調査					
昭和30年							購入	
昭和31年								
昭和32年			2次調査					
昭和33年			『沖ノ島』の刊行					大護摩堂の建設、助成金
昭和34年								寄付
昭和35年				3月端緒				
昭和36年		『上巻』の刊行	『続沖ノ島』の刊行					○
昭和37年								真言宗御室派の宗会議員に選出
昭和38年				1月起工				
昭和39年				11月竣工		10/1復興		
昭和40年		『下巻』の刊行						
昭和41年								
昭和42年								宗務総長となる。
昭和43年	春、復興計画案の推進							
昭和44年	4月起工　昭和大造営		3次調査					大護摩堂の落慶法要
昭和45年								
昭和46年	大造営竣工、遷宮祭	『附巻』の刊行	宗像神社境内が国指定史跡となる。					
昭和47年								
昭和48年								
昭和49年	10月第2宮・第3宮の起工							
昭和50年	5月第2宮・第3宮の竣工							
昭和51年	1月『宗像大社昭和造営誌』が刊行される。						1月30日寄附	
昭和52年								仁和寺門跡
昭和53年					11月起工			
昭和54年			『宗像沖ノ島』が刊行される					
昭和55年								
昭和56年					4月竣工			

宗像神社復興事業と鎮国寺

同月に『宗像大社昭和造営誌』が全国の図書館や神社、研究機関に無償寄附配本がなされる。昭和 52 年 (1977)10 月、宗像神社から宗像大社に名称の変更が認められる奉告祭が行なわれる。

昭和 53 年 (1978)10 月に、神宝館の起工式が行なわれる。11 月に佐三が、宗像町名誉町民 1 号となる。社報の「宗像」に宗像神社一同で賛辞が書かれる。

神宝館　施設は、鉄筋コンクリート 3 階建てで、延床面積 2,000㎡で、文化財保護の観点から、直射日光の遮断、湿気など外気の影響を防ぐ工夫がなされ、壁も 2 重構造となる。1･2 階を沖ノ島出土品･狛犬などの重要文化財の展示室とし、3 階に 150㎡の文化財収蔵室をもうけて、宗像文書・一筆一切経などの文書を展示する。着手は、昭和 53 年 11 月で、来年 3 月にコンクリート工事完了、その後、内外装工事を行い、1 年間の乾燥期間後に落成となる。総工費は、7 億円で国･県費補助は 2,300 万円、残金は神社と一般の募金で負担する。9 月 27 日に境内で地鎮祭並び起工式が執り行われる。1 次・2 次の沖ノ島出土品を中心に社殿の神宝、宗像郡内に散在する文化財を一括して収める共同収蔵庫は、昭和 39 年に建設された。しかし、当時に比べて保管する沖ノ島 3 次調査出土品など収蔵品が増加、その結果 5 万数千点があり、その多くが重要文化財に指定されている。また、出光佐三、宗像辰美奉納文書なども含まれる。

昭和 54 年 (1979)11 月、沖ノ島出土品 147 点を内田義真が大社に返還する。

同年、岡崎敬の編集『宗像・沖ノ島』の刊行がなされ、ほぼ事業は完了する。沖ノ島の調査成果は、岩上→岩陰→半岩陰→露天祭祀への変化を捉えた。社殿が出来る前のヤマト政権～律令国家の祭祀の様相が明らかになった。これ以後も、御神体を発掘した事例はほとんどない。

沖ノ島出土品は、質量と共に群を抜く考古資料であり、更に古事記・日本書記等の文献記載の歴史事実を立証する強力な傍証資料として比類のない、わが国の古い歴史を見直し、民族の誇りを恢弘せんとする気風の興りつつある昨今、このたびの神宝館の意義は大きい。

昭和 55 年 1 月に大和社長、出光興産株式会社、出光石油化学、出光タンカー等の関連会社の新年参拝が行われ、本殿で社業繁栄、業務安全を祈念する祝詔が奏上された。続いて、葦津宮司へ神宝館建設資金の寄付目録が贈呈された。出光興産関係の従業員 1,400 名や全国出光会 (出光販売所) の 2,400 店の方々から、1 億 8,900 百万円の浄材が寄付された。

宗像神社の復興計画は、大正末年から何度も請願活動がなされたが進まず、出

光が会長となる復興期成会を組織し、自ら会長として奔走してから、37 年を経過し、現在の宗像大社の景観と施設が整備された。その力の入れようは、現地事務所を開設し、幹部職員を配置するほどであった。

境内地は、『宗像神社史』の研究成果に基づいて古代・中世の境内範囲の用地購入や民家・墓地移転、玄海町役場移転までして整備がなされ、復興前の 5 倍の面積になり、現在の保存・整備された景観が出来上がる。祈願殿と駐車場部分を除いて、国指定史跡となる。

同様に大島の中津宮、沖ノ島においても用地購入・景観整備が実施される。そして総工費 10 億円の内、4 億円の浄財が出光興産の会社、従業員、販売店からの寄附によるものであり、出光関連企業で総額 7 億 4 千万となる。さらに、出光弘の新出光石油からも寄附があり、つまり、8 割が、佐三の人徳となる。そして、出光佐三と弘・泰亮の兄弟が一致協力して進められたことは特記される。同時に宗像神社宮司、宗像会、神社氏子会の強力なバックアップも見逃せない事実である。詳細な内容は、『宗像大社昭和造営誌』1976 年に纏められている。

忘れていけないことがある。今日、世界遺産となりうる沖ノ島学術調査の調査・研究の 1 次調査、2 次調査・整理費、そして 3 次調査でも 10 年間の経費は出光興産によって賄われたのである。そして多くの人々の尽力によるものである。佐三翁は、日田重太郎の教えである「陰徳」を大切にするので多くを語らない。

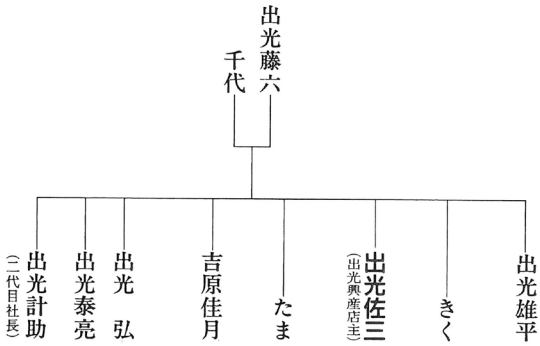
宗像大社が世界遺産の候補になりうる基盤は既にこの時期に、出光佐三と云う個性で結実したと見なしても過言でない。また、自ら計画・実施すること決めたならば、突き進むことを宗像人に示したことに意味がある。

(4)、佐三を支えた出光兄弟と久保宮司

出光家は、出光藤六と千代の間に六男二女の子供がいる。長男の雄平、次男の佐三、三男の佳月、四男の弘、五男の泰亮、六男の計助、長女きく、次女たまがいる。筆者の宗像中央中学校の同級生が、次女真武たまの親族がおり、佐三の事をよく話していた。実家は出光興産土穴店のガソリンスタンドを経営されていた。

宗像神社の復興は、福岡市の地元で新出光石油株式会社を起業した出光　弘が、福岡宗像会のまとめ役として、昭和 15 年より会長となっている。そして、戦前に復興期成会の設置に伴う準備室を自宅に設け、福岡県の窓口となる。

東京在住の出光泰亮は、戦後は出光興産監査役をしながら。宗像神社史、沖ノ島学術調査の支援や、在東京宗像郡人会の世話人として活躍された。



出光佐三と兄弟

この兄弟が佐三の右腕、左腕として、宗像神社や宗像地域の相談窓口役として調整・活躍し、佐三を影ながら支え強力に進められる。兄弟が同じ価値観を持ち、兄の事業を進め、出光興産の宗像出身の関係者がこれを支えたのが実態である。

それは、「家族・兄弟が仲良くする」「人のために尽す」など出光家の家風の影響によるものであろう。『社報宗像』163 号、180 号に追悼記事があり、引用する。

①、出光　弘

出光藤六・千代の四男。明治 26 年 (1893) ～昭和 49 年 (1974)、82 歳逝去。「先輩訪問記」『復刊宗像』1 号　昭和 30 年に赤間の子供時代が紹介される。

赤間尋常小学校の 3 年の頃、卵の買い出しに田舎を廻って金 12 円を貯金して嬉しかった。実業人として活動したいとその時はっきり決めたもんだ。高等小学校入って 1 年生の頃（今の小学 5 年生）に八幡の呉服商の叔父の店で通学傍ら、商売見習をやらされて、店番もやつた。その翌年赤間に帰り、私の家業である染料の樽入の小分包装を一手に引き受けて染料に染まった青い鼻をたらしたもんだ。中学は折尾の東筑中学だ。赤間から毎日汽車で通っていた。寝る前にランプを上に湯沸を釣しておく、翌朝暗いうちに起床して、その熱いお茶で茶漬をかき込んで赤間駅まで寒い野道を歩いたもんだ。中学 3 年生頃から卒業するまで、八幡、戸畑、門司という風に転々と住居を変えた。

住所転々としたとあるのは、出光家が家業を閉じ、赤間を離れたためである。

青年時代　折尾の東筑中学を出て 1 年後の大正 3 年、兄貴に負けるもんかと、青雲の志を持ちブラジルに渡航、さんざん苦労積み重ねたあげく、4 年後に佐三から強引に連れ戻されて、出光商会の仕事を手伝わされた。島根県石見大田町の出光商会の製材所を整理に手掛けた。それから、大連支店員として鉄鋼資材の満

鉄納入を 2 年ほどやり、この後に下関支店次長となる。ここで石油を売ることを覚えた。当時 30 歳。その頃から海上燃料のバラ売り、即ち中味の計量売りが始まった。それまでは缶で売っていた。この頃、彼が海上計量に便利な漏斗型を考えた。今これが全国的に使用されている。

新出光石油株式会社の創業　経営の才に恵まれた上、独立独歩を好む彼は、大正 15 年に福岡の太田鉱油を創立、独立して新出光石油株式会社となり、確実に業績を上げ、昭和 30 年より現在の社名となる。常に石油販売業界の先達として活躍された。福岡県を中心に九州一円に堅固な石油販売地盤を確保し、新出光、新出光石油、出光産業を経営された。現在の株式会社新出光となる。

教育活動と宗像神社の復興　愛国心は戦後、人心の荒廃と国の前途を憂い、いち早く日本の復興は教育の振興であると喝破せられ、学校の設立を志されたことである。大濠中学校 (昭和 22 年) の創立、福岡外国語学園建設 (同年に理事長) を成し、同学園が福岡経済専門学校と合併して昭和 31 年に福岡大学に改称された。理事・理事長の要職で昭和 49 年までの 27 年余間に献身的に学校経営に携わり、我国の教育会、特に私学の振興に尽力され、総合大学まで発展させるなど、その功績は多大なるものが多いが、彼はこの要職に対する報酬を一切受け取らず、その責をまっとうされた。

彼は、敬神崇祖が極めて篤く、昭和 17 年 9 月、兄佐三によって宗像神社復興期成会の発足が提唱されると、直ちに事務所を福岡市内の自宅に置き、発足の準備に尽力する。また、神社と在福岡宗像人会の協力に結束に発展する。同年 11 月に期成会の発足をみて、同 12 月の常任委員会で監事に就任、以来在東京の出光会長を補佐し、復興運動を推進された。運動は、神祇院を動かすに至ったが、敗戦により一時中止となる。

敗戦とともに実施された GHQ の神道指令による政策は神社会に大きな打撃を与えたが、これに怯むことなく、彼を中心に地元関係者の熱願は、戦後まもなく施工された中津宮本殿屋根修理及び沖津宮遷座祭斉行となる。再び復興運動の機運が起こり、昭和 23 年に崇敬会設立となり会長に佐三、運営補佐役に弘が理事長に就任され、協力に復興運動が展開する。この後、頻繁に同会理事会を開き、国有地となっていた境内地の譲与申請、高宮聖地復元などが、審議されいずれも着々と進捗していった。復興事業の重大な局面で弘の助言が極めて多く、献身的な努力をなされた。

昭和 27 年 3 月、辺津宮本殿の修理が着手されることになり、彼を神社常任役

員に迎え、難局に尽力された。責任役員として、22 年間 (期成会役員として 32 年間) 永きにわたり、神社の運営に尽力、この間に文化財復興奉賛会を組織し、理事長に就任した。かくて、昭和 46 年 11 月 11 日、勅使が来て斉行し昭和大造営工事完了による遷宮大祭として完結する。

他に、太宰府天満宮、福岡県神社庁、伊勢神宮式年遷宮奉賛会等の各役員を兼ねられ、更に神宮寺の鎮国寺の復興に尽力された。神仏への崇敬に熱心だった。氏は、実業界、教育事業、宗教活動に顕著な功績を残された。

昭和 49 年当時の主な役職　宗像神社責任役員、宗像神社復興期成会監事、福岡大学理事 (永年理事長)、福岡県神社庁顧問、太宰府天満宮理事、鎮国寺世話人会会長、在福岡宗像郡人会会長ほか多数の役職を兼任される。

特記されるのは、彼の尽力がなければ、鎮国寺の復興はなかった。次項で詳細を纏めた。鎮国寺世話人会会長として尽力され、昭和 44 年、仁和寺真言宗室派管長より感謝状が送られている。

また、昭和 34 年に神社役員の協議により、皇太子殿下御成婚の記念事業として、「宗像大社奨学金受給制度」が設けられ、各方面から浄財を集め、同 35 年 4 月から実施されている。人材育成の為、高校・大学進学者を対象にされている。社報 20 周年の記事によると、250 名が受給を受けた。後に、福岡教育大学で独自の出光支援の奨学金制度が開始されるが、ここに萌芽を見ることができる。

②、出光泰亮

出光藤六・千代の五男。明治 29 年 (1895) ～昭和 50 年 (1975)、79 歳で逝去。

出光商会の創業の頃　泰亮 (たいすけ) は、明治 29 年 4 月 14 日、宗像郡赤間町赤間に出生。明治 44 年には、門司に出光商会を創立されると同時に入社後に丁稚となり、佐三店主と共に今日の出光興産の基礎を築かれた。門司時代は、店主が大八車の先棒を握り、泰亮が車の後押しをして油を売り歩かれた苦労談は有名である。創業時代の苦難を共にした苦労人である。

昭和 15 年、東京に出光興産株式会社が設置されるや、その監査役に就任、同年に取締役名古屋支店長となる。戦後は、常任取締役から顧問に就任された。

宗像神社の復興と宝物館の建設　店主と同じく敬神の念深く、昭和 17 年に宗像神社復興期成会が結成され、店主を補佐し復興に尽力され、神社の隆昌は彼の懇切丁寧な助言と示唆によるところが大きい。昭和 18 年、宗像神社史調査委員会が設けられるや運営に当られ、昭和 27 年に同委員顧問として、以来 20 年余間に各委員を鞭撻されて神社史上下巻、附巻 1 巻が刊行される。

また、昭和 29 年 5 月には、沖ノ島学術調査団顧問として、沖ノ島に渡島、学術調査に加わり団員を激励された。昭和 37 年 5 月には、これら沖ノ島神宝類 5 万数十点を収蔵する宝物館建設委員として浄財の募金にあたられ、神社境内に正倉院風の宝物館完成をみたのである。昭和 39 年 11 月、宗像神社宝物館館長に、昭和 50 年 3 月より神社責任役員に就いた。

人物評　元来非常に温厚な人柄で彼を知る人は一様に「泰亮さん」と呼んで人柄を慕った。また、趣味も広く、殊にカメラの腕は並外れていた。また、郷土愛の気持も強く、在東京郡人会の世話人として、宗像出身者の後輩の指導・育成にも精力を注がれた。毎年宗像神社の秋大祭に参列して、その後の赤間高等小学校時代の同窓会を開かれるのを大変楽しみにされていた。

略歴　明治 29 年 4 月 14 日、宗像郡赤間町赤間に出生。明治 44 年 6 月に出光商会創業と共に入社。昭和 15 年に出光興産取締役に就任。昭和 16 年に同名古屋支店長。昭和 27 年 4 月、宗像神社史編纂委員会顧問に就任。昭和 29 年 5 月、沖ノ島祭祀遺跡学術調査団顧問に就任。昭和 37 年 4 月、宗像神社宝物館建設委員会長に就任。昭和 39 年 11 月に宝物館館長。昭和 50 年 3 月に宗像大社責任役員に就任した。

③、久保輝雄宮司

葦津嘉之「久保宮司の退任に際して」『社報宗像』145 号より引用する。

久保宮司は、「神主は人々の幸福製造業だ、我々神に奉仕する者が幸福にならなければ、人々に幸福になるよう道を説く事は出来ぬ」と云われ、以後職員の親和会が出来、・・・家族的な和の精神が実を結び、社内も次第に落ち着きを取り戻したとある。昭和 37 年頃には、総ての負債を返済し、新たにスタートが始まった。その後、神社の財政も次第に好転し・・・社内に活気が漲り、新しい職員の数も増し今日の軌道がつくられた。

昭和 38 年には宝物館建設が計画され、早急に用地買収を始めました。神社東側の民有地 3 千坪の敷地を買収し建設を行うことになりましたが、当時としてはこの事業費は弊社入 1 ヶ年分に相当する金額でありました。・・・・この頃から着実な実績が稔り、御社頭の参詣者は増大の一途を辿るようになったのであります。御社の体制も整い、企画研究室を設けられ、次々新規事業が計画されました。神湊に屯宮の建設用地買収、続いて五月宮の用地買収、辺津宮境内の拡張、中津宮の御屋根替えなどの事業は逐次実施されて行った。

昭和 42 年には神社の財政も 5 倍になり、当社長年の懸案であった大復興事業

の具体的な計画が始まった。昭和 43 年には、出光佐三復興期成会長と一心同体となってこの事業計画の本格的な実践に取り組むことになる。この事業は幸いに宗像大神の御新徳と時人の和を得て、苦難の中にも順調な一歩を踏み出した。全国に亘る募財活動は、出光佐三会長を中心に予定通りに進捗し、諸計画は次々に進行した。昭和 46 年 11 月 11 日には待望久しい総ての諸事業を無事に完了し、畏くも勅使をお迎えして 400 年振りの偉大な遷宮祭が斉行された。別名に復興宮司とも呼ばれた。退任後、葦津宮司に実務が引き継がれる。

人物評　福岡市近郊志賀町（志賀島）の人、明治 40 年山口県生まれ、昭和 5 年に神宮皇学館の本科を卒業した。根っからの神主さんである。伏見稲荷大社の調査嘱託や、博多でなじみの櫛田神社の宮司を経て、昭和 33 年佐伯宮司の後を承けて、宗像神社に迎えられる。戦争中は従軍して、陸軍大尉の肩書きをもっとは、ちょつと思われない。「筋の通らないことは決して妥協しない」という芯の強さは、こんなところからきたのである。白雲と号し、社報「宗像」に「阿蒙少言」や論説を書いているが、なかなかの達筆である。神社では、神官執筆の『宗像史話伝説』・『許斐山物語』などの啓発本が刊行された。

（5）、佐三と先人の顕彰

①武丸正助の顕彰と維持（ 宗像市武丸 ）

武丸正助は、寛文 11 年 (1671) に宗像郡武丸村に生まれ、宝暦 7 年 (1710) に郡に親孝行が認められ、米 12 俵および田 (1 反 7 畝) を貰う。さらに享保 14 年 (1729) に福岡城に呼ばれ、親孝行で自田の税が免除され、農民の身分であるが「武丸」姓を授かる。宝暦 7 年に逝去する。黒田藩の褒賞で、有名人であった。黒田藩の領民政策の一環で、節婦も褒美が与えられた。地元では、戦前まで「節婦阿政 (おまさ)」と武丸正助は共存した意識であった。

武丸正助の最初の記念碑は、明治 26 年の「郷友雑誌」で宗像会の吉田良春の呼びかけで建設される。

昭和 27 年に吉武村は、福岡県の農村振興計画指定を受け養老院（緑風園）と幼稚園の設置、正助翁顕彰会結成を進めていたが、前者は実施できたが、後者は資金不足で中断していた。時の村長であった立石昇、山下議、高山徳七郎が奔走していて、赤間出身の出光佐三に上京し、陳情の結果、「それは是非実現して貰いたい」と 20 万円の寄附がなされ、顕彰会の結成となる。昭和 28 年に武丸正助廟堂が改築・新廟となる。総事業費は、477,155 円の 213,000 円で 2 分 1 の

武丸正助翁　　**孝**　　**恩**

援助である。

昭和 29 年 (1954)9 月に孝子、武丸正助翁の遺徳しのび福岡松源寺で、200 回忌讃仰法会が行なわれる。10 月 5 日には、200 回忌に遺徳をしのび武丸正助廟堂で、奉賛会祭主の出光佐三の祭文に続いて、子孫の武丸正兵衛の焼香があった。続いて、西本願寺の大谷光明上人の法話、高田旭操師の筑前琵琶、平田汳月師の博多仁和加などの余興も実施された。当時、西鉄の臨時バスも出されたと云う。佐三は、祭典にあやかり亡父藤六 (松寿) の 13 回忌を赤間法然寺で行った。そして、佐々木滋著『孝聖武丸正助伝記』が 3,000 部を寄附配本して、供養される。

佐三の挨拶が、『宗像』復刊 1 号にあり下記に紹介する。

「 わたしは、子供の時から正助翁の親孝行のことを両親からいつも聞かされていてこの孝行な聖人にあやかりたいと思っていた。今回はからずしも奉賛会のお世話をいたすことになって非常な喜びを以て、郷里に帰って来た次第であります。戦後日本の道義も廃退いたしまして、忠孝と云うことが軽んじられてきましたが、この傾向はこのままで終わるものでなく、日本人も又目覚める日があることを信じています。戦後十年の月日が経過いたしましたが、この間どうゆう変化があったかということを考えて見ますと、まず海外では “もう戦争はこりごりだ” といっていながら相変わらず戦争の用意が続けられている。誠におかしな現象であるが、これは言えば何事も理屈一点張りではいかんということであります。いい事した人は必ず恵まれぬ。このようなことは裏を返せば孝子正助さんのような誠実な人間に全世界の人々が成っていたならば、世界はとっくに昔に平和なっていると思うのであります。深い人類愛が人間闘志の間をしみとおつていれば、あんな悲惨になくなって済んだと思うのであります。また翻って国内の事情を考えますと、この頃の日本人はしょうがない。道義は退廃してどうしょうもならぬと日本人を馬鹿の標本みたいに云う。これは日本人自身であります。ところが、外国人はどうかと云うと、日本人は立派だ。日本の国は富士山のように立派だ。勤勉な国民だ。” という。軍人も一般人も褒める。日本人は決して悪い国民でない。正助翁がその手本である。この正助翁の心を心としていけば間違いない。立派な世界

武丸正助廟堂（武丸）

早川　勇顕彰碑（吉留）

平和に貢献する事ができる。と私は思うのであります。」

昭和 39 年 5 月 21 日、赤間に墓参り帰福し、氏神の八所宮、緑風園・武丸正助廟に参る。8 月に武丸正助翁の伝記 3,000 部を配布する。ここに序文を書かれ、経済的支援がなされる。

この本は、子供向けに書き下ろされたのである。昭和 39 年 6 月、孝聖武丸正助翁遺徳顕彰会の代表である滝口凡夫によって、『武丸正助さん』が刊行される。本は、A5 判 38 ページで、200 円の安価で配布される。

昭和 41 年 4 月 25 日に正助翁 210 年祭が遺徳顕彰会によって行われる。宗像会との協賛である。以後、滝口雪雄により、昭和 62 年に『孝子武丸正助拾遺』が刊行される。その中には、出光興産の出光昭介 (5 代目社長) の「真の日本人を育てる鑑に」の序文が寄せられている。

「 父は青年時代から、理想を掲げて実業界に入り、95 年の一生かけて、日本人の事業経営のあり方を実証してきました。その体験の上に立って、今日の世界は権利思想で行き詰まつているので、この混乱を救うものは日本の道徳・互譲互助の精神であるという信念をもって、日本人の世界的使命を全国の青年や経営者たちに訴えておりました。父の頭に描かれていた、道徳の日本人の原型と言うべきものは、恐らく子供心に知った、宗像の先生や地域風や私の家風であり、殊に正助翁の姿であっただろうと思います。その意味で、正助翁の教えは正に、今日の日本及び世界に大きな示唆を与えるものであり、この度、正助翁の伝記・資料が集大成されたことは、非常に有意義なことであると思います」

滝口は、「善を積む」・「孝養を尽す」・「仁徳」・「恩愛」・「正義」等の道徳再興を大事とする良き宗像人の創造を願求する情熱の気魂がある方であった。彼は、元宗像町職員で教育大学移転の企画室課長で手腕を発揮した。そして、出光の精神を受け継がれた。武丸正助廟の改築移転も佐三の了承と援助なくては不可能であった。平成 4 年（1992）正助ふるさと村がオープンする。
このように、武丸正助翁の顕彰事業に深く関与し、経済的にも多く支援を継続的に行われていた。佐三の「孝」や「恩」の基層意識を窺うことができる。

②早川勇顕彰碑（ 宗像市吉留 ）

昭和 43 年 (1968)7 月 22 日、明治 100 年に併せて計画されていた早川勇翁像の除幕式を吉武村役場跡で行われた。再興宗像会が会誌で、寄附を呼びかけたも

のである。早川勇顕彰会は、代表は石田重成町長、顧問が出光佐三となる。式典には、早川勇の子孫や、佐三の代理として出光弘（新出光石油）が出席、350人が参集した。併せて、6月に早川勇顕彰会より依頼されていた早川勇の伝記を桧垣元吉教授により5,000部が出版される。建設碑は、250万円の浄財で建立された。翌年7月に歌碑が建立される。

早川は、宗像会を組織するにあたり中心的な人物で、後進育成に尽力しており、佐三と共通する部分が多くあったと思う。ただし、出光の書いたものに、早川の記述は殆どない。その原因は、早川が勤王のための家族を疎かにし、子供の死が起因するのではないかと推察する。佐三の家族観と合わなかったのかも知れない。

(6)、鎮国寺の復興、東郷公園の再建

①、鎮国寺の助成（宗像市吉田）

安部照生の「鎮国寺」『神郡宗像8号』2015年に記載があり、立部瑞祐の自伝『心の旅路』昭和57年が出版されていることを知った。安部によると、「昭和30年は開基1,150年を迎え、・・・昭和33年落成の大護摩堂建設費に175万円を寄附される」とある。当時の初任給が1万5千円であるから、現在の価値としては、10倍ぐらいとなろう。

鎮国寺は、弘法大師が唐より帰朝後、日本で最初に開基された由緒があるとする名刹であるが、昭和23年に瑞祐師が特命の復興住職としてこの寺に来た時、まず驚いたのが荒れ果てた寺の様子だった。屋根がはぐれて雨漏りする。床は朽ち果て落ちたままという荒廃ぶりで、箸一膳、茶碗ひとつなかった位だから、もちろん明日の米の蓄えなどない。本尊の五体仏以外は既になく流失していたようだ。出光美術館蔵の両界曼荼羅図は、流失品が購入される。本図は江戸時代前期～中期まで鎮国寺に所在が確認される。

瑞祐住職と佐三との出会いは、「鎮国寺の入山当初（昭和23年）にさかのぼる。このとき鎮国寺復興の抱負を語ったところ、社長は予定を変更して寄ってくださり、年に二度、三度、宗像神社に参詣される時はこちらも参ってくださる」とある。住職の38歳の時であった。

大護摩堂の建立（昭和33年）した頃は、勧業行脚に全国を募金で歩いていた。建立の負債の175万円を抱え、身動きが取れず佐三の弟の出光弘（新出光石油社長）を通じて、佐三に会うことになる。立部瑞祐の自伝『心の旅路』が引用する。

鎮国寺（宗像市吉田）

「鎮国寺の事情を説明し、高利貸しから金を借りているときついお叱りを受けた。口調は丁寧だったけど佐三氏の言葉はわたしの肺腑を抉ってきて、じっと首を垂れていたが、・・・わたしの命のある限り・・・絶対にお返しします。・・じつは生命保険にはいつております。死ぬつもりはありませんが、返済できないときは死ぬような成行きになるかも知れません。［わたしもずいぶん大勢の人と付き合ったけど、あんたは本当に命がけやな］と、返済額を融資された。・・1年三ヶ月後に返却するが、このお金を差し上げましょうと」

と詳しく記述される。そして、瑞祐門跡は、「わたしの人生にとって、これは涙の出るほど嬉しかった思い出の一つです」と回想される。佐三は、和尚の命がけの心意気に鎮国寺の復興を確信し信頼したのだろう。

また、鎮国寺の復興事業を親身になり、昭和 31 年に「在京宗像郡人会」が発足しました。出光泰亮・吉武辰夫が幹事となり奔走し、東京虎ノ門の共済会館で発会式となる。顧問は、佐三と倉田主税（日立製作所社長）となる。会は、宗像会の再結成と考えた人が多く、一杯食わされたと冗談を云われながらも、鎮国寺の寄附集めの会であった。この会でのそうそうたる人脈が、後日の募金行脚の旅に役立つことになる。この宗像郡人会は、後に東京宗像郡人会となる。以後続き、昭和 38 年の 4 回は、会員数が 288 名であった。東京の宗像出身者の親睦団体であった。また、昭和 45 年 11 月に 6 回目が出光泰亮が世話人となり、出光興産新社屋 5 階で 133 名に家族もあつまった。宗像弁丸出しの郡人会に、赤間誠

津屋崎町長、久保宮司、山本三吾元宗像校長、伊豆善也県議会議員も駆け付けた。乾杯は、古野清人先生であった。

瑞祐住職は、大護摩堂建設後に、境内拡張整備、客殿、諸堂宇、駐車場の整備を完成させ、名刹の大寺院を復興する。こうした苦境を乗り越え 2,500 万円に及ぶ浄財を独力で集め、鉄筋コンクリートの大寺院を建立し、西国随一を誇る大寺院にまで築きあげた。「寄附は余計に集めようという精神では集まらない」と云い、「誠のあるところ以心伝心、おのずから浄財は集まる」と云う師の言葉には、苦行を乗り越えた行者の信念を含んでいる。

立部瑞祐は、佐賀県鳥栖市生まれ、8 歳で久留米市安国寺に入ったが、のちに伊予小松の香園寺に修行された。彼は、昭和 37 年に自坊を離れ本山の京都市の仁和寺に出任することになる。51 歳であった。この頃は、出光弘の好意と支援を受け、後に第 43 世の仁和寺門跡と真言宗御室派管長に推戴される。

鎮国寺の復興は、佐三・弘 (鎮国寺世話人会会長) の兄弟の支援・寄附と宗像会の結束によるものである。また、神湊魚屋の女将、吉武りゅう・繁子の入山後に粋な支援で支えられた。また、木造不動明王立像 (国指定重要文化財) が、福岡市の福岡城堀端に長宮院にあったものが、縁ありて護摩堂に安置される。この縁は、出光弘が関与するのではなかろうか。

こうして現在の境内は、諸施設が復興整備され、宗像大社と共に宗像の由緒ある寺院である。寺院の歴史については、「中世宗像神社と鎮国寺」を『むなかた電子博物館紀要 4 号』(2012 年) に書いたので参照して頂きたい。筆者は、玄海町分布調査でご一緒したが、「形あるものは、壊れる」と言われたことが、印象的だった。鎮国寺の再建を身を持っての発言と思う。

②、東郷公園の再建

東郷公園の助成 (福津市渡)

東郷平八郎元帥の遺徳顕彰施設として戦前に大峰山に完成していた。津屋崎港口には、日本海海戦で捕獲されたロシアの「アプラキシン」が昭和 14 年に海軍から払い下げられ、港に繋がれていた。海軍思想普及の展示館となっていた。
明治百年を記念して、日本海海戦 60 周年を契機に東郷神社改築と宝物館を計画中だった「東郷神社宝物館及び養真閣再建期成会」では宗教法人の許可もおり、昭和 43 年 5 月 27 日に郡内外の名士参列のもとに、地鎮祭を行なった。敷地外郭に 4 千坪を発起人の安部正弘が寄附、造成が行なわれた。約 2 千坪の社殿及び宝物館建設用地と駐車場が 6 月 8 日に完成し、本殿の工事を着手、同 44 年 5

福津市東郷公園の施設と日本海海戦の銅板

月に竣工している。宗像会会員の安部正弘が、佐三や倉田主税の寄附を呼びかけたものである。安部正弘は、津丸出身で倉田主税の子供の頃からの友人であった。

宗像には、日本海海戦の記念物が多い。沖ノ島の現地大祭は、この日が契機となり、今日も続く。明治 38 年 5 月 27 日には、沖ノ島沖海戦の砲音が玄界灘から聞こえたとの証言が多い。その一人、主税の弟である興人 (三井鉱山社長) は子供の頃に、福間海岸で聞いている。戦後は、戦争に関するものは全て負の遺産と考えられていたが、今後は沖ノ島砲台・大島砲台と共に平和学習の資産として活用できると考える。

(7)、佐三と戦後の宗像会

雑誌名が同じであるが、出版の経緯が異なるので、復刊宗像と再興宗像に区別する。設立趣旨はほぼ同じである。宗像大社の社報は社報宗像として記載する。

復刊宗像　戦後、昭和 30 年 12 月 1 日、神湊町在住の中野正之によって、復刊記念号雑誌「宗像」が個人名義で発行された。復刊の目的と心意気の言葉がある。「故郷は祖先の墓のあるところ、父母兄弟の住むところ郷を離れ故山を望む懐かしむものであるまい。各自消息を報じて、親愛の情を表わし、郷友の交流を厚くし、知識を交換し、徳行を奨励し、老幼少長その責任尽くし、郡の福祉に邁進す

る」とある。戦前の『宗像』の趣旨を継承し、進めるためとする。

復刊の要望は、東京・福岡の他郡の要望に応えたものである。当時、東京・津屋崎・福岡県人会・八幡・門司・飯塚・中間・遠賀宗像会などの親睦会は残っていたが、中間宗像会と有高巌（立正大学）、さらに宗像出身の多い出光興産の幹部からも熱望があり、それに応えたものである。編集の主幹は、中野正之、編集長は吉田和三である。

復刊記念号雑誌「宗像」の復刊宗像に佐三が「宗像族の雄心を」の祝辞を書く。

「 宗像神社は単なる一つの地方的な宗派神道の社でなく、畏くも天照大神の御神勅により建立された社でありまして、宗像郡民の精神的中枢であるというような、小さなものではありません。実はわが日本国民の信仰の中心であると信じています。戦後日本人は。神ながらの道を忘れ、祖先の道を忘れて、精神的な心のふるさとを亡失してしまったような感じがします。そうした意味からいつても日本国民子々孫々相伝えて祭祀し奉るべしと御神勅に示されたこの宗像大社の神威を広く国民にしらしめん心の寄りどころを失って、右往左往している国民に、神に帰一して奉るという先祖崇拝、国民一致の精神を教え示すのは、我々宗像大社の氏子いうなれば、永らくこのうまし国土に住みついている宗像族に与えられた使命ではないかと考える」

と、宗像神社史・沖ノ島調査の成果を取り入れた独自の考え方を披露する。復刊には、交流を深める為に戦前の宗像会のメンバーのこの雑誌に対する期待、会員の顕彰記事が多くみられる。戦後の民主化で多様な記事となり、檄文を書くのは出光翁ぐらいである。地域史に関するものが多くなり、歴史系雑誌の色彩が強くなる。その中で、日並文夫、上妻国雄、安川弘堂が執筆する郷土史記事が多い。2 巻で終刊、会員は 232 人前後であった。

再興宗像　昭和 38 年 3 月 8 日には宗像町東郷で有志が会合し、宗像会の会則を基礎として、新しい宗像会が発足した。その翌 39 年 1 月 15 日、東郷にある町村長会事務所内の井原元彦名義で、再興の「宗像」第 1 号が発刊された。再興宗像 1 号に「宗像会に寄す」に佐三の祝辞が書かれ、名誉会員となる。

「宗像会に寄す」　出光佐三

「 日本は神国なり、而も萬世一系の天皇をいただく世界無比の国体である。ということは、戦後、日本人を捨てられて、古い言葉となっていた。ところが、現在ではこれらが世界の人に取りあげられて、最も新しい言葉となってきた。全世界十年の大戦争で破れて正気を失ったとはいえ、祖先の残しる。数千年の永きにわたる平和の大偉業を見失った事は如何にもふがいないことであった。唖然として自分の姿を見失った日本人が、日本を亡そんがための、占領政策による新憲法、教育法、労働三法を有難く頂戴して守り本尊と心得ている間に、国内は思想的に三十八度線が敷

再興　宗像

かれて、国民は国防軍と侵略軍とに分かれ、右と左との戦いはあらゆる階級にくり広げられている。議会は国策を審議する議場にあらずして、守るか亡ぼすかの戦場である。教育会然り、行政庁及び公史然りである。ただ戦前個人主義、利己主義として、敬遠された経済人が産業の大発展を実現して、世界を驚かし、日本人として、萬丈の気煙を吐いていることは、ここに日本人らしい団結の精神が産業界に残っている事を示すものであって、左派国民の一考すべき重大な点であるといわなければならぬ。戦後 17・18 年を経過して、戦勝の全世界は完全に行き詰まった。核爆発の大発明は人類の絶滅の竿頭に押し進め、幸福なるべき人生を恐怖最悪の人生と化した。征服に始まって、闘争、個人主義・権利思想と、転々として物質を中心として対立闘争の現世界に転落したのである。

近年世界旅行を終えたる日本人の異口同音にいうことは、外国に行って、初めて日本の良さがわかるということである。而も学生青年層に一層強く感じるらしい。日本で赤がかった若い人や、無産主義の青年が、外国に行って忽然として、本来の日本人に立ち戻るのも、面白いことである。灯台もと暗しとでもいうのか、富士は遠くから見るほど佳麗である。私も最近 4 回外国に旅行しましたが、どこの国でもいうことは、世界は行き詰っている。而も解決の道は見出せない。ただ望むものは、永遠の平和と人類の福祉である。次にいうことは、日本国民が皇室を中心として、一致団結しているあの姿がうらやましいことである。このことは、日本の数千年の平和と国民の福祉即ち、皇室中心の団結のあり方が、全人類の目の前に浮び出たということである。また、3 ～ 4 年前、全世界の宗教史学会が日本で催されて、各国から 400 人余りの学者が日本に来て会議を開いた。

その結果、日本の戦後の驚くべき復興は、神の力によるとの結論に達し、神の存在は全世界に認識された。このほか私の体験から、外国人が日本の神の尊厳を認めた事実をいろいろ知っている。ここにわれわれ、日本人が、心得ていなければならぬことがある。それは日本の神々は、われわれ祖先をお祭りしたのであって、外国の神は天にます神であって、祖先でないということ

である。日本人の祖先は永遠の平和と、国民の福祉のあり方を教えられた人であり、この恩を知って、神を祭り、感謝の礼を尽くしているのである。敬神、崇祖、皇室の尊厳等はこの謝恩の念から自然に湧き出るものである。日本人が恩を知るという事実は外国にない。したがって恩に相当する文字もない。この祖先に感謝することを日本人は忘れてはならない。以上により、日本は神国であり、世界無比の国体である。この神の教えを守り、皇室を中心として、国民がお互いに相助けることによって、数千年の平和を楽しんで来た。この互譲互助の姿を以て、対立闘争のドン底にもがいている全人類を救うのが新しい日本国民に与えられた世界的使命である。宗像大神は国民の祖神と仰がれ、裏伊勢といわれている大神である。神域に育った宗像人は醇風美俗を誇って来た。真剣真面目である。従順であるが威力を持っている。私も幼な心にご神徳のあることを知らされた。正助翁の人間愛が体にしみこみ、節婦お政女の碑を見上げて、婦徳のあり方を教えられ、あらゆる環境は私を宗像人として育てるに充分であった。15 ～ 16 歳から他境の人となったが、遠くから見る宗像はまた一段と高い存在である。神国、日本人として神郡宗像人の責任は重い。この世界的転換期にあたり、機関紙「宗像」が発刊せらるること誠に慶賀に堪えないのである。謹んで祝意をいたします。　（宗像会名誉会長　出光興産株式会社社長）

再興宗像には、交流を深める為に戦前の宗像会のメンバーのこの雑誌に対する期待や会員の顕彰記事が多くみられ、上妻国雄 (津屋崎町在自) が編集長となり、安川浄生・筑紫豊・松崎武俊・田中嘉三・安部郁郎・小方正人らが執筆者となり、懐古録と歴史記事、会員通信となる。その主な目的は、教育再生である。

この頃の著名出身者は、安部清美（参議院議員）・赤間文三 (大阪府知事・法務大臣)・有高巌（立正大学教授）・吉田法晴 (参議院議員)・倉田主税 (日立製作所社長)・梶木治郎 (熊本営林局長)・安永渡平 (八幡製鉄所副所長)・石松正鉄 (住友石炭)・釜瀬富太（九州学園校長）・阿部徹 (俳優)・真武直（福岡教育大学教授）などが知られる。会員数は、約 800 人であったが、組織の賛助会員が多く、4 年間で 19 号まで刊行し終刊となる。

この時期は、高度成長期を迎え、人々の移動が当たり前となり、閉鎖的な共同体（同胞意識）が崩壊し、テレビの普及や出版物が多数あり、雑誌の役割が終えたと見る。昭和 43 年 (1968) 10 月、宗像会機関誌「宗像」廃刊、神社広報誌「宗像」へ吸収する。久保輝雄宮司が一本化に尽力された。

社報宗像　昭和 45 年 4 月 10 日、東郷の宗像会発行の「宗像」と神社発行の「宗像」とが合同して、宗像神社から一元的にこれを発行することとなった。昭和 50 年 1 月、現在の発行部数は約 5,000 部とある。

社報宗像は、昭和 36 年 1 月に創刊号が発刊される月刊であった。会誌の性格上、神社関係の記事が多いが、宗像大社になるまでの復興事業や、出光佐三、倉

田主税、久保宮司をはじめとした神官達の記事が収録される。

この中で、出光佐三著『物質尊重より人間尊重へ』、同著『企業に於ける人づくり』、同著『働く人の資本主義』、同著『マルクスが日本に生まれていたら』、倉田主税著『倉田主税の半世紀 - 日立と共に 50 年 -』、滝口凡夫『創造と可能への挑戦』が各 20 回に渡り連載されている。教育の荒廃した時期であり、出世物語でなく、後進の人材育成、啓発の性格が強い。久保宮司の赴任後に発刊されるため、神社復興のための広報紙であるが、後に宗像会の歴史記事が多く執筆されることになる。収録内容は、昭和 56 年に『宗像 20 年の歩み』として大社広報課により復刻版の冊子が作られる。宗像の当時の動向を知る上で貴重な本である。

（8）、勤評闘争と教育の荒廃

かつての日本教育会は、「東に長野県、西に福岡県あり」と言われ、教育郡として全国に誇っていた福岡県教育会も、戦前、戦後を境にして一路衰退、昔の面影は全く姿をけして荒廃を進むばかりでしたと、当時の高山勉宗像町長が綴る。

その一因される労働組合運動は、福岡県教職員組合の勤評闘争、福岡県高教組校長着任拒否闘争である。

①、勤評闘争 (昭和 33 年～ 37 年)

小・中・高校の勤務を校長が採点する勤務評価をめぐって、日本教職員組合 (日教組) と文部省が全面対立、宗像の教育現場も闘争の渦に巻き込んだ。『津屋崎町史』には、鵜飼照夫の「勤評闘争」よると、下記に要約される。

昭和 33 年から福岡県教職員組合 (福教組) の勤評反対闘争が始まった。宗像では、宗像支部 (組合員約 400 人) と各教育委員会、小中学校校長会が話し合い 7 月に「現在の県の案のままでは実施しない。勤評実施については、県内諸般の情勢を勘案し、三者 (町教委・校長会・教組) で協議する。了解がない場合実施しない」との覚書が交わされた。10 月に「文部省や県教委により措置要求や業務命令が出されても覚書の線を崩さない」と相互に確認した。これを宗像方式と呼ばれる。ところが、翌 34 年 1 月に町教委は県教委の催促もあり、組合と協議せず、1 月末に勤評書を提出して、混乱と闘争が始まる。2 月に臨時休校なども起こり、約 1 万人の児童の生徒を巻き込んだ異常事態は進学時期を控えていただけに、批判の声が上がった。3 月中旬に 1 年半ぶりに宗像闘争は収束するが、9 月に勤務評定提出期を前に再び再燃する。校長への無言、宿直拒否、雑役拒否などが行われた。この混乱は 11 月に解決する。この混乱は、県レベルで話し合

元　号	福教組の活動	福岡教育大学	佐三講演	雑誌『宗像』	社報『宗像』	備　考	武丸正助	その他
昭和17年				宗像				
昭和18年								
昭和19年								
昭和20年	敗戦、GHQの指令発令。					敗戦		
昭和21年								
昭和22年	六三制完全実施							
昭和23年								
昭和24年	レットパージに反対声明							
昭和25年	第1回全国教育大会							
昭和26年								
昭和27年							武丸正助顕彰会	
昭和28年						5月日章丸事件		
昭和29年							200回忌	
昭和30年				復刊		初めて渡米		
昭和31年								
昭和32年			城山中体育館・幼稚園の助成			徳山製油所の竣工		
昭和33年	7月福岡県教職員組合の勤評評定闘争始まる。宗像方式で締結。	端緒						倉田社長、宗像高校修学旅行
昭和34年	3月に宗像闘争の解決。9月闘争再開。	福岡刑務所の吉武誘致	5月27日に講演会。		青年よ、明治精神にかえれ			宗像郡人会
昭和35年		5月高山勉が宗像町長となる。文部省を通じて3億の寄付。	10月17日に宗像高校で実施。		発刊1号			倉田会長
昭和36年		12月末に用地の取得。学芸大学が赤間移転を承認。	7月10日～13日、福岡大学・城山中学で実施。		日本人のよさ			
昭和37年	3月勤評闘争が終わる。					石油生産調整に反対。人間尊重50年。ソ連石油の輸入		
昭和38年		4月統合移転の決定、10月22日起工式	10月22日城山中学校にて実施。	再興	物の国の教育と人の国の教育	人の世界と物の世界		4回宗像郡人会288名
昭和39年							武丸正助伝	倉田・出光
昭和40年		11月統合授業開始	9月26日宗像高校、青年会議所にて実施。		宗像人の使命	千葉製油所完成		
昭和41年		11月移転完了				マルクスが日本に生まれたら。出光丸竣工	210回忌	
昭和42年								
昭和43年	春、福岡県高教組の校長着任拒否闘争。	学生運動が波及する。					早川勇顕彰、東郷公園	
昭和44年			4月20日宗像高校にて実施。		日本人の世界的使命	働く人の資本主義		2月倉田2億円
昭和45年		学生運動が沈静化する。			宗像人は和の日本民族のチャンピョンたれ			6回宗像郡人会130名と家族
昭和46年								
昭和47年								
昭和48年								

教育再生と講演会

いが行われ、昭和 37 年に闘争が終わった。

高橋五郎 (県教育庁宗像出張所長) が、「宗像 5 ヶ年の教育の回想」『再興宗像』3 号に当時の事 (昭和 34 年 9 月～同 39 年 5 月) を記録している。校長に対する無言闘争は 50 日を過ぎたところもあり、世界記録を樹立した。先生たちは、校長に無言のまま、秋の運動会を遂行したという奇妙な記事が新聞に載ったという。昭和 35 年 3 月末の人事異動は最高潮に達して、大多数が宗像出張所に集まり、異動の非を詰問された。中には、酒気を帯びている野人顔負けの言動もあったと云う。授業参観も拒否され、組合員の監視付きの参観であった。

その中には、苦労を見かねた組合員が助言する方もいた。その後、勤評問題を契機とした宗像郡教育界の混乱も日を経るにしたがって、反省の気配が現れ、教科研究会が生まれた。小学校校長会の中で研修部ができ、各小学校廻しでお互いの研究を発表して、切磋琢磨が進んだ事例を紹介されている。しかし、勤評の旗は下さず、昭和 37 年までの終結まで続く。詳細は上記資料を参照されたし。

②、校長着任拒否闘争 (昭和 43 年)

昭和 43 年春、福岡県高教組の校長着任拒否闘争が始まり、郡内の宗像高校、水産高校が闘争の舞台となる。前年度に誕生した保守系の亀井光知事は、翌年昭和 43 年 4 月 1 日に小・中・高校教職員異動を一発辞令とした。この異動は慣行 (人事の福岡方式) を破り、高教組推薦の新校長が 15 名のうち 3 名のみあり、約束違反と猛反発し、新校長の着任拒否闘争となる。

『津屋崎町史』によると、宗像高校では、中村喜代志新校長が 5 名の組合員に入門を阻止された。登校した生徒役 300 人が取り囲み「強行着任はやめろ」「紛争に巻き込まれるな」と県教育委員会と応酬し合い、結局引き返した。ところで、『宗像市史』には、この事件の項目さえなく、記述もないのはいかがなものか。

組合活動を纏めた本もあるが、内容が一方的であり、当時のことがよくわからない。声が大きい方が正しいのだろうか。

二つの労働運動によって、戦前の聖職者と称えられた教師が、これを境に労働者となる。戦前より教育者の多かった宗像郡は、この闘争では、福岡県の中で最も激化した拠点の一つであった。森口　郎は、「勤評闘争の実施は全国化し、教員だけでなく、児童生徒をや保護者、さらに地域住民まで巻き込んだ大闘争に発展する。その評価に対する世間の評価は分かれ、この争いが日教組の組織率の低下をするきっかけとなった。そして、地域社会の人々は教師を素朴に尊敬すべき対象から、自分たちと違う行動様式を持った特殊な人間と認識を変え始めた。」

と指摘している。日教組の組織率は、「昭和 30 年代は 90％、昭和 50 年代には 50％に落ち込んでいる。」とし、平成 14 年には 30％以下に減少している。

出光佐三は、宗像神社復興の途中、勤評闘争の激化をいたたまれず、宗像神社の『社報宗像』、『復刊宗像』、『再興宗像』などで、宗像教育の再生に檄を飛ばす。

また、直接的に宗像郡民に伝えるために、講演会のことあるごとに、教育再生と人材育成を語った。この講演は、「青年よ、明治精神に帰れ」・「宗像人の使命」・「日本人の世界的使命」などである。

（9）、出光佐三の宗像での講演会

①、宗像高校の修学旅行

『宗像海人伝』49 号　昭和 59 年の西日本新聞の横田記者の記事を紹介する。

「昭和 33 年、宗像高校の修学旅行コースには、一定のパターンがあった。大阪府庁を訪れ、当時の赤間文三知事 (津屋崎町大石出身) に会ったあと、東京東銀座の出光興産を訪問するのである。」赤間文三は大阪府知事を、昭和 22 年から 3 期 12 年勤め、昭和 34 年から国会議員となり法務大臣を務めた。

宗像郡町村会事務局代行の古田留津子は、修学旅行の時の光景を覚えている。「出光興産の講堂では、号令一下、講堂内の宗像神社に向かって最敬礼をしたのである。その後壇上に佐三翁と日立製作所の倉田主税社長が現れた。記念撮影のとき、目の前に佐三翁の大きな手がニューッと伸びてきて、手の傷跡が見えた。〈歩いて通学しとったころの霜やけの跡だよ〉笑いながら佐三翁が吉田さんの頭を軽くたたいた。宗像の素晴らしさを教えてもらったと吉田さんは目を輝かせて語った。」とある。

修学旅行といった意図的な場でなくとも、宗像というところにはさまざまな形で郷土愛を伝えて行こうする「共同体の意思」が残っている。このころ、倉田主税は、丸の内の丸ビルに日立本社があるので、社長 (会長) が自ら駆けつけるのである。彼は、宗像からの各種団体が皇居の見学の際は、こまめに顔を出したと云う。佐三と倉田の関係が深まるのは、昭和33年に結成された宝満会からである。

②、講演会とメッセージ

走るローン・ウルフ　知見したところでは、宗像神社、宗像高校、城山中学校・青年会議所で行われている。前述のように、勤評闘争に対する教育宗像の再生や、学生運動と関連する。昭和 34 年～昭和 44 年までに、講演会、紙上での宗像教育の重要性が説かれる。重複する内容もあるが、できるだけ多くを収録した。

『社報宗像』1 号　昭和 36 年 1 月より引用する。

昭和 34 年 5 月 27 日の講演録の抜粋である。

出光佐三「青年よ、明治精神に帰れ」- 日本精神を発揮したる時代 -

私は青年に呼びかける。政治家をあてにするな、教育に迷わされるな、そして祖先の血のささやきを聞き、自らをたよって言論界を引きずれ、この覚悟を以て自らを鍛錬し、修養せよ。そしてその目標を明治時代たる日本人に置け。明治時代の日本にとって最も偉大な力を発揮したる時代である。建国以来の日本精神が世界に爆発した時代である。国民は日本精神を堅持して、外国文化を吸収し、咀嚼した時代である。心身を鍛練し、人格を養成して、人間尊重の基礎を堅め、社会国家のため己れを忘れて一致団結し、人間の偉大なる力を発揮した時代である。そして総ゆる場面に於いての挙国一致の姿を顕わして世界を驚かした時代である。名もなき東洋の一孤島、漆の国ジャパンは僅々五十年にして世界五大国の一つになった時代である。この偉大なる時代を作った偉大なる力は、数千年来の精神文明の力である。当時の中国、清国は人口三億を有する世界の強国であり、陸海大軍を以って東洋を威圧した。その兵力を以って朝鮮に侵入し、特に壱岐・対馬を飛石伝いに九州は寇されんとした。日本国民が対外的に国を挙げて一致団結したのはこれが第 1 である。鎮速、定遠の八屯型鋼鉄戦闘艦を中心とする清国の大艦隊に向かって、千数百屯の巡洋艦を中心とする弱小の艦隊を以って、樺山大将は千数百屯の商船南京に乗り手身を捨てて全将兵を鼓舞激励し、その挙国一致は易々として、黄海会戦の大勝となり、陸軍又よく外寇を朝鮮半島より駆逐して本土防衛の責を果たしたのである。露西亜、独乙、仏蘭西の三国干渉は起こった。而も露西亜は世界最大の陸軍国として威圧を加えた。国民は、血涙を呑んで泣き寝入りするやむなき痛恨事である。三国干渉、遼寧半島還付、臥新当胆十年という言葉を国民は肝に銘じたのである。然るに何事ぞ、我等が占領した遼東半島を清国に還付せしめた露国は満州に入り、大連を手に入れ、更に清国に代りて朝鮮南下の態勢を取って我が国民を驚かした。食われるか、戦うかのドタン場に追い込まれたる国民は反発した。意気軒昂として挙国一致の態勢は理想的であった。全国民が身命を賭しての防衛の戦いである。この偉大なる団結の力は世界各国の予想を裏切ってあの大勝となり、世界一の陸軍を破り、ここに初めて日本は国土の安泰を見ることになり、国体の尊厳が世界に知られ、明治大帝の名が世界に沸き起ったのである。この国民的精神は欧米の最新文化を吸収するのにも偉大な力を発揮した。僅々五十年にして世界五大産業国の一つに列するに至った。

翌年の『社報宗像』1 号にオイルダイジェストより「青年よ、明治精神に帰れ」に宗像高校生徒の感想文が収録される。

宗像高校の講演は、高山勉町長の時代で、出光興産の麻生和正・石田正實が出身高校によるところが大きいと思う。昭和 35 年 (1960)10 月 17 日に宗像高校にて記念講演 (創立 40 周年) で講演する。内容は、「青年よ、明治精神に帰れ」と思われる。翌年から数年間にわたり、宗像高校の施設見学は出光興産徳山工場

へ行くことになる。

福岡大学の講演会は、弟の弘が福岡大学の理事長を務めていた関係であろう。続いて、城山中学校においても実施される。

講演録　出光佐三「日本人のよさ」『社報宗像』8 号　昭和 36 年より引用する。

（7 月 10 日に福岡大学、11 日に赤間城山中学校体育館　講演録抜粋）

ご機嫌よろしゅうございます。石田君（出光興産専務）が申しましたように、私もこの坂（城山中学の坂道のこと）を 70 年前に登ったり降りたりしていました。しよつちゅう夢に見ました。日本人がどういう立場にあるかということを、外国と比較して聞いていただきたいと思います。どうぞ楽にしてください。

大体に、日本という国は外国に劣っている国、外国は偉いが日本は偉くない、これが現在の日本人がいうことです。皇室はいらないという極端なことを云うひとがある。しかし外国人からは日本の皇室ぐらい美しいものはない。外国でもこんな中心を持ちたいが、皇室のような存在は二千年以上かからぬとできないから仕方ない、というのが外国人の意見である。これだけ外国人の見方と戦争に負けた日本人との見方の違いがある。・・・・・・・中略・・・・・・外国人には、親切味がない。金に対する仕事としてやる以外にはない。さっちゃんは幼い時の故郷の温か味を重い出したのでしょう。皆さんも、外国人には人間味がないということをしっかり頭に置いて貰いたい。外国人は絶対に信用してはならない。日本のように、武士に二言はない、腹を切る、外国人にはそんなことは無い。日本に無い位大きい外国の大銀行、大会社、大石油会社と取引しているが、言ったことを変える。判を突くまでは変える。書いたものになって無ければ駄目です。親切で金でやる。飛行機のスチュアーデスでも日本人はどこかに金に換えらない親切味を持っている。飛行機から降りても人間味がある。外国人は飛行機から降りると対等だ。物を聞いてもロクに答えません。純な田舎で育ったあなた方には想像もつかぬ話しです。どうしてこう違うかは日本の神、皇室、国体を知れば、その有難さがわかります。

外国では、中国•朝鮮の王様は代々変わる。武力で征服して、国民を無理矢理に押しつけてやっておる。従ってその子孫の力が尽きると家来が頭をあげてそのあとにつく。だから長くても百年そこそこ、短くて 10 年です。そういう風に変わるために国民は何時殺されるか又財産を没収されるかわからぬ、いつも逃げ出し仕度をしなければならない。だから身につけている装飾は財産である。生命の危機、財産の不安のあるのが外国の王様の下の国民です。誰も世話をしてくれない。個人主義、金、物資を身につけ、物資尊重の考えが出来る。

外国でも物質文明が起こっている。日本にもその形があった。近くは徳川から足利、北条、源氏、平家は力で国民を征服した。しかし、その違いは、外国の王様に相当する将軍でも天皇陛下の御許しがなければ国民が承知しなかった。その上で征夷大将軍になり、国内の治安に当った。その上に天子さまが居られて国民と一緒になられ、国民の平和と安全をいつも考えられ、国民は敬っている。これが日本の皇室、国体で国民の上にちゃんとおられるのが皇室である。だから個人主義の権利を主張する必要がない。これは皇室がちゃんと守っておられる。それでは国民はどうすればよいかというと、お互いに仲良くしてその日を楽しく暮らしていけばよい。権利自由を主張す

るとトゲトゲしくなる。そうすると今の世の中のように醇風美俗を害する。自由を守る間はよいが、主張するといけない。今は悪くいわれるが、日本人のようにお互いに助け合いお互いに譲ることは、お互いが義理と人情を感じることであって、これは日本で始めて云い得ることです。義理人情を感じてお互いに自由権利を尊重し合うことは、外国人からみれば権利自由の放棄であり邪道である。勝手をやらない、信頼して融和し、一致団結しているのが日本人の姿です。さっき石田君が云ったように、徳山の製油所がわずか十ヶ月で出来たことは世界の驚異である。作った人は出光の人でない。ストライキをやるべき労務者たちが、徳山宗像神社を拝んで一生懸命働いている姿を見て、日曜も祭日も休まず、年末正月も休まなかった。互譲互助、信頼融和、一致団結の姿が外国でならば 2 ～ 3 年かかるものを十ヶ月でなしとげた。「 世界の驚異」という映画になっています。外国でも真似をしたがっているが、それはできない。対立抗争の姿を無視したから出来た。皇室を中心として国民が一致団結して来た。いかなる武力も権力もこれを破ったら国民が承知しない。これが日本の団体、皇室の尊厳である。

昨日も福岡大学で講演した時に、そういった。尊厳という言葉は外国語には無い。「 君らは、尊厳の言葉の意味も言葉も習っていないから知らないだろうが、これ以外に説明の仕様がない。」といった。これを世界に広げたらどうなりますか、お互いに助け合い譲り合ってやっていけば平和ができる。・・中略・・私共の会社は石油会社だがその姿を示しているわけで、外国の石油会社・銀行等に大きいセンセーションを起している。一石油会社で出来ることを日本中がやれば必ず外国が知る、ということを私は説いて歩いている。然らばどうして日本の人間ができたか。これは日本の教育によってである。日本の教育は「 物」でなく「 人間を尊重する教育、育てる教育」である。外国の教育は、物を中心とした「 教える教育」である。面白い話がある。私の取引しているピッツバークの石油会社、世界 3 ～ 4 番目の大株主でメロン銀行の頭取で陸軍中将のメロン氏に対しガルフ石油の社長が、「 日本人は会ってみなければわからない」というので、「 どうですか日本に行きましょう」と進めた。先月社長夫妻とメロン夫妻がやって来て 3 日目に私に会って「 何と立派な国民か、何か奉仕の金を出すから学生をよこすなり何なりしてほしい」といった。それから奈良・京都に行った。面白い質問をした。「 日本は子供ばかりか」、「 いや、修学旅行だ」それを先生が生徒の世話しているのを大層関心していた。外国では金以外の世話はしない。日本の先生は、昔乍らの素質が立派に残っておる。昨日も学大でそれを痛切に感じた。あの立派な学生と先生が赤間に来てくれることはいいと思った。日本は皇室国体教育で日本民族ができた。世界に類のない人間の世界である。しかも田舎にその特質が残っている。都会や特に東京はドブ或いはバイキンの巣屈である。外国の物資尊重の悪い面が戦前の上海を大きく更に悪くしたのが東京である。占領政策の結果、国体をこわす憲法ができ、新教育法ができ、第三に労働法がつくられた。皆さん、日本を亡ぼそうとした占領政策であることがわかるでしょう。日本は戦争に負けたが、今や世界に浮か上がっている。学大誘致問題は私がいい出したことではないが、五ヶ所のものを一ヶ所に集める立派な大学が出来る、小倉と福岡の中心の赤間がいいというので承知したのです。そして人間尊重の教育ならやりましょうといった。神は鏡を以って、自らをよそから見ようと教えられていた。昨日も学生から質問があった。天皇は戦争をとめられなかったかと。そこで私は答えた。天皇お一人ではどうすることもできなかったが、戦後マッカーサー元帥を訪問された時、はじ

めは出迎えもしなかったマッカーサー元帥が、陛下が「全責は私にある。国民に罪はない」と無私の態度を示された所、マッカーサー元帥が吃驚して、陛下を抱きかかえるようにして見送りされた。これを話すと学生はわかった、といったが、悪いことを唯信じさせられている学生の悩みに同情する。学大が来る。皆さん神郡人としての態度を示してください。近くの郡下青年の指導をはじめたい。協力をお願いします。日本は偉い国、それは人間が偉いのです。郷里の皆さん、何卒奮斗してください。

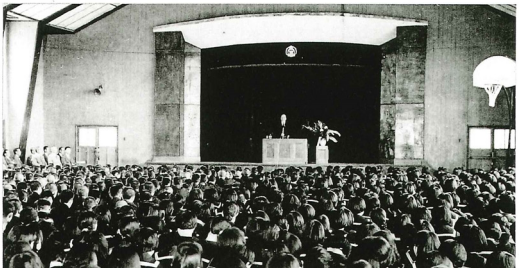
城山中学校の２回目講演は、福岡学芸大学の統合起工式に出光佐三社長が出席した際に、実施される。城山中学校は、彼が入学した赤間尋常小学校の跡地に戦後に開校していた。会場は、佐三が助成が行われ建設された旧体育館である。

「物の国の教育と人の国の教育」『社報宗像』35 号　昭和 38 年より引用する。

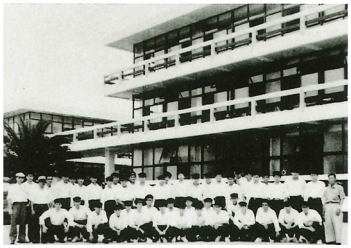
昭和 37 年 10 月 22 日、午前 10 時 30 分から、福岡教育大学赤間統合起工式に際して、城山中学校講堂で出光興産社長、出光佐三氏の講演が行われた、早朝から地元の婦人会、有志多数があつまり、講演は満員の盛況であった。まず、地元高山宗像町長の挨拶があり、続いて社長が講演に立たれる。「教育大学の起工式が行われる事について心からお慶び申し上げます。-- 日本の教育は人間としての教育を行う、うるわしい伝統があり、外国では見ることが出来ない師弟のつながりがありましたが、失礼ながら、現在の教育はそれらのものが、失われ日本の教育でなく外国の教育になっています。何故なれば、現在の教育は教育の切売りであります。知識を切売りするだけでは本来の教育と云う事は出来ません。もとの日本の教育は生徒から先生が育てられるべきものであります。教え育て導いて行く、これは教育の本質であります。物量主義の外国には出来ないことであります。ここに「物の国の教育と人の国の教育の大なる違いがあるのであります。」現在の日本には、これが真の日本教育あると海外に示す教育機関がありません。今回の教育大学は世界に範として示す大学を作らなければなりません。そして日本人は世界で最も優秀な民族であると我々自身が自負しなければなりません。今日、この宗像の地にこのような大学が出来る事は神郡宗像に御鎮座になされる宗像大神の御神意によるものであります。日本のチャンピォンとしての大学を作る事を念頭に置いて皆さまの御協力をお願い致します。

以上が要旨の講演が行われ、引き続いて起工式に望まれた。

ちなみに、城山中学校の旧体育館建設 (昭和 32 年)、旧赤間小学校の図書室・プ―ル建設、赤間保育園の開園 (昭和 32 年) に出光の助成が行われていた。当時は、岡崎春雄 (岡崎工業社長) が、昭和 30 年に母校の東郷小学校にプールと付属施設を建設し、500 万円相当を寄付している。さらに、昭和 37 年 11 月に宗像中央中学校建設で犠牲的価格で落札し、建設・竣工に尽力された。彼は宗像町大井出身で宗像会会員であつた。その目的は、人材の後進育成である。



出光佐三講演会（昭和 35 年）



徳山工場見学（昭和 36 年）

昭和 40 年 3 月 1 日には、宗像神社で出光社長の講演が行われる。

「 出光社長講演会」『社報宗像』 51 号　宗像神社にて

1月 6 日、午前 10 時半より、当社清明殿に於いて開催された。会する者、郡内町村長をはじめとする有志約百名。これに先立ち、早朝より来社された社長は、正式参拝の後、高宮に参拝、深く深く低頭された。折から境内の八重紅梅が咲き誇り、ふくいくと香っていた。10 時半開会。壇上に立たれた社長は破顔一笑、穏やかな口調で話し始めた。

要旨は、1、神郡といわれる宗像に生を享け、幼時からの家庭環境もあって敬神思想を持ったこと。2、会社の各事業所に宗像大神を奉斎して、御加護をいただいていること。3、国の根本が、神と皇室から出ていること。これが方邦無比であり、世界中の物質文明の行きづまりを解決する模範であることを疑わないこと。4、赤間に学芸大学が出来、これにより「 教育郡」として実績があることは喜ばしい。挙郡一致してこれが育成のために尽力せられたい。以上のようなことであった。講演終了後、遅れて駆けつけた元門司市長の柳田桃太郎氏も加わり、宗像名物の「 トリのすき焼き」を囲んで、和やかに懇談が続けられた。

昭和 40 年 (1965) 9 月 26 日、宗像高校講堂で 2 回目の講演会「宗像人の使命」を行う。再興宗像 8 号にその内容が収録される。

同年 9 月 20 日に宗像郡町村会館で、宗像青年会議所の出光佐三の臨席講演が行なわれる。宗像青年会議所関連については、佐三翁顕彰事業を参照されたし。

宗像高校の出光講演録

出光佐三「 宗像人の使命 」

今度の戦争に負けて日本人は腰を抜かしてしまい、その上更に占領政策によって徹底的にいたみつけられ完全に外国色に塗りつぶされてしまっている。しかし本来の日本民族というものは、人を中心として心のあり方を知っている、世界で唯一の民族である。ところが外国は物を中心として対立斗争してきた民族である。その外国が今は完全に行き詰まって、いつ核爆発を頭上にうけて全滅するかも知れないというところまで追いこまれてしまっている。そこに日本民族の人間を

中心として平和にしあわせに暮らすというあり方が、大きく浮び上ってきたというのが今日の世界の情勢である。

日本と外国のあり方がどうしてそんなに大きく違ってきたのかということであるが、それは一言でいえば祖先の違いであるが、外国の祖先は我欲の祖先であり、征服革命の連続が外国の歴史である。そういう征服、圧迫、搾取に対して出てきたのが自由や権利を主張する思想であり、自分や物に頼る個人主義、物質尊重の考えである。ところが、日本の祖先は無私無欲であり、国民に平和にしあわせに暮らすとを教えられできた。それをもっともよく現わしいるが、無防備の皇室と無防備の国民である。そこで日本人は平和に、しあわせに暮らすことを第一義とし、物や金は第二義的なものとするようになった。そして主張することにより譲るという互譲互助の精神とか、恩を知るといというようなことを大切にするようになった。こういう日本民族のあり方が世界の平和と福祉をつくるもとであるが、外国人にはその体験がないからどうしてもわからない。そこで日本人が早く本来の日本人に帰って、世界に平和福祉のあり方を教えなければならない。私が日本人に帰れとか、日本人の世界的使命とかいっているわけもそこにある。

ところがその日本人の中でも、その急先鋒の役目をしなければならぬが、宗像人である。宗像という土地は宗像神社の御神徳によって醇風美俗の地方色をもったところであり、宗像人は非常に素直でやさしく一致団結する。而も人間的に芯が強く、積極的な性格も持っている。宗像人はそういう人間として大切な秀れたものを持っている。私は出光の経営がどうしてそんなに力強いのかと開かれた時、順序立てて説明する場合には必ず自分が宗像に生れたお蔭であると、冒頭に言う。私が他の土地に生まれて他の学校に行っていたならば、今日の私はなかったと思っている。

私の子供の時は、宗像というところは小学校の名校長、名教員を出すので有名であつた。そしてそれは宗像神社の御神穂のお蔭であるということを聞かされていたので、子供心にも神の存在を知った。一方この醇風発俗の土地にも、一般の良民から毛虫の如く嫌われている人が何人かいたが、その人たちは外国の権利思想、自由思想の人であるということを聞かされて子供心に外国思想は悪いという観念を持つようになった。これは外国思想の悪い面のみを見せてつけられて、良い面は知らされなかったということだが、私は今日では日本人として自分育つのに非常に良かったと思っている。そういうわけで私の体験からしても、宗像人は本来醇風美俗で、人間として大切なものをもっているわけですから、この宗像人が本来の宗像人はどうあるべきか、真剣に研究されて、そして日本人が本来の日本人に帰る急先鋒となって貰いたい。幸い昨年（ 昭和 39 年）のオリンピックで日本人も漸く目覚めてきたので、君たち若い宗像人が、日本民族が世界に平和と福祉のあり方を教えなければならない。そのチャンピオンは、宗像神社のもとに育った自分たちであるというような、高い尊い目標をもって進んでもらいたい。

宗像高校における講演要旨　（ 再興宗像 8 号　昭和 41 年 11 月 ）より引用。

昭和 44 年 1 月「宗像人の使命」『社報宗像』100 号に掲載される。

今から 20 数年前、終戦のとき、私は「 日本は戦争に負けたのじゃない。日本人があまり日本人ばなれしているから、本当の日本人にかえるため天から与えられた尊い大試練である」といった。まず第 1 段に「 日本人にかえれ」といった。そして第 2 段に「 国体の精華を発揮して世界平和に

貢献せよ」といっている。戦後 20 数年たって、私の言ったことは間違いでなかったことが、はっきりした。しかも不思議なことには明治 100 年の昨年を境として、日本人が完全に日本人にかえったといいうる。

それはどういうことかというと 20 代以下の青年が非常にいいということである。私どもの出光の販売店の 3 ～ 4 万人の若い人たちと、合わせて 4 ～ 5 万人が申し分なくいい青年であることを知っている。それから東京の消防署、警察庁、自衛隊などの青年が実に立派であることを、私は講演に行って知った。東京にいる青年がいいということは全国の青年がいいに決まっているし、私は全国各地を歩いて実際に知っている。

獅子の子は生まれて 3 日にして千仞の谷に蹴落されるが、ほんとうの獅子であるならばその断崖絶壁を実力でよじ登って、獅子の王座につくと聞かされている。敗戦の結果、占領政策によって谷深く蹴落されたけれども、若い人は断崖絶壁をよじ登って、まさに獅子の王座につかんとしたのが、明治 100 年であった。「 それならば、今の教育会の姿はどうか」と心配されるむきもあるが、あれはからだの弱い質の悪い獅子の子が谷底でジタバタしているようなかっこうで、あれに何ができるかということである。日本伝統の和の精神を発揮して世界第 2 位の産業国をつくった産業界と全く対照的な姿といわなければならない。

それから最近の学園騒動などをみてマスコミをはじめ一般の人々が青年を非常に悪くいつているが、それは少数の有声の声に惑わされているのであって、大部分の青年は日本人らしく黙々と勉強したり、働いたりしている。それなのに少数のラウドスピーカーの声のみを大きく取り上げて、青年が悪いようなことをいうのは、青年がかわいそうである。「 心眼を開く」という言葉があるが、この際、国民は「 心耳を開いて」多数の声なき声を聞くことを会得する必要があるように思う。少数のラウドスピーカーに惑わされてはならない。

そこで今年、明治 101 年は、第 2 段の日本の国体の精華を発揮して、世界の平和に貢献するスタートの年である。国体の精華とは何かといえば、皇室が決してわがままをなさらず、国民に愛の手に抱かれて、皇室を尊敬し、国を愛し、みなが仲良く一致団結している。これが国体の精華である。この皆仲良く一致団結する形は、産業界にはすでにできているが、さらに教育界、政界などにも広めて、日本全体が仲のよい形をつくり、それを世界に示して世界平和に貢献することが、明治 101 年からはじまるということを私は直感しているわけである。これは日本民族が世界に出るということを頭において夜って行く必要があると思う。そのときに、日本民族の祖神である宗像神社の神域に育った宗像人の使命は殊に重大である。私は宗像に生まれ宗像神社の御神徳によくしたが故に今日があると感謝している。宗像の人たちが世界人類を導くという尊い高い目標をもって今後進まれることを希望します。

日本人の世界的使命　昭和 44 年 (1969)4 月 20 日、宗像高校旧体育館で 3 度目の佐三の記念講演会「日本人の世界的使命」が行なわれる。当時は、教職員組合活動による混乱期で、伊豆善也の呼びかけで、宗像教育の立て直しを願って実施された。前年の同 43 年 6 月には、九州大学にアメリカ空軍ファントム戦闘機

墜落に伴って、全共闘運動は福岡教育大学に波及する。当時、福岡教育大学は九州における革マル派の拠点となっていた。福岡県高教組の校長着任拒否闘争もあり、混乱の最中であった。この講演会は当時、一般住民の千人の聴衆があり、多くの支持があったと思われる。『出光佐三翁生誕百周年記念誌』に講演趣旨が収録される。当時の講演録が伊豆義也を中心に「宗像の教育をよくする会」有志で纏められた。歴史資料としても、当時を伝えるものとして重要であり、佐三翁の宗像における肉声を伝える資料であるため、全文を末尾に収録した。当時は 83 歳であった。

同日に出光興産会長の佐三の案内で、ドイツの雑誌『シュテルン』の特派員が同誌の日本特集号「将来の日本」を取材に来た。その内容は、「日本の文化、産業、教育」であった。宗像神社を取材に日本文化の発祥の地と宗像大社、高宮祭場の昔の姿、その建設過程と真の意義を語った。また、午後から宗像高校で行われる講演、「日本人の世界的使命」と題する講演も取材した。この後に、宗像高校創立 50 年に後進育成のために、千万単位の多額寄附が行なわれる。

昭和 45 年 1 月に『社報宗像』109 号に「宗像人は和の日本民族のチャンピォンたれ」が書かれる。

70 年代に予想される日本の大きな発展が世界中の注目の的となっている。これはわが国が敗戦後 25 年にして、世界の日本としての重要な地位を占めるに至ったことを示すものである。一方、世界そのものはどうかといえば、25 年間、対立斗争に明け暮れ、完全に行き詰っている。そして核爆発による全滅の恐怖におののきながら、世界全人類は真剣に平和を探し求めている。この世界の人々が探し求める平和こそ、日本民族が皇室を中心出されている。

世界全人類は真剣に平和を探し求めている。平和こそ、日本民族が皇室を中心として二千数百年にわたって平和に仲よく暮らしてきた歴史そのものである。今日、世界を旅行したとき、各国の人々が異口同音に言うことは、日本が皇室を中心に仲よく一致団結しているあの姿が羨ましいということである。この和の力こそ、我が国をして世界の日本たらしめた原動力である。日本民族のこの和の姿の基礎をつくられたのは、宗像三神にほかならない。天照大神は天孫降臨に先立って宗像御三神に「天孫を助け奉って天孫を祭られよ」という御神勅１号をあたえられていた。ここに君臣の別が出来るとともに、宗像御三神は御神勅を体して、皇室を助けられると共に自らは皇室の手厚い祭りをうけいれられることになった。大和朝廷時代からその後、京都の御所の中に二千年以上にもわたって宗像神社が祭られている事実はこれを物語っている。日本の皇室は世界で唯一の尊い存在であるが、それを理論や理屈でなく、事実として証明するものが京都の御所である。京都の御所は一千年以上の長い間、平地に無防備で、極めて質素におられた。

無欲、無我、無私の形そのものである。ところが、外国のエンペラー、キング、皇帝、国王は

我欲の征服者である故に、国民大衆を搾取して城壁にとり囲まれて金殿玉楼にぜいたくの限りを尽している。従って長くて数百年しか続かず、新しい制服者によってほろぼされている。そういう征服革命と対立斗争のくりかえしが外国の歴史である。日本の無欲の皇室を中心として二千数百年の平和の歴史に比べると根本的な相違である。その結果、日本民族と外国民俗との間にはその民俗性に白と黒というべきギャップが出来てしまった。たとえば譲るということは日本の最も大事な道徳であり、平和をつくる基礎であるが、外国人には権利の放棄、邪道、罪悪となるのである。

昭和 45 年 (1970) 5 月、校舎の全面建て替えがなされ、宗像高校創立 50 周年が実施される。続いて、新体育館が佐三の助成により建設される。

出光佐三「日本人の世界的使命」

今日の世の中くらい簡単になった世の中はありません。これを、複雑に考えて理屈ばかり言っておれば、これくらい複雑な時代はありませんが、簡単に考えれば、これくらい簡単な時代はありません。これはどういうことかと言うと、今日の世界は、個人主義、権利思想、自分のことばかり考えて権利を主張する、その結果対立固争して行詰ってどうにもならなくなっているということです。そしてそれを救うものは何であるかと言えは、すこぶる簡単なことで、お互いに譲り、お互いに助け合う、互譲互助の精神であります。戦後おこったことに、二つ大きなことがあります。

一つは交通が非常に早くなって、世界中を一日で廻れるようになっておるから、世界は福岡県よりも狭くなっている。次に核爆発が発明されて権利思想で対立闘争しておれば、それが頭から落ちて世界の人類が全滅するという、この二つのことです。

交通が非常に早くなって、世界が狭くなった。そこに百数十の異民族が住んでいる。それで、個人主義、権利思想で対立闘争することは、もう、許されない、時代遅れであるということです。権利思想の善し悪しを論ずる余地がなくなっておるということです。そういう簡単な時代なのです。そして権利思想で行き詰った世界を救うのは、日本の互譲互助であります。

まず、産業界が日本人の和の力を発揮して世界を驚かす、これは既にやっております。その次に、日本の教育が立派になる。先生の尊さと先生の教えによって、人間が育てられることを示す。政界も、今のように喧嘩、なぐり合いの場所ではなくて、日本の国政を真剣に討議する本当の議場にする。そうすると、このような日本を世界から見て、何と立派な国かということになって、外国人が自発的に、日本人の在り方を研究するようになる。その時に、はじめて日本の互譲互助とか、道徳が理解されて、世界の平和、人類の福祉の基礎になると思うんです。そこに、日本人の世界的使命があります。

「出光佐三翁生誕百周年記念誌」(昭和 44 年 4 月 20 日) より要旨を引用。

宗像青年会議所の結成　昭和 40 年 9 月 26 日、宗像青年会議所の結成総会が宗像町村会館 2 階にて実施される。宗像郡内の 20 歳以上、40 歳迄の青年男子 70 余名が集まり、発起人・準備委員で協議された定款等が可決した。その目的は、

「地域社会に於ける、相互信頼を旨とし、経済、文化に関する諸問題を研究実施し、志ざしを同じくする友好団体と相協力して、地域社会の正しい発展を図る」とするものである。

立会人の出光佐三を囲み、宗像郡の将来の展望と、各会員に与えられた責任の重大さを教えて戴き、その使命達成の心構えの指導を賜ったとする。その時に実務を担った副代表幹事が、伊豆義也であった。後に福岡県議会議員となり、７期27 年 (昭和 51 年～平成 15 年) 県政に尽力された。

昭和 49 年 9 月 23 日に宗像青年会議所 10 周年が、宗像町立中央公民館で実施された。青年会議所は郡内各界の有志が、「宗像発展のパイオニアとなろう。」を合言葉に結束設立されていた。会員相互の親睦を計るとともに数々の奉仕事業を計画。宗像海岸線の神湊、福間、津屋崎海水浴場の清掃奉仕、城山登山道の整備、各町長を囲んでの町政懇親会等、巾広い活動を行っていた。10 周年では、記念誌の発行、出光佐三の記念講演が実施された。

翌年の昭和50年11月23日、日本青年会議所認承証伝達式が、宗像大社第二宮・第三宮で行われた。式展には、600 名が参列した。そして記念講演に出光興産の石田正實社長が行った。以後、佐三の精神を受け継がれ今日まで続く。

石田正實 (出光興産会長) は、これより 4 年後の昭和 54 年 (1979) に、『宗像高校 60 年誌』に「宗像の歴史と伝統に自覚と誇りを」を記し、宗像中学 4 回生の思い出と佐三翁の言葉を紹介している。

「 私が宗中を卒業したのは昭和 2 年ですから今年で 52 年が過ぎたことになります。しかし当時の思い出は今でも鮮やかに残っております。私の家は赤間の陵厳寺ですから東郷までは約一里の距離です。それを毎日、下駄をはいて歩いて通学したものです。今でも足腰が強くて健康に恵まれているのはその時のお蔭だと思って感謝しております。

当時の校長は初代校長の松木五郎先生で修身を担当されていましたが厳格な方でした。また体育の吉武先生も厳しい中に人間味あふれる先生でした。宗中の草創期でしたから全学に活気が満ちて、質実剛健の校風が培われつつあった時です。いまからふりかえって、私の人生の極めて貴重な時代であったことを痛感します。

私は出光興産に入社して今日に至っておりますが、出光興産の創業者である出光佐三氏も赤間の出身です。今年 93 歳になる出光氏はかねがね「 私の今日あるのは、自分が宗像に生まれ、宗像大社のご神徳の恵みをうけたからである。」と言っております。

宗像大社といえば、私どもは子供の頃、田島放生会のお祭りに、友人と手をとり合って長い釣川の土手にそって二里の道を歩いてお詣りしたものです。今でもその頃、一面の田に黄色くなった

稲穂と釣川の土手に咲いていた彼岸花の美しさが思い出されます。

この宗像大社は御承知の通り、天照大神の三人のお姫様（ 田心姫神（ 沖ノ島 ）瑞津姫神（ 大島）市杵島姫神（ 田島 ））をお祀りしてあります。この天孫降臨に先立って、三人のお姫様は天照大神のご神勅を奉じて宗像の地にお鎮まりになられたのです。そのご神勅とは「 汝ら三はしらの神、宜しく道の中に降りまして、天孫を助けまつりて、天孫に祭かれよ。」というもので、ご神勅の第一号と言われております。これは日本書紀に書かれております。

出光佐三店主に言わせますと、これは結局、日本の皇室と国民の間柄を示したもので、皇室に対する国民としての基本がここに示されているというのです。宗像大社が国民の祖神と仰がれ、また裏伊勢と呼ばれて尊崇される所以です。このご神勅はいま大社の拝殿に大きな額になってかけられていることは宗像の人はご承知のとおりです。私どもの会社にも宗像大社がお祀りしてあって、ご神勅の小さな額もかかげてあります。

宗像郡は、昔は宗像大社の神領になっていたために、神郡宗像といわれてきました。そしてご神徳をうけて、古来、醇風美俗の地方風ができており、昔から小学校の名校長、名教員が出るので有名でした。わが宗中、宗高の伝統もその根源を辿れば、宗像大社に帰することは間違いないと思います。

さて、今日の世界の様子をみてみますと、対立と闘争が世界的に広がっています。世界中の人々が平和と福祉を望んでいるにもかかわらず現実の世界は反対の方向に進んで益々行き詰まっています。これについて出光佐三氏は「 日本以外の外国は物を中心とした“物の世界”であり、権利思想、個人主義の国である。日本は人を中心とした“人々の世界であり、和、互譲互助、道徳の国である。今日の世界の行き詰まりは、物の世界、物質文明の行き詰まりであって、これを解決するものは日本古来の道徳であり心のあり方である。」と言っています。私もそうだと思います。

このように日本人のあり方が世界的に注目され、殊に欧米では日本が盛んに研究されているということは、結局、世界の行き詰まりを解決するために日本的なもの、東洋的なものに精神的活路を見出さんとしている実証だと思われます。

そういう世界的状況の申で、日本人としては、現在の自分の姿をかえりみて、真剣に自問自答し、真の日本人の姿に立ち帰るように努力しなければならないと思います。その点では宗像は先にも述べたように、昔から神郡宗像といわれ、名校長、名教員を輩出した尊い実績と風光明媚な自然環境と醇風美俗の地方風をうけ継いでいます。宗像はいわば日本人の心のふるさとと言ってもいいと思います。宗像人の一層の自覚が望まれる所以です。そして特にこうした時勢の中において、宗像の中心的存在たる宗高の責任は、極めて重いと言わねばなりません。」

昭和 56(1981) 年、95 歳で出光佐三は逝去する。石田正實は、眠る佐三の横顔を見ながら、「この人は、生涯ただの一度も私に〔金を儲けろ〕とは言われなかった。40 年を越える長い付き合いだったのに……」と嘆いたそうです。

石田は、赤間・陵厳寺出身で、戦後の外地引き上げて社員を抱えて、出光一家が四苦八苦していた頃に尽力された。昭和 22 年に取締役、次いで常務に進み、

徳山製油所の建設資金をバンク・オブ・アメリカと交渉するため渡米、帰国後、石田常務は徳山製油所の建設本部長となり、自ら陣頭指揮を執り 10 ヶ月で完成を成し遂げる。本社に戻って、当時東洋一を誇った千葉製油所を 8 ヶ月完成に尽力する。学生時代に禅に凝ったこともあり、出光精神の体現者として、佐三の懐刀と言われる存在であった。後に、三代目の社長となる。

佐三翁は、昭和 34 年～昭和 44 年までに講演会、紙上での宗像教育の重要性を説き、当時の混乱する世論と戦う。自己体験に基づく、日本人にかえれ、日本人の世界的使命、人間尊重を説いた。これは、「正しい道を歩いていれば、敵もそのうち味方になる」であろうか。正に、走る一匹狼である。この流れは、昭和 44 年に結成「宗像の教育をよくする会」事務局長の伊豆善也 (40 歳) を中心とする有志によって、推進された。翌年の東京宗像郡人会で、伊豆議員が人づくりの信条、郷土愛の壮志が述べられ、強い感銘を受けている。

（10)、福岡教育大学の移転統合

福岡学芸大学誘致と福岡刑務所誘致については、当時の宗像町長であった高山勉の『たった 1460 日されど 1460 日 - 神郡宗像に挑戦した男 -』(平成 4 年) があり、行政側の具体的な内容がある。また、川口洋一「刑務所と学芸大」『宗像市史』近現代編に詳しく経過が纏められる。併せて読むと興味深い。

これらを引用しながら、要点を纏めた。昭和 34 年秋に福岡刑務所の宗像誘致の話があり、地元吉武の要望もあり、ほぼ決まる方向で進み、残る水問題で水源探しに全力を挙げていた。

昭和 35 年 5 月 29 日に町長選挙で、「教育・文化・住宅都市」を掲げた教員出身の新人である高山勉が当選した。町長に選ばれた高山は地元吉武であり、誘致を好ましく思っていなかった。東京に上京し、出光佐三社長に挨拶に行った。当時のことを下記に引用する。

「 出光社長は、法務大臣から教えられはじめて知ったという刑務所誘致にひどく不快感を示した。現状は水問題を残すだけで九分九厘決定済みの説明を受けると、・・・その夜に宗像出身の在京大手社長を集めて懇談の場が設けられた。そろって反対の意向。・・・町長の持論の政策（ 教育・文化・住宅都市）に共感を得て、刑務所誘致見直し思い立った」

と高山・河口により記述される。在京大手社長は、倉田主税、安永渡平、倉田興

城山より赤間を望む（昭和 30 年頃）福岡教育大学移転前　神山善信氏提供

人と思われる。当時の法務大臣は、岸信介 2 次内閣の井野 碩哉である。しかし、伊豆善也によると、最初にこのことを知らせたのは衆議院議員の赤間文三 (宗像会会員) であった。帰郷後に議会で経緯を説明し、再度議員が上京し出光社長に刑務所誘致反対の意向を確認し、学芸大学誘致への 3 億円寄附の支援も約束された。昭和35年に文部省を通じて学芸大学統合建設費に3億円を寄付した。一方、宗像町は用地買収を昭和 35 年 8 月頃に完了した。以後、昭和 36 年 12 月、高山勉町長が、福岡刑務所の宗像移転を断り、昭和 37 年 7 月、福岡学芸大学設置促進協議会が宗像町で発足した。町長や行政は多大な困難を乗り越え、昭和 38 年 4 月、福岡学芸大学の宗像移転が決まる。

建設予定地は、赤間・陵厳寺、石丸地区にまたがる城山山麓一帯で、山林・田畑・県伝習農場跡・民家 7 戸・町営住宅 12 戸の所在地で、12 万坪で (39.6 ｈ a) あった。当時の国立大学では、収容学生数に比して全国最大であった。用地買収費は、7 千万円と見込まれ、当時の宗像町年間予算が 2 億円前後であり、3 分の 1 の額であった。用地買収費は、7 千万円は出光興産から借り入れた。後に、3 千万円は宗像町へ寄付される。誘致の条件の 10 万坪以上の国への無償譲渡の用地買収を昭和 35 年 8 月頃に完了した。学芸大学の統合は、吉田法晴が衆議院議員時代から、北九州市長時代に 4 つの分校を廃止、赤間統合に尽力を尽くしている。小倉師範同窓会を中心に、最も反対が激しく、跡地利用で説得して納めている。

宗像誘致は、福岡師範の真武　直により、第１提言者として宗像誘致陳情書の作成、実質上の立役者として尽力している。吉田･真武も宗像会の会員であった。

しかし､文部省の宗像移転は決定されていなかった。無謀と云える取り組みは、昭和 38 年 4 月に文部省の学芸大学統合移転の決定がなされ、軌道に乗る。
この困難を極めた用地買収承認の地主説明会での、出来事が記述される。土地地権者は、180 人とされる。佐三の説明が記述される。

「 出光社長が宗像神社参拝のため宗像にきておられるので､社長にも出席いただきました。席上、社長は学芸大をこの赤間の土地に建設する建設するために努力しているので、どうか皆さんも協力して下さい。先日町長、議員さんたちが上京されたとき、もし大学統合が実現しなかった場合、買収地はどうなるか心配のようだったので、私の意向を伝えておきましたが、そのときは私立の出光工業学校でも建設する覚悟をしています。・・・福岡県教育会のため、町と赤間発展のために御協力下さいと懇願された。」

と以上のことを、高山町長が回想する。

昭和 38 年 10 月 22 日、福岡学芸大学の統合起工式に出光佐三社長が出席する。昭和 40 年 11 月、福岡学芸大学の赤間統合校舎で授業が始まる。昭和 41 年 (1966)4 月に福岡学芸大学の統合、赤間に統合移転し、福岡教育大学となる。昭和 39 年に「年頭所管」で教育大学の設置の抱負を再興『宗像』2 号に書く。

「 国民の祖神宗像神社の神域である宗像の地にも再び黎明が近づいて、城山の山ふところに教育大学が生まれんとしている。日本民族は数千年の長い間、皇室の恵みによって平和を楽しんできたが、この民俗を育てていくものが、日本特異の教育であり、これは学問の切り売りでなく人間の育成を中心とするものである。その意味において、聖地宗像に教育大学ができることは非常に意義あることである。

権利思想に基づく対立闘争によって完全に行き詰ってしまった世界の人々が、皇室を中心として一致団結している日本民族のあり方を認識し、その民族を育てた教育のあり方を研究するようになるのは当然の筋道である。宗像の教育大学はこれに対して必ずやよい回答を与えるであろう。年頭に際して、この意義ある教育大学を抱く神郡宗像人はいかなる心構えをもって進むべきか、相ともに考えたいものである。」

赤間は出光生誕の地元であり、九分九厘決定の刑務所移転を高山町長と共に学芸大統合に転換し、福岡教育大学の統合移転となった。昭和 35 年～ 38 年の出来事である。出光は、学芸大学誘致に関することを昭和 26 年 3 月の『人間尊重

五十年』「夢」の中で赤間町制 50 年の事を、下記のとおり記す。

「 赤間の町会に来て皆に会ってもらいたいとのことであった。仏事の中を抜け出した。町長や有識者の話の中に、昨年町制 50 年のお祝いをしたが、町はいっこうに発展しないで困っているとの紋切型の話があった。私は次のような所感を述べた。事業には立地条件があるから、条件の悪いところには事業は起こらない。宗像郡は昔宗像神社の御神域である。大神の御神徳によって人情敦厚、気風剛健の特色を持っていて、多くの教育者を出している。人間をつくることには優秀の立地条件を備えている。事業を起こして金を儲けるだけが人間の事業でない。人をつくることこそ事業中の大事業である。この方向で進まれることをお勧めする。ただし、こんな大事業は簡単に短時日の間に出来るものでない。ことにお互い現代の国民は戦争をもとどめえなかったような弱い落第生であるから、われわれの子供や孫の時代にこの事業を完成する覚悟があらねばならぬ。まずお互いの家庭教育から始めるべきである・・・・私の言う人は、他人の金や恵みを期待しているような依頼心をもつ人をつくれと言ったのでない。まず自分のことを完成し、その余力をもって人のために尽くすような人を希望するのであって、依頼心のある人などは将来とても人のために尽くす人でない。排除すべき人である。・・・人間尊重は郷里へも徹底していない。人に頼る、さらに人より奪う、この思想は権利思想の履き違いである」

と答えたことが記述される。昭和 25 年の事と思われる。学芸大学の誘致 10 年前の事である。彼は、洞察力で宗像の特性を見抜き、早い時期から宗像を教育者の町とすることを考えていたようだ。

ところで、高山は 2 期の町長選挙で落選する。前掲の本人自著に教育大学の誘致が原因と記す。落選した数日後に陵厳寺の佐三の兄宅で、出会っている。昭和 39 年 5 月 20 日前後のことである。その時の佐三の会話が記述される。

「 今回のことはまことにすまなかったね。刑務所の件で君に無理押しをして、ついに落選へ追いやったことに対して、ほんとうに申し訳ないと思っている。深くお詫びするよ。しかし、決して力を落とすなよ。神郡宗像に刑務所は絶対ふさわしくないという君の力強い信念と、戦後荒廃しきった福岡県教育界の立て直しのため福岡学芸大学の統合に全力を尽くして、全国で何人とも成し得なかった大事業を見事に成し遂げた君の事跡は、宗像教育界、福岡県教育史に一番の功労者として末永く残るだろうと・・・」

と賛辞があり、慰められたとされる。苦労人の佐三の義理・人情を知ることができる。

昭和 38 年 10 月 2 日に深く晴れ渡った秋空のもと、赤間城山山麓で、福岡学芸大学統合校舎建設の起工式が行われた。午前 10 時半、起工祭が開始され修祓、斎主祝詔奏上、鍬入れ、穿ち初めの儀、鎮物の儀、玉串拝礼を以って祭典は終了

出光佐三の郷里　赤間町（昭和 23 年）

した。この後、学長祝辞、県知事他に多数の祝辞があった。中でもこの統合校舎建設について多大の援助を惜しまなかった出光佐三の言葉少ない祝詔が人々の心を打ったとされる。

計画は、福岡本校の他に、福岡、小倉、田川、久留米の 4 分校を赤間に統合するもので、3 年後に敷地 40 万㎡、建築は 4 万㎡とされる。建物は、文科系校舎、理科系校舎、図書館、教育研究所、講義室、学生厚生室、農地施設等が建設された。

文部省は、昭和 38 年度に第 1 期工事に 1 億 7 千万円を計上した。工事総額は、18 億円、内 13 億円が国家予算で残り 5 億円が一般の篤志家の尽力を期待する。

このうち、出光寄付金の 3 億円は、総合教育研究所と技術センターの半分の建設費に使われた。3 ヶ年工事で全工事を完了し、全学が移転する。そして、3 千世帯が赤間に集まり学園都市を形成する。

以後、宗像は高山町長の「教育・文化・住宅都市」へと進み、昭和 41 年の東海大学福岡教養部・付属第五高校が開校する。吉田法晴は、東海大学の設置についても、松前重義理事長の依頼を鵜崎福岡県知事の協力と福岡県私学審議会の了承を取り付け、実現させている。

大学校内

正門

西鉄バス停留所

須賀神社

城山中学校

福岡教育大学の全景

建設中の福岡教育大学

佐三の影響を強く受けた滝口凡夫が、平成 13 年に日本赤十字九州国際看護大学を誘致し、学園都市となる。出光佐三や宗像会員の総力戦で福岡教育大学の統合移転を実現したことにより、50 年後の今日を方向づけたとも云える。

（11）、出光丸の竣工見学

日本の将来を担う中学生にも出光丸を見せたいと、宿泊や交通費もすべて会社で負担、全国の中学生 15,000 人を横浜市に招待する。この時、宗像郡からも中学生が参加する。佐三が発案し、11 ヶ月の日時をかけて周到に計画され実行された。その目的は、「次世代の日本を背負う若い人達に、日本民族の優秀性と世界的使命を教え、夢を与えたい」であった。

『社報宗像』で「世界最大のマンモスタンカー　出光丸建造進む」、「出光丸竣工」に記事がある。昭和 41 年 1 月 31 日に宗像神社で起工奉告祭が斎行された。出光興産が石川島播磨重工業に発注し、同社横浜第 2 工場で造られる。完成までの総工費は 54 億で、完成後はペルシャ湾と出光興産徳山製油所を結ぶ大動脈となった。

昭和 41 年 12 月 7 日に出光丸の竣工祭が横浜で行われた。竣工披露宴は、石川島播磨重工業、横浜第 2 T 場の埠頭にクリーム色の巨体の出光丸が主役であった。全長 342 m、甲板の広さは後楽園グランドの 1.5 倍で、当時想像を絶する巨大なもので、しかもこの船体がわずか 7 ヶ月で完成したことは、日本の和の結晶と、技術の優秀さを世界に示すものである。

午前 9 時半、宗像神社久保輝雄宮司斎主のもとで、船上鎮座祭が斎行された。出光丸は、全長 342 m、重量 21 万トンの世界一タンカーで、東京湾を後にして、ペルシャ湾に晴れての処女航海に発ったのは昭和 41 年 12 月 12 日であったが、3 月 12 日には、第二航海を終えて徳山港に入港した。世界注視の中で、極めて順調に運航して、その威力を発揮している。

石田正實の「出光丸」が、再興宗像 14 号に記事が収録される。彼は、宗像の赤間町出身で宗像会終身会員、出光興産の 3 代目社長である。

石田によると、「ペルシャ湾の標準運賃はトン当り 10 ドル（3,600 円）であるが、出光丸の場合は約 500 円である。3,000 トン級の内タンカーの運賃でいえば、東京－名古屋港間の海上運賃と同じで、中近東から日本に運べるわけである。まさに海上運賃の革命といってよい。現在世界の原油の埋蔵量の 60% は中近東にあるといわれているし、日本に輸入される石油の 80% が中近東からである。その中近東からの運賃が、東京 - 名古屋間の内航運賃に等しいとは、中近東の莫大

な石油資源が日本の内地にあるといってもよい」、しかも石油の消費量は年々増加して、昭和 42 年度は 1 億キロリットルを超えることになり、昭和 60 年には 4 億キロリットルを超えるという、エネルギー調査会の報告がある。一航路にこの船が運ぶ原油の量は 245,000 キロリットルで、積み込まれた原油価格は約 12 億 5 千万円となると云う。

石田正實「出光丸」再興宗像 14 号に収録を下記に引用する。

「 出光丸の竣工に当つで、昭和 41 年 12 月 7 日から、11 日まで、5 日間にわたって、横浜根岸で竣工披露を行った。第 1 日は、高松宮、同妃両殿下の御臨席を得て、盛大に引渡式、竣工披露が行なわれ、第 3 日には、皇太子殿下の御台覧を仰ぎ、第 5 日目には、佐藤総理、大橋運輸大臣等の見学があった。この 5 日間の総見学者数は約 3 万人、そのうち、1万 5 千人は、北は北海道から、南は鹿児島県までの全国中学生、及び同伴父兄である。明治以後百年間、英国その他の先進諸国を抜いて、現在日本の造船能力は世界の王座を占めるに至っている。昭和 40 年の世界造船量は 107 万トンであるが、日本の造船量は 536 万屯で、世界全体の 44%を占めている。かつての造船王国の英国の造船量は 1,221 万トンで、日本の 5 分の 1 も足りない。このことは、日本民族の優秀性と和の精神の成果であるとの出光会長の信念で、戦後日本人としての自信と誇りを失ってしまった現在、是非とも次代を背負って立つ少年に見せたいとの念願から行われたものであつた。

全国から集って来た手紙 1,000 通は、世界一の出光丸の勇姿を見ると、全く驚きと悦びに輝いた。なでるようにしてまた走るようにして、船内くまなく見てまわる姿が今も眼前に思い出される。感想はと聞いても、ただ大きい、デッカイという以外の表現をもたなかった。

彼等が帰校してから約 3,000 通に余る感想文や、お礼状が送られて来た。これらを整理してみると、面白い結果が出て来た。東京都の学校からは 1 通も来なかったし、大阪、名古屋、横浜の大都会からは極めて少なく、地方の農村、山村の学校からは殆んど全員が書き送って来た。都市と農村の世相を反映しているといっても良い。

内容の方から分析してみると、全体の 7 割が、王選手・3 回ホームランを打っても届かない長さとか、碇の一つの重さが大鵬より重いとか、主として外形の観察とどまって、2 割がこの世界一を生んだ日本人の力と、優秀性を認識し、最後の 1 割ぐらいが将来自分たちも、こんな大きな船を作る人になりたいとか、出光丸のエンジンのような力の持ち主になりたい等と自己の自覚と、希望を述べている。最後のグループは、将来国民の指導者になる素質を存じているといってよかろう。

3,000 通のうち、3 通ほどがこの見学を批判し、一通は接待の弁当がまずいし、待遇が悪かったと非難していた。しかも、それらの 3 通が何れも宗像から来た学生のもので、残念というより、むしろ唖然とした。世界一出光丸よりも、一糸乱れず、整然と、かゆいところに手の届く出光社員の行動に、より称賛の言葉を送って来た一般招待者に比すれば、なおさらのことである。出光会長は、これは神慮の顕れであるといっておられる。

神郡宗像の土徳に育まれて、幾多の名校長、名教員が出た。早良巡査に宗像教員というのが、私どもが子供の時からよく聞かされた言葉である。宗像卵とともに郷土宗像の誇りであったのであ

る。宗像人の純粋性の故に、戦後の思想の変化に対応しきれずに、押し流されてしまったのではなかろうか。健康な人ほど病菌に弱いともいわれる。故郷を離れて、時に静かに目をとじて憶えば、山紫水明の宗像の山々の姿、野の美しさが、過去の追憶とともに甦ってくるのは、誰でも同じであろう。宗像の発展と、宗像人の誇りを望むこと切なるものがある」

とある。当時、3 通の批判の手紙が、それが宗像の中学生であり、石田・出光ともに驚いて残念がっていると記されるが、意外とそうでもない。筆者の友人の姉がこの中学生参加に選ばれ、彼女や友人は非常に喜んでいたのを覚えている。家庭の事情で、いつも社会科見学・修学旅行も参加できなかった。中央中学校の先生の粋な計らいで参加できたのだろう。出光佐三と出光丸のことは、友人の笑顔と共に、記憶の中に鮮明に残る。

3、著作・評論・出版と顕彰事業

(1)、著作・評論・出版

出光の逝去後、彼が書いたものが続いて出版される。出光興産店主室『我が 60 年間』追補が出版される。

以後、昭和 58 年に『道徳とモラルは完全に違ふ』出光興産、昭和 59 年に『出光の言葉』出光興産、昭和 60 年に出光興産店主室『我が 60 年間』第 1 ～ 4 巻が出版される。評論としては、昭和 48 年 (1973)2 月、瀧口凡夫より『創造と可能の挑戦　出光佐三の事業理念』が出版される。

昭和 61 年に出光計助『二つの人生』、平成 2 年に高倉秀二『評伝　出光佐三』、平成 15 年 (2003) に、佐三の娘である出光真子『ホワット・ア・うーまんめいど - ある映像作家の自伝 -』が出版される。以下、数多くあるので代表的な著作は下記の通りである。

・高倉秀二『評伝　出光佐三』プレジデント社　1990 年
・堀江義人『石油王　出光佐三　発想の原点』三心堂出版社　1998 年
・滝口凡夫『決断力（中）』日本工業新聞社 2001 年
・佐々木聡編『日本の戦後企業家史―反骨の系譜―』有斐閣選書　2001 年
・水木楊『難にありて人を切らず』PHP 研究所　2003 年
・滝口凡夫『出光佐三　魂の言葉』海鳥社　2012 年
・水木楊『出光佐三　反骨の言魂』PHP 研究所　2013 年
・木本正次　小説「燃える男の肖象　出光佐三」1982 年

また、平成 24 年 (2012) に佐三をモデルとした小説、百田尚樹の『海賊とよばれた男』 講談社から刊行され、翌年に本屋大賞となり、再び関心を集めることになる。今月、岡田准一主演でベストセラー小説が映画として公開された。

(2)、宗像での佐三翁顕彰事業

出光佐三の逝去後に顕彰の記念事業や追悼記事などがあり、原文を引用しながら、彼と宗像の関係者の繋がりを集めた。

出光佐三翁生誕百周年記念事業

昭和 60 年 (1985)8 月 17 日・18 日に宗像市商工会青年部主催で、故出光佐三翁生誕百周年記念事業が、開催される。記念式を須恵の中央公民館大ホール、生誕 100 年祭で映画上演、赤間の生家公開が行なわれた。記念誌は、『日本人出光佐三翁生誕百周年記念誌』に詳しく纏められる。地元で、唯一の佐三の業績・評価を知ることができる本である。

堤宏は、記念誌の中で「今から 20 年前 (昭和 43 年)、当時の宗像は宗像高校の校長着任拒否闘争、勤評闘争等教育闘争の拠点として高名を馳せ、教育現場は大混乱でした。昔から神郡宗像、教育郡宗像と言われ、著名な教育者を多数輩出した、教育界の雄郡でありましたが、当時はその面影もない惨澹たる状況でありました。

このように憂慮すべき状況を耳にされた出光店主は、地元青年代表を東京に招かれ、宗像の現状を憂い “ 宗像の若者よ立て ” この混迷する宗像に何の生きがいを感じるか。このすばらしい環境に恵まれ、良き先輩をもつ幸せな若者よ、醇風美俗宗像の若者よ、勇気をもって奮起せよ。先輩に負けない人になれ、郷土を愛する人になれ。何事にも感謝し、互譲互助の精神をもって真の日本人のチャンピオンになれと激励され、その言葉に目覚めた当時の青年有志が集いも我々は将来の宗像の礎になろうと結成されたのが宗像青年会議所の前身であります。」とあり、発足 10 周年記念誌に「宗像大社の御神徳を頂いている宗像人は特別の使命がある。それは実の日本人のあり方を、身をもって示して世界の平和、福祉に貢献しなければならぬ使命をもっている。そういう高い目標に向って進みなさい」の一文を寄せられ、「日本人のチャンピオンたれ」「日本人のあり方を示すことが、日本人の世界的使命である」など、世界的視野にたたれての御教示を賜わりましたと」と述べられる。

この高名を馳せたのは、昭和 43 年 4 月に福岡県高校教職員組合は、校長推薦

者を巡って、全国でも例のない校長着任拒否闘争が始まった。学校の正門には組合員らがピケを張り、着任しようとする校長に対して阻止した。宗像高校の場合は 67 日後の 7 月 17 日にやっと着任したとされる。津屋崎町の水産高校でも組合員が、ピケを張り警察権力が介入することになる。佐三の誘致した教育大学のお膝元の出来事であった。さらに、学生運動は、福岡教育大学にも及び、九州の革マル派の拠点となっていた。

かつての宗像の教育は、「一人の子を粗末にする時　教育はその光を失う」･「地味だが堅実、一人ひとりに食いついて行く人間教育」とする安部清美教師の「神興教育」などの思想があった。

安部清美 (参議院議員) は、九州のペスタロッチとも呼ばれた教育者であった、彼は、「地味情味」『再興宗像』17 号に、小さな宗像郡からどうしてこうも人材が多く生まれたかと他の都市出身者から聞かれる。その理由に、「昔から宗像名物は教員と卵と言われてきました。その宗像教員によって生み出された宗像教員が、多くの人材人物を育て上げ、今日の日本全国で活躍されているので、この小さな宗像郡の最大の産物は人物であると自慢します。教育郡宗像は、宗像神社を中心とした宗像精神と自然環境が生み出す郡風と、教育界の大先輩各位の人間教育がこうした結果をもたらしたと信じたいのであります。」と語っている。

ところが、昭和 33 年～昭和 43 年にかけて福岡県教職員組合の勤評闘争が激化することになる。

小学校の頃､休みであった宗像神社の放生会も政教分離が進み､休日でなくなった。この時期に再興『宗像』が刊行されるが､宗像会が衰退することと一致する。

川島照亮は、宗像高校と佐三翁との繋がりと感謝が書かれる。

「出光佐三翁の深い心」『宗像高校同窓会　平成 22 年会報』より引用。

「 現在の宗像高校の歴史を語るに出光佐三翁の名前を外すことはできない。・・・中略・・・翁はいつも言っておられました。「 今の自分があるのは、宗像に生まれ育って宗像大社のご神徳に浴したお陰である。宗像は昔から名教員を輩出する教育郡であったが、私もその尊い先生に教え育てられ人の尊さを知った。それで私の会社の在り方は、人間尊重の精神が中心になった」と。そういうご自身の体験から、翁は郷土宗像に対する感謝、報恩の心が強く、それを色々の会に実行されたのです。50 年程前（ 昭和 35 年）には宗像高校で講演をされ、日本人の使命や宗像の若い人たちの役目を説かれました。また、創立 50 周年記念行事や新体青館の建設に際して、千万単位の多額のご寄付を頂きましたが､寄付のことは絶対口外しないでほしいと言われました。そして、この宗像から将来の日本を担う若い人が育つのが、一番の楽しみとも言ったおられました。かく言

う私も現在の伊豆会長、当時常任幹事だった故天野昭夫氏らと共に翁に直接激励を受けた一人であります。「宗像の若者よ立ち上がれ。」と語られた翁の慈顔を今でも忘れることは出来ません。

そのような翁と宗像高枚をつなぐ掛け橋となって、今日まで多面にわたってご尽力を頂きました同窓会顧問の麻生和正氏には感謝の念に堪えません。」

昭和53年11月、宗像町民名誉町民1号となる。この時の宗像大社の『社報宗像』の記事がある。

郷土に対する永年の助力に町民挙げて感謝　　昭和53年(1978)2月号

「人口約5万2千を数え、昨年末に新庁舎の落成を見た宗像町では当町初の名誉町民として、出光佐三氏（93歳）を選び、名誉町民章の贈呈式が去る11月16日に新庁舎会議室で行われた。当日出光佐三氏は、高齢のため欠席されたが、出光興産株式会社取締役の麻生和正店主室長が代理で出席され、天野町長から名誉町民章証書を受けられた。出光佐三氏は、明治18年8月22日、宗像町赤間（旧赤間村）に生まれ、赤間小から東郷高等小、福岡商業をおえ神戸高等商業学校を卒業。明治44年に門司市（北九州市門司区）で出光商会を設立。昭和15年に今の出光興産株式会社と社名を変え、今日の基礎を築かれた今日の間、同氏は教育郡宗像の教育環境整備への援助として、福岡教育大学の統合誘致、旧赤間小学校の図書館、城山中学校の旧体育館、赤間保育園の建設等々、郡内のあらゆる教育機関へのおしみない助力がなされた。

更に氏は、神郡宗像の文化向上のためにも、沖ノ島第1次から第3次にわたる学術調査を基として、宗像神社史上・下・附巻の編集、宗像大社昭和の大造営事業、宗像大社宝物館建設等、神郡宗像の発展に多くの功績を残されております。しかし、これ等の功績は郷土宗像のみならず同氏の著書「人間尊重」や「永遠の日本」などで述べられているように、会社の運営を通して、日本全体の教育と文化の向上に貢献するという出光精神の現われでもあります。また、これらの御功績に対し去る昭和33年には旧門司市名誉市民章も受章されています。このたび、出光佐三氏におかれましては、宗像町、初の名誉町民になられましたことを心からお祝い申し上げます。今後共、益々御健勝・御長寿を心より祈念申し上げます。」

昭和53年12月吉日宗像大社宮司・葦津嘉之、外職員一同社報「宗像」編集部

昭和60年8月27日に福岡RKB毎日放送による特別番組「われ天地に愧じず」が放映され、彼の生涯と事業、友人のコメントが紹介される。出光興産の提供である。

平成23年(2011)、出光創業100周年記念日には「日本人にかえれ」の名言が新聞広告に掲載された。イラストの日章丸（2世）は、イランのアバダン港に石油を購入し、ペルシャ湾で大国イギリス軍に撃沈される可能性があるにも関わらず、新田辰男船長が航海し、川崎港に帰港する。出光の存在を示す世界的な出来事である。タンカーには、航海安全の宗像神社が祭られていた。この時も、「宗

像大神」が加護してくれたのだろうか。

平成 27 年 3 月 24 日～ 5 月 10 日に、宗像市海の道　むなかた館で『日本人にかえれ - 出光佐三展 -』を実施し、期間中に 27,000 人の入館があった。

佐三と宗像の繋がりが、逝去 36 年を経て再び蘇る。

4、まとめ

(1)、佐三翁はどんな人

佐三について、弟の計助（出光興産 2 代目社長）は、『二つの人生』に、「店主の場合は、物事を実行するに当たっては、事前に徹底的に調査、研究する。その結果、一度やると決めたら、だれがなんと言おうと絶対あとには引かない。非常に頑固だ。だから、たとえば、いったん怒り出したらそばには近寄れないくらい激しい。人並みはずれて頑固なところがある半面、実に情にもろい。女性や子供には無条件にやさしかった。逆に相手が強い役所などで、曲がったことがあると、とことん反対した。若いときから苦労ばかりしているから、いろいろとよく気がつくし、義理、人情を非常に大切にする。しかも、普通の人なら、苦労が続くとくじけて止めてしまうが、店主は苦労があってもへこたれない。禍いを次々と自分の栄養分にしていく。山を越すと、次の大きな険しい山をめざしていく。性格は父親に似て、楽天的で明るい。」とされる。

また、店主も明治 44 年、初めて門司に店を出したときは「これで両親や妹、弟たちの窮状を救えれば…といった程度にしか期待していなかったのではないだろうか。晩年、計助、出光がこんな会社になるとは思わなかったと述懐するのを何度か聞いたことがある。」と回想される。

佐三翁は、生前「宗像大社は私の郷土の氏神さまで、その秋祭り放生会にお参りするのが、子供の時の楽しみだったと回想している。晴れ着に締めた博多帯をツメでキュツキュツと鳴らし、釣川の長い土手を両親に連れられて歩きながら一日がかりで、お参りしたものだった。」と云う。

佐三翁の好物は、赤間城山の山芋で、「青年会議所の人たちが、城山の山芋を持参すると、オレの堀り残したものを持ってきたと喜んだ」と、滝口凡夫は記す。

『宗像海人伝』49 号　昭和 59 年には、山芋と名誉町民の記事がある。

「最大の好物は、郷里の城山の山芋であった。宗像町が佐三翁に名誉町民に決定、純金の名誉町民章を贈った。風邪のために寝込んでしまった佐三翁は、スクット起き上がると羽織、はかまを身につけ、町民章を首にかけ、「ありがとうござい

ます」と深々と頭を下げたという。同じく宗像出身の側近 (麻生和正) はこの光景を前にボロボロと涙をながした。宗像町は、毎年、城山の山芋とワカメを送りつづけた。到着が遅れると佐三翁は催促の電話をかけたという。大慌てで職員が山芋を掘りに出かけた。」とある。

以下、いろんな方がエピソードと感謝が記される。

『日本人　出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985 年　宗像市商工会青年部より引用する。宗像大社宮司の葦津嘉之は、復興期成会の頃に彼の宗像気質を下記のように書いている。

「 私事になりますが、初めて出光翁にお会いしましたのは、宗像着任 2 日後の昭和 34 年 6 月 3 日でした。着任早々の私を初め郡内諸団体代表の列席者を前に、宗像大社の復興造営と神郡宗像の将来について、その心情を切々と披露されましたが、この時に翁の並ならぬ敬神の念の深さと、熱情溢れる宗像の郷土愛に一同深い感銘を受けましたことを、今も忘れることができません。その後 20 年の永い間、私は神職なるが故に親しく御指導をいただき、また御高説を拝聴する機会も得ることがありました。具体的な翁の一生を振り返えってみます時、ひと言で申しますならば、「 真の日本人として生涯を送られた偉大な宗像人であった」と思います。神を尊崇し、先祖を敬い、親を大切にし、郷土を愛し、美わしい日本の真姿を世界に示すことをご自分の使命としておられました。その中でも特に宗像に対する郷土愛は、格別であったと思います。宗像市郡内各地の公民館や学校建設、また教育大学の誘致、宗像の教育正常化、宗像大社の復興造営等々、郷里宗像発展の為に格別の配慮とご尽力をいただきましたことは郡民の皆様周知の通りでございます「 宗像の人々は宗像大神のご庇護をいただいて、先祖代々醇風美俗の地方風を生み出し、それを良く受け継いで現在に至りました。その美わしい人情と素朴な地方風と、宗像大神の広大無辺なご神徳の中で私は生れ育ちました。今日の私がありますのは、全く宗像のお蔭です」といつも故郷宗像に対して、格別に報恩感謝の念をお持ちでありました。かつて、教育正常化の嵐に郡内が見舞われた時、宗像にも赤旗を振り廻して教育を荒廃させる悪い奴が多勢おりますよ。と申し上げたら、にっこりと笑われて、宗像人は純情、純真、無垢だから悪の色にも染まりやすいのです。しかし悪いとわかればすぐ治まりますからご心配なくと、心から宗像の人々に対して愛情をもって弁明された時は返す言葉もなくただただ頭が下りました。」と記している。

天野敏樹町長は、下記のとおり回想する。

「 当市におきましては、昭和 41 年 4 月福岡教育大学の誘致を始め、孝子武丸正助翁の遺徳顕彰事業、旧赤間小学校の図書館の建設、城山中学校体育館の建設等の公共事業に多額のご援助をいただき、市財政の苦難の時代を乗り切ることが出来ましたのも、ふるさとをこよなく愛されていた現れであり、・・・宗像住民のシンボルであります宗像大社を氏貞が再建して以来約 400 年ぶりに、巨費を投じて修復されたことは・・・「 宗像の心は一つ」という言葉がありますが、古代より宗像

大社の秋季大祭を中心とする各種の祭りに氏子が集まり、情報交換、コミュニティ形成の重要な拠点となり、神郡宗像の意識が熟成されてまいりました。」

安永武一郎学長は、学芸大学統合移転を振り返り、回想する。
「 当時の金で 3 億という巨額の寄附を下さった。大学側が「 その金で出光会館を建設しましょう」との申し出も断わられ、御自分を表面に出す事をなさらなかったのみならず学生への奨学金を毎年継続して下さり「 国家の役に立つ教師になって欲しい」との念願をこめて今も続けている。」また、教官諸氏に広く外国の実状を知り、教育の場で生かして欲しいと、助成の恩恵を賜つた教官は既に 100 名に達している」

文部省が学生奨学金制度について、「福岡教育大学のみに援助せずに、他大学にも及ぼしたら‥‥‥」と言った時、出光は「それなら私は寄附を止める」と断言されたと云う。

伊豆善也県議会議員は、佐三翁について下記のとおり述べる。
「出光翁の郷土に尽された精神的、経済的ご貢献ははかり知れないものがあり、これほど郷土の為に尽くした経営者は他に類を見ないことでしょう。また、宗像の戦後の政治、教育の荒廃を深く考慮され、その健全化のため、陰に陽に尽力されたご功績を忘れてはなりません就中、教育大を城山山麓に私財を投じて統合、設置されたことは特筆すべきことであります。」と話す。
彼は、昭和 44 年 4 月に宗像高校で、教育の立て直しを願って、佐三翁を招き、講演会「日本人の世界的使命」を企画・実施した、その後に宗像の教育の再生に尽力された。

滝口凡夫は、出光翁については身近にあり多くの著作を書かれており、翁の実像を知る上で欠かせない。彼も宗像出身であり、佐三の宗像に対する基層意識とその影響を分析する。彼は、元宗像市長である。複眼的視野で書いておられる著作は下記のとおりである。
・滝口凡夫「出光佐三さんと私」『出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985 年
・滝口凡夫『創造と可能の挑戦　出光佐三の事業理念』西日本新聞社　1973 年
・滝口凡夫『決断力（中)』日本工業新聞社　2001 年
・滝口凡夫「あるべき人間の姿を求めて」『出光佐三　魂の言葉』2012 年

以下は、滝口凡夫「出光佐三さんと私」から、興味深い記述を下記に引用した。

互譲互助精神

どのような生き方をされ、どのような考え方を持っておられたのか、もう１つは佐三さんが生きてこられた人生、あるいは出光興産の経営理念と宗像との関わり、「 日田重太郎に君の主義を貫き両親を大切に、兄弟仲良く暮しなさい」と教えられた。

「 佐三さんはこの教えを、ずっと守り、出光興産の基本理念とされた。人間の出会いというもの、常識では説明できないほど神秘的だし、偉大な結果を生むものです。」

戦後に、「 創業いらい営々と築いた販売網は終戦によってすべてなくなり、残ったのは 210 万の借金だけでした。60 歳といえば今では停年の歳で、この歳から事業を起こすなど普通の人の考えではできません」そして、「 佐三さんの考え方の基底にあるのはやはり宗像大社です。私達から考えますと佐三さんの生きた道は本当に一直線です。これは非常にむつかしい事で、誰にでも出来る事ではありません。ですから佐三さんは、人からも悪口を相当言われています。業界の一匹狼などとも言われています。これは徳山製油所もできて出光興産も一人前になった昭和 58 年、業界の生産調整に反対し、消費者本位の石油政策を主張して石油連盟を脱退したときのことです。」

根本思想

佐三さんの考えの根元にあるのは宗像大社です。「 宗像大社に行きますと拝殿の所に木の額が掛けてあります。【天孫を助け奉りて、天孫に、祭かれよ】と書かれています。天孫とは天照大神の子孫で天皇家です。その天孫をお助けするとともに、天孫からお祭りを受けられよ、という神勅です。佐三さんほど純粋に豊かに生きた人はめずらしいですね。しかも自分だけでなく出光興産の事業経営の中で、それを実践して見事にやり遂げられた。これは宗像の人だけでなく日本中の人がどれだけ勉強してもいい人物だと思います。」、「 おもしろいことにタンカーに大嶋丸や沖ノ嶋丸、赤間丸、高宮丸など宗像にかかわりのある名前がつけてあり、いかに佐三さんが宗像や宗像大社のことを考えておられたかの証拠と思います。」

宗像とは何か

佐三さんは、宗像大社の神領で、宗像大社の御神徳によって、これだけの醇風美俗の風土ができてきた、と言われています。「 宗像とは何か」が問われなければならない。佐三さんは宗像、宗像と言われますが私は佐三さんの故郷は宗像だけじゃないと思います。逆説的ないい方になりますが、つまり日本人としての本当の在り方、人間としての本当の在り方を求めていくのが佐三さんのねらいであって、それがたまたま純粋な形で宗像にあった。そしてその宗像に佐三さんが生まれた。何も、宗像だけに日本人が住んでいるわけではありません。昔からの日本の農村、山村など、私は土に近いほど、自然に近いほど純粋な人間が育つと思いますが、その宗像という所は純粋な日本人の在り方を示す一つの地方である、ということです。宗像人だけが日本人じゃありません。いづれにしても、今宗像がこんなに大きく変っている。そして佐三さんが自慢されたほどの宗像の醇風美俗、その人間のよさというものもだんだん変わってきている。

そして、滝口は『出光佐三　魂の言葉』の中で、その本質を「出光には人間尊重を初め互譲互助、資本は人なり、努めて難問に挑め、などの理念、教訓のたぐいが多いが、これはすべての土に生きた自作農民の発想から出たものだ」と考えている。

以上のように、宗像会の結成から戦後を経て、宗像会・出光佐三翁の宗像への影響や尽力の実態に眼を向け、歴史の観点から宗像の基層意識の形成を探った。本来は、佐三翁の嫌う金目のことは書くべきではないが、本来の実態がわからないので、記事のあるもの記述した。

幕末志士の早川勇の人徳で、宗像会が結成され、企業・官界・学会に人材が育ち、特に多くの教員が生まれ宗像教育会が結成され教育郡となる。大正期に再び入会した出光は、事業の成功と共に宗像会を代表する起業家となり、宗像神社復興期成会の会長に就任する。しかし、戦争で宗像会は停止に追い込まれる。

戦後、出光は戦前の一切のものは失った。60 歳の年齢であったが、人を資産とする起業を再びはじめ、再び石油業界に戻る。併せて、自社の建物等が戦災に遭わなかったのは、宗像大神の力と信じ、自らの経営思想の実現を目指す。宗像神社の復興は、沖ノ島出土品などで神社の由緒と神徳を独自の理解を深め、武丸正助顕彰により自らの信念を確信することとなる。そこには、「日本人」をキーワードとした明治精神が加味される事になる。

戦後は、宗像会のリーダーとして、念願である神社の復興に奔走しながら、宗像地域の武丸正助顕彰事業、宗像会の再興に進む。宗像会で育った教育をベースに昭和 25 年頃には、宗像は教育で進むことを構想している。昭和 35 年の福岡刑務所の移転計画は、反対意思を高山町長と共に示し撤回させ、福岡教育大学の統合移転の積極的支持者として私財を投じ実現させる。合せて、学生の奨学金制度を始める。こののち、再興宗像の激文を書く一方、宗像商工会青年部の若者を東京に呼び、激励すると共に、宗像高校・城山中学校などで講演会を行い、「宗像人」の育成に激を飛ばす。「日本人のチャンピオンたれ」「日本人のあり方を示すことが、日本人の世界的使命である」と諭す。出光丸竣工の中学生の 15,000 人を招待する考えも、これらを契機に生まれたものかもしれない。

昭和 46 年 11 月の宗像神社の遷宮大祭は、「一生の念願」という。宗像大社が世界遺産の候補になりうる基盤は既にこの時期に、出光佐三と云う個性で結実したと見なしても過言でない。また、自ら計画・実施すること決めたならば、突き進むことを宗像人に示したことに意味がある。

彼の宗像で行なった行動 (事業) は、戦前の教育郡を再び呼び起こすことであり、その基盤を作ったことに意義がある。彼が最も重視したのは、後進の人材育成が目的であった。「宗像は一つ」から「宗像の心は一つ」と郡民意識は、戦後に引き継がれたのは、出光の鮮烈な個性によるものであり、彼の激が宗像会の同胞意識に強烈に影響を与えた。

彼は、常に自慢げに力強く語る。

「 それは宗像大社のご神徳ですよ。これを今の若い人に言ったら「 何をいうか、このおいぼれが」ということになる。宗像大社は、日本国民の祖神といわれておる。お伊勢さまは皇室のご先祖であり、宗像大社は国民の祖神であるといわれておる。『皇室を助け奉って、皇室に祭られよ』という御神勅の第一号がこの宗像神社にある。・・・このご神徳が、どういうふうにあらわれたかというと、まず学校の先生にあらわれた。私が小学校に行っておる頃は、小学校の先生は尊いと思ったものですよ。私の育った宗像郡（ 福岡県）は教育郡で有名だった。今は福岡県が日教組のご三家だが、昔は福岡県と長野県はよい方のご三家で、福岡県は日本で有名な教育県であった。その教育県の中でも宗像郡は特に教育郡として有名で、多くの小学校の名校長、名教員を出した」

と昭和 42 年 5 月に「仲よくする力」『八幡製鉄幹部研修会』の講演会記事がある。以上のような、激を聞けなくなって 36 年が経過する。

宗像の人は、古代より神郡の氏子という意識が強く、自尊心と自立心に富むと言われている。佐三はその典型である。彼の行動や経営を彩る多分に観念的なところは、この宗像の氏子という代々踏襲される基層意識と無関係ではない。

宗像会、出光佐三翁の活躍は、世代交代と共に記憶から薄らいつつあるが、それは既に基盤となり基層意識の中にあると思う。たとえば、保存整備された宗像大社や鎮国寺の景観であり、教育大学などの大学施設、教育者と云う資産であり、宗像人の基層意識に存在する。多くの人々が恩恵を受けているはずである。しかし、基層意識は、無意識の中にあり、地元にいるとほとんど意識されることはない。

（2）、今日、出光佐三翁の痕跡を探す。

彼に関するものは、生家・お墓ぐらいで痕跡が少ない。お墓は不謹慎なので触れない。彼は、明治 18 年に赤間村で生誕し、赤間尋常小学校、東郷高等小学校卒業後の 19 歳まで主に過ごしている。その後、福岡商業学校に通学している。

通学は、毎日、汽車で赤間駅を「朝 5 時ごろの汽車に乗って夜 9 時、10 時の昼夜兼行であった」と回想する。商業学校時代も家業の手伝いで、藍玉の注文取りなどを手伝っている。佐三が直接的に宗像を郷里とするのは、24 歳ごろまで

である。明治 42 年ごろに佐三の意に反して出光家の家族は、家業を閉店し、追われるように宗像を去っている。

佐三は、出光商会を開業し門司市に居住していたが、27 年間の空白がある。大正 6 年に宗像会に再入会するが、会誌をどの程度読んでいたかわからない。本人は、視力が弱く、積読であったと云う。その後、昭和 12 年の貴族院議員に当選してから宗像神社復興事業完成する昭和 50 年まで間、頻繁に帰ることがなる。52 歳から 90 歳の出来事である。

佐三兄弟生家（宗像市赤間）

赤間宿に佐三の生まれたころは、染料のである藍の卸商を父が営んでおり、徳島県から藍玉を仕入れて、郡内や福岡、久留米などに販売していた。赤間は、吉留にある八所宮の氏子であり、総社の宗像神社の氏子、いわゆる二重氏子である。菩提寺は法然寺である。

明治 9 年の赤間村の人口は、987 人で 197 戸であり、唐津街道の宿場町であった。法然寺には、「出光良元」の墓があり、弟の歴史好きの泰亮が調べたところ、宇佐八幡宮大宮司家の一族とされ、宗像へ移り住んだと云う。江戸時代の天明年間には、赤間宿で家業は染物業であった。赤間の古文書が公開されていないものも多く、今後詳細な調査が必要である。そうしないと今後も混乱が続く。

佐三は、父から「一生懸命働くこと」・「質素であること」・「自らには薄くして、人のために尽くすこと」を毎日云われ、厳しく教え込まれた。母は、人前に出ることが嫌いな人であったが、何かことが起こると、「芯の強い女性」であった。出光兄弟が後に、一致団結するのは、両親の家風の影響が大きいと思われる。

旧出光家住宅主屋（国指定登録有形文化財）

・所在地　福岡県宗像市赤間 4 丁目 11 番 28 号
・建築・構造年　明治 26 年 (1893）に建築され、昭和中期に改修工事が実施された。
・木造 2 階建で、瓦葺、建築面積 202㎡
・指定年日　2015 年 3 月 13 日

水木　楊は、『出光佐三　反骨の言魂』の中で、「代々の藍商売を拡げたのは祖父の藤三郎で、佐三の幼い頃、出光は町でも指折りの資産家として知られていた。家業はいったん傾き、この屋敷は他人の手に渡った。しかし、戦後、事業が軌道に乗ってから、出光が買い戻した。この家は、宿場町の街道筋の中でも、ひときわどっしりとした構えで、敷地は 300 坪ある。間口は狭く、約 10 m (5 間半)

昭和 30 年ごろの生家

神山善信氏提供

佐三少年（12 才）右側

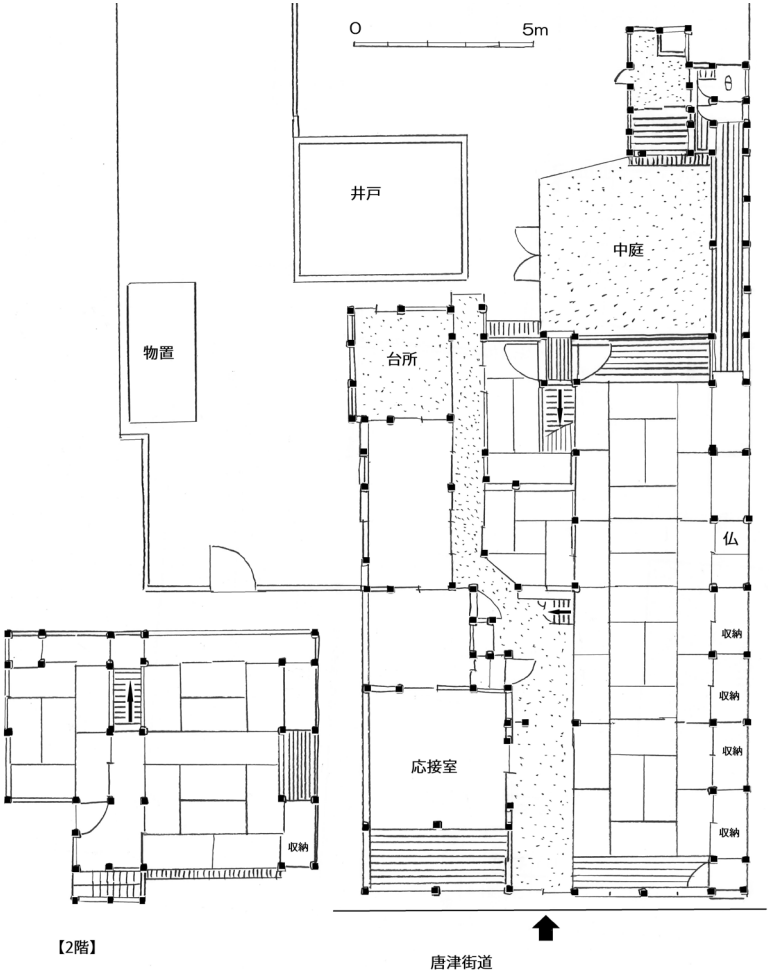
出光興産株式会社　提供

出光兄弟生家

（国指定登録有形文化財）

生家の土蔵

須賀神社



出光兄弟の生家平面図

『旧宿場町　赤間Ⅲ』宗像市教育委員会　1990 年　調査番号 65 より

で広くはなく、奥行きが長い。昔は間口の大きさによって税金をかけられたから、間口を狭く見せた。玄関から、長い土間があり、向かって左に作業部屋 (応接間) がある。昔はここに藍玉を煮る大きな釜が置いてあった。右側が接客をする部屋で、天井が高い。入り口から三間続き、中庭になる。廊下が中庭をぐるりと取り巻く。商売繁盛・千客万来の昔日をしのばせる造りである。蔵は、北側にある」と実見談を記す。調べていく中で、この建物のかっての所有者は、筆者の河東小学校の恩師で担任である早田　勉先生であったのはいささか驚いた。

赤間尋常小学校（宗像市赤間）

小学校は、明治 18 年 8 月に太政大臣の岩倉具視が、教育令改正で設置されたもので、当初は赤間本町の米屋（日新）を改造したものであった。明治 12 年頃の本町の小学校生徒数は 87 人 (男 76 人、女 11 人) である。まもなく、正式なものが御茶屋の跡に造られた。黒田藩の赤間宿にあった御茶屋の後の建物である。ここは、三条実美などが五卿落ちとなり、一行は赤間宿の御茶屋に慶応元年（1865）1 月 18 日～ 2 月 11 日に滞在する。自宅の裏山が学校となる。城山中学校のグランドにあたる。

宗像高等小学校（宗像市田熊・田熊石畑遺跡公園内）

東郷村田熊にあった校舎で、明治 24 年に建設される。後に宗像農学校・宗像高等女学校、宗像中央中学校となる。明治の校舎は、写真が残っている中央のものである。現在、国指定史跡の田熊石畑遺跡内である。建物は残っていないが、発掘調査の際に校舎基礎が発見される。遺構は、布堀の基礎掘方がコの字状に配置され、床の基礎より建物の間取りが分かるので、写真を元に復元図を作成した。洋風の建物で、一階は教室・職員室・事務室、二階は、講堂として使ったと記事がある。当時、宗像の教育の拠点である。

校長は、教育熱心で有名な名校長である牟田尻出身の大森達である。漢詩や書を嗜み、宗像教育会で手腕を発揮する。佐三の 2 年生の時（明治 29 年）の教員は、深田澄之助教頭、石松国太郎、真武民五郎、釜瀬新平（後の九州学園創立者）、伊豆房太郎、安部正威、薄知行、安部ミキ、釜瀬定蔵、松尾潔などの教員が知られ、翌年に天野開作、宗像マス子が赴任する。学年が、二つ上の有吉巌（後の立正大学教授）によると、4 年生は、生徒が 60 ～ 70 人であつた。但、他の資料によると、1 年生は、130 人とあり、学年を上がることに生徒数が減る。この原因は、農業従事者の子は、生業に追われやめる子が多かった。佐三の同郷には、四つ下に倉田主税（後の日立製作所社長）がいる。当時には、宗像教育会が組織され、会員 59 名が知られ、先生の給料は本科が 16 円、準教員が 8 円であった。

1年生　佐三は、宗像高等小学校に入学し 1 年生となる。東郷の校舎には、1 年しか通っていない。通学路は、赤間の自宅 - 唐津街道辻田橋を曲り、釣川北側の堤防道とおり田久橋を過ぎ、野添橋を過ぎ、釣川鉄橋前の踏み切りをわたり、天理教西海教会前を曲り - 東郷橋を渡り、田熊の学校につく。

明治 31 年作成の陸軍省参謀本部陸地測量部の地図があったので示す。

興味のある方は、歩いて頂きたい。この道は、当時の幹線の旧国道 34 号である。

佐三翁は、「瓦となるな」『出光オイルダイジェスト』11 号　1966 年に記す。

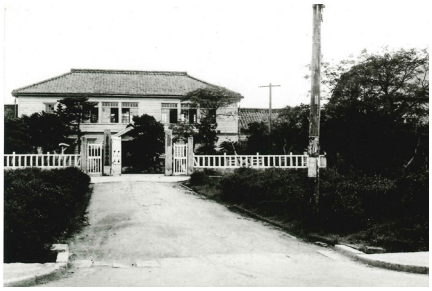
「 私どもの尋常小学校は赤間にあったが、明治 28 年に尋常小学枚を卒業して高等小学校に通うようになった。ところが、高等小学校は宗像郡の中心である東郷町に一ケ所しかできなかった。そこで私どもは一里半の道を歩いて通学することになった。川土手の吹きさらしを通学するので当時 9 歳位の私どもには、この通学がつらかった。今でも忘れられないのは、冬は「 赤ゲットウ」をまとって西から真正面に吹き付ける雪を、こととともせず通ったことである。70 年前はよほど寒かったらしいので、雪がたくさん降ったことを覚えている。互は帽子に日覆いをかけて、その土手を炎天下に通った。ある時は台風に川土手の道の真ん中に吹き倒されて、寝転んでいたこともあつた。この寒風、炎暑、台風によって私どもは鍛えられたことを、今は非常に有り難いことと思っている。空が黄色くなった、また大風が吹くよと平気で、むしろ面白がっていた子供時代が思い出される。子供時代に大風に吹き倒されんとしたり、またあるときは危うく濁流に吹き落とされんとしたり、近所の人たちの避難で家中坐る場所もないごったがえした脆かな光景などが、時代の風潮がそうせしめるのであろうか。交通の発達しなかった旧藩時代には、今でいう風水害というものは、その土地で自分の力で跡始末をなし、人の厄介になることを潔しとしなかった」。その後、「 こうして天に試きれ、地に培われ、父母に諭されて、天を怨まず地を呪わず、神の試練として己れを励み、父を疑わず母を尊み、真の慈愛の呼吸を悟り、これらのことどもが数百年、数千年の長きにわたって九州男児というものが出来た」とも云う。

これは、1 年生の時の記事である。東郷の高等小学校に通っている時であり、風の強い場所は、釣川添いの東郷橋 - 田久橋間であり、おそらく釣川鉄橋付近と推察される。大雨洪水は、明治 26 年 9 月のもので、未曽有の大雨洪水で村民困窮、家屋倒壊と過去帳の記事がある。彼の話によく出てくる。勤勉に釣川の堤防道を毎日片道 5 ～ 6 ｋｍほど通った。

2 年生～ 6 年生　高等小学校の 2 年の時に、赤間に仮校舎ができた。勧善舎という芝居小屋を一時的に改修したものであると記述される。この時に林繁蔵と出会う手記が残され、占部玄海により『郷土歴史叢書 - 人物往来 -』昭和 62 年に下記のとおり、紹介される。

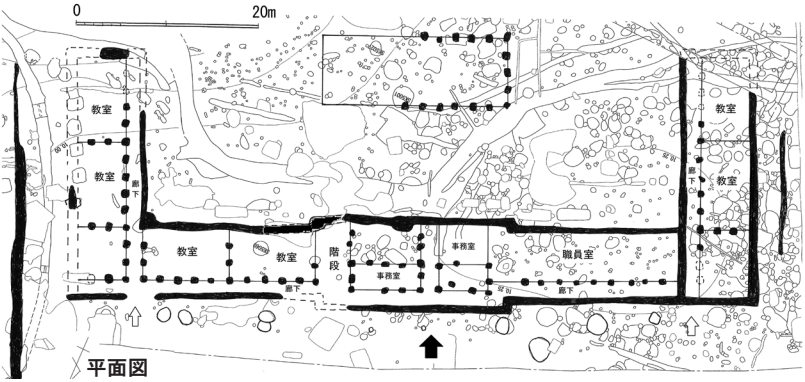
「 高等小学校の二年の時に、赤間に仮校舎ができた。勧善舎という芝居小屋を一時的に改修したものである。そこで私は林君と机をならべて勉強したらしい。なぜそれをおぼえているかといえば、机の蓋をあけて二人とも青い梅に塩をつけてかじっていた。それを見つけられて番止（ 放課後二時間立ち番）させられたことがあった。このことで私は林君をはっきり記憶している」

と書かれる。林繁蔵は、後に朝鮮総督府の官史 (財務局長) となり、佐三の朝鮮進出の石油販売事業に協力する事になる。『旧宿場町　赤間』によると、「公立小



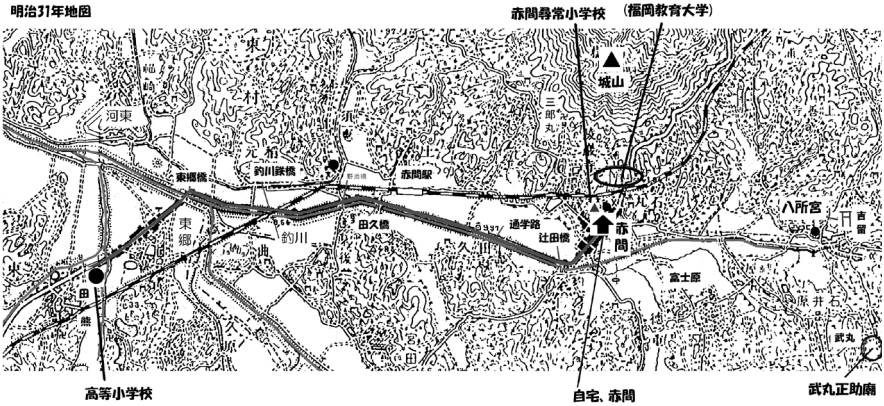
宗像高等小学校の校舎（明治 24 年建設）

立面図

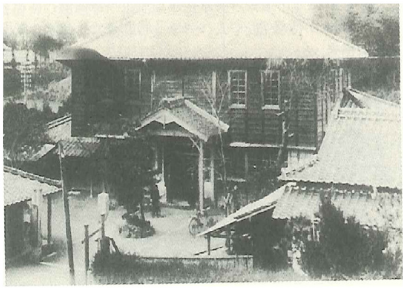


平面図

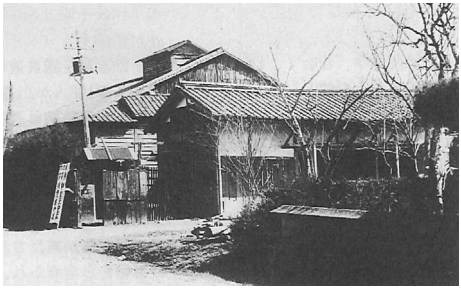
宗像高等小学校校舎の遺構（佐三が明治 28 年～ 29 年に通学）



佐三少年の通学路



赤間町役場（2 階高等小学校）



赤間・勧善舎（高等小学校）

学校も明治 24 年、尋常小学校が御茶屋のあった辺に造られた。高等小学校は、明治 31 年に町役場の二階に置かれた」とある。したがって、2 年～ 4 年生に赤間の「勧善舎」→ 5 年～ 6 年生に赤間町役場二階の高等小学校の授業となるようだ。番止は、筆者の小学校時代の昭和 38 年ごろまであった。

伊豆先生　「ひとすじの道」『我が 60 年間』に先生のことが語られる。

「 小学校時代の伊豆という先生でしたね。私は宗像郡の赤間という人口三百くらいの町に育った。これは農村の街ですね。私はからだが弱かったくせに、いたずらっ子だったですな。だからいたずらをすると、父が「 伊豆先生をちょっと呼んでこい」というのですよ。それで呼びに行くんですが、この先生は藁葺きの小さい家に住んでおられた。そして背が低くて、風采があがらず、実にみすぼらしい恰好をされていた。しかしそれが子供に何となく尊く感じられた。・・・・そして先生のおともをして家につくと、先生は、そこに父と並んですわられるわけですね。そこで父が私をおこるのだが、そのおこる父はあまりこわくなかったのですな。ところが伊豆先生は、ニコニコと笑って、父をなだめたり、私を戒めたりしておられるのだが、その先生がこわい。そして尊いのですね。これが、人間の感じじゃないですか。理屈じゃない。人間と人間との感じだと思いますね。それで先生というのは尊いものだと子供心に感じたのです。七つ八つのときですからね。この先生の尊さが私に非常な影響を与えた。」と云う。そして、「 われわれの育った明治時代は、尊い人といえば小学校の先生でしたが、宗像郡はその尊い先生を出すので有名で、その先生は「 宗像教員」といわれた。このように立沢な教員が出るのは、宗像大社のご神徳の賜物であるというふうに私は聞いておりました。」そして、「 私はその後、神戸の高商に行って、投機で金を儲ける大阪商人のあり方をみたのです。買い占め、売り惜しみをやって人を搾取することの上手な人が利口な事業家となっておった。人を搾取して金を儲けることが事業の本質だとなっておったですよ。それをみて私は、社会は人間が中心である、人間が大事だ、金が何だということを感じるようになった。これは伊豆先生や校長先生あたりの尊さからでてきておると思います。」

と宗像高等小学校の先生のことが記載される。おそらく、大森達校長であり、赤間居住は伊豆房太郎先生ではないだろうか。共に宗像会の草創期の地元会員であ

り、宗像教育会の人々であった。伊豆は、赤間に居住し養蜂の論文を『郷友雑誌』4 号に書かれる。伊豆は、明治 38 年に鞍手郡の小学校に転勤、明治 40 年に遠賀郡 (北九州市若松) 洞北高等小学校校長となる。大森校長は明治 31 年に宗像郡視学となる。彼の少年時代の基層意識は、江戸時代の幕藩体制が終えていたが、明治維新後も農村社会の慣習や伝統は色濃く伝えられており、一新されているものでない。大きく変わるのは身分社会がなくなり、学制改革に伴う教育の場が提供された事だと思う。

(3)、同郷の倉田主税

主税 (ちから) は、明治 22 年に宗像郡神興村津丸（現在の福津市津丸）で生まれた。出生地は、神興小学校前 (現在の神興東小学校) にあった。代々造り酒屋でしたが、主税が生まれたころに製糸業に変わる。昔は土地もかなりあったようですが、祖父の代になってから、祖父が金山、炭鉱、出雲、屋久島の森林開発、さらには台湾鉄道の建設などに手を出し、ことごとく失敗した。田畑を手放しても、それでも当時敷地は三千坪ぐらいあったという。父は、八並製糸所を経営しており、数十人の女工さんがいた。明治 28 年に神興尋常小学校に入学する。小学校時代は、機械いじりが好きで、お爺さん子で宗像神社のお祭りの思い出を回想する記事が多くある。小学校の用地は、祖父が孫が遠くの小学校に通うのが大変だからと、土地を寄附して建設されたと云う。明治 32 年に東郷尋常高等小学校に入学し、同 36 年まで通学する。学制変革で、東郷尋常高等小学校は現在の東郷小学校である。小倉工業学校卒業後、東京の宗像塾の塾生となる。宗像会員となり、雑誌の発送や会議に参加する。仙台高等工業を卒業後は、久原鉱業所傘下の日立製作所に入社する。日立製作所勤務の昭和 20 年 8 月 6 日、広島に原爆投下された日に、徳山から広島行きの汽車が 1 時間遅れ、廿日市町で停車し原爆の難を逃れている。

戦後、初代の小平浪平が公職追放となり、社長に就任。昭和 22 年に日立製作所技術者として、二代目社長となる。そして、22 年間にわたり社長、相談役を務め、日立を世界の企業に育て上げた人物である。

彼の実弟は、倉田興人で三井鉱山社長で宗像会会員である。昭和 28 年に東京本社勤務となり、兄弟の交流が深まる。この兄弟は、戦後の労働組合運動の日立大争議、三井大争議の最高責任者となる。皮肉なめぐり合わせである。

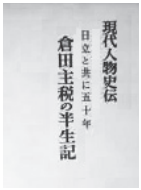
主税は、昭和 30 年の復刊宗像 1 号に「放生会の想い出」、再興宗像 1 号に「科学技術の振興に想う」、再興宗像 5 号「年頭所感」、再興宗像 18 号「明治百年に

倉田主税（1889 ～ 1969）

米軍からの研究費
なさけない と二億円
日立製作所の倉田さん 退職金を投出す
まず10学者に奨励金

昭和 44 年の新聞記事

東郷（高等）小学校（昭和 45 年）



現代人物史伝
日立と共に五十年
倉田主税の半生記

倉田主税と東郷（高等）小学校

思う」を寄稿している。

倉田主税　「科学技術の振興に想う」『再興宗像 1 号』　昭和 38 年より引用。

私が郷里の宗像の地を巣立つていったのは、今を遥かに過ぎる明治 41 年、小倉工業学校卒業の年であったと記憶しています。その後、東北の地仙台に学び、茨城の日立製作所に研鑽と努力の地を得た私でありますが、その私の人格の基本となり、その後に最も力となった骨子は、たしかにまようことなく宗像の地で得られたものであると考えます。明治の末期当時の小倉の地は、勇名天下に誇る小倉師団のもと、日露戦役もあって町内まことに活気に溢れ、青年時代の私もまたいつかとはなく盛んな意気と心を胸の奥に得ることが出来たと、遠く想うことができる。これらの若い日々は誠に懐かしく、またその想いも日々多忙のうちにあって、なお増すばかりであるということも年波の故でありましょう。母校も学友もそしてまた宗像の地もその問幾変遷を重ね、いつしか 10 年、20 年と遠い想い出の渕に沈んだ今日このごろでありますが、青年時代のあれこれは、誠に懐かしくふとした折にも一衣帯水の想いが走るのであり、再び来ることのない、若い日々の如何に素晴らしく大切であったかを考えるのであります。

私は明治 40 年頃、東京白山御殿の宗像塾でお世話になり、雑誌『宗像』に親しみを持ってい

ましたが、その後廃刊となり淋しく感じていました。今回郷里の懇親会「宗像会」が結成され、同郷の会誌『宗像』を復刊されることになり、この私も何か感想をという運びになったのでありますが、私としては感無量と申す処であります。それにつけても先ず第1に私の胸に浮かんだ想いは、宗像の地が当時から教育ということに格別熱心な地であったということであります。当時の国の重点施策の一つに、教育の振興ということが高く掲げられていたと記憶するのでありますが、たしかに宗像からは全国でも有数の教育者が教職についていたのであります。その後の私の産業人としての芽生えの一端には、この郷里の地の教育熱心ということがあったのではないかと遠く想うことができるのであります。明治以来、日本の経済の近代化の歩みは誠に著しく揺籃期より波乱万丈、今日に至ったその歴史はまさしく激動の歴史と申すべく、その間、科学技術の向上もまた日進月歩、たゆまざる努力の道であったのであります。今日の日本は明治以来の長い念願でもあった、国産技術による産業の重工業化という目標を今や大幅に達成して、世界の各国からその繁栄へのより一層積極的力強い役割を期待され、新しい自由貿易という時代を迎えています。今後の世界の第一級の国々との対峙の立場で競争を進めてゆくことになるわけですが、そのためには何といっても、独自の科学技術が必要であります。従来より導入に努めてきた技術については自らのものとして咀しやくして、これを永遠に頭の上らない技術におわらせない覚悟は勿論、更にはより多くの研究者による、より多角的な努力を綜合して真の国民性に根ざしたといいますか、そうゆう独自の技術を実らせていくことが必要だと考えてことだと考えてもいますそののため私は一人でも多くの若い人々に化学技術の道に参加していただきたいのであり、ます。本年は日本が経済が世界の国々とともに、更にスケールの大きい繁栄を目指していく年でもあります。この雄大な意図を達成していく感動力となるものこと国民の科学技術にかける熱意と理解であると考えています。産業人として歩んできた私のこの念願は、郷里の「宗像」に拙文を寄せるに当っても、ふと同郷の若き後輩の姿を偲び、常日頃の科学技術の振興を唱道するといったほどに強いものであります。教育の宗像がゆがめられることなく科学技術の宗像人とありたいのであります。それにつけても思わるることは、日本の国民が示す活発な意欲と旺盛な責任感が、ここに傾け尽されたならばということであり、日本の将来が必ずや輝かしいものであろうということであります。

（日立製作所会長）

昭和31年の「在京宗像郡人会」の結成から、出光佐三と故郷の宗像を通じて関係が深まり、宝満会、宗像郡人会を通じて、宗像に多くの支援を行う。堅実で地味な人柄であるが、大学紛争の頃に宗像の教育について、意見を述べている。

「真の人間教育の機運をつくろう」『社報宗像』100号　昭和44年4月

人は年をとるにつれてふるさとがより懐かしくなるものらしい。若い頃はそれほどでもなかったのに近頃は福岡と聞き、宗像と聞くとむしょうにうれしくなる。だからできるだけの暇を見つけて郷里に出かけたいものと考えているが、それがなかなか実現出来てないのは残念なことである。せいぜい年に一度帰ればよい方だろうか。しかしたまにふるさとに出かけると、昔なつかしい顔にもお目にかれるし、なによりも東京にいては味わえない心の落着きといったものを覚えて、やは

り郷里はいいものだなあとしもじみ思うのである。宗像には昔から教育の盛んなところであった。しかもそれは知識を教えるという教育でなく、いわば真の人間教育が行われているのは福岡県であり、とりわけ、宗像地方であるというのが私の誇りでもあった。しかし、最近郷里から上京してくる人の話を聞き、また、新聞を読んでいたりしていると時おり私の誇りが傷つけられることがあって心淋しい思いをする。本当の教育が失われたのは何も宗像だけでなく、むしろそれ以上に日本全体が人間教育を喪失してしまっている。おそらくこのままでは日本の将来は大きな危険に頻することになろう。

最近おける常軌を逸した大学紛争の中に私は祖国存亡の萌芽をみる思いがして、じっとしておれない気持ちである。なんとか今のうちに建て直しをはかり、真の人間教育を復興しなければ崩壊へむかつて急速度に走り出ていくものと思われる。ところが今なお、このような危険感を持ち合わせていない人が多いように思われる。自分達がそのようなことを心配しなくても誰かがやってくれるであろうという無力感に支配されているようである。これはいつまでたってもよくなるわけがない。私は、今こそ国民あげてこれまでのあり方を総反省し、新しい国づくりへ立上る時と思え。わたしはその仕事を宗像の土地からわきおこって欲しいと思うのである。先ず自分の家庭における教育をもう一度ふりかえり、子供達とこの問題を詰め合うことからはじめて、町に、村に、これから日本をどのように造り直していくかというテーマで真剣な討論をやってもらいたいものである。このような気運がわがふるさとにみなぎる時に、宗像は、新しい時代の歴史の担い手となるのであろう。　（日立製作所相談役）

彼の著作は少ない。それは、「物を書いたり、人様にとうとうとさわやかに弁舌をふるう等とは到底合わない」と云う。また、「生来、むっつり屋の上立ちまわりが苦手」とも自著『しみだらけの人生』に書かれている。酒もたばこも飲まない、経済会の三大堅物とも言われたが、終始一貫温厚にして厳格誠実な人物とされる。出光佐三と性格が全く対照的な人物であるが、敬神・祖国愛は共通し、宗像に対しては共に熱い人達である。

倉田主税『しみだらけの人生』　野田経済社　昭和 44 年より引用する。

愛国心　私が自分自身に胆に銘じるようつとめ、またたえず主張しつづけてきたのは、第一に、ほんとうの意味での日本人であるということ、さらにはきびしい経済社会にも信義誠実さということを常に貫いてゆきたいということ、そうして猿真似でない自主独創の精禅を挿し、最後にやはり、企業は人であることを改めて思いおこし、情の細やかな人間関係を樹立していく必要が、このような時代であればこそ求められるのではあるまいかと思うのである。

日進月歩の時世であるからお互いの切磋琢磨、意見の交換、研究討論はますます必要になってこよう。さりとて、魂と感情をぬきにしたような人間論、一億総批評家のたとえのように、敢て自らの問題を他にのみ責を帰してゆくとか思われぬ風潮をあながち「時」にのみ、その原因を求めるのもどんなものであろうか。明治生れの老書生の”たわごと”としてお聴きすて辟えれば結構である。言い換えれば、日本人のこころを求めつづけてきたということに帰着する。お互いがも

う一度、祖国のほんとうの姿をみつめたいというのが、年来の私の主張であった。実は今までにも、私のこの考え方に対し一部の方々から極端な日の丸主義だとか、世界の大勢をわきまえぬ反民主主義の権化ではないか、というようなご批判を蒙った。

もとより私もあまり抗弁めいたことほしなかった。人間が国際人として物をみつめ、かつ、行動することと、自分が、生れ育った土壌を大切にして生きてゆくこととは決して相反するものでない筈である。むしろ、世界的に物事を見、ひろい視野に立つためには、なにをおいても我々が日本人であるという認識と真の愛国心の滴養が必要である。それなくしてどうして真の国際人たり得ようか。この考え方の基本が世界観にも、経営理念にも貫き通してゆきたいと念願しつづけたのであった。

私の読書録　読書らしい読書をしていない。さて、自分がここ数年間に一体、どのような書物を読んだかといっても、なかなか頭にきざみこんだものを思い出せぬが、私が戦後、東京に出てきてから一貫して、手にしたのは「日本史」である。

少々言い訳めいた話になって恐縮であるが、戦後の 20 年は、日本が有史以来、体験した事のない激動と改革の渦にまきこまれた時代であったし、われわれの会社も集中排除法の指定をうけたり、労働運動のさなかにおかれたりもした。いつのころからであったか、歴史ブーム、それも日本の再認識ということが全国をふうびし、手頃な日本史が各出版社から相ついで出版され出した。これが契機になったという訳でもないが、私は祖国に対する関心、われわれをはぐくみ育ててくれた土壌、あるいは日本の風土と心に対する愛着は少年時代からはげしかったと、記憶している。そういった少年時代からの感情が生きていて、終戦後のあの、祖国喪失とも思えるさまざまな事態をまざまざと見せつけられるにつけ、何とかしてもう一度、日本史を勉強してみたいと考えるようになったのであった。

私の少年時代は、遊びと言えば神社の祭礼に出かけるくらいであった。実はこの神社が宗像神社といって、この神社に対する子供心の関心が、あるいは後世、日本史によせる心に引きつがれたのかもしれない。宗像神社史は上下二巻にわたる大冊で出光佐三さんを中心に、宗像神社復興期成会によって公にされたものである。私の歴史書好きはこういった故郷の歴史と風土に対する愛着から生れ出たのかもしれない。同時に連合国の対日政策が「神道」というものを徹底的に排除してかかった事も、私をして、もう一度祖国の歴史を見直そうと思いをもまた一因であろう。

倉田主税は「私の履歴書」1982 年に敬神崇祖と祖国について書く。

「自分が生まれ、育まれた家庭を愛する心は全く自然の感情であり、麗しい心である。また自分が生を享け、生活している郷土を愛し、国を愛するのは、これまた自然の心であり、理屈ではない。祖国を愛する心を持つ国民に満ちた国ほど将来の繁栄が約束されるものである。第2次大戦がわが国にもたらした弊害の中で私が最も残念に思うのは、国民一般に祖国愛をうとんずる風潮が出てきたことである。戦後の変革があまりにも大きかったためか、戦前にあったものがすべて悪いものだとする考え方が一部にあるようだが、これはあまりにも偏狭な見方だと言わなければならない。先人が遺した正しい道徳や人間の道を深く身に付け、さらに進んで新しい伝統を産み出していくことは、われわれに課せられた義務であろう。

（福岡県出身財界人のつどい。倉田は右から３番目、次は佐三翁、出光興産株式会社提供）

出光佐三と倉田主税

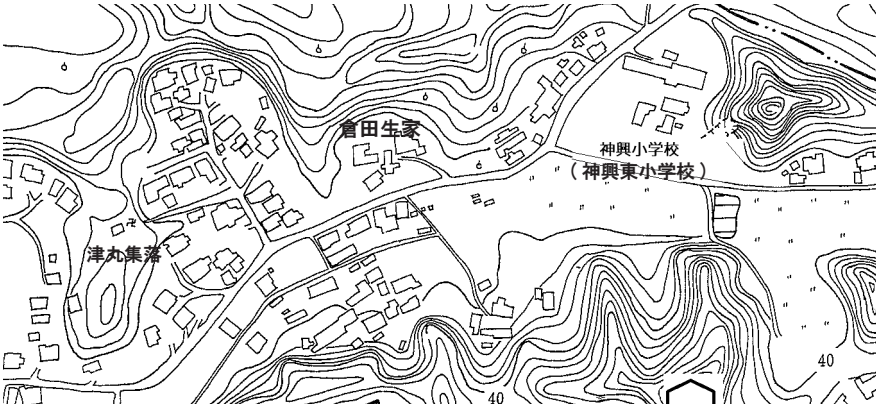
もとより、政治的な意図より出た、誤った愛国心の昂揚などは、避くべきものであることは、歴史の教えるところであるが、人間の本性に訴えた純粋な愛国心の昂揚は、忘れられるべきではない。」

昭和 33 年、鎮国寺復興のため佐三と共に顧問になり、経済的支援を行う。東京宗像郡人会の中心人物の一人であった。久保輝雄（宗像神社宮司）は、昭和 38 年に神社の沖ノ島出土品が国宝・重要文化財の指定を受け入れ、宗像神社宝物館建設の浄財の寄附のため、日立本社に依頼に訪ね、寄附を受けている。その印象は、「質素で口数のすくない、古武士のような人」と評されている。そして、教壇に立たぬ教育者とも述べている。その際に、下記のことを話している。

「幼少の頃から氏神たる宗像神社の尊貴な御神格を教えられて育ち、今回多量の祭祀遺品が出現してわが民族の祖先の厳粛な宗教心が窺われる神郡宗像に生を享けたことを、この時勢なけばこそ、尚更嬉しく思っている。」

倉田主税の語録「企業にとって一番大切なものは人間である。人間を大事にしなければ、真の発展はない。この分かりきったことがなかなか行われぬのが昨今で、駒を動かすように考えているむきもあるが、その影響は実に大きい。人の問題では、考えても考えても足りぬという心構えが必要である」とする。

彼は人生観について、大仏次郎の言葉を用いて、「自分で選んだ道は、所詮一筋にふんでゆくより他はない。この世に生きるということは他の人々とのつじつまばかり合してゆく事ではなくして、どこまでも自分との勝負である。こう思っ



倉田主税生家（福津市津丸）

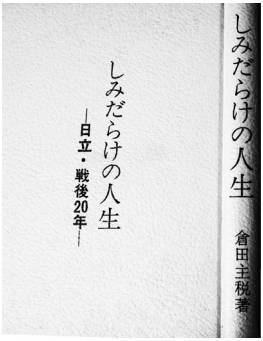
て自分は生きて来た」、この一節を「私は私なりの理解をし、解釈をしてきたが二十年後の現在でも私にとっては心にきざまれてある言葉である」とする。

彼は、日立製作所の会長退職金 (2 億円) を寄附、財団法人国産技術振興会を設置し、国産技術確立に貢献している。また、本籍を決して東京に移すことがなく、宗像に置き、神郡宗像人たる氏子意識は生涯を通した。さらに、津屋崎町の東郷神社の復興に助成される。宗像神社の復興を楽しみにされていたが、急逝される。

佐三とは、昭和 33 年頃に結成された福岡県の同郷実業人が 20 人あつまった東京宝満会でも交勧された。逝去される同 44 年まで、宗像のために尽力された。紀元節の復興に熱心で、佐三翁とも共通の敬神崇祖が強かった。これは、明治時代の宗像の気風だろうか。

水木　楊は、『出光佐三　反骨の言魂』の中で、「なぜそれほどまでに日本という国を意識したかといえば、裏伊勢と呼ばれた宗像大社の氏子として生まれ育ったという自己意識が濃厚だったからだろう。宗像大社が祀る田心姫神、湍津姫神、市杵島姫神の三神は、天照大神の子神である。〈歴代の天皇を助けるように〉との神勅を受けた神々だった。出光の国家意識はときに押し付けがましく、辟易されもしたが、宗像という特殊な地方に生まれ育った出光にとって、郷土愛は宗像大社を媒介にして日本民族への思いにごく自然に結びついていた。素朴で原始的なナショナリズムである。出光の面白いのは、ナショナリストでありながら、官僚とか軍の権威主義を徹底して嫌ったことだ。統制を嫌う、強いナショナリズムとは、実は明治生まれの経営者が共通して持っていた精神でもある。」と理解する。

佐三は、ソ連より石油を購入した際に、マスコミより「赤い石油」と呼ばれ、



キドカラー号と倉田主税著書

出光本社にこともあろうに右翼団体が押しかけることがあったと云う。

宗像神社への敬神崇祖は、祖父より代々繋がっており、どうも国粋主義と云った次元ものでなく、宗像の明治精神の方が実態に近い。

主税は、昭和 44 年 12 月に 80 歳で逝去、福津市四角の正蓮寺が菩提寺である。前年の昭和 43 年には、日立カラーテレビコマーシャルで飛行船「キドカラー号」が全国を飛び廻った。宗像にも秋空上空に飛んでいたことを覚えている。

そして、逝去後、共に宗像の地に眠る。

出光佐三は、「倉田さんに憶う」倉田主税追悼集編纂委員会編『倉田主税追悼集』1970 年に追悼がある。

「倉田さんが亡くなられて惜しい人を亡くしたという小さい私情からでなく国の為、世の為に誠に惜しいと衷心から思われるのであります。・・・中略・・倉田さんに親しくお目にかかっては御神徳に浴しつつ育たれた方と直感しました。この倉田さんが亡くなられた。私は取るものも取り上げず駆け付けた。そして驚いた。何と質素な神々しいお暮しであったか。会社の退職金をポンと投げ出された倉田さんは、矢っ張り御神徳に育てられた尊い方であった。惜しい思いである。」と追悼集に一文が書かれている。

昭和 44 年 12 月に亡くなる年は、4 月に宗像神社の昭和大造営が起工された。この年は 4 月に母の 33 回忌に帰福、17 日に亀井光福岡県知事の引率で、佐三、弟の興人と共に東京の宝満会で宗像神社を参拝された。亡くならなければ、復興事業に尽力され、遷宮祭を歓喜されたと思う。

出光佐三に「一生の念願」とも言わせた宗像神社の復興は、宗像会の人々の共通意識であり、教育郡宗像の復興も同じくするものであった。

西暦	元 号	出光佐三の関係	宗像の主な出来事
1885	明治 18 年	8 月､宗像郡赤間村で生まれる。父藤六（松寿)、母千代	2 月、小倉―赤間―福間―古賀―福岡の国道が 34 号に指定される。
1886	明治 19 年		9 月、赤間警察署が開所する。
1887	明治 20 年		9 月、宗像郡内の官地櫨実 (はぜのみ) の入札
1888	明治 21 年		
1889	明治 22 年		4 月、町村制施行により、赤間村・吉武村・河東村・東郷村・宮田村・野坂村が発足する。
1890	明治 23 年		9 月、九州鉄道の博多―赤間間が開通、赤間駅と福間駅が開業する。
1891	明治 24 年	4 月、赤間尋常小学校に入学 6 歳	11 月、宗像会が結成され、『郷友雑誌』が創刊。
1892	明治 25 年		伊豆房太郎が「養蜂」を書く
1893	明治 26 年	4 月、校長の大森達が高等小学校に赴任する。	9 月に未曽有の大雨洪水、村民困窮と過去帳。
1894	明治 27 年		日清戦争が始まる。
1895	明治 28 年	4 月、東郷の宗像高等小学校に入学　10 歳	
1896	明治 29 年	赤間に高等小学校仮校舎ができる。	4 月、郡制施行で宗像郡が発足、郡役所は東郷村に置かれる。
1897	明治 30 年		
1898	明治 31 年		赤間村が町制施行、赤間町になる。
1899	明治 32 年	3 月、宗像高等小学校を卒業 14 歳	2 月、幕末志士、早川勇が東京で逝去する。
1900	明治 33 年	家業を手伝う。	
1901	明治 34 年	4 月、福岡商業学校に入学 16 歳。八尋俊介らと交遊を深める。	宗像第 1 高等小学校に、宗像郡立宗像農業学校を設立される。
1902	明治 35 年	仙厓和尚の「指月布袋」を買う。	
1903	明治 36 年		
1904	明治 37 年	宗像会に入会する。会員は同 42 年 3 月まで。	日露戦争が始まる。
1905	明治 38 年	4 月、神戸高商に入学。20 歳。在学中に水島校長、内池教授から大きな教訓を受ける。	日本海海戦で勝利する。日露講和条約に調印。製糸工女養成所が神興村八並製糸所内に設置する。
1906	明治 39 年		赤間警察署が東郷に移転、東郷警察署となる。
1907	明治 40 年		伊豆房太郎が遠賀郡洞北高等小学校校長になる。
1908	明治 41 年		

1909	明治 42 年	4 月、神戸高商を卒業、酒井商会に入る。	城山トンネルが開通。(赤間 - 海老津間開通)
1910	明治 43 年	酒井商会で丁稚として下積みを行なう。	
1911	明治 44 年	日田重太郎から創業資金を恵まれる。6 月、門司市に出光商会を創業する。25 歳	
(滝口凡夫作成の年譜・『宗像市史　通史編　第 3 巻』に加筆)			

出光佐三の幼少・青年期年譜

西暦	元号	略　歴	備　考
1889	明治 22 年	3 月、倉田主米造、シナの長男として宗像郡神興村津丸に生まれる。	
1895	明治 28 年	4 月、神興尋常小学校に入学する。	
1899	明治 32 年	4 月、東郷尋常高等小学校に入学する	
1903	明治 36 年	3 月、東郷尋常高等小学校を卒業する	
1904	明治 37 年	4 月、福岡県立小倉工業学校機械科に入学する。	
1908	明治 41 年	3 月、福岡県立小倉工業学校機械科に卒業する。東京の宗像塾に行李を解く。	東京・宗像塾入所。宗像会員。
1909	明治 42 年	4 月、仙台高等工業学校機械科に入学する。	
1912	明治 45 年	4 月、茨城県久原鉱業所日立製作所に入社する。	
1912	大正元年	12 月、下関重砲兵第 5 連隊に入隊する翌年 12 月に除隊する。	小倉の下関重砲兵第 5 連隊
1918	大正 7 年	2 月、日立製作所に入社する。	
1927	昭和 2 年	4 月、欧米視察出発、10 月に帰国する。	
1941	昭和 16 年	10 月、日立製作所の取締役に就任する。	
1945	昭和 20 年	8 月、広島原爆投下の難を逃れる。	
1947	昭和 22 年	3 月、日立製作所社長に就任する。4 月に取締役会長に就任。	
1953	昭和 28 年	11 月、日立造船取締役及び日立工業社長兼任。	
1955	昭和 30 年		復刊宗像に寄稿する。
1958	昭和 33 年		秋、宗像高校修学旅行、東京で宝満会の結成。
1960	昭和 35 年		刑務所移転に反対する。
1961	昭和 36 年	社長辞任。取締役会長に専念する。	
1963	昭和 38 年	久保輝雄宮司が宗像神社宝物館建設の資金助成に行く。	第 4 回の宗像郡人会
1962	昭和 42 年	3 月、14 年間の役員を退職する。	
1969	昭和 44 年	会長退職金の 2 億円を寄付。財団法人国産技術振興会を設立する。12 月に逝去する。	4 月母の 33 回忌、宝満会で宗像神社参拝する。

倉田主税の年譜

第 2 題、宗像における黎明期の遺跡発掘調査

考古学の本格的な地域解明の意図を持った調査は、戦前の田中幸夫の田熊石畑遺跡の調査から始まる。昭和 7 年（1932）の宗像高等女学校の運動場拡張に伴う調査である。以後、鐘崎上八貝塚・釣川・沖ノ島・稲元経塚・香葉遺跡などが、昭和 14 年までに行われる。調査は、現在の試掘、工事立会調査に当たる。これらは、宗像考古刊行会『田中幸夫と宗像』2016 年に纏めておいたので、参照されたい。

これ以前は、福岡県史跡天然記念物調査で、島田寅次郎が鐘崎織幡宮の石棺、柴田常恵が上高宮古墳の調査を実施されているが、概要のみで詳細が不明である。

発掘調査の開始は、昭和 41 年（1961）の東郷遺跡群の本格的な調査から始まる。日本住宅公団の日の里団地造成に伴う大規模開発（200ha）に伴う調査からである。福岡県史跡調査会委託を受け、春成秀爾（九州大学助手）・波多野晥三（福岡教育大学教授）が担当者となる。波多野先生は、古代史を専門であつたが、考古学に造詣が深く、教育大学の宗像町赤間への統合移転に伴い、以後は宗像の発掘調査依頼を受け、調査することになる。下記の内容は、この頃から宗像市の市政施行前の昭和 54 年頃までの内容となる。福岡教育大学の統合により、出光佐三翁の放った一矢は次の展開となる。

1、波多野先生と福岡教育大学歴史研究部考古班

先生は、明治 45 年に山口県下関市生まれで、九州大学法文学部国史科専攻され、後に福岡教育大学教授となる。退官後の 1975 年、梅光女学院短期大学教授となる。1978 年に福岡教育大学名誉教授となる。福岡県文化財保護審議会専門委員を務める。古代史を中心に研究され、代表的な研究に『筑紫史論 1 ～ 4 輯』、『久留米藩』などがある。福岡教育大学の宗像統合移転に伴い、宗像へ転居される。転居に伴い福岡県教育委員会から宗像地区の調査を依頼され、開発に伴う古墳・集落の調査を実施された。特に、歴史研究部考古班の育成に当られ、宗像郡内の分布調査を促進された。しかし、大学の休み期間中では、急速な開発の対応できず苦悩された。下記の調査は、先生が調査責任者として、実施した緊急発掘調査である。

元　号	調 査 時 期	調査された遺跡	備　考
昭和 41 年	1966 年 7 ～ 12 月	宗像町東郷田熊遺跡群・スベットウ古墳の調査	東郷遺跡群　前方後円墳 1 基・円墳 3 基
	1966 年 11 月	福岡教育大学の移転に伴い宗像町へ転居	
昭和 45 年	1970 年 10 月	津屋崎町東郷古墳公園の調査	円墳 1 基
昭和 46 年	1971 年 3 月	宗像町三郎丸古墳群の調査	円墳 9 基
	1971 年 9 月	宗像町稲元墨巡須恵器窯跡の調査	須恵器窯 1 基
	1971 年 10 月	宗像町相原古墳の実測調査	前方後円墳石室の実測
昭和 47 年	1972 年 5 ～ 9 月	福間町津丸・久末古墳群の調査、集落調査	円墳 7 基、竪穴住居
	1972 年 10 ～ 11 月	玄海町会所坂古墳の調査（高向）	円墳 1 基
昭和 48 年	1973 年 1 月～ 3 月	宗像郡分布調査（宗像町・玄海町）	(別記)
	1973 年 10 月	玄海町田野瀬戸 2 号墳の調査	前方後円墳 1 基
昭和 49 年	1974 年 3 ～ 10 月	宗像町城ヶ谷古墳群の調査	円墳 19 基、前方後円墳 1 基
昭和 50 年	1975 年 4 月	福岡教育大学定年退官	
	1975 年 10 月	『筑紫史論 3 輯』の刊行	宗像の報告書を収録

(2)、福岡教育大学歴史研究部考古学班の活動

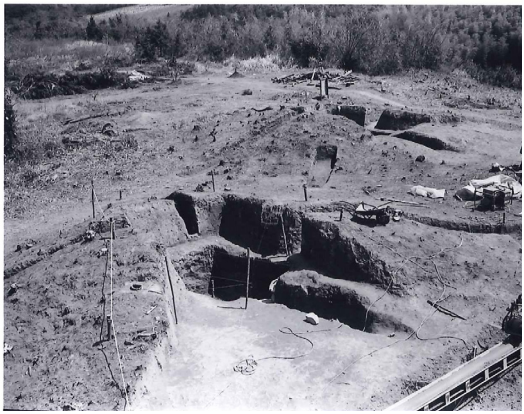
昭和 45 年の遠賀郡岡垣町糠塚南遺跡の発掘調査を契機に結成された大学のサークル活動である。活動は。昭和 62 年度ごろまで自主活動が続いた。考古班の活動を纏めたものは、『城ヶ谷古墳群』1977 年から引用しながら、この組織の活動を明らかにしたい。宗像市制前の発掘調査を振り返る。

①、目的

「古代宗像史を追求する」を活動方針とし、併せて文化財保護を行なうことを旨とされる。主に①文化財の分布調査、②遺跡の発掘調査、③文化財保護の啓発を活動の柱とされる。

その経過は、「はじめて文化財保護運動が問題となった糠塚南遺跡では、『古代遺跡がなんら調査もされず、人知れず破壊されようとしている。このことはどうしても許しがたく、また全国的に保存運動が叫ばれている情況下に、これを問題として取り上げないわけにはいかない。何とか保存すべき手を打つべきだ。』と

波多野晥三先生（1912 ～ 1992）



城ヶ谷古墳群の調査

いった考えのもとに、行政機関へ保存を訴つたえていったが、実らなかった。調査要求に対しても、その必要性はないと取り上げられなかった。そこで『文化財保護運動の一環として、私達自身で発掘調査に踏み切ろう。そして、発掘を契機として文化財保護運動を住民にアピールするとともに、私達のできうるかぎりの記録保存につとめよう。』という考えのもとに発掘調査へと踏み切ったのである。」とされる。

②、考古班の結成まで

波多野晥三先生が顧問であり、発掘調査においては、調査責任者となる。波多野は、福岡教育大学の教授で、昭和 41 年 (1966) の学芸大学統合移転に伴い、11 月に久留米市より宗像に転居される。調査担当は、スベットウ古墳・東郷 2 号墳・東郷 7 号墳・東郷 8 号墳、田熊中尾遺跡、田熊上ノ畑南遺跡・田熊上ノ畑北遺跡の調査に当たられた。

遺　跡　名	調 査 時 期	調査成果
スベットウ古墳	昭和 41 年 7 月～ 12 月	前方後円墳、横穴式石室
東郷 2 号墳・東郷 7 号墳・東郷 8 号墳	昭和 41 年	円墳、横穴式石室。石室の基底部を残す。
田熊中尾遺跡	昭和 41 年 7 月 16 日～ 8 月 5 日	弥生時代前期末～中期の土器が出土。
田熊上ノ畑南遺跡	昭和 41 年 9 月 4 日、11 月 17 日	遺物包含層を検出する
田熊上ノ畑北遺跡	昭和 41 年 12 月 1 日～	竪穴住居・ピット・土坑を検出する。
東郷遺跡群　1967 年 3 月日本住宅公団より作成。		

遺 跡 名	調 査 時 期	調 査 成 果
糠塚南遺跡 (岡垣町)	昭和 45 年 2 月 28 日～ 3 月 18 日	弥生時代集落
東郷公園内古墳 (津屋崎町)	昭和 45 年 3 月 8 日～ 3 月 17 日	円墳、横穴式石室

昭和 45 年 7 月に岡垣町糠塚南遺跡で発掘調査を実施される。翌年の昭和 46 年 (1971) に宗像町三郎丸古墳群で古墳の調査を 2 月 28 日～ 3 月 18 日に実施した頃は、歴史研究グループとあり、この古墳群の調査・整理を経て、12 月に報告書刊行が行なわれる。

学生は、報告書によると 1 年生～ 4 年生まで 20 名が知られる。新 1 年生も 5 名である。

昭和 45 年 (1970) に津屋崎町渡の東郷公園で横穴式石室の調査がなされる。この続いた 2 件の調査に参加した学生が、翌年の昭和 46 年 4 月頃から、歴史研究部考古班として改称、組織化される。

③歴史研究部考古班の構成員

当時、所属していた班員を『三郎丸古墳群』・『津丸・久末古墳群』・『城ヶ谷古墳群』・『清田ヶ浦古墳群』・『野坂の土器について』などで年次と班員の名前を調べたが、昭和 53 年度以降の学生の名前が不明である。彼らの先輩には、福岡県教育委員会の川述昭人・森田勉が相談相手としてサポートした。

元号・西暦	班　員　名	参加した遺跡調査・整理
昭和 42 年度 (1967) 入学	芦田博之・高野信行・長嶺豊秀・大石官・尾崎義孝	三郎丸古墳群 (調査)、東郷公園 (調査) 大石、津丸・久末古墳群 (発掘)
昭和 43 年度 (1968)	晃治・光枝房枝・竹林久美子・小島京子・田尻陽之助	光枝房枝 (沖ノ島)、三郎丸古墳群 (調査)、東郷公園 (調査)、晃治・光枝・田尻、津丸・久末古墳群 (発掘)、浜宮貝塚 (発掘)
昭和 44 年度 (1969)	江浜明徳・田代修司	三郎丸古墳群 (調査)、東郷公園 (調査)、浜宮貝塚 (発掘)
昭和 45 年度 (1970)	筒井亀・鹿島秀世・中尾徹・重住昌志・小沢純子・浦山博子・犬上芳枝・梶原麗子・大庭洋子・吉松恭子・上野正治・与那嶺裕重	三郎丸古墳群 (調査)、城ヶ谷古墳群 (発掘)、筒井・鹿島　勝浦峯ノ畑古墳 (発掘)、浜宮貝塚 (発掘)
昭和 46 年度 (1971)	横山栄二・澤田康夫・高崎紀子・与田伸子・河口桂子・原真知子	三郎丸古墳群 (整理)、城ヶ谷古墳群 (発掘)、澤田　勝浦峯ノ畑古墳 (発掘)、宗像町遺跡分布調査

昭和 47 年度 (1972)	荒石正・古賀茂雄・佐野哉夫・岸本真喜子・権藤八千代・直江千秋・鳴海豊子・西依美穂子・平野千鶴子・冨士崎秀子・村上千鶴・森木博子・中川原哲治・有津潤・麻生益子・森木弘子・木村あけみ	津丸・久末古墳群 (発掘) 城ヶ谷古墳群 (発掘) 、宗像町遺跡分布調査
昭和 48 年度 (1973)	牛島康展・友延正広・山口聖一・菊池和子・三浦美恵子・森方和恵・吉原豊子	津丸・久末古墳群 (整理)、城ヶ谷古墳群 (発掘) 、宗像町遺跡分布調査
昭和 49 年度 (1974)	耜田雄一・木村真一・松原恵治・江口まり子・御屋敷なおみ・倉地寛子・鍬釣真澄・古賀真由美・谷口可賀・永岡史子・平山昌子・木村真一・高木保	城ヶ谷古墳群 (整理)、清田ヶ浦古墳群 (発掘)、奴山正園古墳 (発掘)、石丸遺跡 (発掘)、宗像町遺跡分布調査、野坂土器（整理）
昭和 50 年度 (1975)	落石俊則・石塚智子・居原和代・大賀玲子・藤丸悦子・大塚奈美子・古藤敬子・坂本律子・塚田富子・富永光子・村田ひとみ・米田輝子・江口まり子	城ヶ谷古墳群 (整理)、清田ヶ浦古墳群 (発掘)、奴山正園古墳 (発掘)、石丸遺跡 (発掘) 、野坂土器（整理）
昭和 51 年度 (1976)	高木保・和田文子・森和代・三村芳香・大坪博子・山本嘉子・河野憲朗	城ヶ谷古墳群 (整理)、清田ヶ浦古墳群 (発掘)、奴山正園古墳 (発掘)、石丸遺跡 (発掘) 、野坂土器（整理）
昭和 52 年度 (1977)	宮内智久・田上憲一・石塚智子	城ヶ谷古墳群 (整理)、野坂土器(整理)
昭和 53 年度	以下、不明	
昭和 54 年度		
昭和 55 年度		
昭和 56 年度 (1983)		宗像高校四塚会館資料（整理）
昭和 58 年度 (1983)		城ヶ谷古墳群Ⅱ (発掘)、宗像高校四塚会館資料（整理）
昭和 61 年度 (1986)		1 月 18 日、久原遺跡で現地説明会を開く
『三郎丸古墳群』・『津丸・久末古墳群』・『城ヶ谷古墳群』・『清田ヶ浦古墳群』・『野坂の土器について』の各報告書より、引用。		

(3)、調査活動と成果

①、巡検

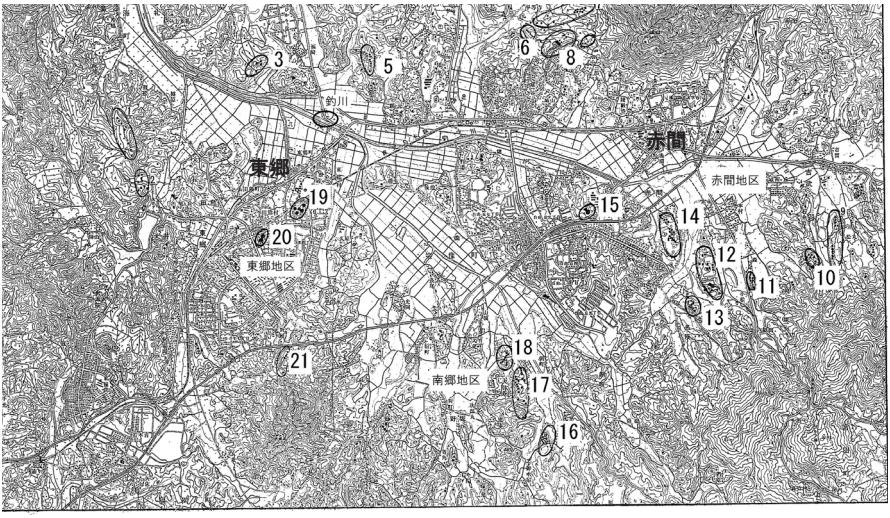
新入部生の歓迎会を兼ねて毎年 4 月に実施された。昭和 47 年 4 月 23 日の開始された頃の日程を示す。見学用資料は、10 ページのガリ版刷りで作られた。赤間駅に 9 時集合、宗像大社→牟田尻装飾古墳 (桜京) →神湊古墳群→須多田住居跡→天降神社古墳→宮地嶽古墳→宮地住居跡のコースである。当時は、桜京古墳に自由に入れた。

②、調査活動

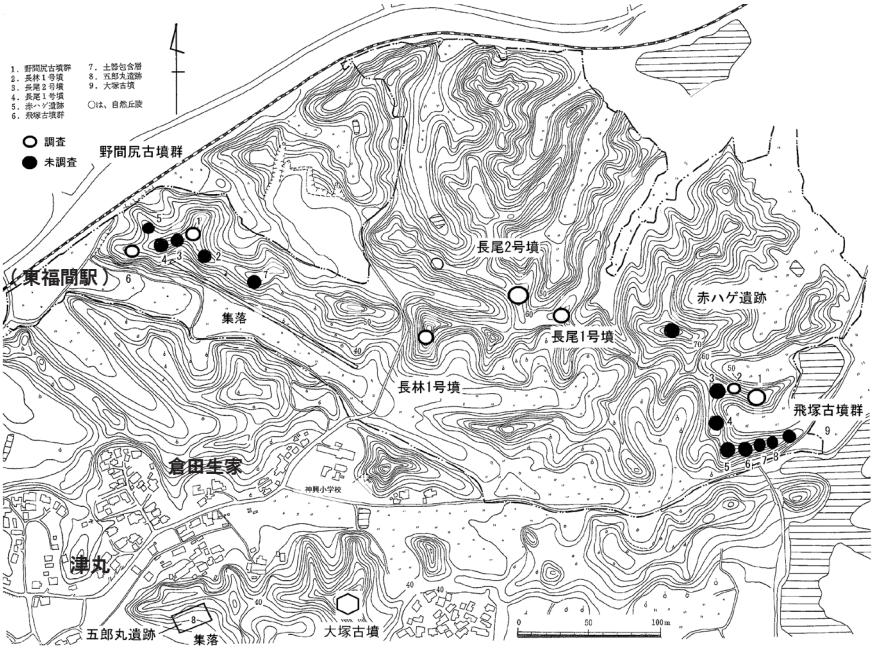
主な活動は、当初は、古墳数基を春・夏期などの休み期間中に実施された。したがって、田野瀬戸 2 号墳・高向古墳・相原古墳などの緊急調査等の小規模な調査と中規模の三郎丸古墳群、津丸久末古墳群、城ヶ谷古墳群などである。特に、三郎丸古墳群で 9 基、津丸久末古墳群で 4 支群 7 基、城ヶ谷古墳群で 20 基を調査することになる。三郎丸古墳群は、大学に隣接した地点であり、学生も参加しやすかった。これらは、いわゆる手弁当の調査であった。ところが、昭和 47 年頃から、宗像郡の国鉄（ＪＲ）沿いの大規模な宅地造成に伴う津丸久末古墳群・城ヶ谷古墳群の調査になり、いわゆる調査費を開発者負担する方式に移行した。三郎丸古墳群は、古墳が 9 基の調査であり、何とか調査・報告書が纏められた。ところが、福間町津丸・久末古墳群の開発は、対象面積が 57 万㎡あり、野間尻 7 基、長林 2 基、長尾 2 基、赤はげ 1 基、飛塚 9 基の計 21 基と集落遺跡があったが、古墳 7 基、集落のトレンチ調査しか行なえなかった。九州大学の学生が応援に駆けつけたが、14 基が未調査でなくなることになる。

開発業者は工程管理のみで、調査の終えることなく開発となる。大学の休暇利用の調査体制に限界があった。しかし、昭和 47 年 9 月 5 日に津丸公民館で調査説明会が開かれ、公開・啓発は実施されている。当時の新聞記事には、「福間町津丸の東急不動産団地造成で、5 月 1 日開始し、7 月 13 日～ 8 月末まで、現地に泊まり込み十数人が交代で 57 万㎡の古墳を発掘している。」とある。高校時代に手伝いに行ったが、7 基の古墳調査が実施されていたが、残る古墳はブルドーザーにより削られ、石室上面が露出していた。ある先輩は、「学生として精一杯やつているが、大学の授業もあり 7 基を掘ることしか出来ない。そこで、新聞発表をやり、期間の引き延ばしを求めたが無理であった」と聞いた。この教訓は、城ヶ谷古墳群に引き継がれる。報告書は、B5 版本文 66 ページ、図版 12 ページであり、2 年後の昭和 49 年 11 月に刊行される。

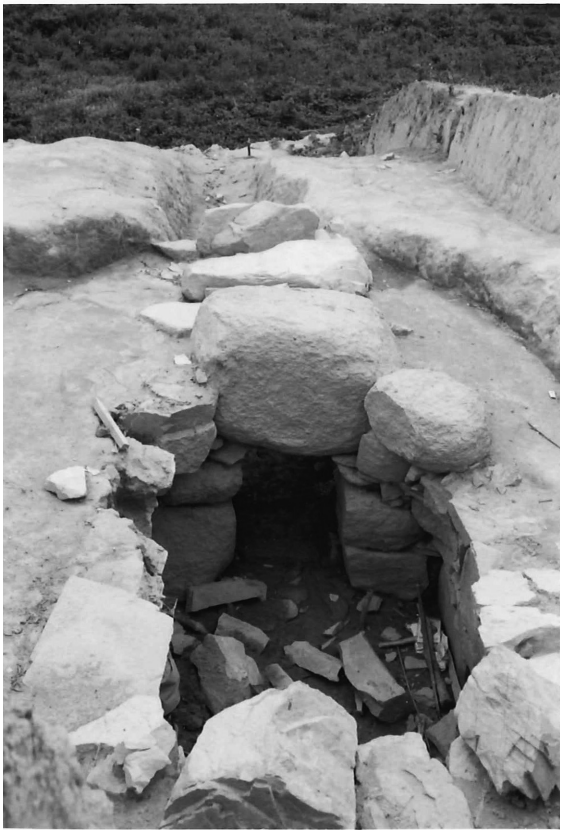
城ヶ谷古墳群は、前方後円墳 1 基を含む円墳 20 基が発掘され、群集墳一尾根支群を面で調査された。報告書は、B5 版本文 185 ページ、図版 52 ページであり、昭和 52 年 11 月に刊行される。報告書では、古墳の石室形態、その変遷、年代の検討がなされ、竪穴系横口式石室の変遷が纏められた。また、出土品に鋸があり、その検討と類似品の比較がなされ、出土の意義が書かれる。さらに、出土須恵器の編年案が示され、石室の年代ともあわせて、宗像における最初の土器編年がなされた。報告書は、昭和 52 年に刊行される。昭和 50 年 3 月に波多野晥三



昭和 52 年頃の宗像町の主な古墳



福間町　津丸・久末古墳群の調査



調査中（飛塚１号墳）

津丸・久末古墳群（飛塚１号墳）　　未調査（破壊）

の退官後は、組織的な発掘調査は実施していない。昭和 53 年頃までは、福岡教育大学の調査・研究成果が、宗像の最前線であった。

また、分布調査やその知見は、昭和 54 年の『宗像沖ノ島』の「宗像古代遺跡地名表」の成果とした収録される。発掘調査黎明期の昭和 40 年前半～昭和 54 年までは、発掘調査は小規模であり、「遺跡分布調査」の時代とも云える。

以後、宗像市へ引き継がれる。

③、波多野先生による歴史研究部考古班の評価

『筑紫史論』第 3 輯より下記に引用する。

「昭和 41 年に四つの分校が宗像町赤間に統合し、教育大もやっと四年制大学としての正統な歩みを辿り始めた。学生が一ケ所に集ることで、これまで 2 年ごとに分断されて来た学生生活が、とにかく 4 年間一ケ所で済むことになり、

学生との接触の面でも大きな変化があった。新しい校舎にも資料室が準備されてはいたが、持ち込まれたケースも遺物も大部分が久留米からのものである。その年の夏から冬にかけて行われた東郷日の里団地の造成に伴う遺跡調査には、はじめて久留米以外の田川分校から来た学生たちも参加して来たし、それからは年度が変るたびに新しい学生がつぎつぎと参加し、次第に資料室を中心に組織が拡大された。発掘への興味から集った単なる同好学生のグループも、何時かこの大学の歴史研究部考古学班と云う研究団体となり、資料室も土器の復原作業や研究討議の場となり、発掘調査を重ねるうちには資料整理から報告書の作成まで、総てが学生の手で出来るまでに成長した。そう云う教育大考古学班の先頭にあって県内各地の発掘調査を繰返し、退官の今日まで大過なしに過せたことは、私にとって楽しい思い出の一時である。」と評価がなされる。

学生であった澤田康夫は、「波多野先生は、人物はやさしく、面倒みの良い先生であったが、気を利かして仕事を手伝おうとすると、自分でやると頑固な側面もあった。明治生まれの気質を感じた。特に、学問に於いては、容赦なく厳しかった」と回想する。

2、文化財保護と啓発活動

代表的なものが、城ヶ谷古墳群の調査とその取り組みである。『城ヶ谷古墳群』1977 年に詳細が書かれるが、具体的取り組みが行なわれた。それは、①発掘ニュース、②現地説明会、教育現場の交流であった。

(1)、城ヶ谷古墳群発掘を通しての文化財保護運動の展開

昭和 48 年 12 月、福岡県教育委員会文化課を通して、業者より城ヶ谷古墳群発掘依頼があった。その経過を『城ヶ谷古墳群』より引用する。

「私達は、この発掘依頼を受けて文化財保護の立場・学術的な立場の両面から討論を積み重ねていった。その間、発掘依頼を拒否・全面保存運動を展開していくべきだという意見。いや発掘依頼を受け文化財保護運動を展開すべきだという意見の 2 つに分かれた。前者の場合、この宗像町内において住民運動を展開できる基盤が班内にも、住民にもまだ形成されていない。時期尚早であるという意見に押し切られた。後者の場合、あくまで発掘（記録保存）を肯定するものではない。いくら記録保存したといっても、その遺跡はこの地上から抹殺されてしまうのである。これでは、私達自身が破壊の手助けをしていると批判されても仕方がない。それで、今までのように記録保存のための発掘調査（最低限の資料保存）といったパターンから発掘をやらずに保存するという運動へ切りかえていくための過渡期であるという考えである。つまり、地域住民と連帯す

るための基盤を、この城ヶ谷古墳群発掘調査を通して作っていこうというものである。このような基本方針のもとに、私達は城ヶ谷墳群発掘依頼を受けていった 」。

まず、彼らが取り組んだことは、地域住民との連帯を深めるために発掘調査の随時経過報告（発掘ニュースの発行）・現地説明会の開催・教育現場との交流であった。「発掘ニュースの発行は、発掘調査開始報告と、第 1 回現地説明会案内をかねて 3 月に 1 回、第 2 回現地説明会案内で 5 月に 1 回それに大学祭（出土遺物展示会・文化財保護シンポジウム）への呼びかけで 12 月に 1 回、計 3 回となり、町内全域を対象として 9,000 枚を配布した。

「 第 1 回現地説明会、第 2 回現地説明会では、延べ 2,000 人の町民の参加が得られた。第 2 回現地説明会では、現場にて宗像町教育委員会・郷土史家・一般の人々それに私達との 4 者で、『文化財保護に関するシンポジウム』を開いた。その結果、町行政の文化財問題に取り組む姿勢の甘さがおおいに問題となった。また、一般の人々からは、『今まで、文化財保護と言われても、実感がなかった。今、自分が見学して来た。古代遺跡が永久になくなってしまうのかと思うと、どうにかして保存できないものかと痛切に思う。』『発掘調査をしている人々は、もっともっとこのような説明会を催し、1 人でも多くの人に文化財保護を訴えて行くべきだ。』等の意見が出されていった。

教育現場との接触では、宗像町教育委員会の賛助をえて、町内の小学校へ発掘現場紹介、見学案内をしてもらった。その結果、河東小学校・赤間小学校の先生方の賛同を得ることができ、発掘現場における小学生の見学会が実現した。その後、赤間小学校では社会科クラブの 6 年生が、私達のクラブを訪問し、郷土の歴史の勉強会を私達と行なった。次に、行政機関への対応であるが、4 月 12 日に宗像町町長へ抗議文（ 資料 1）を提出した。

これは、広報『むなかた』4 月 15 日発行、第 1 面、『ご先祖さまも引っ越し』という記事が、私達の提出した文章とあまりにもかけはずれており、これを読んだ人々に誤解を生むと思われたから、その旨を抗議したのであった。その結果、文書での謝罪はなされなかったが、口頭謝罪という形で収容された 」。

－昭和 49 年度 (1974) －

日付	内容
2 月 15 日	班会…城ヶ谷古墳群発掘依頼に関して
2 月 16 日	班会…城ヶ谷古墳群発掘に関して
2 月 28 日	班会…城ヶ谷古墳群発掘調査開始にあたって
3 月 1 日	城ヶ谷古墳群発掘開始
3 月 7 日	班室にて、県教委文化課・奥村組・教育大学波多野教授・考古学班の 4 者で、城ヶ谷古墳群調査計画打ち合わせ
3 月 15 日	宗像町立河東小学校 4 年生 68 人、社会科見学として発掘現場訪問
3 月 23 日	第 1 回現地説明会（約 1,000 人）

4 月 11 日	班会…城ヶ谷古墳群発掘について・期間及び方針・広報　むなかたについて・第 1 回現地説明会反省・第 2 回現地説明会方針検討
4 月 12 日	宗像町長へ抗議文提出・宗像町教育委員会へ質問状提出
4 月 15 日	宗像町町長へ質問状提出
4 月 22 日	班会‥・城ヶ谷古墳群発掘状況報告質問状に対する回答報告現場にて、県教委文化課・奥村組・考古学班の 3 者で打ち合わせ
4 月 26 日	班会…文化財保護条例の取り扱い方と、私達の文化保護運動に対する姿勢
5 月 2 日	町教育委員会と話し合い質問状回答に対するその後の取り組みについて
5 月 4 日	班会…第 2 回現地説明会打ら合わせ文化財保護に関する学生向けビラの読み合わせ、5 月 2 日、町教育委員会との話し合い報告
5 月 12 日	第 2 回現地説明会（約 1,000 人）
5 月 15 日	班会…第 2 回現地説明会反省町教育委員会からの提起事項について
9 月 5 日	『文化財についての懇談会』- 文化財問題にどう取り組んだらよいか -
『城ヶ谷古墳群発掘期間中に於ける文化財保護関係活動報告』『城ヶ谷古墳群』より引用。	

また、宗像町町長・宗像町教育委員会へ質問状を提出された。今までの宗像町の文化財に対する姿勢を告発するとともに、今後の町行政の文化財に対する基本方針を明らかにしてもらいたいと考え、その手始めとして、4 ヶ条からなる質問状を提出された。その結果、昭和 49 年 9 月 5 日、宗像町教育委員会主催『文化財についての懇談会』- 文化財問題にどう取り組んだらよいか - が開催された。

業者に対しては、保存される 14 基の古墳群が緑地公園として計画されていたので、公園内への収蔵庫の設置、古墳を巡回する遊歩道の設置などを要求された。

そして、このような一連の運動の中間総括として、12 月 6 日～ 8 日の大学祭において、『城ヶ谷古墳群出土遺物展示会』及び『宗像町における文化財保護の現状』というパンフレットを配布し、それをもとに懇談会を開かれた。

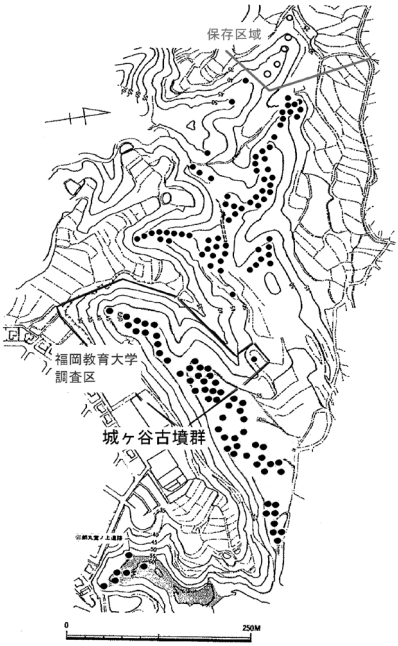
このように、考古班は城ヶ谷古墳群発掘調査を通して、徹底した班内討議をくり返しつつ、基本方針「文化財保護運動の展開は、単に行政批判のみにおわるのではなく、地域住民との連帯のもとに行なうべきである。そのための連帯基盤を作ろう。」に沿って運動を展開された。

（2）、城ヶ谷古墳群調査の取り組みと評価

発掘ニュースの発行は、発掘調査開始報告と、第 1 回現地説明会案内をかねて 3 月に 1 回、第 2 回現地説明会案内で 5 月に 1 回、それに大学祭（出土遺物展示会・文化財保護シンポジウム）への呼びかけで 12 月に 1 回、合計 3 回町内全域を対象として 9,000 枚を配布した。

第 1 回現地説明会、第 2 回現地説明会では、延べ 2,000 人の町民の参加が得

城ヶ谷 12 号墳（昭和 49 年）



城ヶ谷古墳群（赤間ヶ丘・泉ヶ丘）

られた。また第２回現地説明会では、現場にて宗像町教育委員会・郷土史家・一般の人々それに私達との４者で、『文化財保護に関するシンポジウム』を開いた。その結果、町行政の文化財問題に取り組む姿勢の甘さが問題となった。

また、参加者の意見が紹介されている。

「一般の人々からは、『今まで、文化財保護と言われても、実感がなかった。今、自分が見学して来た。古代遺跡が永久になくなってしまうのかと思うと、どうにかして保存できないものかと痛切に思う。』『発掘調査をしている人々は、もっともっとこのような説明会を催し、１人でも多くの人に文化財保護を訴えて行くべきだ。』等の意見が出されていった。」

さらに、教育現場との関係では、古墳群に隣接する小学校への現場見学会が実施される。

「教育現場との接触では、宗像町教育委員会の賛助をえて、町内の小学校へ発掘現場紹介、見学案内がなされた。その結果、河東小学校・赤間小学校の先生方の賛同を得ることができ、発掘現場における小学生の見学会が実現した。その後、赤間小学校では社会科クラブの６年生が、私達のクラブを訪問し、郷土の歴史

の勉強会を私達と行なった。」

以上のように、当時としては発掘調査→保存啓発→地域学習の流れで、文化財保存の先駆的な取り組みが行われた。現地説明会は、2 回実施され合計 2,000 人である。平成 20 年（2008）の田熊石畑遺跡の現地説明会（1,800 人）でもこの参加者を超えていない。さらに、河東小学校・赤間小学校の生徒数を入れると、更に数が増えるのだろう。当時、宗像町に出された公開質問状を受けて、宗像町教育委員会主催の「文化財についての懇談会」が実施された。参加した市民、学生、郷土史家に共通の文化財に対する認識ができ成果が上がった。

考古班の横山栄二班長は、「僕らは、教員となり文化財を大切にする生徒を育てたい」と云われたことが印象的であった。学生たちの積極性と行動力は、凄ざまじいものがあった。

この古墳群は、筆者が高校 2 年生の昭和 47 年 4 月に城ヶ谷の丘陵で 10 基の古墳群を発見し、教育大学の先輩に連絡したものであった。筆者も、城ヶ谷古墳群の発掘調査に参加し、赤間駅で第 1 回の現地説明会の案内と保存のアジビラを配った。翌年には、担当した城ヶ谷 12 号墳の遺物整理に参加した。

（3）、城ヶ谷古墳群のその後

『城ヶ谷古墳群Ⅱ』宗像市教育委員会によると、下記の通りの対応となった。

「 1982 年 6 月 15 日、業者から、宗像市大字平等寺・三郎丸地区の土地開発に係る協議書が宗像市に出された。申請地は、かつて、1973 年 12 月に赤間宅地造成事業として開発申請が出されている。この時点では、業者・福岡県教育委員会・宗像町教育委員会・福岡教育大学を交えた協議により、平等寺地区の 14 基の古墳については緑地帯として保存し、緑地内には資料館・遊歩道を設置して古墳公園とする。そのほかの古墳群は、工事着工前に緊急発振調査をして記録保存することを決めた。これによって、三郎丸地区の古墳群の発掘調査を 1974 年 3 月に開始し、同年 10 月にこの地区の発掘調査を終了した。ところが、平等寺地区の発掘調査に入る段階になって、開発に伴う諸々の条件が整わないために本工事が中止となった。このため残りの発掘調査も中断することとなった。

1982 年 7 月、事業区内を貫通する都市計画道路が事業認可を受けたため、宅地造成と道路建設が同時進行することとなり、緊急発掘は工期との関係上、急を要する事態となった。1982 年の申請時点において、平等寺地区の約 14,500 ㎡については自然公園として整備保存することが、福岡県教育委員会の指導として明記されていた。このため発掘調査は保存地区以外の平等寺地区の古墳群から着手した。1983 年 3 月 1 日着手時には、約 15 基の古墳を確認していたが、調査の進行とともに、丘陵尾線上に、古墳の盛土をほとんど流失した古墳群の存在を知ることとなり、大規模調査の様相を示してきた。それにともない、調査計画は大きく変更され、工期との調整も

困難をきわめた。

これとは別に、発掘調査の中途において、宗像市都市計画課から、保存地区の自然公園計画に異議が出された。宗像市が近隣公園として都市計画決定を受けるためには、自然公園としては認められないというものであった。現行の都市計画法では、開発事業区内には児童および近隣公園は開発面積の 3%以上必要となっている。法の中では自然公園は含まれないとしている。このために急遽、福岡県教育委員会、宗像市教育委員会、宗像市都市計画課を交えた協議を行ったが、結果として、保存地区の 5 基の古墳について約 5,000 ㎡のみは今後緑地帯として整備保存する。他の古墳については、発掘調査を実施して記録保存することとなった。また、緑地内に建設予定であった資料館は、宗像市中央公民館敷地内にプレハブを建設して、整理•保存することとなった。これを受けて、1983 年 8 月に近隣公園は、都市計画決定した」。

城ヶ谷古墳群の開発区域には、北西部に 5 基の古墳が緑地帯 (約 5,000㎡) として整備保存された。

3、宗像郡内遺跡の分布調査

（1）調査とその内容

昭和 47 年から三カ年計画で宗像郡内の遺跡分布調査が実施される。当時、宗像郡の遺跡地図は、昭和 36 年『宗像神社史』収録図で、田中幸夫作成による成果が唯一で最も詳しいものであった。しかし、出土地点が大縮尺地図で照合が困難であった。宗像町では、昭和 48 年 3 月に実施され、宗像町役場からは牧田・尾山清・瀧口雪雄、教育大学考古班の澤田・高崎・與田・赤星と、東海第五高校の筆者・鎌田が参加し実施された。行政担当者は遺跡に詳しくなく、東海第五高校の歴史クラブの古墳分布図と教育大学歴史研究部考古班の自主分布調査の成果が収録される。調査は、先の既存調査の追認であった。分布調査の対象地は、教育大学考古班の今後の団地開発計画地を中心に精査を目指し、登録した。その成果は、『宗像町埋蔵文化財一覧』宗像町教育委員会 1980 年に纏められ、下記の表の通りである。

一方、玄海町でも昭和 47 年 12 月に行われ、玄海町役場の桑野勇、松本肇（宗像大社）・江口航三（玄海中学校）、立部祐道住職（鎮国寺）・波多野先生と教育大生、東海第五高校 (2016 年より東海大学付属福岡高等学校と校名変更。以下、東海第五高校) の鎌田・筆者が参加した。宗像町と同様に、行政担当者は遺跡に詳しくなく、牟田尻・神湊地区、多礼・吉田・田野地区は東海第五高校の分布図、上八・鐘崎・池田地区は教育大学分布図が収録された。昭和 54 年に『玄海町誌』

玄海町分布調査　上八承福寺（昭和 47 年 12 月）

玄海町分布調査　池田・平信盛笠塔婆（昭和 47 年 12 月）

に収録される。

津屋崎町では、昭和 48 年 1 月に田中香苗・北野清美の所属する津屋崎郷土史会に調査が委託された。郷土史会は、昭和 44 年に結成されたグループで、自主活動をされていた。宗像会会員の流れを引くグループである。特記されるのは、津屋崎古墳群の勝浦峯ヶ畑古墳・勝浦井ノ浦古墳・奴山正園古墳・大石岡の谷 1 号・2 号墳などはこのグループの自主活動の発見によるものである。東海第五高校の歴史クラブは、新原・奴山古墳群と宮司地区の分布図を提供した。

福間町は、福間町郷土史会により実施された。これらの成果は、昭和 52 年発行の福岡県教育委員会『福岡県遺跡地図』に収録される。当時、上記のある町の分布調査に参加とき、保存の悪い古墳は登録しない方が良いとか、形あるものは壊れるとか、高校生の筆者と鎌田は度肝を抜く発言に驚いた。この町は、古墳が後の分布調査で増えたのはそれが原因かも知れない。当時は、いわゆる手弁当の調査であった。

1975 年　宗像町埋蔵文化財一覧	発見数	1979 年玄海町誌	発見数	2011 年　宗像市遺跡等分布地図　※	発見数	発掘調査数
古墳	435	古墳	202	古墳	2,236	780
集落・散布地	10	集落・散布地	2	集落・散布地	※	
須恵器窯	3	須恵器窯	0	須恵器窯	※	
その他	1	その他	10	その他	※	
合計	449		214	※古墳のみ比較		

※宗像市の古墳数は、原俊一の御教示による。

宗像町の踏査日程	内容・踏査コース
3 月 2 日	役場打ち合わせ
3 月 7 日	河東・福崎・池浦
3 月 9 日	須恵・相原・稲元
3 月 12 日	山田・平等寺・陵厳寺
3 月 15 日	安倉・武丸・土師上・高六
3 月 16 日	徳重・富地原・名残・田久・朝町
3 月 18 日	野坂・中山・総括 (東郷)
3 月 19 日	東郷・高塚・用山・平井
3 月 20 日	大井・総括 (東郷)
宗像町遺跡分布調査、昭和 48 年	

津屋崎郷土史会の田中香苗会長

(2) 宗像町遺跡分布調査のまとめ

当時の宗像町遺跡分布調査のまとめを宗像町で纏められ、下記に引用する。

「昭和 47 年以来、3 回にわたって宗像町の埋蔵文化財分布状況調査を行ってまいりました。今回の調査でだいたい完璧にちかいところまでこぎつけたと思います。実におびただしい古墳が宗像町内に散在しております。そして、これらの古墳が毎年確実に、破壊されていっています。急激にベッド・ダウンとして変貌している宗像町は、同時に自然の破損、文化財の破壊を道ずれにしてきているといえます。開発と文化財保護との関わりが、相互対立の関係として存在しているところに不正常さがあろうかと思います。ともあれ、文化財の破壊（＝都市開発等々）は、また、文化財問題を語り、考える機会を与えています。教育大学歴史研考古学班主催による城ヶ谷古墳群の現地説明会では延べ、1,000 名をこえる人々が、稲元古墳群では 1 日で 150 人もの老若男女が参加しております。日の里の古墳公園が教育大、地元の方々の自主的な集いによって清掃され、古墳公園にふさわしい装おいがなされようとしています。

この小冊子が、宗像町における開発問題、あるいは文化財問題を考えるうえで、多少なりともお役にたてば幸いです。　　昭和 50 年 2 月　宗像町教育委員会」

上記の日の里の古墳公園（東郷高塚古墳）の清掃は、次項の昭和 49 年度・50 年度入学生の教育大学考古班の活動である。

4、野坂の土器と中松元古墳群

昭和 49 年度・50 年度の入学生が中心となり、野坂中松元古墳群の破壊に伴う県・町への通報から、勤労者住宅生活協同組合が実施する開発区域で、古墳・遺跡破壊が行なわれた。この古墳群は、昭和 50 年 2 月に宗像町遺跡の分布調査報告書に記載された、周知の遺跡である。この古墳群は、昭和 46 年度・47 年度の彼らの先輩により、発見されたものである。

『野坂の土器について』宗像町教育委員会　昭和 53 年（1978）より、引用しながら記述する。

野坂中松元古墳群の破壊経過

昭和 51 年 3 月	労住協（勤労者住宅生活協同組合）宅地造成をはじめる。
4 月 15 日	“北側 8 基発掘の上破壊、南側 8 基緑地として保存” という旨が、県の文化課と町の社会教育課と業者によって口答で確認される。（業者はこの確認にもかかわらず、発掘予定の 3 基を未調査のまま壊し、更に、保存されるはずの南側 8 基の山裾も削ってしまう。）
8 月 20 日	労住協の依頼した発掘調査団によって、北側 8 基のうち壊されていない 5 基の発掘調査に着手する。(この発掘は充分とはいえなかった。)
9 月 15 日	考古学班員によって住居跡らしいものが発見される。(町の社会教育課を通して、県文化課に調査を要請)

9 月 22 日	県文化課の技師による調査がなされたが、遺跡ではなく、流された土砂に土器が含まれていたにすぎない、と判明される。（多量の土器があったために 27 日 50 m四方に縄を張り、以後 3 日間工事がストップされることとなる。実際に 10 月 7 日まで工事はストップされた。）
10 月 15 日	町主催の土器説明会が、中央公民館にて行なわれた。（文化課の技師を招いて採集土器の説明、簡単な須恵器の変遷・窯・甑の説明などがなされた。出席者は小学校の先生 6 名、一般の人 8 名）
昭和 52 年 5 月	町に「土器の整理」をするように提起する。
6 月 15 日	町から「土器の整理」を依頼される。
7 月 10 日	野坂に関する現状報告と 7 月 21 日～ 24 日の「土器の整理」を知らせるビラを配布する。
7 月 21 日～ 24 日	中央公民館において「土器の整理」が行なわれる。考古学班は土器を整理ことにより住民の人と共に、文化財に触れていこうという主旨のもとで行なう。参加者 50 名あまり。
7 月 25 日 ～ 8 月 20 日	同志社大学が発掘調査を開始する。
9 月頃	県の文化課によって、保存されるはずの 8 基が発掘される。
昭和 53 年 3 月 11 日	採集遺物の本格的に報告書作成にとりかかる。

中松元には、確実な 2 つの古墳群（8 基ずつ計 16 基）の存在が確認されていた。昭和 53 年 3 月 1 日現在、中松元の古墳は、最初保存されるはずだった南側 8 基の発掘中に、8 基の他に 4 基見つかり、残されるはずの 3 基のうちの 1 基が今年度中に発掘される予定であるとされる。当時のことが『野坂の土器について』に「宗像の文化財の現状」として記載されるので、下記に引用する。

「先人の歴史をありのままに伝えてくれる文化財は、現代に生きる私達にとってかけがえのないものと思います。特に、十分明らかにされていない原始・古代の歴史を知る上で、古代住居跡・貝塚といった埋蔵文化財は貴重な史料です。1960 年以来、高度経済成長の名のもとに、全国いたるところで開発がすすめられています。それは、ここ宗像においても例外ではありません。宗像は、福岡・北九州のベッドタウンとして最適であるため、宅地造成、道路建設等によって日ごと変化しています。

宗像町には、約 500 の遺跡が確認されていますが、そのうちすでに開発の名のもとに壊されていった埋蔵文化財は、相当数にのぼっています。今年度・宗像町においても、開発優先の行政のもとで、住民に十分知らされることなく、石丸遺跡（ 弥生・古墳時代）、中松元・相原の古墳群が、期限つきの緊急調査をしたうえで壊されてしまっています。このように現在ほとんどの埋蔵文化財は、開発の中で破壊にひんしているのです。一方、この開発の波の中で、国指定・県指定として、また公園として残されている古墳等の埋蔵文化財も存在しています。しかし、せっかく残された文

化財も、その地域の人々の間でどういうふうに活用されていけばいいかわからない状況の中では、遺跡の価値さえ半減してしまうと思います。この宗像にも、日の里に古墳公園が存在していますが、私達は、この日の里の古墳を宗像の地方史を知る上で十分に活用しているでしょうか。昨今、奈良県明日香村マルコ山古墳の発掘調査がマスコミで大きくとりあげられています。あのような著名な古墳だけが、埋蔵文化財だと考えている人も多いことでしょう。皆さんのまわりを見まわしてください。この宗像においても、宗像の歴史を物語ってくれる埋蔵文化財が数多く存在しているのです。今日の埋蔵文化財の破壊の状況を考えると、すべての文化財が、いつの日かなくなってしまうのではないかと思うほどです。文化財の価値を十分に理解し、利用していくために、私達は文化財の保存を真剣に考えないと、とりかえしのきかないような状態になるのではないでしょうか。

＜私達の活動について＞

野坂とは別に、石丸遺跡を例にとってみますと、宅地造成中・偶然に考古学班点が土器片を一発見したことから、そこに宗像では珍しい弥生時代の遺跡が存在していたことがわかりました。そこで、私達は町の社会教育課に工事の中止と発掘調査を要請しましたが、工事は中止されず、かたわらでブルドーザーが動くなかで、わずか 10 日間の危険な発掘調査でした。それもただ掘り上げるといった程度のものでした。この破壊された遺跡の重要さを知っていただくために、私達は

昨年（昭和 52 年）7 月 4 日、石丸公民館で独自に報告会を開きました。現在のような状況の中にあって、私達は昨年度、「文化財保護運動」を年間テーマの一つにかかげ、日常の活動として、遺跡の存在を発見・確認するための分布調査、また対外的には、中央公民館における野坂の土器整理など、十分であるとはいえませんが、私達なりに取り組んできました。住民の皆さんに、文化財を身近に感じていただき、文化財の現状・文化財保護について考えていただけたらと思い、この報告書を出版することになりました。今年度も、「文化財保護運動」を年間テーマの一つにかかげ活動していくつもりです。今後の私達の企画に、住民の皆さんが多数参加されることを期待します。」

当時、津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査に教育大学歴史研究部と共に参加していた筆者も、後に詳しく聞くことになった。当時の印象は、また同じ事が繰り返されたと感じた。波多野先生が退官後、教育大学で調査が実施できないので、開発が優先され、破壊が繰り返された。『野坂の土器について』宗像町のまとめが記述されるので、引用する。

「宗像の人口も 5 万をこえました。山紫水明の片田舎の町から、文字通り巨大なベッド・タウンへと変貌してきております。急激な変化は当然様々な矛盾を生みますが、宗像町の場合も例外ではなく、水問題・下水処理問題・公共施設の問題そして文化財問題等々生まれてきております。人口急増のあとに息をきらして追っかけていく宗像町政と評した方がおられますが、うがったことばだと思います。しかし、又、人口急増は住民間における多様な教育・文化要求の花も開かせて

います。ふるさとを見直す運動とサークル、地域史の発掘と学習等々…。さて、確たる歴史の事実をつみあげていくことで、宗像の歴史を明らかにしていく作業が今求められています。今回、その作業の一環にと、ほぼ一カ年かけて、野坂で採集された土器の整理と分析が行われてきました。そして、この小冊子にまとまりました。この作業にあたられた教育大歴研のメンバーを中心とする方々に、あらためて深甚の謝意を表します。この冊子が多くの方々に地域史学習の教材の一つとしてあつかわれれば大変さいわいです。　昭和 53 年 3 月　　宗像町教育委員会 」

元号 (年)	年　度	遺　　跡　　名
昭和 45	1966 年	東郷遺跡群（福岡県史跡調査会）
昭和 46	1971 年	三郎丸古墳群（福岡教育大学）
昭和 48	1973 年	陵厳寺茶屋辻遺跡（福岡教育大学）・三郎丸前田遺跡（福岡県教育委員会）・城ケ谷古墳群（福岡教育大学）
昭和 49	1974 年	稲元古墳群 1（稲元古墳群調査団）　昭和 51 年に報告書が刊行される。
昭和 50	1975 年	稲元古墳群 2（稲元古墳群調査団）
昭和 51	1976 年	野坂中松元古墳群 1（野坂中松元古墳群調査団）・野坂大木遺跡（福岡教育大学）
昭和 52	1977 年	野坂中松元古墳群 2（野坂中松元古墳群調査団）・石丸遺跡（福岡県教育委員会）・相原古墳群 1 （福岡県教育委員会）
昭和 53	1978 年	野坂中松元古墳群 3（福岡県教育委員会）・相原古墳群 2（福岡県教育委員会）・久戸古墳群 1 （福岡県教育委員会）
昭和 54	1979 年	久戸古墳群 2（福岡県教育委員会）
黎明期の発掘調査（ 外部委託 ）		

当時、町には専門の文化財担当はおらず、社会教育主事が開発に伴い、開発業者に調査者を直接依頼する状況であった。筆者は、奈良大学に進学したが、稲元古墳群の調査の依頼が業者から考古学の恩師教授にあった。断った方が良いですよと云った覚えがある。業者は関西や関東まで探していたようだ。

5、考古班活動がその後に及ぼした影響

①、田熊石畑遺跡の保存

宗像町遺跡分布調査の成果が、昭和 50 年 3 月に刊行された。これらの成果は、玄海町・津屋崎町・福間町の調査成果などと共に、福岡県教育委員会『福岡県遺跡地図』昭和 52 年（1973) で公開され、全国的に周知の遺跡として認識されることになる。宗像町庁舎は、昭和 48 に庁舎建設特別委員会を設置、昭和 50 年に建設委員会が設置、昭和 51 年に用地購入が済み、12 月に起工式が行なわれた。昭和 49 年の後半は、稲元古墳群などの調査が問題となり、福岡教育大学考古班の町へ公開質問状等が提出されていた段階であった。由良半三郎の町長時代で

あった。知人より、宗像町庁舎を田熊石畑遺跡のある荒廃地に計画が検討された事もあったと云う。あそこは、「遺跡が出るから開発に手間が掛かる」との事で、候補から外され、現在の地に土盛されて着工されている。このころ、城ヶ谷古墳群の保存問題がなければ、市役所はこの地に建設された可能性があり、銅剣類も工事中の発見になっていたと思う。当時であれは、調査は不十分であったと思う。上記の経過で、後に田熊石畑遺跡が残ることになる。城ヶ谷古墳群の保存運動は、一定の開発に対する抑止力が働いた一例である。その後、平成 20 年に田熊石畑遺跡の保存を求める会が結成され、市民の尽力と市長の英断で保存される。このことは、矢田公美「田熊石畑遺跡の保存を求める市民運動について」『むなかた電子博物館』創刊号　2009 年を参照されたい。また、昭和 47 年 7 月に牟田尻古墳群で東京のゴルフ場会社の開発計画があった。しかし、桜京古墳の発見と分布調査の成果で、92 基の大型群集墳と判明しており、15 年ほど開発を遅らせることができた。その結果、古墳群の開発による破壊から逃れ、多くの古墳が残る事になる。

②人材と育成

歴史研究部考古班の卒業生は、多く方が教員となられた。全盛期の昭和 45 年入学生（1970）～昭和 50 年（1975）も、昭和 49 年を挟んで還暦前後となる。宗像の関係では、中尾徹が、昭和 56 年（1983）に宗像高校に赴任され、占部玄海と郷土研究部を復活され、旧宗像郷土館資料の整理を行い、昭和 59 年に『宗像高校視聴覚ホール資料図版・目録』を刊行された。中尾は、考古資料を担当された。さらに、資料を四塚会館に収蔵・展示された。澤田康夫は、唯一、教育の道から離れ、文化財担当者として福岡県那珂川町で遺跡調査に尽力された。江浜明徳は、2014 年に『九州の戦争遺跡』海鳥社で刊行される。彼は、高校教諭で平和教育担当として、戦跡遺跡をライフワークとして活動されている。多くの方が、昨今の教育現場でご苦労されていると思うが、盆栽の道で活躍される先輩もおられた。福岡県の教員で考古学に知識のある熱心な先生、管理職が多いと思うが教育大の考古班の方々かも知れない。

筆者や鎌田隆徳は、高校時代に三郎丸古墳群・津丸久末古墳群・城ヶ谷古墳群の調査に参加し、最も影響を受けた。田熊石畑遺跡の保存を求める会の発起人に参加したのは、その影響と思う。筆者が宗像に異常に拘るのはその影響である。さらに、城ヶ谷古墳群の調査で影響を受けた少年がいる。調査後の古墳で遺物を拾い考古学を始めた白木英敏である。彼は、のちに宗像市で国指定史跡の田熊石

畑遺跡の調査・保存整備を行うことになる。また、耜田雄一と交流し、彼らが日の里古墳公園の清掃活動を行っている頃である。その少年は、考古学に興味を持った川畑和弘（滋賀県守山市）で、弥生時代の環壕集落である国指定史跡の下ノ郷遺跡の調査・保存整備の担当者となる。

このように、40 年を振り返ると、直接的な方々を書いたが間接的に影響を受けている方々も多いと思う。

6、高校クラブの活動

(1)、宗像高校郷土研究部の活動

宗像高校四塚会館の資料で、宗像高校郷土研究部の活動アルバムを 4 冊ほど発見した。昭和 38 年～ 46 年頃の資料で、クラブ活動での遺跡発掘調査、踏査の記録が収録される。

宗像考古刊行会の『宗像高校郷土研究部資料　遺跡写真』で報告したが、再録する。

特に、宗像市神湊上野古墳、宗像市相原古墳群、宗像市浜宮貝塚、宗像市大井三倉古墳など埋蔵文化財報告書が刊行されないもの、当時の調査風景を知る上で貴重な資料が含まれる。郷土研究部の当時の記録類がほとんど残っておらず、知見する調査資料より、活動と調査を復元してみた。細部は、不明な点があるが、大まかな概要を纏めた。活動は、昭和 38 年（1963）～昭和 59 年 (1984) までの資料である。自主調査は、相原古墳群の分布調査と大井石棺の調査がある。主に、宗像で実施された東郷遺跡群・神湊上野古墳・浜宮貝塚の参加が知られる。顧問は、山田清・松永雅生→正木喜三郎・篠崎泰真→占部玄海・中尾　徹先生に引き継がれた。正木喜三郎は、「旧宗像郷土郷土館資料」について、当時のことを書いている。山本三吾校長の希望で移転するとあり、下記に引用する。

「 私が宗像高校に赴任したのは昭和 40 年 4 月のことである。着任早々、山本三吾校長の案内で荒廃した郷土館内を見て廻った私は、校長の希望もあり、郷土館資料を引き取り、その保管を考え、社会科諸先生の賛同を得た。移管に際して、事前に相談した小田富士雄先生の御教示に従って、木端一つ残らず運ぶことにした。社会科主任の松永稚生先生指揮のもと社会科教師全員でこれに当り、社会科授業の時間を割き、生徒諸君二人に搬送用の魚箱一つを充て、魚箱に入れて人海作戦で社会科教室へ移し終えたのである。

移管された資料は反古とゴミ。塵にまみれた土器・石器の山であった。授業の合間をぬって資料　を分類、ゴミ・ヨゴレ取りは郷土部女生徒諸君が担当した。着任された篠崎泰真先生を郷土部顧問に迎え資料の整理をお願いした。そののち、新校舎が落成し空室となった旧六棟の家庭科

教室の一室に陳列ケースを収め、これに資料を収納することになった。社会科教室からの搬送は諸兄生や、郷土部諸君の協力で行い、大まかながらも整理もでき、展示出来る状況となった。一部の資料委託者が宗高事務へ返還を要求され、私の知らぬ間に引き取られてという事態が起ったのである。宗高は資料を移管しているだけで所有権はないという事務の説明である。移管と同時に所有権も移っていると思っていた私にとって寝耳に水の驚きで、同時に整理の情熱も冷める気持である。また資料を入れた旧家庭科教室は新校舎から離れており、心なき者によって窓ガラス・陳列ケースが破られる事件が続発した。その補修を再三、学校に申し入れたが駄目で、迷惑顔されながら、窓に格子を打つことで落着した。移管した時の先生方は転出されてしまい、協力者はなく、折からの校長着任拒否闘争（昭和 43 年）もあって一時的にしろ、ついに管理放棄をしてしまった。だがこうした私を深く反省させることがあったのである。また管理を放棄した後の資料室を見学（昭和 45 年 5 月）された九州大学岡崎敬先生から資料保管の重要性を説かれたこと、そして特に、放棄してしまった資料室の整頓と清掃を郷土部の諸君が黙々と続けてくれている姿を見たことが私の胸を強くうったのである。気をとり直し、整備を再開した。

今日、郷土資料の散逸を免れたのは、学校当局・諸先生方の尽力もさることながら歴代の郷土部諸君の無償の奉仕の賜物だと感謝し考えている。資料移管から7年、部員減少から郷土部は休部し資料室の清掃をする者もなく、格子はあってもガラスは破れたままで、時折、一人で掃除をしていたものの、埃が積るままの資料を見ると尽力され転出されていった先生方やかつての郷土部諸君を考えれば、胸の痛む想いであった。昭和 50 年、私は退職することになった。気にかかるのは資料である。社会科の船津隆造先生の勧めもあり、今宮新校長とも相談し、九州歴史資料館の渡辺正気先生に子持勾玉・青磁碗・石剣や古文書など重要物品だけでもと保存管理をお願いした。快諾され館員の方々が引き取りに見えた。他は盗まれる心配はないであろうと判断し、後事を託すべき人もなく、複雑な想いのまま宗像を旅立ったのである。」

昭和 43 年の校長着任拒否闘争は、教員の疲労となり、文化財の保存にも影響を与えた。彼は、「一時的にしろ、ついに管理放棄をしてしまった」とある。

特記されるのは、宗像高校教諭であった占部玄海・中尾徹先生によって、旧家庭科教室資料を再度整理がなされた。整理は、むなかた目録と資料を確認し、1 点ずつ写真撮影がなされ、写真図版を中心に目録が作られた。

昭和 59 年（1984）発行の「宗像高校視聴覚ホール・郷土資料目録」がそれで、収蔵資料の全てが明らかとなった。作業は、郷土歴史研究会の協力を受け、考古資料を中尾徹、古文書等を占部玄海が担当された。なお、収蔵資料の重要性を公開するため目録を刊行し、費用は占部玄海の自費出版によってなされた。これ以後、宗像高校図書館司書の酒井恵美子が四塚会館資料の管理をすることになる。

占部は、退職後に四塚会館資料を活用して、宗像郷土史の集大成を行う。宗像で郷土館資料をいち早く紹介したが、一般の方々に十分に理解が進まなかった。

写真の解説

①古墳時代 神湊上野古墳（宗像市神湊）

玄海町誌・宗像沖ノ島に前方後円墳の記事がある。横穴式石室を内部主体とする。後円部が前方部より高い。『アエラ』の武末純一の当時の想い出に、5 世紀末の古墳とされる。調査担当者は、福岡県史跡調査会から委嘱された森貞次郎・渡辺正気とされる。短甲が出土する。

昭和 46 年の鎌田隆徳の見学メモに葺石と昭和 41 年 8 月ごろの調査とされる。今回の写真で、横穴式石室で墳丘に葺石を配置することが判明した。

②、古墳時代 相原古墳（宗像市相原）

古墳群は、宗像平野の右岸、釣川の支流である横山川流域にあたり、谷奥を見下す丘陵上に位置している。丘陵は平野部との比高 30 mあり、平坦で緩やかである。周辺には、須恵墨巡・稲元日焼原・須賀浦の窯址群や稲元、久戸古墳群、須恵クヒノ浦古墳が分布している。視下の小平野は盆地状を呈し、古墳時代の集落である池浦高田遺跡が広がっている。

相原古墳群は、昭和 35 年頃に福岡県教育委員会の分布地図に 5 ～ 6 基が登録されている。その頃は、雑木の茂る丘陵で、5 号墳の天井石や古墳の墳丘が比較的良好に保存されていた。古墳の所在する丘陵は、牧草地の開発によって、大きく 3 回にわたって削平が行われた

宗像高校の分布調査は、昭和 38 年に前方後円墳を含む 7 基の古墳が発見される。1 号墳の側面の写真と 3 号・5 号墳の石室石材が撮影される。一部、掘削される。相原の前方後円墳は、昭和 41 年までは完存していた。

③、古墳時代 東郷登り立遺跡（宗像市日の里）

東郷高塚古墳に近接する遺跡で、春成秀爾（九州大学助手）を担当者として発掘調査が実施された。調査の結果、石蓋土坑・竪穴住居などが検出された。宗像高校に隣接しているので、参加したクラブ生徒のスナップが残される。

・日本住宅公団 1967 年『東郷遺跡群』福岡県史跡調査会

④、古墳時代 スベットウ古墳（宗像市日の里）

スベットウ古墳は、東郷田熊の小丘陵北端に位置する前方後円墳で、全長 35 ～ 40 mと考えられる。主体部は、竪穴系横口式石室で、玄室は長さ 3.6 m×幅 2 m、高さ 3.8 mのやや胴張りの長方形プランを呈する。玄門部には框があり、墓通が上方へ上っている。出土遺物は、挂甲・鉄鏃・刀子・帯金具・金銅製品・

元号 (西暦)	調査内容	顧問 (先生)
昭和 38 年 (1963)	宗像町相原古墳群の調査・岡垣町高倉古墳群の調査参加、文化祭は「相原古墳群」の展示。	山田清・松永雅生
昭和 39 年		山田清・松永雅生
昭和 40 年 (1965)	宗像郷土館資料を宗像高校へ移動、8 月、東郷遺跡群（日の里団地内の分布調査を実施）	山田清・松永雅生・正木喜三郎
昭和 41 年 (1966)	東郷登り立遺跡 4 月～ 6 月、7 月～昭和 42 年 2 月に東郷遺跡群（日の里団地　スベットウ古墳調査参加）、8 月頃か、玄海町神湊上野古墳に調査参加する。	山田清は 10 月明善高校へ転勤）、正木喜三郎・篠崎泰真
昭和 42 年		正木喜三郎・篠崎泰真
昭和 43 年	4 月～ 7 月、校長着任拒否闘争となる。	正木喜三郎・篠崎泰真
昭和 44 年	(宗像町大井石棺の調査)	正木喜三郎
昭和 45 年 (1970)	5 月、宗像高校創立 50 周年　岡崎敬先生の「沖ノ島遺跡について」講演、文化祭は「宗像の仏教」を実施。	正木喜三郎
昭和 46 年 (1971)	5 月　玄海町浜宮貝塚の調査参加、文化祭は「宗像の万葉の道」	正木喜三郎・赤松
昭和 47 年	部員の減少で休部する。	正木喜三郎
昭和 48 年	休部	正木喜三郎 (管理)
昭和 49 年	休部	正木喜三郎 (管理)
昭和 50 年	4 月、正木先生が東海大学へ転勤。	
昭和 51 年	休部	
昭和 52 年	休部	
昭和 56 年	4 月に郷土研究部の復活	占部玄海
昭和 57 年	宗像郷土館資料の整理開始（歴史研究同好会）	占部玄海・中尾　徹
昭和 58 年	宗像郷土館資料の整理	占部玄海・中尾　徹
昭和 59 年	『宗像高校視聴覚ホール郷土資料図版・目録』の刊行	占部玄海・中尾　徹
平成元年	四塚会館の竣工　宗像高校創立 70 周年	藤　清治・松隈東海
宗像高校活動アルバム・『宗像高校視聴覚ホール郷土資料図版・目録』昭和 59 年より作成		

ガラス製小玉 719 個・ガラスの切子玉・須恵器片が出土している。造墓時期は石室の形態より、6 世紀前半に比定される。 日の里団地の造成後に消滅した。

中学生時代の筆者の大井の友人が当時、採集したガラス小玉を 10 点ほど持っていた。調査参加写真は、事前調査の写真、発掘参加時の写真があり、報告書掲載以外のスナップがあり重要である。

・日本住宅公団 1967 年『東郷遺跡群』福岡県史跡調査会

⑤、古墳時代 神湊浜宮貝塚（宗像市神湊）

神湊の丘陵は、赤土の上に砂層が厚く堆積しており、砂層面に遺構群が検出される。神湊集落の東側の砂丘上に位置する貝塚で、確実な範囲でも東西 80 m×南北 160 mの範囲に貝の分布が確認でき、さらに両側に 50 mの広がりが知られる。海抜 10 mの宗像神社浜宮を中心に、北に伸びる緩い砂丘に立地し、もつとも低い 4 mの位置まで貝層がみられる。玄界灘沿岸で最大の古墳時代貝塚である。最初に田中幸夫により、「神湊貝塚」として紹介され、石井 忠によって貝層・土器・骨格器が採集され、遺跡の見直しが始まった。

昭和 46 年 5 月に筑紫野史学会によって、北端の部分が調査される。現地表面から、0.5 mまでは、二次堆積であるが、海抜 4.2 mの基盤層の上に、混貝土層が確認された。混貝土層には須恵器が検出されており、6 世紀中～ 7 世紀前半に比定される。自然遺物は魚骨（サメ・マダイ類・フグ・クロダイ・スズキ・カツオ・エイ）・貝類（サザエ・アワビ）は岩礁性のものが多く、潜水漁法の存在が予想される。これらに伴って鉄製ヤス・釣針・刀子・骨鏃・鹿角製品・土錘が出土している。当時としては、画期的な問題意識を持った調査であった。

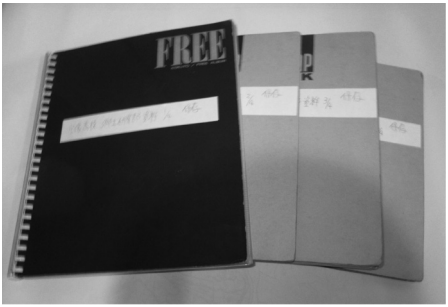
⑥、古墳時代 大井三倉古墳 石棺（宗像市大井）

スナップ写真が 3 枚あり、箱式石棺と内部の石敷きが確認できる。別の写真に蓋石が写っており、『宗像市史』に掲載の大井三倉の石棺と特徴が一致する。市史は、撮影時期不詳とされる。私は、昭和 38 ～ 44 年の間に調査されたと推察する。水糸が見えるため、実測がなされている可能性がある。当時おられた臨時職員の前川威洋先生 (後に福岡県教育委員会文化課) あたりが、図化されたのではないか。再度、確認が必要。

⑦、古墳時代 宮地嶽古墳（福津市宮司）

金銅製冠を含めて昭和 27 年と 36 年に新国宝に指定された。破損が著しいため昭和 41 年～ 43 年の 3 年間で文化庁の補助を受け保存修理がなされた。昭和 48 年より、東京国立博物館に勧告出品として、常設展示される。写真は、馬具の保存修理前であり、昭和 41 年以前に宮地嶽神社で撮影されたものである。また、鐘崎海女の資料がある。

桑田和明は、正木先生について、「当時、先生は服装など気にせず、教員としても異質な感じで、学者風の方であった。高校時代は歴史部には女子が多く入らなかったが、文化祭の借用で甲冑を先生と借りに行ったこと、神湊浜宮貝塚の調査に参加したことを覚えている」。先生との関係が深くなったのは大学時代、地



クラブ記録写真集（2011 年発見）

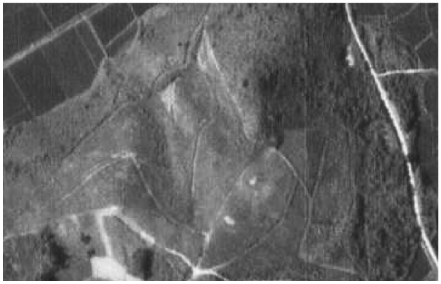
昭和 46 年（大宰府天満宮）

岡崎敬（九州大学）の講演　昭和 45 年 5 月

正木喜三郎先生とクラブ員

神湊上野古墳

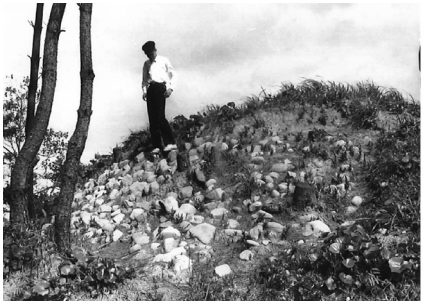
神湊上野古墳



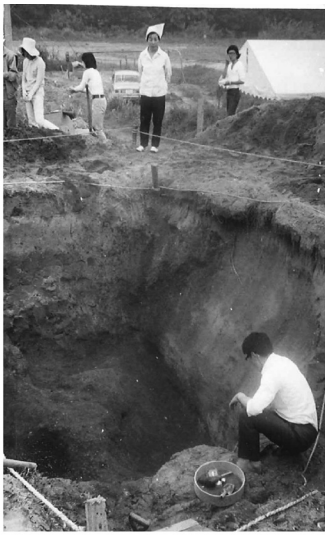
参考　相原古墳群航空写真　昭和 41 年

東郷登り立遺跡

相原 3 号墳の天井石



神湊上野古墳の葺石

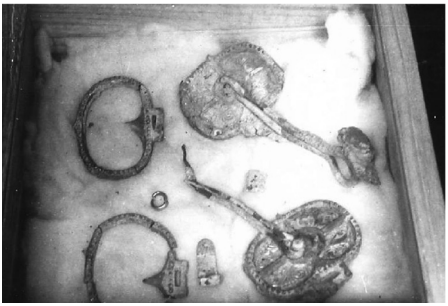


神湊浜宮貝塚

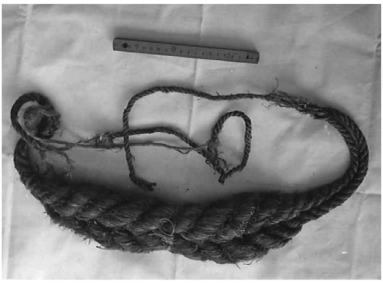
神湊上野古墳の石室

大井（三倉）石棺

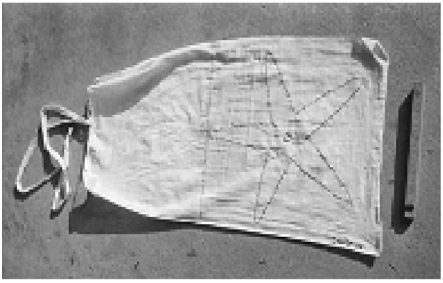
スベットウ古墳の石室



宮地嶽古墳の馬具（修理前）



鐘崎海女（はちこなわ）



鐘崎海女（いそべこ）

鐘崎海女（昭和 30 ～ 40 年代）

鐘崎海女（いそじゅばん）

元の宗像に戻り先生の退官後、『津屋崎町史』・『宗像市史』の執筆を依頼されている。

宗像の中世史は正木と桑田の師弟の研究で、画期的に進んだ。桑田は『中世筑前国宗像氏と宗像社』を 2004 年に発刊する。また、正木喜三郎執筆の『古代・中世　宗像の歴史と伝承』2005 年の刊行を病床の正木に代わり、実質的な編集・刊行を行なっている。

参考文献

・占部玄海・中尾徹『宗像高校視聴覚ホール　郷土資料目録』宗像高校　1984 年
・正木喜三郎「宗像郷土館資料の再生」『ふるさとの自然と歴史』110 号　1985 年
・福岡県立宗像高校『創立 70 周年記念』1989 年
・宗像考古刊行会『宗像高校郷土研究部資料　遺跡写真』2011 年　ＣＤ版
・宗像考古刊行会『田中幸夫先生と宗像郷土館 - そして田熊石畑遺跡の保存 -』2010 年
・宮地嶽神社『国宝 宮地嶽古墳出土品修理報告書』1968 年

（2）、東海大学付属第五高校歴史クラブの活動

2016 年 4 月より東海大学付属福岡高等学校と校名が変更される。ここでは旧校名（以下、東海第五高校と略す）を使用する。

昭和 45 年に高校陸上部で筆者と鎌田隆徳と出会い、共に考古学に興味があり、意気投合した。玄海町・津屋崎町には鎌田、宗像町は筆者が興味を持っていた遺跡の踏査からこのクラブの歴史が始まる。高校時代のクラブノート手元にあり、これに沿って記述する。

顧問は、山隈惟美・秋元勇夫・高岡清・松岡哲先生で社会科担当であった。

昭和 45 年 (1970)

高校 1 年生は、4 月 9 日･10 日、東海第五高校西側の曲丘陵の踏査から始めた。曲丘陵は、谷部に黒耀石・須恵器、丘陵頂部の平坦面に弥生時代前期の土器類を採集した。後に曲香畑遺跡と呼ばれ、発掘調査が実施される。

高宮祭場の周辺は、当時段々畑となっており、滑石製品･須恵器が散布していた。踏査の際に、水溜の畦に土師器 (複合口縁の壺･甕) などが露出しており採集した。9 月 20 日には、山隈・秋元両先生の指導を受け、須恵窯跡群の新池・古池の踏査を行い、灰原などを発見した。そして谷沿いの崖面の須恵器散布状況から、新池・古池周辺の分布図を作成した。戦前の田中幸夫の踏査以来、窯跡の分布を調べた。10 月 8 日には、鎌田と考古学研究会を二人で立ち上げ、陸上部の合間や土曜・日曜日に遺跡の見学、分布調査を行った。11 月 7 日・10 日には、須恵・曲遺跡の踏査を再び行なった。12 月には、鎌田の村である桜京古墳周辺の牟田尻古墳群の踏査を安部徹・末続・鎌田・筆者が実施した。クラブでの本格的な踏査であった。大島の踏査もこの頃である。12 月 16 日は、三郎丸古墳群の丘陵が伐採されたので、分布調査で 6 基の古墳を発見したが、開発業者に調査することをお願いしたが、殆どが破壊されたため、現状の記録を取った。

昭和 46 年 (1971)

3 月に、三郎丸古墳群の残存する古墳を福岡教育大学の波多野先生が発掘調査を実施された。この時に、筒井亀などの教育大学の先輩らと出会うことになる。研究会は、高校の必須クラブ活動で、歴史研究部となり部員も増えた。高校 2 年生は、4 月に城ヶ谷の丘陵で 10 基の古墳群を発見し、教育大学の先輩に連絡した。後の昭和 49 年に筆者が発掘調査と整理に参加することになる。5 月の連休には、神湊浜宮貝塚の調査が筑紫野史学会主催であり、宗像高校郷土部と共に参加した。5 月には、牟田尻古墳群に尾根上に多くの古墳が群集しているので、再び分布調査を行なった。さらに、津屋崎町の新原・奴山の前方後円墳と円墳の分布調査を行なった。7 月には、宮地嶽古墳の見学の帰りに、内の切り通しで環頭太刀の柄頭を採集し、淨見宮司に届けたが、以後、この資料は、神社で行方不明となる。玄海町田野丘陵で、土器を採集したのもこの頃である。8 月には、田熊示現神社境内の裏で弥生前期の貯蔵穴が崖面に露出しており、土器を採集した。当時、『福岡県の歴史』に青銅器の地名表があり、田熊中尾 (忠霊塔) で銅剣が出土しており、注意していた場所である。9 月には、福岡教育大学の稲元墨巡窯跡の調査を見学に行った。続く 10 月に福岡教育大学の相原古墳の石室調査が行なわれた。10 月 23 日の学園祭にクラブの展示に伴い牟田尻の桜京古墳が、秋元・高岡・鎌田・筆者が装飾古墳であることを確認した。11 月 12 日には、宗像神社遷宮大祭があり、出光佐三翁に出会った。

11 月の学園祭では、鎌田が中心となり、桜京古墳石室の実大模型を作成した。12 月には、新原百塔の配置図、拓本・実測調査を行った。

昭和 47 年 (1972)

昭和 47 年 2 月には牟田尻古墳群の第 1 回目の分布調査を実施し、60 基の古墳を確認した。2 月には、奥野正男先生の主催する筑紫古代史研究会が、宮地嶽神社で開催されたので参加し、奥野先生に出会った。3 月には、池浦の削平された古墳より、ガラス丸玉を採集した。同じく、津屋崎団地東側の古墳削平地より、鉄器類を採集した。併せて山麓部の古墳の分布調査を行なった。高校 3 年生の 4 月 23 日には、福岡教育大学歴史研究部考古班と東海第五高校のクラブ合同の『巡検』を行った。私たちの古墳・遺跡の情報を共有することができた。澤田康夫とは、この頃からの知り合いとなる。

4 月 13 日～ 16 日に相原古墳群の造成があり、削平された古墳の記録を取った。5 月には、大井丘陵上の 2 箇所で弥生土器を採集し、黒耀石なども採集した。さ

山隈・秋元先生とクラブ員（昭和 48 年）

玄海町田野・池田分布調査（昭和 47 年）

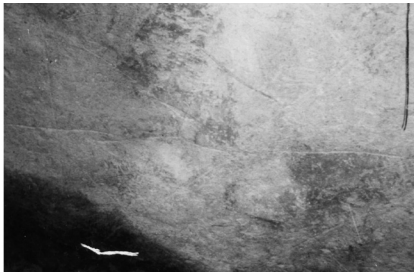
相原古墳（前方後円墳　昭和 46 年）

文化祭　正木喜三郎先生（昭和 47 年）

田野瀬戸２号墳（昭和 47 年）

三郎丸９号墳（昭和 46 年）

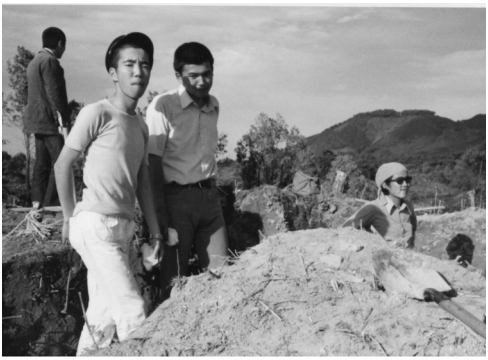
田野瀬戸２号墳石室（昭和 47 年）



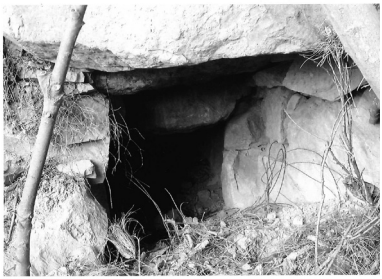
桜京古墳の連続三角文

相原古墳（前方後円墳　昭和 46 年）

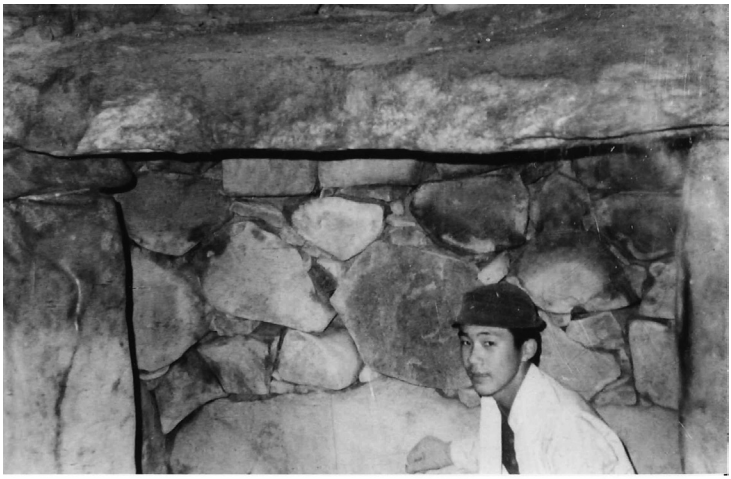
相原古墳の石室



福間町津丸・久末古墳群（昭和 47 年 8 月）



田野上林 1 号墳

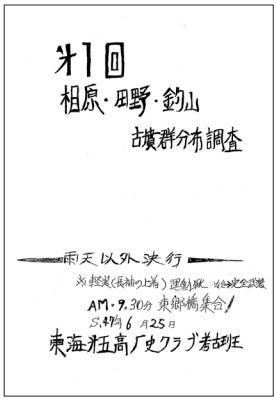


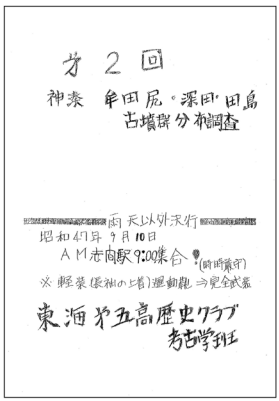
桜京古墳発見と学友鎌田隆徳（昭和 46 年 10 月 23 日）

旧宗像郷土館（昭和 47 年 10 月）

資料整理（平成 4 年）

旧宗像郷土館（昭和 52 年）





歴史クラブ考古班の調査資料

らに、南側の崖面で大量の弥生土器を採集した。この遺跡は、後に大井三倉遺跡と呼ばれる。この頃に田熊石畑遺跡南の崖面で弥生土器を採集した。また、廃屋となった宗像郷土館の写真撮影を行なった。5 月には、博多で『奴国展』を見学した。関心は、遠賀郡にひろがり、水巻町立屋敷遺跡、遠賀町城ノ越貝塚、鬼津横穴、鞍手町鎧塚古墳・古月横穴、中間市羅漢公園の見学に行った。6 月には、正木喜三郎先生の案内で、格子窓の部屋に納められた郷土館資料を見学し感銘を覚えた。6 月 25 日に相原・田野の分布調査を実施し、記録を報告した。8 月には、福間町の津丸古墳群を福岡教育大学の発掘調査に参加した。9 月 10 日は、牟田尻古墳群の第 2 回目の分布調査を実施、合計 92 基からなる大型群集墳であることを確認した。10 月は、学園祭に伴い須多田ニタ塚古墳の石室の計測を行なった。同時期に福岡教育大学による高向古墳(会所坂)・瀬戸 2 号墳の発掘が行なわれた。田野瀬戸 2 号墳は、私たちが工事中に発見し、福岡教育大学に通報したもので、波多野先生が緊急調査を実施された。10 月 28 日には、相原前方後円墳の墳丘が牧場の拡張で削平された。11 月の学園祭に『古墳宗像』を鎌田の編集で作成した。この時に正木喜三郎先生も見学に来られた。この時期に陵厳寺の高樹山の山頂に登った。12 月には、須多田天降神社古墳にて須恵器・埴輪を採集した。教育大の先輩に、「土管の破片」と云われたが、後に埴輪となる。また、宗像郡遺跡分布調査の一環で、玄海町の分布調査に参加した。この時に、松本　肇・桑野主事・立部住職と出会、私達の高校時代の古墳・遺跡分布図を玄海町に提供した。

昭和 48 年 (1973)

昭和 48 年は、1 月に宗像郡遺跡分布調査の一環で津屋崎町の遺跡調査に参加した。津屋崎郷土史会は、調査を委託されており、自主活動の成果を盛り込まれた。私達も高校時代の古墳分布図を会に提供した。前年より研究会に参加していたので、田中が声を掛けてくれた。この時に、田中香苗・北野清美の所属する津屋崎郷土史会の皆さんにお世話になった。2 月には、許斐山城の踏査を行い、保存状況が良いことを知った。ただし、一部に電波塔が設置されていた。3 月 2 日～ 4 月は、宗像郡遺跡分布調査の一環で宗像町の調査が実施された。宗像町の牧田・尾山・瀧口、教育大学考古班の澤田・高崎・與田・赤星と実施した。宗像町の赤間地区は、福岡教育大学の歴史研究部が自主活動で、分布調査をされたものを提供された。なお、私達も高校時代の古墳・遺跡分布図を宗像町に提供した。分布調査報告書は、昭和 50 年 2 月に刊行された。

なお、東海第五高校旧蔵資料は、下記に報告した。

・花田勝広『宗像考古 1 号』 宗像考古刊行会　1976 年
・花田勝広『宗像考古 2 号』 宗像考古刊行会　1992 年
・花田勝広『宗像考古 6 号』 宗像考古刊行会　ＣＤ版　1992 年
・花田勝広『宗像考古 7 号』 宗像考古刊行会　ＣＤ版　2008 年
・宗像考古刊行会『東海大学第五高校歴史クラブ考古班の活動記録』 ＣＤ版　2015 年

高校時代は、宗像町三郎丸古墳群 (6 基)、相原古墳群 (13 基)、福間町井手ノ上古墳群 (4 基) や、津丸・久末古墳群 (12 基)、玄海町田野瀬戸 1 号墳などの多くの古墳が目の前で、未調査でなくなった。常に無力感を感じたので、余りいい思い出はない。また、大学時代も、津屋崎町宮地団地山麓の古墳群も登録されたはずなのに、調査されず住宅地となっていた。

クラブ顧問の山隈惟美・秋元勇夫先生は、生徒の調査に同行してもらつたり、調査の方法や記録の取り方を教わった、よき恩師であった。先生方の導きには、今でも感謝しており、筆者や鎌田の歴史好きが「宗像のために役立てる」のは先生の教えによるものである。

当時、福岡教育大学の筒井　亀、澤田康夫、鹿島秀世には歴代に渡り、考古学へ導いて頂いた。澤田先輩とは未だに、先輩・後輩関係が続いている。
よく誤解されるが、筆者が直接宗像に関わるのは、高校・大学時代の 5 年間である。

追加資料　作成中に 2 つの古墳の記事を発見したので、収録する。

神湊上野古墳　昭和 42 年 (1967)8 月 17 日～ 24 日まで、福岡県史跡調査会 (会長　長沼賢海) により調査が実施された。調査は、九州大学考古学研究室 (小田富士雄助手)・福岡高校 (森貞次郎教諭)・香椎高校・宗像高校の考古学部員の数十名で実施されたた。上野古墳は、全長 45 mで斜面に人頭大の葺石を持ち、独立丘陵に位置する。発掘調査で横穴式石室が発見され、石室幅 1 m、長さ 3.5 m、深さ 1.5 mの単室であった。副葬品は、短甲 (横矧板)・鉄剣・ガラス小玉 20 個、又墳丘周辺から須恵器の壷が 3 個出土した。

・引用文献「上野古墳発掘調査」『社報宗像』69 号　1966 年

高向古墳 (田野小路界古墳)　玄海町高向に存在する通称高向古墳は、直径 20 m、墳丘高さ 5 mの円墳である。県道建設に伴う緊急調査で 11 月から調査が開始された。調査は、福岡県教育庁文化課の委嘱をうけて、福岡教育大学の波多野晥三教授が担当している。この古墳は、以前から地元の人に知らており、墳頂に

学年	西暦	元号	月	クラブの活動内容	資料	福岡教育大学の調査
小学5年	1966	昭和41年		牟田尻で古墳発見(鎌田)		教育大学の移転に伴い波多野暁三先生が来る
				相原古墳の見学(花田)		宗像町東郷遺跡群の調査　7月～12月
6年	1967	昭和42年	6月～9月	牟田尻で紡錘車・須恵器出土(鎌田)		
中学3年	1969	昭和44年	10月	宗像郷土館の見学(花田) 東郷高塚で弥生土器採集(花田)	○	
高校1年	1970	昭和45年	4月9日・10日	曲香畑遺跡の発見	○	
			7月	相原古墳群踏査		
			9月20日	須恵・須恵器採集		
			10月8日	考古学研究会結成(鎌田・花田)		
			10月			津屋崎町東郷公園の古墳調査
			11月7・10日	須恵窯跡分布調査		
			11月14日	曲香畑遺跡の分布調査		
			12月	牟田尻・数回調査(鎌田・安部・花田・末続)		
			12月	大島調査		
			12月16日	三郎丸古墳群発見と記録	○	
高校2年	1971	昭和46年	3月	下高宮で土器採集		
			3月			三郎丸古墳群の調査(福岡教育大学)
			4月	牟田尻古墳群見学(山隈・秋元・鎌田・花田)		
			4月	宗像町城ヶ谷古墳群の発見		
			5月	浜宮貝塚調査参加		筑紫野史学会、浜宮貝塚調査
			5月	牟田尻古墳群分布調査 新原・奴山・須多田古墳群分布調査		
			7月	宮地嶽2号墳の大刀発見	○	
			7月	田野で土器採集		
			8月	田熊中尾遺跡で貯蔵穴発見		
			9月			稲元墨巡窯跡の調査(福岡教育大学)
			10月			相原前方後円墳石室調査(福岡教育大学)
			10月23日	桜京装飾古墳の発見(秋元・高岡・鎌田・花田)、石室の計測		
			11月・学園祭	桜京古墳の模型	●	
			12月	多礼で石器採集	○	
			12月15日	奴山百塔図面		
高校3年	1972	昭和47年	2月	牟田尻古墳群分布調査(1)　60基確認		
			2月	筑紫古代史研究会(宮地嶽神社)参加		
			3月	池浦古墳よりガラス玉採集		
			3月	津屋崎・宮司分布調査・鉄器採集		
			4月21～23日	相原13～16号墳記録・消滅		
			4月25日	巡検(教育大・歴史クラブ)	●	巡検(教育大・歴史クラブ)
			5月	大井三倉遺跡で土器採集	○	
			5月	田熊石畑遺跡で土器採集		
			5月3日	奴国展の見学		
			5月5日	立屋敷・城ノ越遺跡見学		
			6月	宗像郷土館資料の見学(鎌田・花田)		津丸古墳群調査
			6月25日	相原・田野・釣山分布調査	●	
			8月	津丸古墳群調査参加		
			9月10日	牟田尻分布調査(2回)　92基を確認	●	
			10月	須多田ニタ塚古墳実測	○	
			10月	玄海町高向古墳の調査(福岡教育大学)		玄海町高向・会所坂古墳の調査(福岡教育大学)
			10月	玄海町瀬戸古墳の不時発見		玄海町瀬戸古墳の調査
			10月28日	相原前方後円墳の墳丘消滅		
			10月22日	須多田天降神社古墳で埴輪・須恵器の採集	○	
			11月	学園祭(正木喜三郎先生が来る)		
			12月	新原・奴山・須多田古墳群分布調査		
			12月	玄海町分布調査に参加(花田・鎌田)		
	1973	昭和48年	1月	津屋崎町分布調査に参加、津屋崎郷土史会が実施(花田・鎌田)		
			2月16日	許斐山城調査		
			2月18日	遠賀町鬼津横穴		
			3月2日～4月2	宗像町分布調査に参加(花田・鎌田)		宗像町分布調査に参加(沢田・高崎・與田・赤星・)
			3月	大井三倉遺跡で石包丁採集、久戸で土器採集	○	
大学1年	1974	昭和49年	3月	宗像町城ヶ谷古墳群参加(花田)		宗像町城ヶ谷古墳群の調査　3月～10月
			8月			津丸・久末古墳群報告書の刊行
2年			10月			瀬戸古墳の調査(福岡教育大学)
3年		昭和50年	3月	宗像町城ヶ谷古墳群の整理		宗像町城ヶ谷古墳群の整理
			8月	宗像郷土館考古資料の実測(花田)		
			10月 12月	津屋崎町勝浦峯ノ畑古墳の見学(花田)		波多野退官論集『筑紫史論Ⅲ』
4年	1976	昭和51年	3月	むなかた考古1の発刊(花田)		
			8月	宗像郷土館考古資料の実測(鎌田)		
			8月	津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査参加(花田)		津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査参加
	1977	昭和52年	8月	奈良大考古学研究会の古墳見学		
			12月			城ヶ谷古墳群報告書の刊行
	1978	昭和53年				
	1992	平成4年	8月～	宗像郷土館考古資料の実測開始(花田・鎌田)		解散
	2008～2009	平成20年～21年		田熊石畑遺跡の保存を求める会の発起人に参加(鎌田・花田)		解散

東海第五高校の活動

○宗像考古に掲載、●資料あり

盗掘孔がある。古墳内部は、前室と後室とを持つ横穴式石室墳である。床面には板状の石が敷き詰められていた。石室全長は、5 m余である。後室は、長さ 3 m、幅 2 mを測り、僅かに胴張りである。奥壁は、幅 1 mの一枚石を置いている。また、後室の奥に 4 枚の仕切石により、幅 1.5 mの囲いをつくり、屍床を形成している。前室は、1.5 m四方の部屋で遺物の大部分が出土している。服装品は、須恵器 (高杯・杯・大型壷)、金銅製杏葉 1 対、馬具破片、ガラス玉、鉄鏃が出土する。須恵器はⅣ B 形式であり、追葬は考えられない。

・「高向古墳調査される」『社報宗像』144 号　1972 年

高校時代以後

筆者は、昭和 49 年 (1973) に城ヶ谷古墳群の調査に参加、昭和 51 年に津屋崎町清田ヶ浦古墳群の調査に参加する。

平成 4 年（1992）から、鎌田と旧宗像郷土館考古資料の整理を行い完了した。平成 20 年には、田熊石畑遺跡の保存を求める会の発起人に 2 人が参加することになる。平成 20 年～ 26 年に旧宗像郷土館の雑誌・古書類をデータ化、宗像関連専門論文等 500 本を集成本として『続宗像郡誌』30 巻に集め、宗像市図書館深田分館提供した。一般の方が、身近に学べるように、今後の歴史好きの発生に備えた。以下はその成果である。

・花田勝広「宗像郷土館の研究 1」『古文化談叢』30 号 九州古文化研究会　1994 年
・花田勝広「宗像郷土館の研究 2」『文化財学論集』 奈良大学　1994 年
・花田勝広「宗像郷土館の研究 3」『滋賀考古』15 号　滋賀考古学研究会　1994 年
・宗像考古刊行会『田中幸夫と宗像　- 宗像郷土館と田熊石畑遺跡の保存 -』 2016 年
・花田勝広『宗像の歴史と文化遺産の研究』ＣＤ版　2013 年
・宗像考古刊行会『続宗像郡誌』第 1 ～ 30 巻　ＣＤ版　2016 年

7、まとめ

(1)、40 年後の宗像の古墳

高校を卒業して 44 年が経ち、今書いていることは、既に昔話になり歴史の一部となる。気付いたことを纏めておきたい。宗像市の遺跡数は、2011 年の分布調査の成果が明らかにされており、古墳総数 2,236 基となる。40 年前に比べるとの 3.5 倍にとなっている。古代の胸形君が予想以上に大きな勢力と考えられることになった。

特に、古墳の調査数が、非常に多いことである。古墳が多い事は、当時の埋葬される被葬者が多いことを示す。筆者は友人達と平成 19 年 (2007) に横穴式研

究会を関西で実施したが、その際に近畿地方の横穴式石室を集成した。ネットの【横穴式石室集成】を検索参照。この時の発掘されている古墳数を調べたが、大阪府で 673 基、奈良県で 583 基、滋賀県でも 477 基であった。未報告があるので、各 100 基を加えても、旧宗像郡古墳調査数 866 基は、これら超える調査数である。福岡県行橋市の竹並横穴群は単独で 1,000 基を超えることは有名であったが、宗像もこんなに多いとは思わなかった。数値は、宗像市にご教示頂いた総数 2,236 基、調査数 780 基に福津市の 10 年前の数値を加えて独自に作成してので、概数は福津市分が増加する可能性がある。総数は、池ノ上宏の集計によると、2,830 基とする。

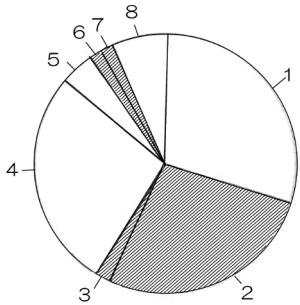
この表を基にすると、旧宗像町の半分の古墳は既に存在しない。旧福間町の 20% は、存在しない。これらは、ＪＲ沿いであり、交通の便が良く、宅地造成に伴う調査である。旧玄海町は、玄海ゴルフ場建設に伴うものが多い。旧津屋崎町は、宮地団地の未調査分を含めるともう少し増加すると思われる。旧宗像郡の古墳総数の 3 分の 1 前後はもう消滅している。この数値は、直視すべきである。全国的に群集墳の多い福岡県の開発が高度成長に伴い過激に進んだことが分かる。宗像以外の福岡県の地域も同様な現象である。しかし、全国的にみると、関西の方が多くの古墳が残っていることになる。10 年前に調べた時も調査数が、約 550 基であったので気にはなっていたが、非常に大変に驚いた。

前方後円墳は、確実なのが 44 基あり、旧玄海町 9 基、旧津屋崎町 17 基、旧福間町 3 基、旧宗像町 15 基が知られる。旧宗像町の半分弱は、調査・消滅する。旧福間町・旧玄海町が各 1 基となる。旧津屋崎町は半壊 3 基を含めると、ほぼ 17 基が完存する。津屋崎の古墳群は町文化財担当者の池ノ上宏の尽力により、国指定史跡となり、今後も保存される。

地　域	前方後円墳数（現存）	半壊	全壊	備　考（全壊の古墳）
旧玄海町	8	0	1	田野瀬戸 2 号墳
旧宗像町	8	1	6	須恵クヒノ浦古墳・城ヶ谷 3 号墳・スベットウ古墳・田久瓜ヶ坂 1 号墳・徳重高田 16 号墳、徳重本村 2 号墳
旧津屋崎町	14	3	0	
旧福間町	2	0	1	手光大人 4 号墳
合　計	32	4	8	総合計 44 基

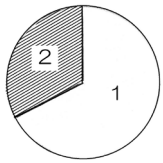
番号	地区名	古墳数 (基)
1	旧宗像町未調査数	767
2	古墳調査数 (宗像町)	729
3	古墳調査数 (玄海町)	51
4	旧玄海町未調査数	689
5	旧津屋崎町古墳未調査数	102
6	古墳調査数 (津屋崎町)	39
7	古墳調査数 (福間町)	47
8	旧福間町古墳未調査数	183
	古墳総数 (推定)	2,607

宗像の古墳総数と調査



番号	地区名	古墳数 (基)
1	宗像郡古墳未調査数	1,741
2	宗像郡発掘調査数	866
	古墳総数 (推定)	2,607

宗像の古墳と残存率



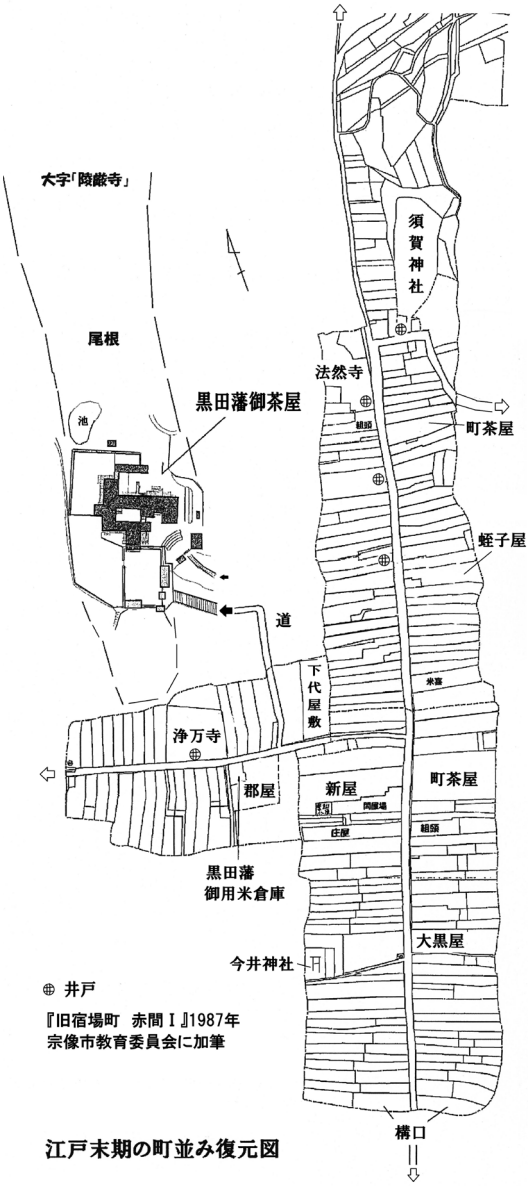
筆者が田熊石畑遺跡の保存を求める会の発起人に参加したのも、少なくとも田熊を残さなければ、今後未来はないと感じたからである。沖ノ島や宗像大社だけが、宗像の遺跡ではない。世界遺産の認定後は、多くの遺跡が保存されることを「宗像大神」に祈るだけである。

(2)、40 年後の後悔

赤間宿の御茶屋　筑前国黒田藩の宿に設けられた別館で、『筑前国続風土記』に元禄年間に 19 箇所あった。藩主別邸として利用され、唐津街道を利用する大名や幕府役人の宿泊所として利用される。ネットの「唐津街道歴史研究所」で位置が検討されている。幕末に三条実美などが五卿落ちの一行が、赤間宿の御茶屋に慶応元年（1865）1 月 18 日～ 2 月 11 日に滞在した所である。

赤間塾の中村哲一郎塾長ら 3 人は、小郡市の九州歴史資料館収蔵庫で発見された福岡藩御用大工の本陣の間取り、仕様を記録した古文書をもとに御茶屋の復元図を作成している。下記のものは、提供されたものである。天保 5（1834）年に黒田藩御用大工、林家文書 (九州歴史資料館蔵) の指図がある。

城山中学校御茶屋は、丘陵上に位置し階段を上り、表御門を入り籠に掛ける建物と、家臣の控える腰掛がある。上級武士は、御玄関で挨拶を交わし、大広間で



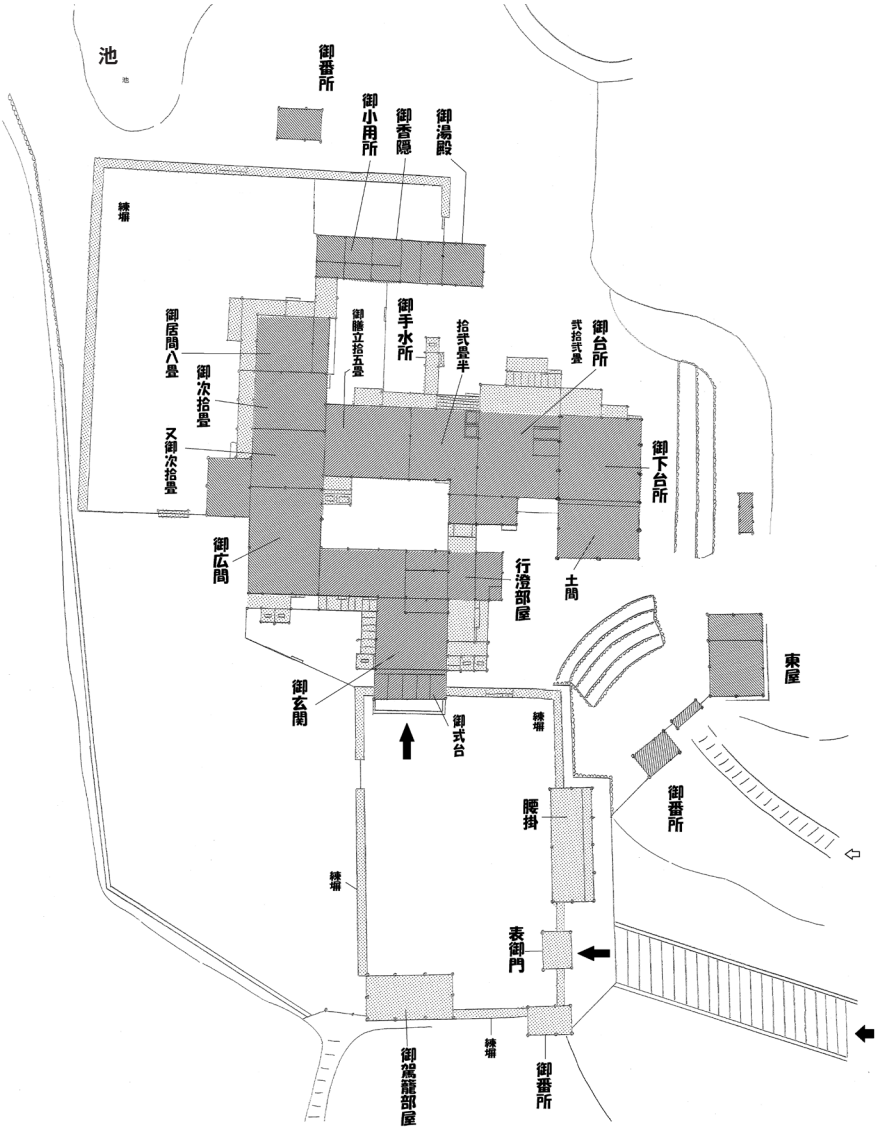
江戸末期の町並み復元図

昭和 36 年　航空写真

昭和 50 年 3 月 8 日　航空写真

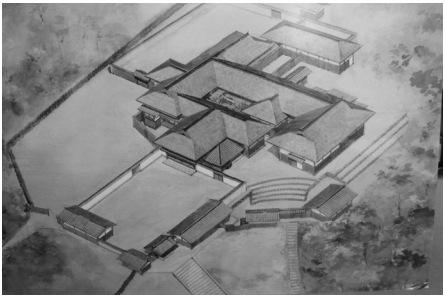
御茶屋の造成

赤間宿と御茶屋の位置関係（江戸時代末期）



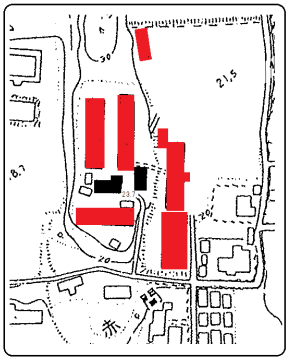
赤間宿・御茶屋の建物配置図（赤馬塾提供）

昭和 45 年城山中学校卒業アルバム（奥の二つの校舎が御茶屋の位置となる）

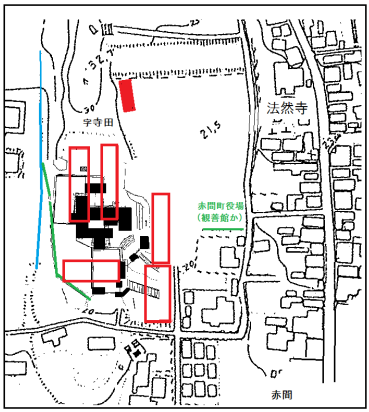


御茶屋の復元図（赤馬塾提供）

昭和 23 年の航空写真

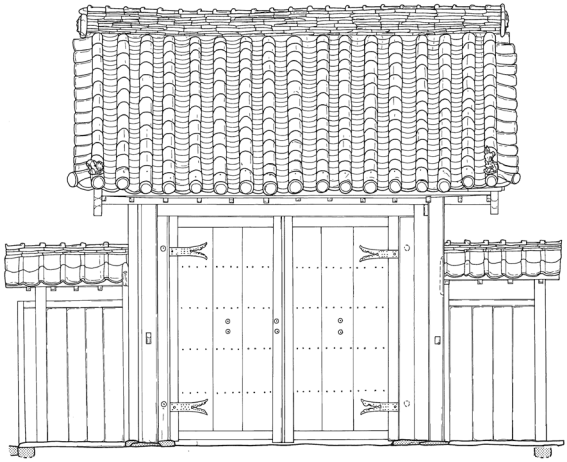


城山中学校校舎の配置
（昭和36年）



御茶屋と校舎の整合図

御茶屋と校舎の位置関係



門の推定復元案　0　2m

御茶屋の門部材（赤馬塾提供）

会見をする。大名や幕府役人は、御居間八畳の部屋が宿泊所となる。建物には、御台所・御手水所・御湯殿などの施設がある。岩倉具視などの公家も御居間八畳（上）・御次間拾畳（中）・御次間拾畳（下）の部屋に宿泊したのだろう。各所に番所があり、練塀で守られる。現存する門部材は、東屋と御番所の間の勝手口に当たる通用門と推察される。

明治時代の廃藩置県後に御茶屋は、どうなったのかよく分からない。

赤間尋常小学校は、明治 18 年 8 月に太政大臣の岩倉具視が、教育令改正で設置されたもので、「当初は赤間本町の米屋を改造したものであったと。まもなく、正式なものが御茶屋の跡に造られた」と出光佐三は記す。さらに、「私どもの尋

常小学校は赤間にあったが、明治 28 年に尋常小学枚を卒業して高等小学校に通うようになった。・・・高等小学校の二年の時に、赤間に仮校舎ができた。勧善舎という芝居小屋を一時的に改修したものである」とある。

前者は、黒田藩の赤間宿にあった御茶屋の後の建物であったのだろう。後者は「辻田橋の所にあった」と伊豆幸次氏より御教示を受けた。御茶屋の位置は、赤間村に隣接するが、陵厳寺村字寺田となる。

明治 24 年に陵厳寺に校舎を新築し、赤間尋常小学校と改称する。出光の記事と合う。おそらく、御茶屋の後の建物が一部利用された可能性がある。

明治 42 年には、字茶屋辻に位置し、赤間尋常高等小学校と改称する。昭和 16 年に赤間国民学校と改称、昭和 22 年に新学制で赤間小学校となる。

昭和 3 年の『宗像郡史蹟名勝写真帖』に「お茶屋跡」の記事がある。

「当時のお茶屋跡は、赤間小学校の校庭東、小丘上、現在畑となっている。その玄関の扉が今、赤間有吉常松氏宅に保存されているときく、町内の有志の中に此地に記念碑を建立して遺跡を世にあらわさんと計画中である」と記事の内容が分かる。占部玄海の知見は、「茶屋の思い出」占部玄海『郷土歴史叢書』第 1 冊によると、「子供のころ城山中学の運動場は小高い森であった。こんもり茂った雑木の中にとんがり屋根の洋館と純日本風の豪邸があった。森の入口には子供三人でやっと抱きかかえるような杉の丸木が三本無造作に並んでいてそれが、茶屋の入口である。その門の一つ一つに管笠が宜しく大きな、それは大きなすり鉢がかぶせてあったのを思い出す。門は厚く戸板で閉ざされ、その奥に誰が住んでいるかも知らなかった。「茶屋の辻」この小字とも茶屋も森も消えてしまった。」子供ころとあり、昭和 9 年 (1934) 年生まれからすると、昭和 23 年までの事と思われる。航空写真に建物が写る。とんがり屋根の洋館と純日本風の豪邸は、個人の住宅で写真にぼんやり写る。この建物は、御茶屋と全く関係ないと、伊豆幸次氏に伺った。御玄関の前の広場は、畑となる。他に、数棟の建物が確認できる。

昭和 22 年 4 月 22 日に赤間・吉武村学校組合東部学校として開校する。昭和 26 年 9 月 1 日に現在の位置に新築の木造建物校舎が建設される。とんがり屋根の洋館と純日本風の豪邸は、中学校に取り込まれ昭和 49 年ごろまで残る。昭和 23 年 1 月 19 日に米軍の航空撮影が行なわれる。昭和 36 年 9 月 2 日に国土地理院が撮影する。昭和 50 年 3 月 8 日に国土地理院が、カラー写真を撮影する。鉄筋校舎新築造成中の写真で、遺跡が削られる。御茶屋跡は現在の城山中学校のグランドにあたるが、完全に消滅した。御茶屋を失ったことは、今後、赤間宿の

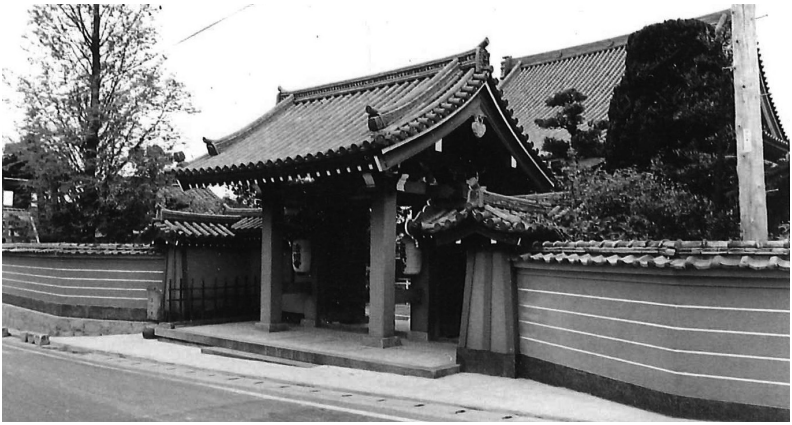
文化再生に大きく影響を与えると思う。

当時、昭和 50 年以前には、御茶屋絵図（指図）の存在は知られていなかった。このころは、埋蔵文化財は、古代を中心に登録され、周知の遺跡となっていた。城郭は、登録されていたが、近世はよっぽどのものでないと対象にならなかった。

ふと思う、旧宗像郷土館が廃館とならず、公的に機能していたならば多くの人々に知られ、昭和 48 年の分布調査の台帳に登録され、調査ができたと思う。校舎は建設されていたが木造であり、地下に遺構は残っていたと思う。

筆者は、昭和 50 年 3 月には帰省、赤間の福岡教育大学で遺物整理に 2 週間ほど赤間に通っていた。帰りに城山中学校のフエンス越しに造成をボートと見ていた。昼も夜も前を通っていたのに、存在を知っていれば記録を取れたものを。残念でならない。

赤間・須賀神社



赤間・法然寺

総 括

1、宗像の特性

第１題と第２題は、一見別々の内容に捉えがちですが、これらは歴史の一連の流れである。早川勇の後進育成が宗像会を生み、教育者が多く発生し教育郡と呼ばれ、会の雑誌を通じた交流が刺激となる。会で育った事業家・官界・学会関係者が、再び後進育成を行う宗像塾が東京に生まれ、戦前に宗像郷土館・郷土会館建設事業で結束した。宗像会本部が移転した宗像神社を核として継続される。戦争で中断した会は、戦後本格的に出光佐三の始めた宗像神社復興事業と共に集結があり、復刊宗像会・再興宗像会が再び結成され、出光の強烈な個性と実行力で、多くの事業の支援や直接執行が行われる。福岡教育大学の移転により、波多野先生と歴史研究部考古班がいち早く、埋蔵文化財の緊急調査にあたり、文化財調査・保存の啓発を行う。波多野・正木先生の活躍により宗像の文化財調査で、宗像高校や東海大学第五高校生徒の歴史クラブに影響を与える。また、復刊宗像会・再興宗像会の世代の郷土史系団体や個人は、城ヶ谷古墳群の保存啓発後、宗像の自然・歴史・文化財保存研究会の結成となる。一方、宗像神社の復興期成会の事業は、沖ノ島調査で成果を上げ、出土品が神宝館建設され公開される。

全く関係ないように思われるが、元は一つであり、戦後に宗像神社系譜（宗像会）と福岡教育大学の系譜があり、これに昭和 56 年以降の行政が影響を与えた系譜の３つとなる。三つ目の行政系譜は、いずれ関係者に纏めて戴きたい。

雑誌『宗像』は、明治 24 年から大正時代を経て昭和 40 年代のこの地域の歴史を、民衆の立場から記録したものであり、宗像市町村史に記載と評価が欠落していた。宗像の人が歴史好き、宗像神社がなぜ復興できたか、郷土館に多くの浄財が集まったかなど、多くのこの地域の伝統を読み取ることができる。おそらく、高度成長期までの地域像を知るうえで興味ある内容である。宗像の文化財・歴史好きの伝統の根幹にかかわる資料と思い、あえて集成を進めた。

『宗像』は、明治 24 年～昭和 18 年までの約 51 年間続いた雑誌である。戦後再興され、昭和 30 ～ 43 年まで発刊された。184 冊の冊子は、宗像の人・文化の地域的気質・特性を窺う上で興味のある雑誌である。今後の文化財理解の啓発

資料となると思う。

特に、戦前に伊東尾四郎が『宗像郡誌』と『福岡県史』を並行して無理してなぜ全三巻を編纂されたか。宗像は教育熱心な土地柄とは。宗像神社の信仰心が強い、宗像の心一つである一体感の理由。なぜ、世界遺産の基盤をつくった出光佐三があれほど、神社の復興に執着したのか。出光家の人々が宗像の地へ経済的・人的支援をいとまなかったかのが何故か。宗像郷土館建設に寄附金があれほど集まった理由、戦後の再興宗像の雑誌が影響を与えた上妻国雄、吉武謹一、田中香苗、安川浄生、日並文夫、占部玄海、安部郁朗、小方正人などの人々。高校生の頃、私達から見たかっての年寄（第 3 世代）が自費出版までもして、なぜ郷土史研究に熱心だったのか。すぐに思いつく事例は、明治から発刊されたこの雑誌の気風が影響を与えたものである。この雑誌は、先人の活躍を記録したものであるが、多くのヒントがあるのだろう。もっと早い時期に、一般の多くの方が知られれば、今と違う宗像地域の構築が可能であつたと思う。過去の人々の思想が、現代に継承されることは何か。当時、郡単位での組織で 50 年近く続いたものは少なく、九州でも個性の強い一種独特の世界であると。筆者も全体像を初めて知った。

2、文化財の調査・啓発の歴史

雑誌『宗像』の集成を行い、その内容を読めようにした。その中で、明治時代より 50 年以上も続いた宗像郡の同胞雑誌を読んでいる内に、この地域の独自性を知ることになった。雑誌『宗像』は、全国でも最も古く長く続いた古い地方雑誌である。筆者の関心に沿って、文化財理解・啓発を時系列でまとめてみた。

①明治 24 年～昭和 19 年　第一波

明治 24 年、東京に在住する宗像郡出身者の間で、宗像郷友会が結成、雑誌『郷友雑誌』が発行されたが、その後『宗像』と名を変え会誌を媒介として大阪・福岡・北九州・飯塚等の各市をはじめ、海外 (アメリカ) でも結成されるようになり、会員数は 1,200 人を越えた。宗像会は雑誌から機関紙へ変貌した『宗像』を通じ、会員及び宗像大社との連携をはかるとともに、新知識の取得や切磋研磨を目的としている。宗像会の変遷を概観すると、まず東京宗像会で発刊した会誌「宗像」は、在京の学生が輪番幹事になって編集にあたり、毎年 4 回発行して昭和 10 年に至る間に既に 144 号まで発行している。東京本部は、大正末年の関東大震災で被災したにも関わらず、昭和 10 年まで宗像塾の学生が編集・発刊した。昭和

元号	西暦	宗像会	宗像神社復興期成会	宗像沖ノ島の調査	研究書・啓発書	津屋崎郷土史研究会（福津）	宗像の自然・歴史・文化財保存研究会	むなかた歴史を学ぼう会	世界遺産	文化財への理解	学者・地域研究者
明治24年	1892	宗像郷友会の結成		江藤正澄「沖津島紀行」	雑誌　宗像の刊行 伊東尾四郎氏の歴史記事『雑誌宗像』						伊東尾四郎
（省略）											伊東　新
昭和2年	1927			柴田常恵「沖島の御金蔵」							江藤正澄 柴田常恵
	1929										原田淑人
昭和5年	1930										
	1931	事務局宗像			伊東尾四郎『　宗像郡誌』中巻						宗像辰美
	1932										桜田勝徳
	1933	50年続いた雑誌で全国的最古の地方雑			伊東尾四郎『　宗像郡誌』下巻						
	1934										伊東尾四郎
昭和10年	1935			田中幸夫「沖ノ島に詣でて」						第一波	豊　元国
	1936				田中幸夫『宗像の旅』						田中幸夫
	1937										出光佐三
	1938	宗像郷土館開館	出光佐三氏を会長に結成		田中政喜　『宗像郷土読本』					宗像会の組織力	田中政喜
	1939				田中幸夫　『むな形』						脇野　磐
昭和15年	1940			豊　元国の遺物調査	古野清人「筑前宗像の宮座資料」						古野清人
	1941	宗像163号									大場磐雄
	1942										梅原末治
	1943										赤間太郎
	1944										
	1944				伊東尾四郎『宗像郡誌』上巻						
昭和20年	1945	終戦									
	1946		中断								
	1947										
	1948										
	1949										
昭和25年	1950										
	1951										森貞次郎
	1952		用地買収								三野　章
	1953										野間吉夫
	1954			調査開始							
昭和30年	1955	中野氏、復刊	高宮の整備								
	1956										
	1957										
	1958			『沖ノ島 』							鏡山　猛
	1959										
昭和35年	1960										
	1961		『宗像神社史』上巻	『統沖ノ島 』							
	1962										小嶋鉦作
	1963										
	1964	再興・宗像を発刊。	宝物館の開館								上妻国雄
昭和40年	1965										松崎武俊
	1966		『宗像神社史』下巻								安部郁郎
	1967				鏡山 猛 歴史と風土『筑紫』						田中嘉三
	1968				宮地嶽神社『国宝 宮地嶽古墳出土品修理報告』	田中善苗氏を会長に結成					
	1969										田中善苗
昭和45年	1970				古野清人『農耕儀礼の研究―筑前宗像における調査』						古野清人
	1971		史跡指定	『海の正倉院沖ノ島』							
	1972		遷宮祭			古墳分布調査			宗像神社境内の史跡指定		出光佐三
	1973										
	1974									第二波	波多野皖三
昭和50年	1975										
	1976		『宗像大社昭和造営誌』						桜京古墳史跡指定	沖ノ島効果	
	1977										中村修身
	1978										安川浄生
	1979			『宗像沖ノ島』	安川浄生『宗像の歴史散歩』				文化財担当職員の宗像配置		岡崎　敬
昭和55年	1980		神宝館の開館				結成。吉武謹一氏を事務局長の活躍				松本　肇
	1981									歴史グループの連合	吉武謹一
	1982										田村圓澄
	1983										河窪奈津子
	1984				『宗像高校 郷土資料目録』				宗像市町の大規模開発に伴う埋蔵文化財調査。『宗像の遺跡をたずねて』		小川　賢
昭和60年	1985				占部 玄海『郷土歴史資料叢書 1～5巻						占部玄海
	1986										尾山　清
	1987										
	1988				小田富士雄編 『沖ノ島と古代祭祀』						小田富士雄
平成元年	1989										
	1990							結成。平松秋子氏を会長			
	1991			佐田 茂『沖ノ島祭祀遺跡』					海人シンポジウム1～3		佐田 茂
	1992				『筑前鐘崎漁業誌』						日並文夫
平成5年	1993		『宗像大社文書 第1巻 』		楠本　正『玄界の漁撈民俗』						上田年見
	1994										楠本　正
	1995				宗像市町史の刊行						川添昭二
	1996										田中正日子
	1997				中村正夫『宗像郡地誌総覧』						中村正夫
平成10年	1998								農業基盤整備・圃場整備事業に伴う発掘調査		亀井輝一郎
	1999		『宗像大社文書 第2巻 』					約370回の講座・見学会を実施。			正木喜三郎
	2000										
	2001										
	2002										
平成15年	2003				桑田和明『中世筑前国宗像氏と宗像社』・正木喜三郎『古代・中世 宗像の歴史と伝承』						
	2004										桑田莉萌
	2005			弓場紀知『沖ノ島 古代祭祀とシルクロードの終着地』					津屋崎古墳群の史跡指定		石井　忠
	2006										弓場紀知
	2007				宗像市町史の刊行				沖ノ島展	第三波	
平成20年	2008					吉原文書の調査		田熊石畑遺跡の保存	『宗像遺産』・暫定リスト		小田富士雄
	2009		『宗像大社文書 第3巻 』	『古代の福岡』海鳥社	宗像電子博物館	『福津の絵馬』		20周年記念誌	田熊石畑遺跡史跡指定	市民参加	伊津信之介
	2010					庚辰塔の調査			田熊石畑遺跡とムナカタ展		藤野正人
	2011				『続宗像郡誌』の集成						
	2012								むなかた館の開館		矢田公子
	2013										
	2014										平松秋子
平成27年	2015								田熊石畑遺跡の開園		

歴史系団体と啓発

11 年には、本部を宗像神社に移して敏腕編集長の宗像辰美・石田和吉により発刊がなされた。このころから時局の影響を受け、会誌はつい漸次遅延し、遂に自然休刊の止むなきに至った。

雑誌『宗像』に歴史関連記事を書いたのが、伊東尾四郎（福岡県立図書館　初代館長）である。彼は、当初の発起人で、その件数は、27 篇あり、彼が宗像の歴史啓発の嚆矢であり第一人者であった。昭和 5 年ごろに『宗像郡誌』の執筆を任されたのは、経験豊富と宗像会幹部であった為である。明治 30 年に『宗像郡誌』の必要性を説いたのが、伊東新であった。早くして逝去されたのは残念であった。昭和 12 年に江戸時代の百姓をまとめた脇野磐 (八並村) は、自宅の古文書を纏め、優れた地域研究である。

昭和 13 年に宗像高等女学校内に建設された宗像郷土館は、当時女学校に奉職されていた田中幸夫の尽力と神郡宗像に誇りをもつ郡民により創設された。郡民の浄財の寄附は、全国の宗像会を通じて行われた。この間、田中幸夫の『宗像の旅』『むなかた』『宗像郷土読本』、田中政喜の『神郡宗像郷土史』が刊行される。当時、伊東が専門書の『宗像郡誌』、田中幸夫が郷土館建設と普及本のベストセラーとなった『宗像の旅』を執筆した。沖ノ島の調査は、江藤正澄の「沖津島紀行」、柴田常恵の「沖島の御金蔵」、田中幸夫の「沖ノ島に詣で」、豊 元国の遺物調査などがある。昭和 6 年に、桜田勝徳の鐘崎・大島の民俗調査はこの時期のものである。昭和 17 年、出光佐三を会長に宗像神社復興期成会が結成される。

②昭和 20 年～昭和 28 年

宗像郷土館の廃館状態により、歴史啓発施設の消滅となる。この施設が存続しなかつたため、高度成長期の開発に文化財への理解が大幅に遅れ、多くの遺跡を失うことになる。このことは前述した。しかし、宗像神社復興期成会の事業が着実に進む。この間に、野間吉夫の鐘崎海女の民俗調査が特記される。

③昭和 29 年～昭和 54 年

宗像神社復興期成会の事業が本格化し、高宮祭場の買収・整備、宝物館の完成が上げられる。宝物館の完成により、宗像の重要資料が保管・管理・展示される。小嶋鉦作よる戦後に進められた『宗像神社史』の刊行があり、神社の学術的成果が纏められた。この時、神社の始源に沖ノ島調査が欠かせないので、神域の学術調査が行われ、ヤマト政権による国家的祭祀が明らかになった。その成果は、『沖ノ島』『続沖ノ島』『宗像沖ノ島』として刊行され、併せて『宗像大社昭和造営誌』も纏められた。これらの成果に基づいて、境内地内の買収、社殿の整備、重要文

化財本殿・拝殿の保存修理が行われ、遷宮大祭でピークに達した。この頃、宗像・沖ノ島出土品は全国で「海の正倉院　沖ノ島展」で一般公開が実施された。出光佐三の諦めない復興への行動力が際立っている。復興期成会は、氏子・信者も多いが、戦前からの宗像会がその精神的な母体であったことを忘れてはならない。

戦後、昭和 30 年、中野正之によって、復刊記念雑誌『宗像』が発行された。昭和 38 年には、宗像会の会則を基として、再興宗像会が発足した。その翌 39 年～昭和 43 年までに 19 号が発刊される。宗像の人・文化の地域的気質・特性を窺う上で、興味のある雑誌である。注目されるのは、戦後も元軍人の顕彰もあり、意外と思ったが、明治時代から出光万兵衛・伊豆凡夫らは、宗像塾の学生達の面倒や良き相談相手となっている。旧軍人より、「宗像」の同胞が重視された。この雑誌に歴史関連記事が多く収録された。そのメンバーは、上妻国雄・松崎武俊・安部郁郎・田中嘉三などである。戦前に宗像会の雑誌編集を行ったこともある古野清人は、『農耕儀礼の研究－筑前宗像における調査－』を地域の記録として刊行された。普及本として、安川浄生の『宗像の歴史散歩』が刊行される。宗像で最も多く読まれる普及本である。昭和 46 年に津屋崎郷土史研究会が田中香苗によって結成される。松崎武俊は、独力で散逸する宗像郡一帯の古文書に給料をつぎ込み購入、収集した。大量の古文書を自ら目録を作成し、研究者に公開した。後に松崎古文書館 (宗像市日の里) を整備される。宗像郡に古文書が大量に残るのは彼の尽力の成果である。彼は、古文書研究する異色の警察官 (刑事) であった。また、松崎武俊・尾山清らの古文書を読む会が結成される。

この時期は、宗像市日の里団地造成に伴う 218 万㎡の開発にかかる調査、自由ヶ丘団地の開発など住宅開発の徴候がみられる。昭和 45 年以降、福岡教育大学の波多野晥三による開発に伴う事前調査が行われる。同大学歴史研究部考古学班も発掘調査を実施する傍ら、宗像郡内の分布調査を精力的に行った。分布調査による基礎的作業が遺跡保存の前提という路線へ意向し、城ヶ谷古墳群以降、主たる発掘調査への組織的参加を行っていない。昭和 50 年以降は、稲元古墳群の調査に代表される大規模開発が本格化しはじめた段階で清田ヶ浦・相原・久戸古墳群等の調査が目白押しとなる。県道建設に伴って、勝浦峯ノ畑・井ノ浦・新原奴山 1 号墳等の前方後円墳が調査された。次第に宗像氏の奥津城の一角も明らかになった。

この時期に、宗像神社境内（昭和 46 年）、装飾古墳である桜京古墳（昭和 51 年）が国指定史跡となる。

④昭和 55 年～平成 15 年　第二波

宗像神社復興期成会の一連の復興事業が終わり、神宝館の開館により、沖ノ島の国宝が身近に見学できるようになる。宗像地域の自然・歴史系団体が集結し、宗像の自然･歴史･文化財保存研究会が結成された。田村圓澄を会長に、吉武謹一･田中香苗・上田年見・松崎武俊・尾山　清などの、個性的な面々の活動が、会誌を通じて精力的に「ふるさと宗像」の学習が始まる。そして、博物館の設置を求められた。後半期には、むなかた歴史を学ぼう会 (会長　平松秋子) が結成され、講座・学習会が続けられた。20 周年記念誌によると、約 370 回の講座・見学会を実施された。小方正人が中心とする宗像生活史研究会は、『宗像むかしの生活研究』を刊行され、土地の民俗伝承を詳細に纏められた。土地の伝承も含まれており、考古学の分野も活かせると考える。占部玄海は、宗像郷土資料を『郷土歴史資料叢書 1 ～ 6』として纏め、郷土史の集大成を発刊する。宗像会系の最後の郷土史である。中村正夫の『宗像郡地誌綜覧』は、『宗像市史』近世編の補足するために、自費で出版される。古野清人に続く学者の故郷を思う出版である。日並文夫による『鐘崎漁業誌』は、鐘崎の歴史を知る上で欠かせない。

宗像市の大規模開発が本格化するに伴って、文化財行政職員が配置される。その後の経過については、原俊一の「宗像の考古学」や『宗像市史』に詳しく纏められている。

文化財行政職員は、宗像市 (1981 年)･津屋崎町 (1989 年)･福間町 (1990 年)･玄海町に配置され、宗像市町の大規模開発に伴う埋蔵文化財調査や、農業基盤整備・圃場整備事業に伴う発掘調査が実施され、遺跡の現地見学会が数多く開催された。調査も、弥生集落・前方後円墳・群集墳・須恵器窯、奈良～鎌倉時代の集落・墓址と全時代を通じた遺構群と遺物が出土し、宗像の全体像が把握される段階である。その中で、「海人シンポジウム」の開催、『宗像の遺跡をたずねて』などが刊行され、海人文化を理解が深まった。『宗像市史』が刊行され、地域の通史が明らかとなる。注目すべきは、昭和 62 ～ 63 年の秋山晴子らのまとめた『旧宿場町赤間』の記録調査は当時の建物群が詳細にわかる。

⑤平成 16 年～平成 27 年　第三波

平成 17 年に多くの前方後円墳が含くむ津屋崎古墳群が国指定史跡指定となる。さらに、国指定史跡の宗像神社境内である沖ノ島遺跡を中心に津屋崎古墳群、桜京古墳、東郷高塚古墳に田熊石畑遺跡を追加し、「宗像・沖ノ島と関連遺跡群」として、世界遺産の暫定リストに登録される。福岡県・宗像市・福津市を中心に

元　号	宗像会系（在地系）	研究系	団体系
明治・大正年間	**石田和吉**『むなかた』、**野口美造**『宗像の歴史』・『宗像遺徳集』、『貞婦はん・孝女こや』・『孝子正助伝』、『宗像郡郷土史』		神湊浦漁業協同組合『神湊浦沿革』
昭和元年～昭和10年	**幡掛正木**『沖津宮』		**宗像郡教育会**『宗像郡史跡名勝写真帖』
昭和11～20年	**田中幸夫**『宗像の旅』・『むな形』、**田中政喜**『神郡宗像郷土読本』、**福原軍造**『宗像郷土史』	**伊東尾四郎**『宗像郡誌・上・中・下』	
昭和21～30年	**田中嘉三**『増福寺始末記』、佐々木滋寛『純孝武丸正助』	**伊東尾四郎**『福岡県史料叢書』	
昭和31～40年	**出光佐三**『人間尊重50年』、**瀧口雪雄**『武丸正助さん』	小嶋鉦作『宗像神社史』	
昭和41～50年	**上妻国雄**『郷土の民話』・『宗像人物風土記』・『続宗像人物風土記』・『続々宗像人物風土記』・『宗像路散歩』・『宗像伝説風土記』，**安川浄生**『大島郷土誌』、**田中嘉三**『孔太寺神社考』、檜垣元吉『早川勇伝』、**安部正弘**『東郷公園と私』**倉田主税**『しみだらけの人生』	波多野晥三『筑紫史論3輯』、**古野清人**『筑前宗像の農耕儀礼』、木村俊隆『宗像郡本木村定札制』、瀧口凡夫『創造と可能の挑戦』	**宗像大社**『許斐山物語』・『宗像史話伝説』
昭和51～63年	**上妻国雄**『宗像風物誌』・『福間の又べえ』、**田中香苗**『津屋崎風土記』、**松崎武俊**『部落解放史発掘―追悼集』、**安川浄生**『筑前の流人』・『宗像歴史散歩』・『安部宗任』・『宗像の歴史』、**占部玄海**『宗像高校郷土資料目録図版』、『郷土歴史資料叢書1～3』、**井上隆三郎**『筑前宗像の定札』、**立部瑞祐**『心の旅路』	石井忠『漂着物の博物誌』、原田大六『阿弥陀仏教の謎』、『福岡県地誌全誌二』	**正助翁遺徳顕彰会**『筑前宗像郡孝子武丸正助伝拾遺』、**宗像大社**『むなかたさま』・『宗像20年の歩み』、**壱岐貞実ほか**『宗像高校60年誌』

平成元年～ 10 年	**上田年見**『ふるさと文化財探訪記』・『福間のあのころ』、**日並文夫**『鐘崎漁業誌』、吉武謹一『玄海町史話伝説』、**占部玄海**『郷土歴史資料叢書 4 ～ 5』、**高山勉**『たった 1460 日されど 1460 日』、木村俊隆『宗像の塩浜』、**日並文夫**『玄海町の民俗資料集』	**中村正夫**『宗像郡地誌綜覧』、石井忠『海辺の民俗学』、**楠本正**『玄界の漁撈民俗』、秀村選三・西村政子・平嶋浩子・瀬戸美津子『筑前国宗像郡吉田家家事日記帳』、**宗像大社文書編纂刊行委員会**『宗像大社文書 』	宗像を知る会『宗像ふるさと紀行』、**宗像の自然歴史文化保存研究会**『新抄宗像記・同追考』・**宗像生活史聞き書き研究会**『宗像むかしの生活研究』、**日並文夫ほか**『鐘崎漁業誌』
平成 11 ～ 20 年	吉村青春『津屋崎センゲン』この時期は、市町村史に宗像会系が携わる。	**正木喜三郎**『古代中世宗像の歴史と伝承』、桑田和明『筑前宗像氏と宗像社』、宗像大社文書編纂刊行委員会『宗像大社文書 』	**福津郷土史会**『福津の絵馬』、許斐山愛好会『風と森との物語』、むなかた歴史を学ぼう会『創立 20 年記念誌』
平成 21 ～ 28 年	**平松秋子**『八所宮のおくんち』、**安部照生**『福崎ものがたり』、吉村青春『津屋崎学』、山口浩『宗像あれこれ』・『ふるさと三郎丸のすがた』、**占部玄海**『海北道中の王者』・『勤王志士早川　勇』、**花田勝広**『田中幸夫と宗像』・『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』・『出光佐三と宗像』	桑田和明『戦国時代の筑前国宗像氏』	吉武歴史観光ボランティア『吉武物語』、平等寺伝承行事を伝える会『伝承行事を守り続ける平等寺』、**福津郷土史会**『吉原文書追加目録』、津屋崎祇園山笠会『津屋崎祇園山笠 300 年記念誌』
主な単行本著作者（個人・団体）を集め、行政刊行物・沖ノ島関連を除く。 ※参考　**太字**は、宗像会会員・系が関与する。知見するもののみ。			

世界遺産登録のために、尽力がなされる。この中で、沖ノ島国宝展、田熊石畑遺跡の国史跡指定に伴う田熊石畑遺跡とムナカタ展などが開催される。むなかた電子博物館は、ネットを活用・情報を俊敏に伝える取り組みがなされ、紀要 1 ～ 7 号刊行される。宗像の情報を世界に伝える広報の窓口となる。

この時期の特徴としては、『津屋崎町史』・『福間町史』などの刊行で、宗像地域の市町村史が全てまとまり、資料編と共に、容易に一般の方々にも歴史の学習が容易になった事があげられる。

さらに、桑田和明の『中世筑前国宗像氏と宗像社』、正木喜三郎の『古代・中世 宗像の歴史と伝承』、河窪奈津子の尽力した『宗像大社文書』の出版などの専門書が刊行され、基礎研究も蓄積がなされる。平成 23 年実施の九州前方後円墳研究会の『宗像地域の古墳』は、原俊一を中心とした古墳資料の集成が行なわれ、宗像の実相が明らかになった。特記されるのは、国指定史跡田熊石畑遺跡の保存は、市民の手によるものであり、市民参加主導の歴史学習が進んだ結果とみられる。宗像市の講座等に見られる息の長い地味な講座が、その基盤にあることは間違いなかろう。今後、むなかた歴史を学ぼう会・福津郷土史研究会は、地域歴史学習と啓発を進める役割を果たすのであろう。宗像の歴史観光ボランティアの会の結成は、身近な遺跡の理解が深まっている。福岡教育大学の公開講座は、歴史に関心のある人々へ、専門的学習を促し、変化の起爆剤となっている。平成 24 年度の「海の道　むなかた館」の開館は、宗像文化を通史的に知る施設と歴史の啓発拠点になっている。平成 24 年 8 月には、市民団体の「赤馬塾」、中村哲一郎を中心に実行委員会よる「大赤間展」では御茶屋・幕末の偉人らを紹介している。近年は、「街道の駅　赤馬館」の開館、岩熊寛を中心とした畦町宿の再生イベントが実施される。

書籍は、むなかた歴史を学ぼう会の平松秋子の『八所宮のおくんち』、安部照生の『福崎ものがたり』、吉村青春の『津屋崎学』、山口浩の『宗像あれこれ』、むなかた歴史を学ぼう会『創立 20 年記念誌』、吉武歴史観光ボランティアの会の『吉武物語』、平等寺伝承行事を伝える会『伝承行事を守り続ける平等寺』などの個人・団体系の出版がある。『福崎ものがたり』は、筆者の集落の歴史である。

また、国指定田熊石畑遺跡の開園・イベント、宗像市主催の「邪馬台国とムナカタ国」の講演会などで、沖ノ島以外の文化財の理解が深まっている。田熊石畑遺跡は、田中幸夫先生が宗像を去り、76 年を経てに復活し、宗像の歴史の基盤となり、新たな歴史の再出発となっている。

最近では、研究書の桑田和明『戦国時代の筑前国宗像氏』、普及本の占部玄海『海北道中の王者　宗像王君と宗像三女神』・『勤王志士　早川　勇』が出版される。

また、花田の『田中幸夫と宗像』・『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』・『出光佐三と宗像』が自費出版がある。

宗像でのかつてない第三波は、世界遺産の推進と共に、地域の文化財、文化遺産の認識と地域再生へ続くのだろう。明治 24 年の『郷友』『宗像』から流れる文化財への関心は、断絶はあったが変容しながらも、風土と共に地域的気質として受け継がれている。なお、宗像の世界遺産は、ホームページを参照されたい。

⑥宗像はなぜ歴史好きが再生産されるか。

明治の歴史研究･啓発は、伊東尾四郎の第 1･2 世代 (宗像会)、第 3 世代 (復刊･再興宗像会)、筆者の属する第 4 世代となる。元祖は、早川勇の人徳による雑誌『宗像』の出現が、宗像の歴史好きを発生させ、会誌を通じて地域ナショナリズムによる出版物が現れ、伊東尾四郎・田中幸夫の 1・2 世代の影響が次ぎの 3 世代に引き継がれる。表で最も多いのが、宗像会系譜の個人著作・団体ものである。ここが宗像の地域史の特徴である。行政刊行物を敢えて除いたのは、この地域の自力を知るためである。興味深い特徴は、「宗像のために」と自費刊行されたものが多く、第3世代が後進の人材育成ための宗像会の精神が続いている事が分かる。

宗像人は、宗像のためにと記録を残すのが好きである。特に、教員関係者の出版が多い。つまり、10 年間単位でみても、普及本により、歴史知識の再生産が行われる。これに、出光兄弟による復興された宗像大社・鎮国寺の保存された景観、行政の文化財調査・啓発活動・イベントが加わるためであろう。

3、結語

一見、自然以外に何も恵まれていない宗像地域は、江戸時代以降の宗像の特産物は、ご承知のとおり、「教員・鶏の玉子」が多いのがこの郡の名物であった。明治時代に宗像会の結成により人材育成､「大きくなあれ｣を合言葉に人材が育つ。宗像会は､宗像と東京を直接繋ぎ､明治の気風を強く持つた雑誌『宗像』を通じて、郷友の交友と新知識の取得や切磋研磨を目的としている団体であった。その広がりは、国内を超えてアメリカ宗像会まで結成される。全国的に見ても、50 年以上続く地方雑誌は珍しく、九州の中でも同胞意識の強い特殊な地域であった。戦後も高度成長期まで引き継がれ、そして今日に至る。

滝口凡夫は、かつての宗像郡は「自作農が圧倒的に多く、地主―小作農の関係は小規模、沿岸漁業は、鐘崎、勝浦、津屋崎を基地として行われている。人情は純朴であり、敬神崇祖の念が強い。婚姻関係も郡内にとどまり、宗像神社の氏子としての一体感、相互扶養の気風も強い」とされる。そして、郡民の共通の性格、特徴を、「自作農的な土くささ、頑固一徹さ、それでいて温かい人間味といった

ものを感じられないだろうか」と評している。

しかし、近年はこの地を選んでに住んだ新興住宅の人々は、宗像への関心が強く、積極性・行動力があるが、再興宗像会崩壊後の在地系の人々は、保守性が強いと見ることもでき、滝口の評した面影は薄らいだ。これは、全国的に地域の特徴として、同じ傾向である。昭和 55 年を境に人口も在地系と新興系の人口比は、1 対 2 で既に逆転し、新しい気風が入っており、今後が楽しみである。現在の人口は、15 万 5 千人 (宗像市・福津市) となる。

子供のころは、宗像神社の放生会（秋季大祭）に参るのが、1 年のうち最高の楽しみであった。宗像以外の人々は不思議と思われるかも知れないが、結婚式を宗像大社で挙げる人々が今でも多い。氏神が身近に感じられる土地柄である。それでも、戦前は国家神道下で「裏伊勢」と自称し、戦後は「田島さま」、復興後は「むなかたさま」となり、時代の要請と共に変容する。したがって、神社祭祀も左右され、昔のままでない。沖ノ島に女性が入るとと、「やきもちをやく」と云う迷信は、戦後に創作された話である。これも宗像神社の復興によって、生まれたものである。近年も世界遺産事業に伴い、新たな迷信が創作される。悲しいことである。神様は昔のままで変わらないが、人が歴史を創作する事例である。神道が今日まで続くのは、各時代に要請に応じて変化するからである。

佐三翁は、教育にも熱心であった。昭和 32 年、徳山製油所を 10 ヶ月のスピードで完成させ、世界を驚愕させた。翌年に福教組の勤評闘争が開始され、昭和 34 年に宗像で組合闘争が起こる。佐三翁は、宗像神社復興の途中、勤評闘争の激化をいたたまれず、『再興宗像』、宗像神社の『社報宗像』などで、教育郡宗像の再生に檄を飛ばす。さらに、直接的に宗像郡民に伝えるために、講演会のことあるごとに、教育再生と人材育成の重要性を語った。講演会や紙上での宗像教育の重要性を説き、当時の混乱する世論と戦う。自己体験に基づく、日本人にかえれ、日本人の世界的使命、人間尊重を説いた。これは、「正しい道を歩いていれば、敵もそのうち味方になる」であろうか。昭和 34 年～昭和 44 年の出来事である。

そして、福岡教育大学の誘致、統合を実現した後に、出光丸の竣工を日本の将来を担う中学生にも出光丸を見せたいと、宿泊や交通費もすべて会社で負担、全国の中学生 15,000 人を招待する。佐三が発案し、11 ヶ月の日時をかけて周到に計画され実行された。その目的は、「次世代の日本を背負う若い人達に、日本民族の優秀性と世界的使命を教え、夢を与えたい」であった。経済人でもあったが教育にも熱心であった。正に、自分の意思を貫く走るローン・ウルフである。

ところで、出光佐三が、宗像神社復興に人的・金銭的支援を実施したのに、“境内に自分の記念碑的なものをのこすな”が気になっていたが、これは、宗像神社復興期成会の母体が宗像会であり、戦後も出光兄弟は「宗像人・宗像会の一員」とする意識が強いと思う。復興事業碑は、境内外の祈願殿の横にある。

早川勇の人徳から、宗像会が生まれ、有能な人材を輩出し、出光も一員と思う意識が強く、自らの事業理念とも合致し、宗像神社の復興が「一生の念願」とする発言となったと思う。遺言に、自分の銅像・顕彰碑・施設などを建設するなと伝え聞くが、宗像会の一員意識によるものと考える。

宗像への支援は、宗像神社の復興・福岡教育大学誘致と建設・宗像高校 50 周年事業と体育館への直接的な寄附が、判明するだけでも当時の 8 億円以上である。現在の価値の 2 ～ 3 倍となろうか。惜しみない多額の寄附金は、福岡教育大学の学生奨学金制度、教官への研究助成以外に、城山中学校の旧体育館、旧赤間小学校の図書館、宗像神社宝物館、四塚会館建設、鎮国寺の復興、福津市の東郷神社など施設、さらに、出光佐三が自ら買い集め、神社に寄附奉納した中世の「宗像神社文書」なども多数あり、正確な寄附額はわからない。それは、佐三翁が「寄附、助成のことを絶対他言するな」と釘を刺している。「陰徳」のためである。そして、安易な助成はせず、努力を懸命に積み重ねた人物と見極めた後に、不足分を協力している。ケチでなく、依頼心のみ人間を最も嫌っている。

その目的は、宗像神社の復興と人材育成のための施設充実・教育再生と考えられる。常に、「人」を中心とする人間尊重の精神が貫かれる。

佐三の逝去後も、宗像大社平成御造営奉賛者の銅版には、総事業費 19 億円の内、出光興産並び関係会社、同販売店有志で 7 億円ほど寄附金がある。まだ、航海安全の神、宗像大社への支援は続く。出光の企業理念とされるものは、宗像の風土と教育、宗像会の交流によったものが、基層部分のような気がする。佐三は、これらを独自に特化させ、戦後に宗像地域を引っ張っていく。よく、宗像の子といわれる由縁である。彼は、昭和 44 年の宗像高校講演「日本人の世界的使命」で宗像神社の復興後の将来を語っている。

「今の若い人からみれば、出光の老いぼれが、神様のことを言って大きな金を集めておる、バカだと言われるだろうけれども、私は、そんなことは気にしません。笑われることは覚悟の上で、宗像大社の復興に全力を注ぎます。これが十年、二十年、三十年後に必らずモノをいうのです。日本が世界に出るときに、宗像大社の姿が必ず出るようになる。世間の風評なんか、私は気にしません。」とある。

これは、「正しい道を歩いていれば、・・・」であろうか。47 年後の今日、文化財関係の筆者は、その彗眼と洞察力に圧倒される。

佐三は、晩年に事業の芸術化を目指し、出光の事業はかくあるべきとした。

「真の芸術と真の事業とは、その美、その創作、その努力において相一致し、その尊厳と強さにおいて相譲らざるものである。美の創作に対して努力するわれわれが、事業の芸術化を信じ、これを主張するようになったのも当然の結果である。出光の事業は誰が見ても美しからねばならぬ。醜悪なる、単なる金儲けであってはならぬ」

出光の事業は、「誰が見ても美しからねばならぬ」は、今後、宗像が世界遺産登録により、彼の事業が芸術化され「永遠の日本」・「日本人にかえれ」の出光佐三翁の名言ともに「事業の美」として継承されるのだろう。今後も、出光興産の故郷の地として宗像が意識され、宗像大社が航海安全の神として、祭祀と支援が続くのだろう。

筆者は、宗像での彼の事業は、宗像神社の復興が「国家のために尽くす」の核であり、武丸正助翁顕彰が、親孝行・恩が「日本人の持つ互譲互助の精神、恩を知る」などの宗像の農耕社会に由来するものである。合せて、宗像郡にあった健康保険制度のモデルである江戸時代から続く「定札」(じょうれい) の相互互助精神が加味されると思う。福岡教育大学の誘致は、明治時代からの宗像会の教育を核とした人材育成の基盤を、宗像の地に持ってきたと考える。彼は、人間尊重の理念を宗像で尽力し、体現されたとみる。

最近、「海賊とよばれた男」と再び脚光を浴びるが、筆者は、弟の計助社長が『二つの人生』に「周りから“一匹オオカミ”というようなことをいわれるので、その語源を外人に調べてもらったら、ローン・ウルフ（一匹オオカミ）とは [集団の力を借りることなく独立独歩、荒野を進んで恐れないような事業家のこと] だそうで、一般に云われるような悪い意味でないことがわかった」と書かれる。こちら方が、的をえているような気がする。

今日の宗像大社の復興は、出光佐三兄弟の熱意と尽力である。そして、学園都市の流れは、戦前にその要素があり、現在の教育・文化の振興の特質を規定していると見る。

明治時代以降の 150 年を振り返ると、歴史は常に前代に要因があり、次の時代に変容しながら踏襲される。そして、社会の大きな変革があっても、人の基層意識は変わるものでない。宗像会を詳しく知ることが、今後の展望を知る上で重

要と思う。最近、再び東京宗像会が復活する。また、福岡にも宗像会が存在する。明治時代からの同胞意識は、出光佐三、世界遺産の刺激で再び出現する。

一方、平成 15 年 (2003) に、出光真子『ホワット・ア・うーまんめいど ある映像作家の自伝』の中で娘の真子は、佐三について「徹底した儒教的、家父長的男女観を抱いており、妻及び四人の娘を「女こども」として軽蔑しその自立を否定し人格的に抑圧したと」と語っている。また、彼女は、「宗像から夜汽車で持ってきたのだろう」と厳しい批判が痛烈に書かれる。これは、江戸時代以来の宗像の家父長的男女観を引き継ぐ明治精神を機軸とし、民主化しなかったためであろう。お父さん譲りのストレートな内容である。

佐三の人生理念は、明治時代の宗像の価値観を伝えるものであり、出光真子の記事や天皇に対する考え方は、平成の時代には批判される部分もあると思うが、人には一長、一短があるのだろう。

最後に回想を書きながら一文が気になった。『人間尊重 50 年』収録の「私の人生観」である。若い世代に話した言葉である。

「 人生というものは老後にあるのだ。君らが 60 ぐらいなって過去を顧みて、過去 60 年間だったというだけで、一瞬にすぎない。その間に贅沢をしたとか、いいことをとか、反対に苦しんだとかいうことはたいした問題じゃない。ひと思いで消えてしまう。ところが、老後の一時間、一日というものは実に長い。その長い 1 日、1 ケ月、1 年というものを不愉快な思いをして暮らすか、ああいいことをしたと思って暮らすか、これが人生の幸、不幸のきまるところだ。それだから過去は短い、将来は長い、それならば過去にいいことをして将来を楽しめ」

とある。70 歳の時に書かれたものである。出光興産株式会社の『我が 60 年間』第 1 ～ 4 巻は、宗像の近代・現代史を知る上で貴重な資料であるが、佐三翁の人生訓を知る上でも興味は尽きない。

本稿は、歴史の視点で近現代史を取り扱うために、本人自著、本人に近い方々の書き物を多く引用させていただき、実態が正確になるようにした。書き残された方々に謝意を表する。なお、内容が一面的な捉え方があるかもしれないため、関係者に失礼があったら、御容謝戴きたい。敬称は、偉大な先輩たちであり、失礼とは思ったものの略させて戴いた。

昭和 30 年生まれの筆者は、宗像神社の復興と変化を身近に接することができ、遷宮大祭で厳かに式典に出席する佐三翁を見たことがある。伝説のように語られた彼が、なぜここまで宗像に尽力するのかが、いつも不思議であった。

本稿は、余り触れられることのなかった宗像の行動（事業）とその影響を明らかにする事に努めた。今後も新たな資料や証言が見つかり、訂正をする箇所も見つかるかもしれない。しかし、これだけ恩恵を受けているのに、私より詳しい方がいるはずなのに、地元で纏められものが少ないのは、いかがなものか。

地元の方々に、佐三翁の「宗像の心」が知られ、良い部分を受け継がれることを願望する。今後も出光関連資料を収集して行きたい。

謝辞

本稿作成にあたり、出光佐三、倉田主税、出光計助、石田正實、出光昭介、滝口凡夫、久保輝雄、葦津嘉之、柴田節郎、占部玄海、堤宏の各氏の文章を引用させて戴いた。特に、出光興産株式会社には佐三翁の写真掲載の御快諾を戴き、麻生和正氏、出光興産株式会社の海老敏幸、小林洋志の両氏にお世話になった。

地元の井上正文氏には、宗像市商工会、公益法人　宗像青年会議所に『出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985 年の写真・引用に御配意を戴き、神山義信氏に貴重な写真の提供を頂いた。また、宗像市教育委員会、宗像高校四塚会館には写真許可・収蔵資料を再録させて戴いた。末尾の講演録は、伊豆善也氏に収録の御承諾を賜り、佐三翁について有益な御教示を受けた。

高校時代からの先輩である澤田康夫氏には、今日まで温かい指導を受け、学友の鎌田隆徳、山中紀美子氏には 40 年前の忘れ行く記憶を思い出してもらい、桑田和明氏には今後の道しるべを教えて戴いた。平松秋子、矢田公美両氏には、田熊石畑遺跡の保存を契機に活力を学んだ。さらに、矢田　浩、岩熊　寛、尾山　清、原　俊一、白木英敏、山田広幸、池ノ上宏、耜田雄一、川畑和弘、伊藤美智留の各氏、赤馬塾の方々には、資料提供に御協力を戴いた。本稿の元になった『紀要』であるむなかた電子博物館紀要委員会 (平井正則委員長) に掲載の快諾を賜り、伊津信之助先生、編集実務の宮川幹平先生には長文を編集・校正等でご尽力を戴いた。なお、伊豆幸次氏に書簡を戴き、誤記を指摘され訂正した。未公開の出光佐三翁の両親の写真等を頂き、赤間の奥深さを知った。記して感謝を申し上げる。

最後に赤馬塾の中村哲一郎氏には、本書の啓蒙の役割を深く理解を頂き、御配意を賜った。深謝いたします。

なお、原文に現在、不適切な表現・語句が含まれるが、歴史資料としてそのままとした。しかし、□は記載しなかった。また、市町村名は、当時のものである。ちなみに旧宗像郡は、現在の宗像市 (旧宗像町・旧玄海町・旧大島村)、福津市 (旧福間町・旧津屋崎町) の 2 市からなる。

資料　講演録　　**昭和 44 年 4 月 20 日　宗像高校体育館**

日本人の世界的使命

ー先生の尊さを教えた宗像の教育の復活を望むー

出光佐三

1、外国の個人主義、権利思想は時代遅れである

本日は、なつかしい故郷に帰りまして、みなさまにお目にかかる機会を得まして、ありがとう存じました。

この宗像という土地は、戦前は日本の教育の土地として、一頭地を抜いておったところであります。日本の教育のあり方が、世界の混乱に対して今日、すべてを決する問題になりましたので、そのつもりで宗像人として熱意を示されんことをお願いするために参ったようなわけであります。

今日の世の中ぐらい簡単になった世の中はありません。これを、複雑に考えて理屈ばかりいっておれば、これくらい複雑な時代はありませんが、簡単に考えれば、これくらい簡単な時代はありません。

これはどういうことかと言うと、今日の世界は、個人主義、権利思想、自分のことばかり考えて権利を主張する、その結果対立闘争して行詰ってどうにもならなくなっているということです。そしてそれや救うものは何であるかと言えば、すこぶる簡単なことで、お互いに譲り、お互いに助け合う、互譲互助の精神であります。これが、外国には全然わからないのでなく、日本の人も、もう、わからなくなっておる。この、わからなくなっておる。互譲互助の精神を復活すれば、それで世界は平和になるということです。

それでは、個人主義、権利思想が悪いのかということになりますが、決して悪いのではありません。ただ、時代遅れであるということです。

戦後おこったことに、二つ大きなことがあります。

一つは交通が非常に早くなって、世界中を1日で廻れるようになっておるから、世界は福岡県よりも狭くなっている。次に核爆発が発明されて権利思想で対立闘争しておれば、それが頭から落ちて世界の人類が全滅するという、この二つのことです。

交通が非常に早くなって、世界が狭くなった。そこに百数十の異民族が住んでいる。それで、個人主義、権利思想で対立闘争することは、一つ、許されない、時代遅れであるということで個人権利思想の善し悪しを論ずる余地がなくなっておるということです。そういう簡単な時代なのです。

そしてこの権利思想で行き詰った世界を救うのは、日本の互譲互助でありますが、今の若い人に、互譲互助といっても、聞いたこともないという人がおります。

2、譲る」ということは外国では権利の放棄、邪道となる

「 譲る」ということは外国では、罪悪であり権利の放棄であり、卑屈であるということになっている。

日本では、互譲互助は道徳の基礎をなしておりますが、外国では罪悪となっておる。どうして、そういうことを、私が知ったが知ったかと言いますと、十年くらい前に、日本で世界宗教史学界が開かれて、世界各国から 400 人ぐらいの人が集って会議をやった。その席に、私が引っぱり出きれて、簡単に話をしたことかあります。

その時に私は、日本の民族性のいいところを話したのですが、そのあとで一部の学者が「 今のはいい話であるが、時間が短くて不十分であるから、出光の会社に行くから時間を与えてくれ」といって、2 ～ 3 日あとに十数人の各国の宗教家がやって来た。

そして、いろいろ話をしておりましたら、私の会社の経営のあり方、日本民族の道徳、徳のあり方については感心して聞いておりました。

ところが私が、お互いに譲り、お互いに助ける、という互譲互助ということが日本にあることを話したところ、みんなが顔色を変えて「 譲るということは、けしからん、それは卑屈である、権利の放棄である、邪道である」と言って総立ちになって攻撃してきた。私は、これは何ということかと思って答弁のしようもなかった。

そのとき私の会社が、歌舞伎座の隣にあったので、前に交叉点がありますから交叉点を指座して、「 あれをご覧なさい。あなた方が権利を主張して、俺の車が先だ、イヤそうじゃない、俺の車が先に入ったのだといって権利を主張したために、車が埋ってニッチもサッチも動かなくなったじゃないですか。そこで、赤いランプが出て、待ちなさいといわれる、これか譲るということなんです。そして、次は青いランプが出て、さあ、いらっしゃいとなる。これが助けるということなんです。これが、互譲互助のあり方なのです。自分らの権利思想の行き詰まり、互譲互助の手段をとり入れて解決しておいて、あなた方は何をこうか」と話をしたところ、黙り込んで話はすんだのです。

互譲互助は平和のもとであり、日本では道徳の根源である。お互いに、いたわり合うということです。殊に九州の人は、この気持ちが強いのです。それが、外国では、権利を放棄することになる。

外国人は、強い者は絶対に譲りません。これは、私どもが外国の会社と商売をしてわかります。下から出ていったら何をするかわからない。上からいった方がうまくいく。だから、私の考えるは、外国人は、譲るということは、強い人に降服する、強い人に征服される、ということだろうと思うのです。

日本の譲るということは、弱い人を助けるために、強い人が譲るということです。外国では、弱い者は絶対にやっつけられるの違いなのです。多少の例外はありますが、私はあらゆる国の財界、政界、哲学者等に会って話しますが、日本の譲るという意味について理解した人はひとりもありません。そんなの人が異口同音、卑屈で、けしからんと言って怒ります。これが、外国の思想と、日本の民族性との根本の違いなのです。

この間も、ニクソン大統領がヨーロッパを訪問するときに、お互いに話し合おうと言っております。ところがアメリカ人がお互いになんてこと言うはずがないのです。自分の権利を主張しながら、

お互いに話し合おうと言って声明しておる。話し合いをするときに、権利を主張し合っておって話し合いができますか。お互いに譲って、お互いの立場を考えて、強い者が譲るときに話し合いはできる。あのパリの会議（ ベトナム和平会議 ）をみてご覧なさい。いつまでたっても自分の権利ばかり主張して、人を責めることばかりしておる。自分が譲ることを知らないから、行詰って、どうにもしようがない。これが、いい見本なのです。いかにお互いに話し合おうといったって、自分の権利を主張しておっては、できっこありません。

そして、ニクソン大統領は帰国して、更に、お互いに相談しようと言っている。相手を責めることばっかりしていて、信頼ということがありますか。自分が譲って相手を助けるということに信頼ができてくる。権利ばかり主張して信頼ができるということは、ありうべからず言ことである。これらのことは、ニクソン大統領が率直に、日本のお互いに譲りお互いに助けるということを、言葉は知らないけれども、その事実を、欲しがっておるということを示していると思います。

今、世界の後進国を、助けて引上げるのが世界の常識になっております。弱い者を助けてよくしてやるのが、互譲互助であり、それを世界が欲しておるということなのです。

互譲互助ということは、わからないけれども、そのあり方を探しておるというのが、今日の世界の情勢です。権利思想で行詰ってどうにもならなくなれば外国も自分で互譲互助のあり方を探し出すようになる。それまでに、日本国民が互譲互助のあり方を各方面につくっておけば、世界の人が、それを見て、なるほど、こういう行き方があるかということで、日本人の姿に見習うようになる。その時にはじめて人類の福祉世界の平和が出来ると思うんです。これが、日本人の世界的使命であります。

3、日本と外国の遠いはどうして出来たか

それならは、互譲互助と権利思想との違いがどうしておこってきたかということであります。

これは、すこぶる簡単なことです。われわれの祖先は、無欲であるのに対し、外国のエンペラー、キングは我欲である。自分の欲のために、いい者も悪い者も亡ばしてしまう。相手の善し悪しにかかわらず全部征服してしまう。そして、搾取する。自分はぜいたくの限りを尽して金殿玉楼に住んでいる。日本は、そうではない。無欲の祖先であるから、いい者を育てるために悪い者を亡ぼされたということです。いい国民のために悪いことを無くすそうというのが政治の理想である。その政治の理想を数千年前から実行されておったことです。

ところが、外国をみてご覧なさい。征服して、搾択して、自分がぜいたくの限りを尽しているから、次の人が、また出てきて、征服するかもしれないので、城壁の中にこもっている。濠を廻らし、その中に立てこもらなければ、亡ぼされる。日本の皇室は京都をご覧になれはわるが、二千年近く、平地に無防備でいらっしゃるこれが何よりの証拠である。外国城壁の中にこもっても、長くても二、三百年しか続いていない。エンペラー、キング、皇帝、国王いうものは、二、三百年しか続いていない。

日本の皇室は平地に無防備でいて二千年続いておられる。この全く対照的な形どう見るかということです。エンペラー、キングは我欲のために征服して搾取しているから、外国の国民からいえば、私どもにも権利がありますよ、自由がありますよと言って、ここに権利思想、自由思想がでてくる

のは当然であります。

ところが日本では明治維新前には、自由とか人権とか言うことは必要がなかった。これはお互いに譲りお互いに助けるということによって、お互いの自由を尊重しお互いの権利を尊重しておったということで、自由とか権利を口にする必要がなかった。ただ、明治以後になって、日本にも封建制の悪いところがあったから、自由民権思想をとり入れなければならないということであったのです。

日本では、さっきから申しますように、互譲互助という精神があって、よく働いて質素に暮し余力をもって人のために尽せと言われた。働いて自分のみに報いずに人のため尽すのが互譲互助であり、そうしてこそ社会が幸せにいくということなんです。

それから、無我無私。人のために尽すのが無我無私であります。互譲互助は、そこからでております。

次に、恩を知るということ。恩を知っておるのは日本人だけです。征服され搾取されている者に恩を知るなんてありません。外国のようには征服と搾取とか、あるいは虐殺なんてものは日本にはありません。生命の安全はいつも皇室によって守られ、国民の財産が没収されることもない。生命財産の安全を守ってくださる皇室に対してありがとうございますというのが、恩を謝することなんです。それで、われわれの祖先を神に祭って恩を謝しておる。日本の神様は、みんな、われわれの祖先であり人間であります。外国では多少の例外はありますが、搾取された人を、神様に祭る気はない。だから外国の神は天にまします神様であり哲学の抽象的な神が、天にまします神になっている。日本は具体的に、自分らの祖先に恩を謝するために神に祭っておる。日本の神と外国の神の根本的に違う点です。

それからこの恩を知ることからお互いの恩、社会の恩を知っておる。あなた方が、今日暮らしておられるのに、自分の勝手な暮しをしておられますか。お互いに助け合って、暮らしておる。お互いに助け合って、暮しておる。お互いにということから、自分勝手なことをしてはいけない、個人主義、権利思想のような自分の勝手なことだけを言ってはいけないということになる。

それが日本では昔から義理が悪い、人情に反するという言葉になっているのです。この義理人情という言葉は外国にはありません。考えられないことです。

それから犠牲という言葉も外国では、搾取されるということです。日本の犠牲はそうではない。ほかの人の恩になっておる、国の恩になっておる、社会の恩になっておる、だから自分から進んで恩をお返しするのが、社会の恩であって外国とは全然反対である。

こういうふうに日本と外国とをみてみると、恩を知るということについては、外国には日本の恩に相当する事実がない。したがって字も、あて字である。義理人情は全然事実がないのみならず字もない。無我夢私も、外国にはありません。また互譲互助は罪悪である。ということで、日本の道徳の根源になるものは、外国には全然ないということです。このように外国と日本とは数千年の間に根本的に違ってきたのであります。

4、日本は道徳の国、外国はモラルの国

また日本は道徳の国でありますが、外国はモラルの国です。

これは亡くなられた鈴木大拙先生が本にも書いておられるし、私もたびたび聞いたのですが、モラルというものは書いたものです。さっきから申しますように、征服して搾取してぜいたくをしようというエンペラー、キング、皇帝、国王が大衆を治めるために、法律をつくり、規則をつくり、組織をつくつた。その法律、規則、組織に従うことがモラルである。これに対し道徳は、書いたものではありません。人間がお互いにどうしていけば、幸せにいけるかという、人間の真心から、自然と湧き出るものが道徳である。そしてそれには、こうしなければならない、ああしなければないというように人間が判断することです。モラルは書いたものです。それで、合理的とか順法精神はモラルから生れてくる。書いたものに違反さえしなければ何をしてもいいということです。しかし考えてごらんなさい。自分の給料を上げるために鉄道を止め、郵便を止めて、関係のない一般の国民に迷惑をかけるのも、法律上からは合法的であり順法精神であり、モラルの上からは差支えないかもしれぬ。しかしながら、国民の道徳から考えてみれば、そんなことはしてはいけないということは、はっきりしている。

もし、日本民族に道徳の観念が昔のままあるならば、仮にそれが合法的であり順法精神であっても、そういうことはやらない。お互いに話し合いでゆく。しかしモラルからみると、そうじゃない、法律に反しなければ何をしてもいいということになる。子供を育て、道徳のあり方を教えることが、日本の教育でありますが、その教育を司つてる先生がストライキをやって座り込みをやる。これは順法精神で少しも差支えないですが、一般の日本人からみると、それはいけませんということです。ここにモラルと道徳との違いがあります。人間が判断して、こういうことはしてはいけない、こうしなければならないというのが日本人の道徳であります。外国では法律や規則の書いたものを見て、この字にあてはまるではないかと言って、無理に合法的、順法精神の下に、なすべからざることをやっておる。

それなら、そういう立派な国民であったのが、どうして今日のようになったかということです。

今では、自由国家は、日本を負かしたことは間違っておったと後悔しております。しかしながら、負かしたときには、日本が二度と足腰たないようにしようというのが占領政策の狙いでした。日本人の偉いところは、お互いに力を合せることです。これを外国からみれば、皇室を中心として一致団結しておる、和をもって尊いとするあり方です。この和の力を根本から崩して、対立闘争するようになれば、日本人は独りで自滅するということです。それが、占領政策の狙いで実に巧妙な政策であった。

そこで占領政策の第一は、一致団結の中心である皇室の尊厳を傷つけたことです。今日の若い人に聞けば、皇室は豪族の一つてあって他の豪族を征服したものなり、と言います。これは外国のエンペラー、キング、皇帝、国王のあり方です。若い人は占領政策によってそういうように教えられているから、それが先入観になって、なかなかとれない。私は日本の皇室は外国のエンペラー、キングと違うことや随分言ってきかせるけれども、わからない。それならば、その青年が悪いかというと悪くはない。ただ皇室だけはなかなか理解出来ないでそういうことを言う。

この皇室の尊厳を否定するためにつくられたのが新憲法であろう。新憲法をつくって、日本の大黒柱である皇室を叩きこわそうとしたのです。戦後の憲法ができたときには、私は貴族院議員でありましたから、よく事情を知っておりますが、あれは一夜漬けの新憲法です。日本の政府の方

で新しい憲法をつくって、それを議会にかけようとしておった。

それを進駐軍が聞いて一夜漬けで、誰が書いたか知らないが、英文のものを押しつけてきたのです。当時、万能の占領軍の押しつけですから、拒むわけにいかない。やむ得ずに議決して、他日われわれの手で改正しようということを申し合せたことを、はっきり覚えております。

一国の憲法を誰が書いたかわからない、しかも外国の字で書かれたものを訳してつくって、そのまま守っておるということがありますか。われわれの家の家憲をよその人に書いてもらって、持っておる人がありますか。どういうふうに改正するかは別にして、一応は議会にかけて再検討すべきものですが、今の議会は、共産党と保守党との戦場です。国を亡ぼすか守るかの戦場である。その戦場で憲法改正なんてことはできない。もし、政府が憲法を改正するということを口にしたならば、蜂の巣をつついたようになって問題がおこる。それで、いまは憲法改正ということはできませんが、いずれ今後、われわれ国民の審議によってきめなければならない。

占領政策の第 2 番目として、日本が二度と立たないようにするために、新教育法をつくって教育に対立闘争の思想を入れた。

日本の教育ぐらい尊いものはない。私が宗像に生れ、宗像の尊い先生の教えを受けたから、私の今日があるので、この先生の尊さを知らなかったなら、今日の私はありません。それは、後で申しあげようと思います。この尊い先生によって私ができており、日本民族ができておる。その先生のあり方を対立闘争するようにすれば、二度と再び日本は立ち上がれないということです。

先年、私が文部省の人づくりの委員会の特別委員になったときに、誰かが「教育勅語の中に日本の道徳が説いてありますから、あの道徳を復活してはどうですか」と言われたときに、委員長は、「教育勅語に書いてある道徳は、新教育法の中にありますから心配する必要はありません」と言った。私は、これを聞いて、けしからんと思ったから立って、「新教育法の中に、日本の固有の道徳が説いてあると言いますが、実際において、日本の道徳は抹殺されておるではありませんか。互譲互助とか、恩心を知るとか、義理人情というものは、みんな、けしからんと言われているじゃありませんか。そういう事実において抹殺しておきながら、教育勅語の道徳が新教育法に盛られていることは、どういうことですか」と質問したのですが、答弁ができなかった。そして、これについては審議しない、ということになってしまったのです。

この新教育法の中の道徳は、さっきから言うところのモラルであります。書いたものです。日本の道徳は書いたものではない。人間の真心から湧き出るものである。だから、日本は徳の国、道徳の国であり、外国は権利思想の国なんです。この根心的に違うものを、辞書でつないでおるところに、大きな間違いをおこしているのです。

例えば、天皇をエンペラー、キングと訳しておる。数千年も無防備でおられる平和の中心である天皇を、征服者であって、二、三百年しか続かない城壁の中に立てこもっておるエンペラー、キングと訳しておるところに大きな間違いがある。これは日本人として考えなければならない大事な問題と思います。

占領政策の第 3 番目として、日本の産業界に対立闘争の思想を入れて、和の力を破壊するために、労働三法をつくったんです。こうして、占領政策は日本を自滅させるために実に巧妙な、敵ながら天晴れなやり方をとったのです。

5、世界を驚かしている産業界と、世界に醜態をさらけ出した教育界

ところが、ここに面白い史実がある。現在同じ日本の中に二つ、白と黒の史実がある。白というのは、世界を驚かせている産業界である。戦争に負けて、今日のような産業の発展を夢にも思っていなかったところの、その日本が、僅か二十数年にして世界 2 番目の産業国になったことは、どういうことですが。これと反対の黒が教育界であって、いまだに占領政策に腰が抜けてノタ打ち廻っておる。そして、世界に醜態を表しておる。世界に醜態を表しておる教育界と、世界に大きなプライドを示しておる産業界と、どうしてこの二つができたかということを、皆さん方は考えてみて下さい。

産業界の人はバカじゃないです。自分のことが自分でできないようでは、会社は潰れてしまうので、自分のことは自分でやります。でありますから、占領政策によって労働三法をお押しつけられ、対立闘争の組合の思想が入って、一応組合をつくって対立闘争するけれども、最後には、会社のため、自分の仕事のために協力するという和の力が、産業界にはでておるということです。言いかえれば、占領政策の労働三法によって植えつけられた、対立闘争の組合のあり方を、完全に消化咀嚼して自分のものにしたということです。

日本には、天然資源は何もありません。あるものは人間だけです。その人間が自分のためのみに働かずに、互譲互助、お互いの力を合せて人間の力を発揮しておる。日本人は金を離れた勤勉さをもっております。私の会社では社員が時間外手当をうけとらない。これは金を離れた勤勉さをもっているからです。世間のため、石油消費者のためという愛他の精神です。ただ自分の給料を上げるために、という労働を切り売りする観念がない。これが日本人であり、人的資源となって、その力を発揮して世界の第 2 番目の産業国にしたということです。

これに反して、教育界は親方日の丸です。直接自分に関係がないから、組合をつくれといわれてつくって、占領政策に完全に叩きのめされて足腰が立たず、未だにノタ打ち廻っているということです。

私はよく言うのですが、獅子は子を産んで 3 日にして、その子を千仞の谷につき落す。そして、本当に獅子の王座につく力のある子は、自分の力で断崖絶壁を乗り越えてくる。そして獅子の王座について百獣の王となる。産業界は、それである。敗戦によって谷底に蹴落された。天の試練によって蹴落された。けれども、自分の力で登ってきたのが産業界のあり方です。

ところが、教育界は、谷底でノタ打ち廻って未だにとヒョロヒョロしておる。しかしながら、これは先生が悪いのではないのです。先生はおとなしい方なのです。私の知っておる限りでは、先生は実に従順でおとなしい。そこが子供の教育に適している性格である。しかし半面、おとなしい先生であるから、引きずられておる。そこで、引きずられておる先生をいたわって、日本の教育はこういうものでありますよ、日本民族を育てるのですよと、激励して谷底から自分の力で這い上がる滋養分を与えて、本当の日本の教育者にしてあげる、これは宗像の人の力であり、教育郡である宗像のあり方であり、福岡県の人であり、日本人全体の責任である。これは抽象論ではありません。さっきも申しましたように私は宗像に生れて、先生の尊さを知っておるから今の私があるということなんですが、それを順を追って申しあげます。

6、「日本人の事業経営」は教育の力によって生まれた

(1)、私は宗像に生れて先生の尊さを知った。

私が小学校に行って間もない頃と思いますが、何かいたずらをすると父に「伊豆先生を呼んで来い」と言われて、私は先生のところに、「お出でください」と使いに行ったことを覚えております。そのときの光景は、今でも頭に残っております。先生は、草覆の小さい家から出てこられた。先生は、背の低い、風采の上がらない方でありましたが、そのときの先生というものは、私には実に尊く見えた。何という尊い姿であるかと子供心に思ってお供をして父のところに来ました。父と二人で座りになって、父は私にやかましく、言って、私の悪いことを告げておりましたが、先生は終始ニコニコと笑って、私をいたわり、父をなだめておられる。ニコニコ笑っておられる先生が、私にとっては実に恐わかった。ガミガミ怒っておる父は恐くなかった。黙っていたわっておられた先生は、実に尊く感じた。これを、未だに忘れることができない。伊豆先生の名前も忘れることができない。これが、日本人の先生と子弟のあり方と思うのです。

それから、古い方はご承知でしょうが、この宗像は教育郡として名校長、名教員をだすので有名であった。福岡県で、こんなに名校長、名教員のでるところはありません。福岡県と長野県が、日本の教育県といわれたくらいに発達した県である。その中で宗像郡が一頭地を抜いて、名校長・名教員を出したのです。

どうして、そういう名校長、名教育がでるかと言いますと、宗像郡には宗像神社があります。その宗像三神という神様のご神徳を受けて、立派な先生がでられるということを常々聞いておりました。子供心に先生の尊さから、私は神の尊さを知ったのです。宗像神社は今年政府の予算がとれて改築になりますが、これを機会に昔の宗像ご三神の姿に戻すことが私の最後の仕事であると決心しております。

しかし、今の若い人からみれば、出光の老いぼれが、神様のことを言って大きな金を集めておる、バカだと言われるだろうけれども、私は、そんなことは気にしません。笑われることは覚悟の上で、宗像大社の復興に全力を注ぎます。これが十年、二十年、三十年後に必らずモノをいうのです。日本が世界に出るときに、宗像大社の姿が必ず出るようになる。世間の風評なんか、私は気にしません。

このように、先生の尊さからご神徳を知り、家庭では父から、「働け、そして質素にせよ」と言われた。怠けたら非常に叱られた。そして、余ったもので世間のために尽くせということを教った。これが、私の一生のもととなっています。これは、やはりご神徳の影響によって日本の醇風美俗を受けて、このような私の家風になったと思います。

それで私の会社にはみんなが働いて、質素にして世間の人のために尽くすという社風があります。これは、私の家風からでております。

(2)、神戸高商で、人間のあり方、事業のあり方を教わった。

もう一つ私が恵まれたのは、神戸の高等商業に入ったことです。神戸の高等商業の学窓から大阪を見たときに先生の尊さ、人間の尊さを知っておる私は、金さえあれば何事やってもいいという大阪の金持ちの有り方を見て、憤慨した。当時日露戦争のあとのブームのときでありますから、

買い占め、売り惜しみをやって投機によって金をもうけることが、事業家の偉い人であるといわれた。投機によって金をもうけることは、一般の消費者を犠牲にすることです。

そして、もうけ金で目に余るようなことをやる。これは、人間の尊さを知っておる私からみて、けしからん、社会は人間がつくつたものである、尊い人間が中心にならなければならない、それを、黄金の奴隷になるとは何事だと言って、このときに、「黄金の奴隷になるな」ということ言ったのです。もう一つ、私か恵まれたのは、水島鉄也という校長であります。正金銀行におられて世界の事情、社会の難しさもよく知っておられる方ですが、病気で銀行を辞められて、神戸の高商の初代の校長になられた。

講義を聞いたことは一回もありませんが、われわれ学生を実子のごとく育てられた。家庭の事情から本人の性格を調べて適当なところに就職の世話をされ、就職後も呼びつけて、どうだと聞かれたり、就職先の会社にいって重役に、その子供の様子をきいたりして、本当の、親が子供を要するような愛をもって育てられた。社会の中心になる尊い人は、愛の手によって育つということを私は教えられたのです。そこで、私は開店と同時に、水島先生に見習って社員を愛する形をとって今日まできておるわけです。

それから、内池簾吉という先生に「商売は金もうけではないぞ、商売は社会のために配給の事業を司るのだ」と教わった。それで、私の会社は消費者のための石油業、あるいは、工場のあるところでは、市民ともに栄える工場ということで、いつも相手に対して自分が尽す、という方針をもって実行してきている。これが、やはり内地先生の教えの尊さから出ておることなのです。

7、日本人としての出光の経営のあり方

神戸高商を出て、二年間丁稚奉公をしてそのあと一人で門司に行きまして、出光商会を始めたのですが、そのとき高等小学校をでた子供をおかあさんが連れて来られて、どうかこの子を頼みますと言われたときに、水島校長の顔が浮かんできて、このおかあさんに代って、この子供を育てようと思った。使おうと思ったのではない。育てようと思うからやめさせない。困難にぶっつかってやめる子供はダメです。やめさせないから、これが、今では首を切らないことになっております。したがって定年制がない。組合もいらない。それから出勤簿もない。出勤簿をとろなんて人間侮辱ですよ。自由に働くためには出勤簿はいらない。労働の切り売りをやらないから、給料は生活の保障となる。それで生活は安定しておる。それならぜいたくをしておるかというと、そうではない。私の会社の社員は終戦後から徳山製油所ができる十年間は食うものも食わずに働いておる。けれども、社員は耐乏生活に甘んじて頑張り、耐乏生活もまた生活の安定なり、というところまでいっている。その代り、私は生活の安定の基礎である家を社員に探させることはありません。終戦後、千人の人が帰って来たときも家だけは社員にあてがっておる。

石油カルテルからいじめられ、政府からもいじめられたために、食うものも食わず耐乏生活を十年やってのち、昭和 32 年に徳山製油所ができて、はじめて普通の生活に入ったのです。私の会社で何か、大事件が起こるときに支店長や幹部の会議で開くと、返事が面白い。あの耐乏生活に入ったらいいでしょう、という一言ですべて解決する。それで何も言うことはない。これが耐乏生活も生活の安定であり、同時に耐乏生活の力を、みんなが知ったということはない。

それが戦後、労働基準法によって時間外手当をやらなければなりませんから、やったところが、誰も受け取らない。のみでなく、時間外に働かなくなった。そしてその言い分は私どもは社会国家のため、消費者のために働いておる、仕事が残ったのでやっておるのであって、労働を切り売りするために残ったのではない、と言うんです。それで今はやらないことにしていますが、時間外でもどんどん働いております。こういうことは、外国の会社は想像もできないことなんです。これは日本人だけです。

こういう私の会社の日本人らしいあり方が出来たのも、全く、人間の尊さを伊豆先生から教わり、人間のあり方を父に教わり、水島先生から、愛のあり方を教えていただいたのがもとです。いいかえれば教育の力によって今日の自分があるということです。だから教育の力によって日本人が世界の使命を果たすことになるわけです。

8、終戦のときに私が言ったこと

(1)、負けたのではない、天の大試練である、本当の日本人に帰れ。

私が終戦のときに予言したことがあります。そのとき、バカだ、□□□だ、と言われました。

それはどういうことかと申しますと、明治時代は日本が立派であったが、大正時代は世界各国が命がけで戦争をやっているときに、日本は中立の立場で、船を造って金もうけした一夜成金とか、あるいは武器を作り高く売って懐手をして金をもうけたような、働かずして金をもうけた時代です。働かずして金をもうけるくらいに人間を冒瀆するものはありません。それが、思想的に日本の互譲互助とか、他人のために働く、という根本の思想を崩して、次第に軍部、政治家、財界の一部の野心家に引きずられて、今度の戦争になったということです。

戦争が激しくなるにしたがって、私は日本もこれで亡びるかと思っておりましたが、戦争が進むにしたがって、第一線で働いている本当の軍人は実に立派な軍人である。日本の武士道に恥じない、清廉潔白にして、責任感の厚い軍人である。それから、第一線で働いいておる国民、これまた、実に立派である。銃後を守っておる国民も、また、立派である。これを見たときに、この戦争は日本民族性が、全国に残っておることを示したものであり、これを見ただけで、この戦争は意義があったと、私は楽観しはじめました。そういうときに戦争は敗戦で終ったのです。それで、私は戦争に負けたという感じはなかった。働かずして金をもうけ、思想的に廃頽した日本人を直すには、並み大抵のことでは良くならない。これは、敗戦というような大鉄槌を加えなければ目が覚めないというので、天のおぼしめしで苦杯をなめさせられたんだ。だからわれわれは戦争に負けたのではない、天の試締を受けて日本人に帰れといわれておるのだということを私は考えた。日本人としで当然の考えができたわけです。

それで終戦の詔書を読めばよく戦後の心得をお諭しになっておられるから、これを、われわれが読んでおれば間違いはないというので、詔書奉読式をはじめました。20 年 8 月 17 日に東京にいる 40 ～ 50 人の社員で集めて、私の会社に祭ってある宗像神社に礼拝して、それから皇居を遥拝して終戦のご詔勅をお読みしました。そして、私かその後でいつたことは、「グチグチ言うな。グチを言わずに日本の三千年の歴史を顧みよ。そして、今から再建に起ち上れ、これは天の試練である」といって、戦いに負けたということは言わなかった。それで、仲間の人々から負け惜しみ

とか、バカだとかいわれて攻撃されました。

(2)、国体の精華を発揮して世界の平和に貢献せよ。

その次に私が言ったことは、今でも不思議なこと言ったと思いますが、「国体の精華を発揮して世界の平和に貢献せよ」と言っている。戦争に負けて、皇室を見失なっているときに、国体の精華を発揮してという言葉を使い、そして、世界の平和に貢献せよと言っておる。だから、私が今言っている日本人の世界的使命ということは、すでにそのときに言っておるわけです。

ところが昨年の明治百年までに、日本人は完全に本当の日本人に帰っておる。あなた方は「そうじゃない、教育界を見てご覧なさい、混乱そのものだ」とおっしゃるかもしれませんが、さっきも言いましたように、あれはからだの弱い、質の悪い獅子の子が谷底でジタバタしているかっこうで、あれに何ができるかということです。しかも教育界が混乱しているために、日本全国に教育熟が盛り上っておる。このまま教育を放っておいていいかということで、いろいろ議論されるようになってきた。これが、本当の日本人に帰る道程であるということなのです。

大部分の日本の青年は非常にいいということです。去年、いろいろの方面からその実体を見せられビックリしました。殊に東京の人が悪いということは定評でありますが、その東京で 20 代の人が非常にいいということをみせつけられました。といいますのは、私は消防庁とか、警視庁や、警察学校などに講演に行って、今の若い人は実に立派であるということをはっきり知ったのです。東京の青年がよければ、地方の青年は無論いいにきまっているから、日本の青年がいいということなんです。若い人は口では「皇室は何ですか」とか、「日本の家族制度は何ですか」、「日本の道徳は目茶苦茶」とかロクなことはいわないけれども、やっておることは立派である。私はこれでいいと思うのです。明治百年を境として、日本人は本当の日本人に帰っておる。私が戦争に負けたときに言ったことが、ちゃんと実現して本当の日本人に帰っております。

9、日本人の世界的使命

明治 101 年の今年から、国体の精華を発揮して世界の平和に貢献せよという時代に入るのです。国体の精華いうことは、さっき申しましたが、私は外国人に理解させるには、京都に連れて行って、御所と二条城を見せることにしております。外国のエンペラー、キング、皇帝、国王は城壁を巡らして、その中に立てこもっているのに対して、日本の皇室は二千年近く平地に無防備でおられる。これこそ平和の象徴はありませんか。しかも皇居の中で実に質素なお暮しておられる。民間の少し金を持った人ならば、もっとぜいたくな暮らしをしておると思うのですが、そのくらい質素なお暮しをなさっておられたことがわかる。外国人はそういう尊い姿を見たことがありませんので、ビックリするんです。皇居を見たあとで、私は外国人を二条城に連れて行って、「これをご覧なさい。これが、あなた方のエンペラー、キングのあり方です。ちょっと一か月の間徳川将軍が滞在するにしても、城内にいなければ身の危険がある。あなた方の国王は、これでしょう」というと「そうだ」という。この御所と二条城の二つを比較して、外国人は驚くと同時に、すぐ日本の国体の尊さというものを理解します。

さっきから申します無我夢中とか、互譲互助とか、義理人情とか、恩を知る、とかいうようなことを教育によって教えれば、それが世界の平和のあり方、人類の福祉を教えることになるのです。

この日本人の世界的使命をやるについては教育郡としての日本教育の先端を今まで歩いた宗像が、教育の本当のあり方を世界に示すことであります。

私は既に世界に出ております。5 ～ 6 年前に「マルクスが日本に生まれていたら」という本を英訳して世界に配っております。何がゆえに資本主義、社会主義、共産主義といった喧嘩しておるか。喧嘩する理由はないのではないか。私が喧嘩しない実績を示しているから、それがいえるのです。

私が、今から 58 年前に門司で仕事をはじめたときに、私は大阪の金持ちに反感をもって、資本主義の資本家の搾取を戒めて「黄金の奴隷になるな」と言って出発しているので、私の会社では搾取はやらせないことになっている。私が資本家として搾取しないことになっている。その一例として、開店と同時に、私は丁稚と二人で給料取りになった。私は一生給料取りです。それは搾取をしないということです。従業員を搾取せず、自由に働かせる。私の会社には、権限の規定もなければ罰則もありません。人事管理というものもありません。人間を信頼しているから必要がないのです。

去年の 2 月にソ連のバイバコフ副首相と話したときに、「罰則がなくて、悪いことをした者はどうするか」という質問がでました。ソ連としては、当然の質問だと思うんです。私は、そのとき簡単に答えた。「私の会社には社員が入ってきたときには子供が生まれたと思うんです。そのときに百人も子供が生まれたのであれば、2 人や 3 人できの悪い子供ができるのはあたり前じゃないか。親がからみて可哀想だと思う。兄弟からみれば何とかしてやろうと思う。それが親子の情であって罰する気にとてもならない」と言ったんです。一生懸命にやってしくじることは、人間のやることですから当然です。私もしくじる。それを社員だけ責めることはできない。まじめに一生懸命にやっておれば、しくじっても罰せられない。それが、日本人のあり方だと思いますが、資本主義や共産主義からは考えられないことです。

しかし、私は資本主義も、社会主義も、共産主義も、否定しないが、鵜呑みにしない。どうゆうことかと言えば、初めから資本主義の搾取をなくして、自由に働かせて能率を上げることをやっておる。また、社会主義の働く人のため、といういいところを取り入れておる。しかし、社会主義は働く人のためといいながら、国営公営が非能率であって、働けないようになっている。それで、国営公営を排斥する。言い換えると、私の会社は、社会主義も資本主義も関係ないんです。それから、私が仕事をはじめてから 10 年ぐらいしても共産主義というものができた。そのときに、私は「共産主義もいいところがあるから排除してはいけない、ただ日本の国体を否定するような共産主義は、共に天を戴くことのできない敵であるが、しかし、主義そのものは排斥してはいけない」と言っております。けれども、共産主義は働く人も、働かない人も、悪いことをする人も、いいことをする人も、同じです。利口な人も、利口でない人も分配は同じです。これは人間には適しない。人間は平等でなく、公平にやらなければいけない。公平と平等の区別のつかない幼稚なものが共産主義なのです。だから、働く人のためには働くようむくいてやって、公平にやらなくてはならない。自由に働いて能率を上げる資本主義のいいところをとっていかなければなりませんが、それが、今やチェコあたりが歩こうとしている道であると思うんです。しかし、実際には、まだ主義者や軍がいますから、そうなっておりませんが、いずれそうなると思うんです。資本主義は、外国ではまだ資本家の搾取が残っていて悪い点があるけれども、今日の資本主義は結構ですよ。搾取する

ような資本家は日本にはおりません。私は 7 ～ 8 年から前から外国の人々に資本主義と社会主義、共産主義と喧嘩する必要はない。私が既に事業経営の上で、3 つの主義をちゃんと消化して仲良くやっているのだから、私の会社の行き方を真似されれば平和に仲よくいけますよ、と言って世界に出ております。しかしながら、そうゆうことをいくら説いたって、さっきから申し上げたように言葉がないのですから、事実で示すほかありません。まず、産業界が日本人の和の力を発揮して世界を驚かす、これは既にやっております。その次に、日本の教育が立派になる。先生の尊さと先生の教えによって、人間が育てられることを示す。政界も、共産主義が減ってきて、日本の国政を真剣に討議する本当の議場になる。今のように喧嘩、なぐり合いの場所でなくて、お互い話し合ってゆく議場になる。そうすると、このような日本を世界から見て、何と立派な国かということになって、外国人が自発的に日本人のあり方を研究するようになる。その時、はじめて日本の互譲互助とか道徳が理解されて、世界の平和、人類の福祉の基礎になると思うんです。そこに、日本人の世界的使命がありますが、その高い尊い使命を達成しなければならない日本人の中で、教育界が一番遅れておりますから、これを何とかよくするように、国民が盛り上がり、殊に宗像の人が盛り上がって、子供を健やかに育てていかれるよう愛の手を伸ばされることが、最も必要な時代になっていると思うのです。これが宗像人に特に課せられた使命でないか思います。

世界は実に簡単なところにきております。私が郷里に帰って、みなさんにお願いするのは、私が先生の尊さを知らされて育ったために、今日の私になっておることを申し上げて、宗像の教育、先生の尊さを今後実現して頂きたいということであります。

講演録は、『宗像の教育をよくする会』事務局長　伊豆善也編集より引用した。

当時、福岡教育大学に学生運動が波及し、全共闘運動 (革マル派) の九州の拠点の一つであった。福岡県高教組の校長着任拒否闘争もあり、教育界混乱の最中であった。佐三翁は、宗像教員から「組合潰し」と言われ、嫌われ者であった。

これが原因なのか、47 年後の今日まで、教職員関係者が佐三翁について書いたものはほとんどない。思想を超えて地域貢献は、公正な評価をするべきである。

当時伊豆は、宗像の教育の健全化を佐三翁に話すと、「それなら俺が話に行く、会場の準備と千人を集めろ」と激を飛ばされたと伺った。佐三は 83 歳。この講演会は、一般住民の千人の聴衆があり、多くの支持があった。以後、健全化が進む。

昭和 60 年に伊豆善也は、『日本人　出光佐三翁生誕百周年記念誌』に下記の通り、佐三翁と宗像関係を回想している。

伊豆　善也 (福岡県議会議員)

郷土の生んだ偉大な巨人出光佐三翁が、明治 18 年、赤間の地に生を享け、95 歳の天寿を全うされました。今年がちょうど生誕百年を迎えられるに当り、宗像市商工会青年部が故人の偉業を偲んで、記念事業を企画されましたことはまことに意義深いものがあります。

出光翁の辿られた、経営者としての巨大な足跡と経営哲学、郷土への限りない愛情とご貢献、宗像大社への深い信仰心、秀れた人生観、世界観などについては広く周知のことで、今更説明を要しません。

その数かずの業績のなかで、私が最も感銘を受けたことは、終戦後の血のにじむ苦闘ことです。敗戦により満州、朝鮮、中国大陸、南方など、海外に営々として築き上げられた広大な石油販売網と膨大な資産を一挙に失われました。そして廃墟と化した国土・混乱する社会経済状勢の中で、千人近い社員だけが残されるという厳しい状況下におかれながら、「出光には海外に 800 人の人材がいる。これが唯一の資本であり、今後の経営を創る。出光は終戦にあわてて馘首してはならぬ」として全員を暖かく迎えられた人間尊重の事業経営理念を格調高く打出されました。

そして「働け、働け、そして人の為に尽せ」との父君の遺訓を忠実に守られ、大地域小売業など信念を貫き、そうして出勤薄なし、停年なしの大家族主義による独特の経営を展開されたのであります。強大な外資系資本と激しく戦いながら、氏族系資本の旗頭として、常に適切な妙手を打ち今日の大を築かれました。私は常々、出光翁の際立った洞察力・決断と実行力、これを支え燃えるような熱情の根源をなすものは何であろうかと不思議に思っておりました。

幸い、晩年の十数年、上京のとき、帰郷されたとき、お会い出来、切々と諭されたことが蘇って来ます。神仏のご加護祖国日本やふるさと宗像の恩、小学校から高商までの師の恩を、眼を閉じられて、とつとつと回想されるお姿が鮮烈に浮んで来ます。恩を報恩感謝のために生涯を生きるという信念こそが会社経営の基本となっていたと拝察しました。そして若年からの血のにじむ努力によって石油に関しては誰にも負けないという自信が裏付けとなっていたと思うのであります。その頂点というべき日章丸のイラン石油買取りの壮挙も、余人の到底なしえない、世界中を驚倒させた痛快事でありました。

そして戦後、テーラーの科学的管理法など欧米移入の経済学が羽振りを利かせていた中で、日本民族の美風を基礎とし、対立、抗争を排した和の経営に徹せられたことこそ出光経営の神髄と思うのであります。今や世界に冠たる経済大国となった我が国の事業経営が世界の注目を集めているとき、出光翁の経営哲学は、日本のみならず全世界に大きな示唆を与えるものであります。

一方、出光翁の郷土に尽された精神的、経済的ご貢献ははかり知れないものがあり、これほど郷土の為に尽くした経営者は他に類を見ないことでしょう。また、宗像の戦後の政治、教育の荒廃を深く考慮され、その健全化のため、陰に陽に尽力されたご功績を忘れてはなりません。就中、教育大を城山山麓に私財を投じて統合、設置されたことは特筆すべきことであります。

私にとりましても、私の今日あるは出光翁のご指導、ご鞭撻によるところ大きく、ご高恩のほど身にしみて感謝しているところであります。郷土宗像の大恩人である出光翁のご遺志を心として健全な宗像の発展のため微力を注ぐ所存であります。

近代日本発展の原点である明治精神の復興が叫ばれている現今、その最大の体現者であり、代表的日本人である出光翁の足跡を私共は反芻し、実践せねばならぬと思うのであります。

宗像の商工業界が種々の難関に遭遇しているとき、商工会の中核体である皆さんが、出光翁の精神を継承して難関を突破され、洋々たる未来を開拓されんことを心より祈願するものであります。

宗像市商工会青年部『日本人　出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985 年より引用

滝口凡夫（つねお）は、「誇り高い美しい宗像を」『社報　宗像』330 号にに寄稿している。佐三翁に「人間として心底まいってしまい惚れこんだ。」とあり、宗像市長になった経緯を記している。下記に引用する。

なぜ市長になったのか、とよく開かれる。新聞社の役員を続けておればよいものを、なぜ好んで苦労の多いポストを選んだのか、という意味である。私が新聞社を退任したころ、出光興産の林史郎福岡支店長がある会合で私をこう紹介した。「 滝口はバカです。バカもバカ、大バカです」ふつうの人間なら市長選挙に出ようなどと考えない。転進したことでソロバンが合うわけじゃないし、電柱だって頭を下げなきゃならん。あえてそんな道を選んだ滝口は大バカだ、というのである。林支店長は宗像市赤間の出身である。あとで「 先輩をバカ呼ばわりして済みません」というから、私は「 いや、ありがとう。りっぱなあいさつだった。まったく君の言うとおりだけど、大バカの元祖は出光佐三店主だよ」と答えた。

私が市長選に出ようと決心した理由は、最終的には「 宗像か好きだから」と言うしかない。一途にそれを押し通して選挙に出た。宗像のことを私に教えてくれたのは、出光佐三店主である。新聞社の東京支社に勤務していたころ、もう 20 年ほども前だが、店主を囲む勉強に参加させていただき、宗像大社のこと、そして日本と日本人のあるべき姿を、繰り返し、繰り返し教えられた。

私なりに、店主から受けとったものは、その後に一冊の本（「 創造と可能への挑戦 - 出光佐三の事業理念 -」昭和 48 年 ）にまとめさせていただいた。店主の宗像を思う心、そして 90 年を超える人生、ただ一筋におのれの信念を貫き通した足跡に、人間として心底まいってしまい惚れこんだ。

その歩みを詳細に述べるだけの紙面の余裕はもちろんないが、出光佐三は稀代の大バカなのであり、大バカだったからあれだけの仕事ができたのである。私も大バカと言われたことが、本当にうれしかったのである。

宗像は福岡、北九州という二つの百万都市の中間にあり、北部九州大都市圏の中核、結節都市として新しい発展の時期を迎えている。21 世紀に向けて新しい地域づくりの基礎を築くことか、いま宗像に住む私たちの責務である。立候補を決意し政治活動を始めたころから、「21 世紀とか地域づくりとか言ったって票にならん。」ゴミとか福祉とか婦人問題を取り上げろ」と、なんども忠告を戴いた。

ありがたい、適切な助言だから大いに参考にさせてもらったが、21 世紀を語ることはついにやめなかった。佐三店主の顔が私の脳裏にチラチラ映り、ガンコ一途さを通させたのである。

私は、誇り高い、美しい宗像、を築きたい。もちろん市、郡一体の宗像である。

・滝口凡夫 1988 年「 誇り高い美しい宗像を」『社報　宗像』330 号

瀧口凡夫は、昭和 63 年 (1988) ～平成 12 年 (2000) の 2 期 8 年、宗像市長を勤めた。昭和 3（1928）年に、福岡県宗像郡宗像町（宗像市）に生まれる。昭和 26 年（1951)、九州大学経済学部卒業、西日本新聞社に勤務する。

福岡県立宗像高等学校同窓会　ー東京支部略史ー

麻生和正氏から、宗像高等学枚（宗高）同窓会東京支部の略史を戴いたので、東京の在京宗像郡人会の記事があり、下記に引用する。

概観　平成 23 年 (2011）頃、有志の間で「同窓会の歴史をまとめておこうではないか」という話がもち上がり、永年この会の世話役を勤められた麻生和正氏を中心に会誌編集の方針を話し合いまとめられた。

半世紀以上に及ぶ、そうした宗像の歴史の変遷同様、宗像高校同窓会・東京支部にも宗像郡人会、宗像中学同窓会から続く歴史があります。昭和 30 年代、宗像において「宗像会」が発足し、これは宗像の町村長会の中に事務所をおいて、雑誌「宗像」も再刊されております。なお、宗像大社広報「宗像二十年の歩み」によると、宗像神社の社報「宗像」にも、戦前の東京の郷土雑誌の趣旨が引き継がれていたようです。

さて、戦前の歴史のなかで、特筆すべきは、「宗像塾」の存在です。上京した宗像出身の学生の生活を支援する活動は、極めて有意義で、郷土意識を高めるものでした。

昭和 31 年に「在京宗像郡人会」が発足しました。これは学生に限らず、宗像郡出身者の集まりでしたから、会員の顔ぶれも多彩で、郷土色豊かな会が行われていました。この郡人会の集まりは、昭和 50 年ころまで続きます。そして、この在京宗像郡人会と同じ頃か、少し遅れて、「宗像高校同窓会・東京支部」ができます。このように、宗高東京支部と在京郡人会が並存していましたが、当時の状況は郡人会が主流で、会合も毎年行われていましたが、宗高の方は時たま開催される程度でした。従って、東京においては、昭和 30 年代から、50 年代の初めまで、郡人会が宗像を代表する形になっていました。そして、時の流れと共に、郡人会の方々の高齢化と宗高卒の増加によって、50 年代の半ばから、宗像の代表は郡人会から宗高東京支部へバトンタッチされて行きました。

特筆すべきものの一つに「宗像塾」の存在がある。東京小石川､白山御殿に「宗像塾」と称して創設されたのが、明治 30 年 10 月。青雲の志を抱いて上京した宗像出身の学生たちのための寄宿舎だった。

その生みの親が伊豆凡夫等とされているが、他の人物については、記録不明で割愛せざるを得ない。

昭和 29 年春より 30 年秋にかけ 54 回にわたって、夕刊フクニチ新聞に連載

された記事があるが、そのなかで、「宗像人経済界三羽烏」として、日立製作所の倉田主税、出光興産の出光佐三、八幡製鉄の安永渡平の名をあげている。これに、戦前の朝鮮総督府で活躍した林繁蔵、日本通運の安座上真を加えた五名を中心として、それぞれの業績を述べている。

明治以降「宗像塾」で育った人物として、前記の宗像郡赤間町徳重出身の林繁蔵は、国運を賭した明治 38 年（1905）の日露戦争の前後、同郷の倉田主税と起居を共にして、時局を語り合い、壮大な抱負を抱いて、大陸への野心に燃えたという。

安永渡平（八幡製鉄所長・八幡化学社長）は東大在学中、3 年間、小石川町にあった「宗像塾」で過したが、後年、折に触れて「宗像塾」の思い出を語られ、感謝されていた。

「宗像塾」の創設者、伊豆凡夫亡き後は、有志が自主運営なされるが、場所も何度か代わりながら、昭和 20 年の半ばまで存在したようである。神山裕紀氏によると、昭和 22 年、東大入学の時、知人の先輩から「宗像塾」に入るよう勧められたそうである。

在京宗像郡人会　戦後、十数年を経て、世情も落ち着き、宗像会についての要望が高まり、昭和 34 年（1959）、宗像郡下の町村会長、議長会に諮って、「宗像会」結成の合意がなされた。そして翌年、結成総会が行われて、「宗像会」が再発足した。当時の名簿を見ると、郡内の町村別に会員名、郡外として、福岡、北九州、大阪、東京の会員名、さらにアメリカ地区として、3 名の終身会員が記載されている。会員数、642 名となる。

この「宗像会」に先立って、東京において「在京宗像郡人会」が結成され、昭和 31 年（1956）に虎ノ門共済会館での発足の会合が行われた。

そして、最高顧問に出光佐三（出光興産社長）、倉田主税（日立製作所会長）を迎えて、中央区銀座の出光興産本社内に事務所をおくことになった。世話人は占部真太郎（八幡化学工業常務・津屋崎出身）、岩佐忠（赤間）、魚住芳平（津屋崎）、城戸久（神輿村）、千名三郎（岬村）、中野充（田島村）、吉武辰雄（東郷）、阿部俊介（東郷）の方々であった。なお、出光興産社内の事務所は、佐三氏の弟泰亮（監査役）が世話役をされた。

そして、最初の会員名簿ができたのが、翌年、昭和 32 年 6 月で会員数は 233 名となる。名簿は 2 ～ 3 年ことに出されて、昭和 52 年（1977）2 月の最後の名簿まで続いた。会員数（280）名となる。

昭和 34 年（1959）10 月 8 日、虎ノ門共済会館で第 3 回在京宗像郡人会が約百人の会員が集まり、開かれたが、その当時の様子が西日本新聞に掲載されている。一部、紹介すると、『日本一の郡人会』と題して、「会は出光泰亮、魚住芳平ら世話人の司会で始められ、安永渡平（八幡化学社長）が「三十年ぶりに東京に住むことになったが、これから郡人会の発展に尽したい」と挨拶、続いて出光佐三氏が「宗像の近況を報告する」と前置きして、宗像神社が面目を一新したことや、福岡学芸大学の宗像誘致運動のあらましを説明され、阿部清美参議院議員が学大誘致に努めたいと述べた。

この後、懇親パーティに入ったが、倉田日立製作所会長、石松正鉄石炭協会長、吉田法晴参議院議員、赤間文三大阪府知事、中村研一画伯、吉武辰雄丸の内署長らが欠席とはいえ、出光、安永両社長をはじめ知名士が多く、会館の係員たちも″日本一の郡人会″と驚いていた。

また出席者は県人会と違って知り合いが多く、共通の話題も豊富で、「オウ、アンタもこっちに来とったとナ」と旧友に再会した喜びや「ウーン、よう知っとるバイ、アンタがあれの息子さんですナ、うちに遊びにキンサイ」と友人の第二世の成長ぶりに喜ぶ声が開かれた。みんなが誰にも遠慮することがなく、宗像弁を喋り、セイセイした顔だった。」

また、鎮国寺の復興事業を親身になり、宗像郡人会で出光泰亮・吉武辰夫が幹事となり奔走した。顧問は、佐三と倉田主税（日立製作所社長）となる。会は、宗像会の再結成と考えた人が多く、一杯食わされたと冗談を云われながらも、鎮国寺の寄附集めの会であった。この会でのそうそうたる人脈が、後日の募金行脚の旅に役立つことになる。この宗像郡人会は、後に在京宗像郡人会となる。

以後続き、昭和 38 年 5 月 14 日、第 4 回在京宗像郡人会は、新しく竣工した出光興産千葉製油所にて家族ぐるみの会を行い、参加者 230 名が皇居前のパレスホテルよりバスを連ねて訪問、東洋一の大製油所を見学して、パーティでは宗像弁が飛び交う楽しいひと時を過す東京の宗像出身者の親睦団体であった。

また、昭和 45 年 11 月に 6 回目が出光泰亮が世話人となり、出光興産新社屋 5 階で 133 名に家族もあつまった。宗像弁丸出しの郡人会に、赤間誠津屋崎町長、久保宮司、山本三吾元宗像校長、伊豆善也県議会議員も駆け付けた。乾杯は、古野清人先生であった。

宗高同窓会東京支部について

「在京宗像郡人会」と同じ頃か、少し遅れて、「宗像高校同窓会・東京支部」ができます。そして、時の流れと共に、郡人会の方々の高齢化と宗像高校卒業生の増加によって、50 年代の半ばから、宗像の代表は郡人会から宗像高校・東京支部へバトンタッチされて行きました。

・初代支部長、梅田実氏（宗中 1 回・大正 13 年卒）は日本興業銀行役員や日本輸出入石油社長などを歴任。宗中第一回卒業生として支部発足以来、ほぼ 30 年、平成 2 年、死亡されるまで東京支部の発展に尽力された。

・二代目支部長には、神山裕紀氏（清水建設専務・後副社長）が平成 3 年（1991）11 月、就任。その後、10 年間にわたって貢献された。

・また、その頃から世代交代で、高校卒が増え、副支部長に春川寿次郎が誕生した。そして、「宗高同窓会・東京支部」として総会も毎年開かれるようになった。因みに、その翌年、宗像高校本部の同窓会会長に県会議員の伊豆善也氏が就任された。

・三代目支部長には、春川壽次郎氏（宗高 1 回・昭和 25 年卒）が副支部長より引き継がれて、旭昭石油社長としての職責のかたわら、東京支部の発展に尽力された。

・四代目支部長には、片山仁氏（宗高 3 回・昭和 27 年卒）元順天堂大学学長が就任して、多忙のなか、支部運営に新たな工夫、改善をされたが、三年余で病のため逝去なされた。返す返すも残念なことであった。

・五代目支部長は田中孝（宗高 7 回・昭和 31 年卒）。副支部長、瀧口正寛、山本洋子で、平成 20 年（2008）11 月より現在に至る。

以上、の麻生和正氏（宗中 24 回・昭和 22 年卒・出光興産専務）は「宗像郡人会」発足の頃より退職後の今日まで神山裕紀氏と共に顧問を勤めている。

・出典　『福岡県立宗像高等学枚同窓会　東京支部略史』 2012 年 11 月より引用

出典・参考文献

1、出光佐三と宗像関連記事の出典一覧

元号 (年)	西暦	記　事　内　容	出　典
明治 39	1906	・編集部「会員消息」入会	『宗像』 64 号　宗像会
明治 42	1909	・編集部「会員消息」脱会	『宗像』 72 号　宗像会
大正 6	1917	・編集部「会員消息」再入会	『宗像』110 号　宗像会
大正 13	1924	・編集部「会員消息」	『宗像』138 号　宗像会
昭和 14	1939	・編集部「郷土特輯」	『宗像』158 号　宗像会
昭和 15	1940	・編集部「出光商会の飛躍」	『宗像』159 号　宗像会
昭和 18	1943	・竹間保史「宗像神社に仕へ奉りて」	『宗像』163 号　宗像会
		・高橋　昇「宗像神社復興計画の趣旨と経過を述べて神郡郷友一般の憤起を望む」	
		・宗像志江「宗像神社復興期成会の設立」	
昭和 26	1951	・出光佐三「美しい旅」	『我が 60 年間』第 1 巻
昭和 29	1954	・出光佐三「天災と九州」	
		・出光佐三「水を呑み冷暖自ら知る」	『人間尊重五十年』　春秋社
昭和 30	1955	・出光佐三「宗像族の雄心を」	『宗像　復刊記念号』宗像会
昭和 31	1956	・出光佐三「アメリカを視察して」	『復刊　宗像』2 号　宗像会
昭和 35	1960	・出光佐三「心の世界」	『我が 60 年間』第 2 巻
昭和 36	1961	・出光佐三「序」	『宗像神社史』宗像神社復興期成会
		・小島鉦作「後記」	
		・出光佐三 - 青年よ、明治精神に帰れ -	『社報宗像』1 号
昭和 37	1962	・出光佐三「宗像神社」	『人間尊重五十年』春秋社
		・出光佐三「夢」	『我が 60 年間』第 2 巻に収録
		・出光佐三「古稀を迎えて」	
		・出光佐三「仙厓和尚」	
		・出光佐三「虎から兎へ」	『我が 60 年間』第 2 巻
昭和 38	1963	・出光佐三「宗像会に寄す」	『再興　宗像』1 号　宗像会
		・宝物館建設計画いよいよ進む	『社報 宗像』30 号
		・物の国の教育と人の国の教育	『社報 宗像』35 号
		・学芸大学統合校舎起工式・城山山麓に学芸大学設置	『社報 宗像』35 号
昭和 39	1964	・出光佐三「年頭所感」	『再興　宗像』2 号　宗像会
		・出光佐三「武丸正助さんの話」	孝聖武丸正助翁顕彰会
昭和 40	1965	・出光社長の講演会	『社報宗像』51 号
		・宗像青年会議所結成総会開催	
昭和 41	1966	・出光佐三「瓦となるな」	『出光オイルダイジェスト』11 号
		・出光佐三「宗像人の使命」	『再興　宗像』8 号　宗像会
		・石田正美「出光丸」	『再興　宗像』14 号　宗像会
		・出光佐三「不思議な宿命」	『我が 60 年間』第 3 巻
		・出光丸の建造が進む	『社報　宗像』64 号

昭和 41	1966	・出光佐三「人間尊重の 50 年の完成は 20 代社員の責任」	我が 60 年間』第 3 巻
		・出光佐三「こんな大きな船は日本人だけが造れる」	
昭和 42	1967	・出光佐三「仲よくする力」	『我が 60 年間』第 3 巻
		・編集部「早川勇の顕彰碑」	『再興　宗像』第 3 巻　宗像会
		・出光丸竣工	『社報 宗像』73 号
		・出光佐三「若い人への遺産相続」－出光丸の竣工 -	『我が 60 年間』第 3 巻
昭和 44	1969	・宗像人の使命	『社報 宗像』100 号
		・日本の心を取材	『社報 宗像』101 号
		・宝満会一行参拝	『社報 宗像』101 号
		・出光佐三「日本人の世界的使命」	伊豆義也編集　宗像の教育をよくする会
昭和 45	1970	・宗像人は和の日本民族のチャンピョンたれ	『社報 宗像』109 号
		・出光佐三「ひとすじの人生」	『我が 60 年間』第 3 巻
		・在京宗像郡人会　和やかに開催さる	『社報 宗像』117 号
昭和 46	1971	・世界におでましになる宗像大社	『社報 宗像』121 号
		・国土守護神としての崇敬を	『社報 宗像』132 号
昭和 48	1973	・滝口凡夫「風土とおいたち」	『創造と可能の挑戦　出光佐三の事業理念』西日本新聞社
		・久保宮司の退任に際して	『社報 宗像』145 号
昭和 49	1974	・出光弘氏の逝去を悼む	『社報 宗像』163 号
		・全工事の地鎮祭斎行	『社報 宗像』166 号
昭和 50	1975	・出光佐三「御神徳の尊さ」	『我が 60 年間』第 4 巻
		・宗像大社復興期成会　出光佐三退任奉告祭	『社報宗像』179 号
		・出光泰亮氏の逝去を悼む	『社報 宗像』180 号
昭和 51	1976	・出光佐三「序」	『宗像大社昭和造営史』
		・宗像古文書の奉納	『社報 宗像』182 号
昭和 52	1977	・御神徳の尊さ	『社報 宗像』200 号
昭和 53	1978	・編集部「出光佐三氏　宗像町初の名誉町民に迎えられる」	『社報 宗像』宗像大社
		・総事業費 7 億円 - 宗像大社神宝館建設決まる -	『社報 宗像』214 号
昭和 54	1979	・石田正美「宗像の伝統と歴史に誇りと自覚を」	『宗像高校 60 年誌』宗像高校
昭和 55	1980	・出光興産㈱より浄財奉納	『社報 宗像』230 号
昭和 60	1985	・滝口凡夫「出光佐三さんと私」	『出光佐三翁生誕百周年記念誌』宗像市商工会青年部
昭和 61	1986	・出光計助「オオカミのあとのネズミ」	『二つの人生』講談社
		・出光計助「店主の思い出」	
昭和 62	1987	・出光昭介「真の日本人を育てる鑑に」	『孝子武丸正助拾遺』

昭和 62	1987	・占部玄海「金山の章」	『郷土歴史叢書 - 人物往来 -』第 3 冊
平成 6	1994	・高山　勉「出光社長と私」 ・高山　勉「人間出光佐三翁像」	『たった 1460 日されど 1460 日』
平成 11	1999	・川口洋一「刑務所と学芸大」	『宗像市史　通史編　第 3 巻　近現代』
平成 22	2010	・川嶋照亮「出光佐三翁の深い心」	『宗像高校同窓会会誌』平成 22 年
平成 24	2012	・滝口凡夫「あるべき人間の姿を求めて」	『出光佐三　魂の言葉』

2、参考文献

・出光佐三「 私の人生観」は「 水を呑み冷暖自ら知る」に収録『人間尊重 50 年』
・高山　勉『たった 1460 日されど 1460 日』1994 年
・高倉秀二『評伝　出光佐三』プレジデント社　1990 年
・竹原元凱「 沖ノ島祭祀遺跡 」『日本の遺跡発掘物語』7　社会思想社　1984 年　田中幸夫と宗像の関係がまとめられている。氏によると、出光佐三に宗像の歴史の理解に大きく影響を与えたとする。
・占部玄海『郷土歴史叢書 - 早川勇とその群像 -』第 1 冊　1985 年
・占部玄海『郷土歴史叢書 - 人物往来 -』第 3 冊　1987 年　出光佐三翁以外の宗像会員の人物について、詳しく調べられおり、詳細はこちらを参照して頂きたい。なお、柴田節郎の回想録「 宗像塾の思い出」の初出は、『宗像高校 60 年誌』宗像高校 1979 年に全文が記載され、関係資料が収録される。また、釜瀬新平「 宗像中学校開校式にのぞみて」も参照されたし。
・宗像市商工会青年部『日本人　出光佐三翁生誕百周年記念誌』1985 年
・壱岐貞実ほか『宗像高校 60 年誌』宗像高校 1979 年、『宗像高校 70 年誌』宗像高校　1989 年
・福岡教育大学歴史研究部考古班『津丸・久末古墳群』1974 年
・福岡教育大学歴史研究部考古班『城ヶ谷古墳群』1977 年
・宗像市教育委員会『城ヶ谷古墳群　II』宗像市文化財調査報告書第 8 集　1985 年
・宗像市教育委員会『旧宿場町赤間 I ～III』1986 ～ 1989 年
・宗像神社復興期成会『宗像大社昭和造営誌』1976 年
・吉武歴史観光ボランティアの会『吉武物語』2010 年
・安部照生「 鎮国寺」『神郡宗像 8 号』2015 年　宗像大社ホームページ
・立部瑞祐『心の旅路』鎮国寺　1982 年　法蔵館
・森口　郎『日教組』新潮社　2012 年
・高橋五郎「 宗像 5 ヶ年の教育の回想」『再興宗像』3 号　1964 年
・西日本新聞　『宗像海人伝』　横田記者　連載記事　1984 年
・鵜飼照夫「 勤評闘争」『津屋崎町史』1999 年
・吉田法晴「 宗像の地域性と将来」『再興宗像』15 号　1967 年
・伊豆義也編集『日本人の世界的使命』宗像の教育をよくする会　1969 年

3、出光佐三の著作、出光興産株式会社

・『四十年間を顧る』1951 年
・『わが四十五年間』1956 年
・「 前垂掛けから始めて」『現代教養全集　8- わが生涯 -』筑摩書房 1959 年
・『人間尊重五十年』春秋社　1962 年
・『人間尊重の事業経営』春秋社　1962 年
・『「 人の世界」と「 物の世界」- 四十の質問に答える -』出光興産社長室 1963 年
・『マルクスが日本に生れていたら』春秋社 1966 年（ 1972 年改訂）
・『働く人の資本主義』春秋社 1969 年
・『日本人にかえれ』ダイヤモンド社　1971 年、のちに（『出光佐三の日本人にかえれ』あさ出版 2013 年 ）
・『出光の言葉』出光興産 1974 年
・『永遠の日本 - 二千六百年と三百年 - 出光佐三対談集』平凡社 1975 年
・『道徳とモラルは完全に違ふ』出光興産 1983 年
・「 出光佐三」『私の履歴書 - 昭和の経営者群像 -5』1992 年　日本経済新聞社
・「 生き仏との出会い」『鈴木大拙 - 没後 40 年 -』河出書房新社　2006 年
・出光興産株式会社『出光五十年史』1970 年
・出光興産株式会社『ペルシャ湾上の日章丸―出光とイラン石油』1978 年
・出光興産株式会社『アバダンに行け―「 出光とイラン石油」外史』1980 年
・出光興産株式会社『我が六十年間〈 第 1 巻〉創業より～昭和 34 年 1985 年
・出光興産株式会社『我が六十年間〈 第 2 巻〉昭和 35 年～ 40 年』1985 年
・出光興産株式会社『我が六十年間〈 第 3 巻〉昭和 41 年～ 46 年』1985 年
・出光興産株式会社『我が六十年間〈 追補〉昭和 47 年～ 56 年』1981 年
・出光興産株式会社『月刊出光 - 店主追悼号 -』1981 年

4、★近親者の執筆

★出光計助『二つの人生』講談社　1986 年
★滝口凡夫『創造と可能の挑戦　出光佐三の事業理念』西日本新聞社　1973 年
★滝口凡夫『決断力（ 中）』日本工業新聞社 2001 年
★滝口凡夫『出光佐三　魂の言葉』海鳥社　2012 年
★高倉秀二『評伝　出光佐三』プレジデント社　1990 年
★出光真子「 父の名をのがれて 」『ホワット・ア・うーまんめいど』2003 年
・佐々木聡編『日本の戦後企業家史 - 反骨の系譜 -』有斐閣選書　2001 年
・水木楊『出光佐三　反骨の言魂』PHP 研究所　2013 年
・堀江義人『石油王　出光佐三　発想の原点』三心堂出版社　1998 年
・斐　富吉「 出光佐三の経営思想の行方 - 日本的精神と日本経営 -」『大阪産業大学経営論集』第 3 巻 2 号　2002 年

5、倉田主税の著作・出典

・倉田主税「 私の履歴書」『私の履歴書 (経済人 12)』1982 年　日本経済新聞社
・倉田主税『しみだらけの人生 - 日立・戦後 20 年 -』1969 年　野田経済社
・河野幸之助『現代人物史伝 - 倉田主税の半生記 -』日本時報社出版局 1962 年
・養父　守『倉田主税の半生記』『社報宗像』42 ～ 68 号　1964 年
・倉田主税追悼集編纂委員会編『倉田主税追悼集』1970 年
・倉田主税「 故里を想う」『社報宗像』3 号　1961 年
・倉田主税「 明治百年に思う」『再興宗像』18 号　1968 年
・倉田興人「 大社の参拝の思出など」『社報宗像』100 号　1969 年
・倉田興人「 兄、主税の思い出」『倉田主税追悼集』1970 年
・倉田主税「 真の人間教育の気運をつくろう」『社報宗像』100 号　1969 年
・宗像大社「 倉田主税氏を悼む」『社報宗像』110 号　1970 年
・占部真太「 祖父の思い出」『社報宗像』110 号　1970 年
・宗像大社「 倉田主税先生を偲ぶ (1)」『社報宗像』122 号　1971 年
・宗像大社「 倉田主税先生を偲ぶ (2)」『社報宗像』123 号　1971 年
・安部正弘『東郷公園と私』1966 年

記録用『出光佐三と宗像 - 温故知新と回想 -』

本稿は、むなかた電子博物館紀要 7 号「温故知新と回想」2016 年に写真・資料を加筆した。ネット掲載とは異なります。

本稿は、記録し残すことを目的に書いたものだが、分量が多くなり、電子博物館の印刷物に収録できず、インターネット掲載・公開のみとなった。

出光佐三翁と宗像について書かれたものは数少なく、将来に資料を残すため、多く情報を収録したものである。そして、『出光佐三と宗像』と改題し、書き加えて『記録用冊子』としたものである。佐三翁の宗像での行動と活躍、その後に与えた影響を残すために書いた。作成にあたり多くの方々を巻き込んでしまったが、皆さんが出光佐三翁の事ならと、思想を超えて御協力を戴いた。逝去後に、36 年を経ても、佐三翁の洞察力と偉大さを痛切に感じた。

筆者も宗像出身者として、風土と人に恩恵を受けた一人として纏めた。歴史は記録化しないと「露と消える」ものである。

20 年後に、その真意は伝わると思う。未来の宗像の人々に送るものである。ご活用頂きたい。

(2017 年 11 月 26 日に記す)

出光佐三の著書と関連書籍

出光佐三翁をさらに知りたいための施設

出光美術館（門司）「出光創業史料室」

出光美術館（門司）は、出光佐三とゆかりの深い門司港レトロ地区の一角に出光コレクションを展示する美術館として 2000 年に開館した。その後 2015 年の改築を経て新たに完成した美術館は、モダンながらノスタルジックな面持ちもそなえたレンガ調の外観へと生まれ変わり、レトロ地区の新たな顔として皆様に親しまれている。展示は日本の書画、中国・日本の陶磁器が中心である。

出光興産の創業者であり、出光美術館の創設者である出光佐三の生涯の軌跡を紹介する「出光創業史料室」も併設している。

出光　佐三と人間尊重　出光商会の創業から経営者としての主義、思想やその実践の歩みを前編、後編にわけて紹介している。

徳山製油所の建設　1957（昭和 32）年竣工した徳山製油所の建設を 3D-CG で再現した映像がある。(ネット記事を抜粋引用)

開館日	開館時間：10:00 ～ 17:00（入館は 16:30 まで） 休館日：毎週月曜日（ただし月曜日が祝日および振替休日の場合は開館）、年末年始および展示替期間
所在地	〒 801-0853　福岡県北九州市門司区東港町 2-3
電話	093-332-0251
交通アクセス	ＪＲ門司港駅より徒歩８分　門司港レトロ地区内、レトロ駐車場前

出光美術館（門司）

［著者紹介］

花田勝広〈はなだ　かつひろ〉

1955 年 3 月、福岡県宗像市河東 (福崎) 生まれ。奈良大学文学部史学科、同考古学研究室研究員、文学博士。滋賀県野洲市教育委員会文化財保護課課長を経て、主査。滋賀県立大学非常勤講師

〈著作・論文〉

花田勝広『古代の鉄生産と渡来人』2002 年　雄山閣、大橋信弥・花田勝広編(『ヤマト王権と渡来人』2005 年　サンライズ出版)、小笠原好彦・吉村武彦編(「 倭政権と鍛冶工房」『大和王権』展望日本歴史 4　2000 年　東京堂出版)、白石太一郎編(「 鉱物の採集と精錬工房」『列島の古代史 2』2005 年　岩波書店)、和田晴吾編(「 製鉄と鍛冶」『講座日本の考古学』古墳時代 2012 年　青木書店)、「 考古編」『宗像市史』通史編第 1 巻　1997 年、水野正好編(「 湖南」『近江』1992 年　吉川弘文館）に収録。

花田勝広「 高安千塚の基礎的研究」(『高安古墳群の基礎的研究』大阪府八尾市教育委員会 2008 年)、「 三上山下古墳の獣帯鏡」(『滋賀考古』21 号 1999 年)、「 田中幸夫とその周辺」(『田中幸夫と宗像郷土館』1995 年)、「 宗像郷土館の研究 1」(『古文化談叢』30 号 1994 年)、「 宗像郷土館の研究 2」(『文化財学論集』1994 年)、「 宗像郷土館の研究 3」(『滋賀考古』15 号 1994 年)、「 筑紫宗像氏と首長権」(『地域相研究』20 号 1991 年)、「 宗像・相原古墳群の再検討」(『地域相研究』19 号 1990 年)、「 筑紫宗像の生産工房」(『田辺昭三先生古稀記念論文集』2002 年)、「 沖ノ島祭祀と在地首長の動向」(『古代学研究』146 号 1999 年)、「 筑紫・宮地嶽古墳の再検討」(『考古学雑誌』85 巻 1 号 1999 年)、「 宗像地域の古墳群と沖ノ島遺跡の変遷 」(『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研究会 2010 年)、『田中幸夫と宗像』2016 年、『北部九州の軍事遺跡と本土決戦』2016 年の本、論文ほか。

筆　者

『出光佐三と宗像　- 温故知新と回想 -』

発　行　　2016 年 12 月 26 日

第 3 版　　2017 年 11 月 23 日

著者　花田　勝広

発行　宗像考古刊行会

制作　インデザイン CC2015 編集、オンデマンド PDF 印刷・製本